
足掻き続ける愚者

玄ブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足掻き続ける愚者

【Nコード】

N33260

【作者名】

玄ブ

【あらすじ】

突如としてしっけていて見知らぬ世界に放り出された少年をまっぴらしたのとは、苦痛と別れだった。

そして数年の時間がたち少年は僅かな希望を下に足掻くことを決めた

――

作者は小説初心者です。頑張っ続けて行きたいと思います！

ある程度は原作を知っておいた方が良くかもしれません。

第零話〜物語への突入：介入編〜（前書き）

カルボクラムから始まります。

すべてのプロローグを纏め、さらに編集しました 5 / 29

第零話　物語への突入：介入編

シトシトと雨が降り、巻き起こる土臭い臭いがツンと鼻を突く。

ここは見捨てられた亡き都市、カルボクラム。人がもう住まなくなつて久しく、今この町を支配するのは、方々に茂る草木と魔物たちだ。

尤も、今に限っては眼下に多数の人影が見えているが。

そんな町で、俺たちは――竜に跨り、飛んでいた。

「タイミングはそっちに任せた、俺は何時でも行けるぜ？」

俺は、俺と同じく竜に跨っているもう一人に声をかける。

「――」

彼女は声を発することなく、コクリ、と頷く事で承諾の意を表す。その姿は白い鎧を纏っていて、その持ち主の性別などは一目見ただけでは分からない。その鎧のフォルムは……例えるならイカのような特徴的な形をしている。

正直その例えはどうなの？　と言う声が聞こえてきそうではあるが、事実だ、仕方がない。

カチャリ、と音がして彼女は前のめりになる。そして槍を持たない左手で、竜の背にしがみつく。

……いよいよだ。

俺は目の前の鎧の肩の部分に手を置き、同じく前のめりになり、体

を固定する。ビュン、と空を切る音。

次々と景色が流れて行き、一瞬後には目の前に池のようなものが見えた。

スピードはそのままに、竜は、池に飛び込んだ。

ああ、本当にいいよだ。

これから、最初で最後の足掻きを始めよう――

- - - - -
- - - - -
- - - - -

この四年間、あの日のことを後悔しなかった日はない。

頭では理解している――

――だが心では納得していない。

あの状況で少しでも未来に希望を残すためなら、ああするしかない。つた――のかもしれない。

それをアイツらは本気で信じて、俺を希望とした。なら、俺は応えなければならない。

――だから努力して、ひたすらに剣の腕を磨いた。

――だから努力して、ひたすらに魔術の術式を頭に叩き込んだ。

――だから努力して、ひたすらにアイツらの居所を探した。

……けど、未だにどれ一つとして、マトモな成果は上がっていない。

アイツらを、助け出す以上は決して失敗は出来ない……そう自分に言い聞かせ……いや、そうして恐怖から逃げ続けた。

俺が今からしようとしていることは、常に死という恐怖が付きまとう。

だから逃げ続けた。

………どこのヘタレだよ、俺は。

だけどそれももう終わりだ。

覚悟なんていうものも、今ひとつ、ただどこのままっていうのにも耐えられなかった。

矛盾していると思う。

死が怖いと言いながらも、その死に恐怖して閉じこもる自分に耐えられなかった。

本当に、可笑しな人間だと思う。

だから、もう一度言う。

『だけどそれももう終わりだ』

他の誰でもない、友のために俺は動く。つまり俺は、存外にお人好

しだというコトだ。

アイツらのために、命を投げ出せる、と。

—— 最近、やっと気がついたコトだ。

さあ、『これから、最初で最後の足掻きを始めよう……』

- - -
- - -
- - -

一瞬にして、水塊を抜ける。そう感覚で判断すると目を開けた。

そこにあるのは、大きな機械仕掛けの塊——シルトブラスティア 結界魔導器。

だがそれは……通常、町で見かけるそれとは違った。

本来町を魔物の襲撃から護るために使われる結界魔導器とは方向性が違うのだ。シルトブラスティア

それは真逆に魔物を閉じ込める為のもの『逆結界』——らしい。

らしいというのは、俺自身そんな魔導器は初めてお目にかかる代物だからだ。ブラスティア

それに付け加え、何の支えもなく宙に浮いている時点で十分にファンタジー。ファンタジーワールド……や、この世界自体、現実離れた世界んだけどよ。

すぐ近く、目の前で白い鎧の右腕がブレる。

ほんの刹那、丁寧な装飾を施された槍が魔導器をブチ抜くのをどうにか、目で捉えることができた。

そして、そのすぐ後には上方で火花が飛び散る音がする。

続いて下方では巨大な影を閉じ込めていた結界が弾け飛ぶ音がする。
今回の第一の目標は達した。だが、これからの方が大変だ、という
より面倒だ。

竜——バウル——が空中で急停止し、火球を飛ばす。そして、剣——
剣といっても大の大人ほどの大きさはある——を携えた、これま
た大男を筆頭とした三人組と対峙する。

「……ほう？」

「どうやら、俺らを先に倒せてことらしいぜ？　面白いじゃねえ
か……！」

深緑のフードを被った男が吼えるとはほぼ同時に、双方が戦闘体制に
入る。

ブンツ、と音がして同時にバウルが猛スピードで動く。

理由は見なくても何となく分かる、三人組の一人の少女が円形のブ
ーメランのようなものを飛ばしてきたのだ。

「くっ……！」

鎧から苦悶が漏れる。

……今は何とか避け続けてはいるもののさすがに人が二人も乗って
いるのだ。動きも自然と鈍くなる。

「おらおらおらオラァッ……！」

「チッ、邪魔……なんだよ……！」

刃の猛攻が一端途切れると、フード（名前…ティソンだったか？）が、あるう事か壁を走り、そして此方に飛びかかってくる。それに俺は鞘で殴りつけることで応戦し辛うじて引き離す。

……やはり俺が乗っついていては満足に動けないか…。

「おい、このままじゃマズい。俺は一旦降りて下を何とかする…！」

言い終わると彼女の返事も聞かず飛び降りた。ボーディー・プラスティア武器魔導器を介し足に力を入れる。

——鷹爪襲撃——

心の中だけで叫び、一気に降下する。

俺が地面に着いたとき大きな音がして足元の床が弾けた。土煙も舞ったほうが登場の仕方としてはそれっぽいのだろうけど、生憎と空気が湿っていてそうはならなかった。

降り立った地点はちょうど、主人公グループとグシオスの間。両者を引き離す形となった。

戦闘中に無理矢理引き離れたのだ。……なんとなく、馴染めそうにない空気が流れる。

「オイ、あんた…邪魔したのは悪かったが話なら後にしてくれ」
つて、おい！？」

何かユーリが話しかけてきたけど、適当にいなしグシオスの方に走る。

……決して逃げたわけではない、と思いたい。

ああ、クソ。なんか俺完璧に空気読めてねえよ……。

side Yuri

突然、衝撃が走った。

見たこともない巨大な魔物から生き延びるために剣を振るい、丁度、エステルが戦闘に復帰したその時だった。

何が起きたのか咄嗟には判断出来ず、その方に目を走らせる、と草く臥たひれた色をした茶色のフードを被った人物がいたのだ。

アイツは……確かさっきの竜使いと一緒に突入してきた奴だ。あそこから降りてきたのか？

「おい、アンタ「邪魔したのは悪かったが話なら後にしてくれ」っておい!？」

ソイツは俺の言葉を遮り、あの巨大な魔物の方に駆けていって……って、おい。

そんな無防備に魔物に近づいては――

「なにやってんのよ、アイツ……!？」

「さ、さあ、でもあのままでは――、？」

そこで、俺たちは啞然とした。

「……で、此――俺――ち――けま――。」

さっきのヤツ――声から判断して俺とそう変わらない年の男だと思っ――がさっきまで俺たちと闘っていた巨大な魔物に話し掛けてい

たからだ。

通常であれば一笑に伏すような事だろう。だが状況が状況だけに、不思議と馬鹿らしいとは思えなかった。

更に驚く事に、まるでその青年の提案を聞き入れたかのように、踵を返してこの大部屋から出て行くこうとする。

魔物が言葉を解する筈がない、オレの中にある、そんな当たり前の常識が今にも崩れ去りそうだった。

「……………え？」

「?、どうした、エステル」

「さっきの魔物に見られていたような気が…」

「気のせいじゃないか？」

「そう、ですね。気のせいですよね？」

「いや、俺に聞かれても」

全く、何がどうなってんだ？

side out

side syouya

グシオスが脱出し、今回やるべきことは全てうまくいった。初対面

の俺の言葉をグシオスに聞き入れてもらえるかは不思議だったが、うまくいったようだ。

残るは、俺達が脱出するだけ。それが完了すれば、終了だ。

「アンタ、何者だよ」

「何者か、と問われても只の人間、としか答えようがないんだけど？」

ほっと安心しているところにユーリご一行——つまりは、この世界を舞台としたゲーム、TOVの主人公パーティーが近づいて来た。……ありや、そっぴやもう只の人間じゃなかったか。

「ふざけてないで聞きたいことがあんだけど……？」

そう頭に怒りマークを浮かべて、ずいっと近づいて来たのはリタ・モルディオだ。

……でも何故俺に怒りが向けられるのかは理解できない。俺ならともかく、竜使いなら……。

ここで、至極単純な答えに行き着く。……ああ、そうか。俺が竜使い——ジュデイスと一緒にいたからか。

ジュデイスは今まで、各地のとある魔導器を破壊して回っていたから、ブラステイア魔導器研究者である彼女にとっては当然、許されない対象なのだろう。

「答えられる範囲なら、って言いたいんだけどねえ？」

「……なによ？」

「後ろ、見てみるよ」

「え？」

みんなが後ろを向いた瞬間、バコンオオン！！と大きな音がして逆結界魔導器が落下した。

そして、それに続いて上から大量の水が降ってくる。……何時までも危険な場所にいるなんてゴメンだ。

「てな訳で、此处は危ないからさっさと脱出させてもらっよ」

そう言うが早いか、俺は走り出す。崩れた瓦礫の山を一足、二足で駆け上がり、クルリと方向転換。

続けてホールの中央を向いて、助走をつけて再度駆け出し、空中に身を差し出すと……。

「——ッ」

うまい具合に、バウルとジューデイスが拾ってくれる。

「ありがと、助かった」

「全く、ムチャクチャね」

「ははは、スマン」

やっとの軽口が打てるような状況に、不思議と笑みが零れた。やがてバウルが垂直に飛びゆっくりと上昇を始める。

「コリアっ！！待てエ！！」

何か下の方から聞こえてきたけど、無視の方向で。……もし会うとしたら、後が怖いな。

「オラオラオラアッ！！、グアゝ！？」

……、何かフードが襲って来たけどバウルに一瞬にして避けられて落ちていった、勿論コイツも無視の方向で。

まさか、リアルでそんなギャグチックな光景を目撃するとは思わなかった。

ここから下まで随分と高さがあるが……まあ、気にせずとも平気だろう。この世界の人間は丈夫なのが多い。

水の塊を抜け、外にでる。外は相変わらず雨が降っている。

「お礼をいうわ、ありがとう」

「いや、丁度良かったから手伝っただけで、礼をいわれるほどじゃない」

互いに礼を言い合い、労をねぎらう。

「ついでにだし、送っていくわ、ダングレストだったわよね？」

「スマン、助かる……っと、その前にちょっといいか？」

「ええ」

「ここで少し下ろしてくれ、あっておきたい人がいるんだ」

「分かったわ」

この後の話は…また今度でいいか、その内話すだろう。
物語はやっと本番なんだ、時間はまだある。

登場人物設定・用語解説

名前：守里 翔矢（しゅり しょうや）

性別：男

年齢：19

武器：刀、および短剣

所属：戦士の殿堂・バレストラーレ頭領補佐

性格：見た目の割にメンタル面が弱く、お人好し（のはず）。

イメージカラー：紺

オリ主。 苦勞人。 容姿は黒髪黒目の純日本人。

戦闘スタイルは接近戦から魔術による支援まで何でもそつなく行うことができるが、どれも一流と言うには程遠い。

オールラウンドのバランスタイプ、悪く言えば器用貧乏。

もしゲームに出たとしたら、高確率で二軍落ちする。

使用済み術技

技

トウソウシュウゲキ
鷹爪襲撃

—— 属性：無

—— 分類：奥義

コゲツセン
弧月閃

—— 属性：無

—— 分類：特技

ギシヨウソウセン
義翔双閃

— 属性：無
— 分類：奥義

ノクターナルライト（ノクターナルライト）

— 属性：無
— 分類：特技

飛刃爆符

— 属性：火
— 分類：スキル変化
— 内容：オリ技、投げるナイフの着弾時に爆発効果がある

れっさいしょうは
烈碎衝波

— 属性：無
— 分類：奥義

クルエルエディクト

— 属性：水
— 分類：スキル変化
— 内容：オリ技に非ず。TOSIRより。

術

レイ（レイ）

— 属性：光
— 詠唱：『邪を討つ臍氣の光』
— 分類：中級術

主人公以外のオリキャラ

名前：ダミー（だみー）

年齢：38

武器：??????

所属：天地の穴蔵

性格：基本真面目。勝負好き。

イメージカラー：グレー

イメージは凛々しいおじさん（髭なし）。

仕事を真面目にこなし、様々なギルドの信頼も厚い。性格に難あり。

人の驚く顔を見るのが生き甲斐。

序盤以降の登場予定は無い。

名前：カレル・ウィンバード

性別：男

年齢：42

武器：長刀

所属：戦士の殿堂

性格：基本穏やか。

バトルジャンキー。家族内のヒエラルキーは最低。

本作の主人公、翔矢の師にして戦士の殿堂の警備部の長。戦いに
関して素人であった翔矢を鍛え上げた スパルタティーチャー！。

名前：リユンヌ

性別：女

年齢：18

武器：鍛え抜かれたコブシ

所属：クレールを愛でる会・会長&戦士の殿堂（手伝い）

性格：明るい。 快樂主義。

ボケ担当。 でも偶にシリアスもこなす。 でも口調が安定しない。 そしてシスコン。

カレルの娘その一。 下手したら主人公より強い。

主人公と同じくカレルに師事。

名前：クレール

性別：女

年齢：16

武器：パレットナイフ

所属：戦士の殿堂（手伝い）

性格：クーでれ。

ツッコミ担当。 姉と父親に辛辣。 でも内心は……。

カレルの娘その二。 読点の代わりに三点リーダーを使って話す。

主人公と同じくカレルに師事。

用語説明

テリユカリユミレース

テイルズオブヴェスペリアの舞台にして、本作の舞台。

その空には古代文明の遺産である『人工』衛星である『凜々の明星』が輝いている。

地表の大部分は水に覆われており、星が生まれた際に残ったエネルギー、エアルが星内部を循環している。

エアル

星が生まれた際に残ったエネルギー体。全ての物質の源。

星内部を循環し、エアルクレーネなどから地表に噴出している。

テリユカリユミレースに住まう全ての生き物にとってなくてはならないもの。しかし、酸素と同じように高濃度のものは生き物に悪影響を及ぼす。

言ってみれば生命力だが、それだけではなく成長の促進も促す。

作中で翔矢は進化も促している、と言及している。

エアルクレーネ

世界中に点在する、エアルの源泉。ここから星内部のエアルが噴出される。

世界中のエアルが乱れるとエアルクレーネが活性化し、大量のエアルが噴出される。その際、エアルクレーネ付近の動植物は多大なる影響を受けることになる。

ブラスティア 魔導器

本編より千年以上前の古代ゲライオス文明時代に、クリティア族によって生み出された。

今現在使用されている魔導器は、ほぼすべてが当時の遺跡などから発見されたもの。

術式が刻まれた魔核コアと筐体コンテナから構成され、エアルを原動力として
いる。

魔物から街を守る、結界魔導器シルトプラスティア。術や技を使用する為の武醒魔導
器ティアなど、他にも多種多様の魔導器がある。

クリティア族

特徴的な尖った耳と二本の触覚をもち、一部を除き穏やかな気質
の持ち主。

物事の本質を見抜く力、ナギグを持つため武醒魔導器がなくて
も術技を使うことができる。

古代ゲライオス文明時代には魔導器を発明した。

ギルド

帝国の支配を嫌ったものたちが作り出した自治組織。 大小様々
で種類も多種多様。

ギルド社会には法が存在しないため掟を守ることが重視される。
また上位組織としてユニオンがあり、ギルド社会の抑止力となっ
ている。 最大勢力は、ドン・ホワイトホース率いる天を射る矢。
アルトクス

始祖の隷長

総ての生物の中で、特にエアルに適応した個体が成る存在の総称。
高い知性と長い寿命を有する。

魔物の親玉と呼ばれることもある。

名前の由来はアリストテレスの唱えた目的論の中の、目的に達し
ている状態を表す完全現実態・エンテレケイアより。

体内にエアルをため込むことができ、それを利用して世界のエア
ルの総量を調整している。

作中ではベリウスやフェロー、グシオス等がこれに当たる（他にも登場）。

……… 随時更新していきます。

第一話〜道末だに見えぬが故に・前編〜（前書き）

ぎり、間に合った……

第一話　道末だに見えぬが故に：前編

何時かの会話

そこにはとても静かな空間が形成されていた。

何も音が無いと言っわけではない、寧ろ草木が揺れる音から魔物が蠢く音などで耳障りな程だ。

だが、その2人の間には音が気にならなくような気迫が確かにあった。

「礼は要らん、寧ろ私は君達から恨まれるべき人間だろう」

「確かにそうだ。けどな、アンタが居なければ彼女の心は壊れていたとしても可笑しくはなかった。

アンタが居たことで多少なりとも俺達は救われた、だから…礼を言わせてもらっただけだ」

可笑しなことに、この二人は崩れた瓦礫を背に会話をしている。

しかし、確かにその目の先には相手がいるかの様だった。「そうか、……だがアレ等の居場所は教えることが出来ない。いや、正確には知らないと言った方が適切か」

「っ……！？」

「アンタでも知らねえってのか！？マジかよ？」

「……ああ、本当だ。

貴様が逃げ出した後、プロジェクトの一時凍結、およびサンプルの保存の為だそうだ。

知っているのは一握りの関係者の更に一握り、片手の指の数程もないだろう」

「……こんな事、俺が言うのも可笑しいんだけどよ、こんな事、俺に話してもいいのかよ？」

「さあな？……だが私とて元は人だ。こんな可笑しな気分になることもある、ということだろう」

「……………」

その声には先程とは違った感情が含まれていた。

それは悲しみか、怒りか。
それは憐れみか、後悔か。

何れにせよこの男は、全てを諦めきっている訳ではなく少なからずの意志の下、行動できる人物だということだ。

「…じゃあ、俺は行く。ありがとな」

「……………さっさと行け」

分かってるよ。瓦礫に身を隠していた人物はそう言つと、立ち去った。

音が戻って来る。そこに残っていた男も立ち去る。

………彼らの会話が何を意味していたのか、それを知るのはもうしばらくお待ちいただきたい。

…何れ語られることなのだから。

-

-
-
-

- - -

- - -

- - -

「やはり、駄目でしたか…」

「ああ、どこを叩いてもチリすら出なかった。
正直、すまなかったとしか言いようがない」

「いえ、謝られるどころかコツチとしてはお礼を言いたい位ですよ、
てか言います」

酒の臭いが漂い、バカ騒ぎをしている連中の声が時に耳をつんざく。
まだ昼間だというのに大丈夫なのだろうか？

「しかし、ここまでなにも出ないとなるとな本当にあるのかどうか
疑わしくもなる」

「しかし……!-!」

「分かってるよ、言いたいことも、それが本当だってことも。
たださっきお前がいった通り今はないってだけだ」

「え………? あっ、そう………でしたか」

その返答にすぐさまもった。そして思わず早とちりしてしまった自分に内心呆れる。

……そう言えばテストなんかを解くときよく問題を読まずにやってしまっていたことが偶にあったな。

そうやって一人悦に入っていたとき……カンカンカン、と鐘が鳴るおとがした。警鐘――！

「……それではダミーさん、俺はこれで」

「おう、気をつけてな」

俺は勢いよく立ち上がり、凛々しいオジサン（決しておっさんではない）ことダミーさんに見送られながら店から出る。

……あつ、金払ってねえ。

……まあいいか。

ストーリー通り進んでいるとするなら、このあと起きるのは……結果の消滅か。

「だとしたら、制御盤に急ぐとするか」

策の為に主人公一行と少しでも接点を作っておくのに越したことはない。寧ろ先の一件はそのためだけとも……とは言えんか。

ベリウスさんへの恩返しっていうのも多少はあった訳だし。

まあ、急ぐとしよう。

- - - - -

つい数秒まえに結界が消滅した。その決定的な瞬間は見えていないが結界が“消される瞬間は”見ていた。

つまり、何が言いたいのかというと……

「貴様………」

はい、赤眼共に只今睨まれております。

まあ、予定通りだな。…とはいえ………!?

「っ……!」

「――ちっ」

危な!!？

咄嗟にバックステップで回避すると先程、俺が居たところ（しかも、丁度俺の頸があつたであろうところ）を切り裂く白く歪な形をした刃があつた。

流石はと言つかなんというか、辛いねえ――!

「はああ!!、」

――弧月閃!!――

下方から三日月を描くように一閃させる。

だがそれは敵を捉えるまでには至らなかつた。

だがそうしたことで、確かな空間を確保すると同時に時間も出来上がる。

それが、此方には確かなチャンスとなつて顕れる――!!

「――レイ!!」

「「「――!!??」」」

――閃光。

相手は混乱し、確かな隙が生じる。当たり前だろうな――!

確かな隙を逃したりはしない。相手に一気に接近し、無銘の刀を一閃させる。先程奴らが俺にやろうとしたように――！

「がぁぁあ――！！、――」

断末魔が途切れる。スマンと、心の中で誤る。偽善でもない、独善。まあ、テメエの募り募った罪が故だ。諦めてくれ。

それに……まだアイツらにバレるわけにはいかない（……………）。

「ッ――！！！」

奴らも自分達が置かれた状況を理解したようだ。既に攻守は逆転している。

だがヤツらもさるもので、今度は二人同時に飛び込んでくる。

流石にこれはヤバいと守備体制に切り替える、が――

「蒼波ッ！！！」

- - それすら無駄だったようだ。

まあ……………往きますか。

第一話〜道末だに見えぬが故に：前編〜（後書き）

作者

「はい、今回は翔矢の人間関係と実力がちよつと明かされた回でした。てか短かったな」

翔矢

「しかもギリギリだったしな」

作者

「ギリギリでした……」

いやさ、今日もテストがあつて忘れかけてたんだよ……」

翔矢

「またか。で？」

作者

「チャイムが鳴る数秒前に間違い発見、そして手遅れでしたよ（涙）」

「

翔矢

「まあ、なんだ。ドンマイ？」

作者

「うつ、泣けるぜ（涙）」

- - -

翔矢

「まあ兎に角、やっと本番だな」

作者

「ですね。あと新たなオリキャラもでたし分かりやすい伏線も張った」

翔矢

「ダミー、偽物ってどうなんだ？」

作者

「単純に偽名、なんか色々ヤバイ橋渡ってるばいよ？」

翔矢

「…そうか。てかゲームではまずキャラクターはできないことをやっただが気づいた人いるのか？」

作者

「まあ、条件満たせば出来るんだけど普段にこれできたらチートだよねー。」

因みに伏線でもある」

翔矢

「だが、あまり使えない。俺が「うん、これ以上は完璧に答え出ちゃうのでカットしま〜す」何でだ？別に良いだろ？」

作者

「折角だから、皆さんに考えて貰おうかと。」

因みに彼がこれやれるのは1日最大2、3回が限界、上手いかないときは一回も出来ないんで使いどこ重要だったり。そして限界ま

でやると倒れるから実質一回だけという設定です。

この注意重要。これ言つとかないと当初のキャラ設定崩れるからね」

翔矢

「もうちょっと強キャラにすれば丁度良かったんじゃないのか？」

作者

「それは俺が個人的にやだ」

翔矢

「おい」

作者

「感想、ご意見おまちしてまーす！」

第一話〜道末だ見えぬが故に：後編〜（前書き）

後編です。

第一話　道未だ見えぬが故に：後編

Side Yuri

「おいカロール、まだ着かないのか！」

「あともう少しで……！ほら、あそこだよ！」

ギルドの巢窟ことダングレスト。その町は今突然、大量の魔物の襲撃を受けている。

こう行く町行く町、厄介事が続いていると某天才魔導少女に言われた通り、まるで自分がナニカに憑かれているように思えてしまう。

そして今はカロールの案内の下、突然消滅した結界を復旧させるべく
シルトブラスティア
結界魔導器に向かっていた。

「え！？人が襲われています！」

丁度、魔導器の制御盤が視界に入る距離に入った時、エステルがその声を上げる。

三人の赤眼のうち一人は倒れており、残り二人の赤眼は黒髪の青年と対峙していた。

「！…………ちつ！！」

赤眼が二段構えで青年に迫る。このままでは危ない。そう判断すると、鞘を投げ捨てるようにして剣を引き抜いた。繰り出す技はすでに決まっている。

「蒼波……！」

剣先から勢いよく蒼い衝撃波が飛び出すと、狙った通りに赤眼に直撃する。青年はその瞬間を逃がさないように、エアルの纏った剣で三度斬りつけた。

「大丈夫か！」

「怪我はしていませんか？」

「ああ、どうにか無事だ、よっ！」

青年は下から上に刀を一閃させる。しかしその攻撃は虚しく空を斬った。……？この声って確か……？

「ねえ、あんたもしかして……？」

「話してる暇はないようだぜ？」

リタも気づいたらしく疑問を投げかけようとするが、俺がそれを遮る。

リタには悪いが今は詮索している時間はない。敵は二人といっても、プロの暗殺集団。到底油断して良いものではない。

「ったく、後で聞かせて貰うわよ……!!」

「マジかよ……」

残念そうな声で言うが見た目はそのようには見えない。ただ単に表情には出してはいないだけなのか、それとも本当はそう思っていないのか。一瞬、疑問に思ったがすぐに頭から締め出した。

再度、剣を振るう。

黒い人影との攻防は五分はしないうちに終わった。

s i d e o u t

最後の止めはユーリがして、全員の張り詰めた空気がゆっくりと緩む。因みに俺はあれからあまり役には立てていなかった。やはり、ああいった人種とまともに殺り合うには意表をつくしかない、か。全く、面倒この上ないな。

海凶の爪の連中を全滅させるとリタが制御盤に走り、目にも留まらぬ速さで術式を構築していく。何となくなら魔導器の術式が分かる俺でもあれだけの速さで作業を進められると、よくわかん。気がつくとサンドアのようなシンボル（天気予報で見る雷マークのようなもの）が、幾重にも重なるエアルの循環の為の円と直線の上に3

つ並び、待機モードに移行する。

……その後金髪を持った青年騎士……会話の内容と俺の記憶から考えると確実にフレンだろう……。を筆頭とする数人がやってきてユーリ達と言葉を交わしていたが特に関係はなさそうなので割愛する。

「さて……」

ユーリを含める4人＋一匹の目が一齐にこちらを向く。敵意ある視線ではない上にこうなるようにやっていたとはいえ、なんとなく居心地が悪い。

「さあ、早速聞かせてもらおうよ？」

まず一つ、あんたこの前カルボクラムに居たわね？

二つ目、なんで魔導器を壊したのか……！？

三つ目、あのバカドラとの関係は……！？

さあさあ、しっかりと答えて貰おうよ……！！」

……前言撤回、約一名もの凄く殺気立ってます。てか2個目と3個目は明らかに1個目の質問を俺が肯定することを前提としていませんか？事実だけだよ。

「……確かに俺はあの時カルボクラムにいたさ。てか一つ言っとくけどよ俺が魔導器をぶっ壊したわけじゃないんだが？」

「じゃあなに？自分はあのバカドラが魔導器壊してるのとは関係ないって言いたいわけ？」

「ああ、関係ないよ。俺の目的は別だったし」

「へえ？じゃああいつと一緒に居たのはどうゆうことよ」

若干熱は冷めてはきているものの、相変わらずその瞳には焰が宿っている。……なんか怖いんですが？

「ただ単にあの人とは知り合いでね、偶然居合わせたから乗せて貰っただけなんだよ。」

「……………これで満足か？」

「いいや、まだまだ有「まあまあリタ、その辺で止めにしませんか？」「うつ」

うお、すげー。あの魔導器大好きっ子が躊躇してるよ。てかなに？もう完全に懐いちゃってます？

どこか感心（？）したように俺は二人の少女を見る。なんだかんだ言っても二人とも仲が良いんだな、やっぱり。

「真偽の程は兎に角として、一応答えてくれんのな？」

「まあな。どつちかと言ったら、言っちゃったほうが後々ラクかなーって思っただけど……………」

「どちらにしてもあんまり変わらなかった、っと」

「まあな」

ユーリが声をかけてきたので苦笑しながら応じる。これで一応の区切りがついたってことなのかね？

「じゃあ、俺はお暇とさせてもらっつよ」

「ん？ああ、そうか。さっきはなんだか悪かったな」

「いいや別に、特になんとも思ってないさ」

「……私はまだ聞きたいことがあるんだけど」

「……………」

再度繰り返すが、“自分が招いた状況とはいえ” なんだか面倒臭くなってきたぞ…………？

「俺にも用事があるんだ、また会った時にでもまた質問してくれ」

「そうですよ、リタ。

私達もケーブモックの調査に向かいませんか……………」

「分かってる、けど……」

なんだかしょぼんとしている姿を見ると自分が悪者になった気がし

てくる。……罪悪感で心中が悶えている位には少なくとも思っ
まっている。
それに……。それに、その姿が、声が。彼女と重なって見えたと
もあるだろう。

「はあ、ったく……」

だから俺は自分の頭をガシガシと右手で触り、言葉を紡いだ。

「俺の用事もケープモックだからよ、そんときに話してやるよ」

みんなの驚きに満ちた目が開かれる。特にリタはなにをいつている
のだろう？ みたいな表情をしている。
自分でもイマイチ何故こんなことを言ったのかは分からないが、存
外に俺はお人好しなのかもしれない。

……普段なら、こんな患者にそんなことはありはしない。そう考
えているはずだ。

なのに、今、この瞬間はそう思えたのだ。なんの疑問も持たずに。

全く可笑しな人間だな、俺は。

第二話〜翠の争乱：前編〜（前書き）

駄文&説明&全然進まない……

後、何時もより1日遅れてすいませんでしたorz

翔矢「こんなの誰も待って無いだろ」

……さいですか。

第二話　翠の争乱：前編

「・・・これでいいか？」

「ええ、今はコレだけでいいわ」

「今は（、）、ね・・・」

じめじめとした空気が漂い、灰色は空を覆う。そんな今にも雨が降り出しそうな天気なのに、俺は野外で律儀に某天才少女の質問に（といつても答えられる範囲でだが）答えていた。

……なんで俺はあんなこと言ったんだか。（前話参照）いや確かに主人公一行と伝手を持つのに越したことはない。だが今回の目的とは関係がないし、何よりリタの質問責めが大変だった。

しかも魔導器に話が及ぶと、途中に魔導器講座が入ってきて、あれ？完璧地雷踏んだ？みたいになった。

その結果、カロルは知恵熱にうなされ、エステルは熱心に聴き入ってるし、ユーリはウンザリしている。リタ？なんか目を輝かせて喜々としてエステル相手に話してましたよ？

で、そうこうしている内に、

「着きましたよ、っと」

「？、誰に向かって話してるんだ？」

「いや何でもない」

「世の中にはこんな大きな木があるんですね……」

そうエステルは目の前に聳える大木を見上げながら呟くように言う。
……いや、正確には大木の根っこだ。最早巨大すぎて全景を目に納めることは叶わないだろう。

「けど、ここまで成長すると逆に不健康って感じがするな」

「カロルが言ってたとおりだわ。
ヘリードで魔導器が暴走した時になんともなく感じが似てる」

「植物のエアル過剰吸収による急激な成長、ってね」

「？、何か知ってるの？」

まあな、と俺は返事をして、分かっている事は少しだけなんだがな、とさらに断りを入れてから続けた。

「そもそもエアルってのは生物の成長・進化を促す物質なんだ。生命力と言い換えてもいい。

生き物によってその影響は大小は異なるし、エアルに触れている条件によっても影響が異なる」

例えばヘリードの時のように――俺自身は直接現場を見ていないが――植物の場合はエアルの影響を色濃く受け、短時間で大量のエアルを吸収すれば急激な成長が引き起こされる。

逆に安定したエアルを長時間に渡って吸収すると、『意志を持った

植物としての魔物』なんてのが現れたりする。

一方で人間などの場合は通常、勿論例外はあるのだが影響をあまり受けず、体に悪影響を与えるものとしての側面が強い。

「この森の場合は、暴走したエアルクレーネの近くにあった木が影響を受けたことでここまで成長した、ってところだろう」

「エアル、クレー…ネ？」

あー…。そう言えばこの時のリタはエアルクレーネのことを知らなかったんだっけ。

失敗失敗と口の中で呟いてからまた口を開く。

「エアルクレーネはエアルを大地から吹き出す源泉のことだ。

世界中にあるから案外、探せば見つかるんじゃないのか？」

「……そう、分かったわ」

結構。それから顔を上げて当たりを見渡して、それから気づいた。さっきと同じように『カロルは知恵熱に（ry』……という風になっていた。

………なんか今日はこんなのはっかだな…、…

…ガサリ。

「………！」「」

刹那、全員の意識が張り詰める。

俺も勝手に右手が刀の柄を掴んでいた。このあたり、戦人としての意識がすっかり出来上がってきたのだろうか。

草村から人影が伸びる。

敵か……？そう誰もが思っただろう。
事実俺もそう思った。

だが直ぐにその考えを捨て、記憶の中から一つの事実を拾う。

…そうだ。此处で現れるのは確か――

「よっ、偶然！」

…和風な服を着てボサボサ頭を紐で簡単に留めた、胡散臭いおっさんことレイブンだった。

「…こんなとこでなにしてんだよ？」

「自然観察と森林浴って感じだな」

「うさん臭い……」

「あれ？歓迎されてない？」

張り詰めていた空気が解け、目の前ではコントか何かと見間違っような会話が^{デジャヴ}はじまった。

「本気で歓迎されるなんて思ってたんじゃないでしょうね？」

「そんなこと言うなよ。せつかくタイミング考えて登場したのにさ？」

「タイミングって……」呆れて思わず呟いた。じゃあ何か？さっき俺が説明してた間、ずっと草村で息を殺してた？

……暇なんだな。

「それに俺、役に立つぜ？」

「役に立つって。まさか、……一緒に来たい、とか？」

違うと言って欲しい、と心の声が聞こえるようにカロールが言う。

「そう、1人じゃ寂しいしさ。ダメ？」

「背後には気をつけてね！。変なことしたら殺すから」

そう言うのと、リタは振り向きもせず森の奥に足を進めて行く。

……マジだなあの言い方。一見関心無さそうに言ってるの怖え。

おっさんは若干傷ついたような表情で（どうせ演技だろうが）口を尖らせて続けた。

「なあ。俺ってばそんなに胡散臭い？」

「ああ、胡散臭さが全身からにじみ出てるな」

「どれどれ……」

袖に鼻を近づけてクンクン、と臭いを嗅ぐ。

あとここは『匂い』じゃなくて『臭い』だ。この表現の違い重要。

「変なことしたら、オレなにするか分ないからそこんところろしく」

それじゃ行くぞ。そう言ったようにほぼ一斉にパーティーメンバーはリタの後を追う。

……なんかあれだな。温度差がすごい。

「……？」

後ろを振り向くと何故かレイブンが俺の方を見ている。

「…俺の顔になんかついてるのか？」

「いやー？そんな事はないけどよ？」

ギルド『戦士の殿堂』の重役がこんな辺鄙な所に何の用かなーって不思議に思ってたところ」

「………」

こっちの素性なんてとうにお見通し、か。

驚くことではない。あいつらにとっては俺達（、）はそれなりに重要な存在。

俺のこれまでの経緯を知っていたとしても不思議ではない。

普通ならデカイギルドの幹部だから、だと思うところだろうがそうではない。『知識』があるから分かる。

ここは…無駄に聞かない方がいいか。

「色々野暮用があつてね」

「ふーん、まあいいけどよ」

そう言うとレイブン、いやシュヴァーン・オルトレインは俺を抜いて小走りでみんなの方へ向かう。

……………なかなか面倒な相手だ。

第二話〜翠の争乱：中編〜（前書き）

遅れてすいません（汗）

なんか中編になってしまいました。

終わらせる積もりだったのに……

第二話　翠の争乱：中編

「ちっ……！」

ギチギチとアゴを鳴らせながら巨大なカマキリのような魔物が近づいて来る。

……これで最後！

「翔月双閃！」

下から縦に一閃、中に打ち上げ……更に一閃。

先程からの戦闘でダメージを負っていたぶん、存外呆気なく倒れ僅かにもがく。

「ふッ……！」

留め。堅い甲殻を切り裂き魔物は絶命する。
珍しく苦戦せずに戦闘終了……！

一人で内心、悦に入るが当然誰も気に留めることなく先へと進む。

「さあて、次いくぞ？」

「あつ、待ってよ！」

魔物の群れを退け先に進む、また魔物の群れては更に進む。その繰り返した、なかなか進まない。

それに付け加えケーブモックの森は存外に広く、つい五分ほど前にレイブンの大道芸とカロルの虫嫌い発覚イベントが終わったところだ。

激虫プレスは虫系の魔物が多く助かっている。

「それにしても……」

歩を進め一段落した辺りでリタが純粋な感想を上げる。

「さっきのカロルの驚きよう、ちょっと無いわね」

「誰にだって、怖いものの一つや2つくらいあるでしょ!？」

カロルが半ばムキになりながら反論する。

細部は違つのだろうが一度聞いた台詞を目の前で繰り広げているのだ。

こういう時に自分達は遠いところに来てしまったのだと、改めて感じる。

……面白そうだし混ぜってみるか。

「あたしにはそんなものはない」

「ウソ言っちゃイヤよ。天才魔導師少女、おっさんにだって怖いものがあるんだから」

「？、何だ？おっさんの怖いものって？」

「おっさんは、美女が怖い！！」

「なにそれ！？」

「はいはい、おっさんの戯れ言はほっとこうぜ」

戯れ言なんておっさん傷つくわー、と言い返してきたが無視する。

「リタ、正直になっておいたほうがいいぞ？」

「そうそう、いざという時フォローできるのは良いことだぞ？」

「誰があんたらなんかに。」

て、あんたは寧ろフォローされる立場の人間でしようが！」

「う…ぐっ！？」

こゝこいつ……。痛いところを……。確かに、言い返せない部分はあるけどよ。

「しょうがねえだろ？こればっかしは。」

まあ俺には苦手なことも怖いものもあるんだ。

、そうだな……」

「どうしたの？」

「例えば……。……リタは幽霊とか苦手だったりしないのか？」

「（！？）、なわけないでしょ。誰がそんなもの……」

俺の発言にリタは、よくよく注意しなければ分からないほどに僅かに硬直する。

そこを目敏く見抜くおっさん（約一名）。

「へえ？なにになに、そういうこと？」

「な、なによ？」

「いやー、リタっちがまさか幽霊が怖いとはねー？」

「そうなんです？、リタ」

まさかのエステル参戦にリタの顔が分かり易く変わる。
それにほんの少し紅潮しているようにも見えた。

「だから言ったでしょ！？わたしに怖くないって！
それにあんたはどうなのよ！？」

「え、俺？」

そこで俺にフリますか…。

んー、と顎に手を当て取り敢えず考えてみる。

……カロールのように虫が嫌いということない。寧ろガキの頃はよく捕まえて遊んでいた方だ。

次に幽霊……。このファンタジーワールドに来て暫くしてから見事になくなりました、まる

高い所は、好きな方だし。何か動物にトラウマが、ということはない。

だから……

「大切な人が居なくなること、とか？」

「いや、わたしに聴かれても」

「はは、それもそうか」

……うん。なんだかここ数年で自分が随分と変わってしまったように感じる。

やはり、大きく変わったのは三年前の、あの日あの瞬間だろうか。それとも2年と少し前のあの瞬間からだろうか……。

さらにリタがなにか言おうとしたのか、口を開こうとすると――

「お、

」

――その場にいた全員の耳が……とても小さく風や雨音に掻き消されそうになる音を拾った。

……？なんだ、声か？

「……何か……

声が聞こえなかった？」

……カロルもそう感じたなら、幻聴ではないようだ。

聞いただけではよく分からないが恐らく女性、それも少女と呼んでよい位の年齢だろう。

……いや、ちょっと待てよ。確かコレって……？

「うちをどこへ連れて行ってくれるのかのー」

また聞こえた。しかも今度ははっきりと。

やはりそういうことか……そういうことなのか。

「この声、どこかで……」

しかし、このことはただ俺が失念していただけだし、そこまで大きな問題ではないだろう。

多少の差違はあっても……そうだと思いたい。

辺りを見回すとすぐにそれが目に入った。

これまた大きな甲虫のように見える魔物と……その魔物に捕まっている船乗りの服と帽子ををブカブカに被った少女。

しかもあれは……楽しんでないか？

「パ、パティ………！？」

「なに？おなじみさん？」「早く助けなきゃ！」

「あーはいはい。俺様にお任せよつと」

カチン、と音がして収納されていた弓が姿を現す。レイブンの弓はどこぞの『持つ』というより『掴む』というような持ち方をする、剣のような形にもなる機械弓だ。

…遠近両方に対応した武器か。なかなか便利そうだ。最も、それ一つを使うのに高い技術力が要求されるのだろう。

シュツと弓が矢を飛ばし、それと同時にユーリが走る。

一秒弱、矢は命中しその衝撃で少女――パーティが自由落下を開始した。勿論その先にはユーリがいて、某神様を喰らうゲームとは違って……

「ナイスキャッチなのじゃ」

……見事に間に合った。

あと関係ないけどあれは間に合わせるべきシーンではないのか？ど
ういう意図があるのかは分からないけど。

ユーリはすぐにパーティを地面に下ろし此方に歩いてきた。

――

「で、やっぱりアイフリードのお宝って奴を探してるのか？」

「アイフリード………?」

「のじゃ」

アイフリード。歴代のテイルズオブシリーズには彼、もしくは彼女の関係者が登場している。そしてその殆どが海賊関係者だったりする。

「嘘くさ。こんなところに本当に宝が？」

「いったい誰に聞いてきたのよ」

「測量ギルド『天地の穴蔵』が色々と教えてくれるのじゃ。」

連中は世界を回つとるからの」

「それでラゴウの屋敷に入ったって訳？
結局何もなかったんでしょ？」

「100%信用できる話の方が逆に胡散臭いのじゃ」

だからって帝国執政官の屋敷に忍び込むとは……。てか『天地の穴蔵』もどつからそんな眉唾持ってきたんだ……。あー……。何か心当たりがあるんですが、そんな眉唾持ってきた人。あの人なんでもやってそうだし……。

「ま、確かに」

「あんた100%胡散臭いわよね」

「ヒドいお言葉……」

……横のコントは放っておこう。

「とにかくウチは1人でお宝探しを続行するのじゃ」

「1人でウロウロしてたらさっきみたいに魔物に襲われて危険なことに……」

「あれは襲われてたんじゃないのじゃ。
戯れてたのじゃ！」

「魔物のほうはそう思ってないと思うな……」

……正直いうと先程まで内心焦っていたがこの少女がこのメンバーの輪に入ることと和んできた気がする。

焦りの理由は俺がずっとこの世界が箱？版を前提として自然と考えていたからだ。

彼女がパーティメンバーに加わることで変わるのはストーリーに彼女のエピソードがプラスされるだけ……。バタフライ効果がどのような影響を及ぼすのかは分からないが恐らく大丈夫だと思う。

……両方やつといて良かったよ。

……、

「……！？」

「……！！パティ、後ろ……！！」

パティまでほんの数メートル。その距離までに魔物が迫っている。危ない……！そう叫びそうになるだろうが、俺とパティだけが恐らく違っていたのだろう。

即座に彼女はこの世界では珍しい銃を取り出し構えたかと思うと、バンという音が立て続けに5つ聞こえた。

形状は海賊映画でよく見るフリントロック式のようなが、性能は段違い。

恐らく空気中のエアルを集め、発射するタイプのものだろう。

そういったのは物にもよるが小さなハンドガン位の大きさだと実際に弾を発射するものに比べ、殺傷能力が低い場合もある。……のだが、パティのものは比較的大口径で威力は十分、しかも的確に殻の間の関節に当てていく。

……すげえ。

「つまり1人でも平気って訳か」

「一緒に行くかの？」

「せっかくだけどまたの機会にしとくわ」

「それは残念至極なのじゃ。それでもうちはいくのじゃ。
さらばなのじゃ！」

話終わると1人、俺たちに背を向けたたたーっと走り去っていく。

「行っちゃった……」

「本当に大丈夫なんでしょうか……」

「本人が大丈夫って言うてるんだから、大丈夫なんですよ」

「……俺も初めて見た感想だけど、身のこなしとか銃の扱いとか明らかに慣れてたし大丈夫じゃないのか？
少なくとも、素人じゃない」

みんなが歩みを進める中、1人不安そうにしているエステルに取り
敢えず声を掛けておく。

すると小さく、……はい、と返事が返ってきた。

エステル本人はまだ心配のようだが、そのようなことでいちいち気
にしているはこの世界でやっていけない。その辺り、このお姫様に
は理解できないことも多いのだろう。

……このへんでそろそろ言うておくか。この位の手助けはするべき

だろう。

「さて、ここらでみんなに言っておきたいことがあるんだが、いいか？」

「？うん、いいけどどうしたの？」

「ああ。この先は森の中心部になるわけだが、そこにはちょっとめんどいのがいてね」

「魔物が……？」

真剣な表情のユーリにああ、と返すと皆引き締まった表情をする。

「そいつの名前はギガラルヴァ。今までの雑魚とは違って強いから注意しておいてくれ。」

……俺の懸念はその一点に尽きる。この短い期間ではなんとも言えないが可能性はある。

そのため一応の準備として、アイテムはなるべく多めに用意している。

「分かった。みんな気をつけておけよ？」

ええ、とかおう、とかそれぞれが返事を返す。まあ、彼らならきちんと対応してくれるだろうから心配はしていない。

「それにしても、翔矢はなんでもしっているんですね。以前にもここへ来たことが？」

「いや俺じゃなくて友人がね。俺はそれを聞いただけ」

「ふーん。因みにエアルのこととかもその友達から？」

「そっちはギルドの上司から。それと独学」

「……そう」

嘘100パーセントだが、今回だけは仕方ないのでそのまま流す。
まあ後は勝手に向こうが解釈してくれるだろう。

……兎に角、初めてのボス戦だ。心だけは引き締めておこう。

第二話　翠の争乱：中編（後書き）

昨日は部活で美術館に行ってきました。

その時ついでに、アニメイトに行ってきたんですが学生が多くて店内黒ばっかりでしたよ。なにしろ県内中の高校が集まってましたからね、その時。

…… 本当、疲れた。

第二話〜翠の争乱：後編〜（前書き）

（祝）p v 1 0 0 0 0 ！

第二話　翠の争乱：後編

肌を焦がすようにピリピリとした空気が漂っている。

その正体は俺達から放たれている緊張感と抑え込まれた殺気。そんなふうになっているのはさっきの発言を受けてのことだ。みんな周りに注意を払い、僅かな兆候さえ見逃さぬようにしている。

当然、雑魚共もいるものだから大変だ。

つい先程までの戦闘により暖まった体温を小さな雨粒達が少しずつ奪ってゆくのがどこか心地よく感じる。

その時――

――ドクウン――

空気が、揺れた。
力が、胎動した。

「――！？」

「？ショウヤ、どうしたの？」

「いや……何でもない」

「そう？」

偶然近くにいたカロールが不思議に思ったのか話し掛けてきた。矢張りというかなんというか、ユーリ達は気がついていないようだ。

そして心なしかさつきより空気が重くなっている。恐らく気のせいではないだろう。先程の揺れもそうだ。

その揺れは心臓の鼓動のように規則的なものではなく無秩序な力の奔流。

間違いなく辺りに悪影響を巻き散らかしている。そうとは思えない。

……随分エアルクレーネに近付いてきたな。

――よってそれはボス戦がすぐそこまで迫っていることを意味している。

はあ、全く……。何で俺はこんな所にいるんだろう。今更ながらに少し後悔。

まあ、来てしまった以上は仕方がないし、腹も括っているのだが。

「おい、さつきショウヤが言ってたのってあれじゃねえか？」

ユーリの視線の先、オレンジ色の光が浮かんでいる。光が強すぎてエアルクレーネの特徴でもある結晶化したエアルが見えていないが、間違いない。

「そ、あれがエアルクレーネ」

「あれが……」

リタが何かに思いを巡らすように呟く。

魔導器研究のトップである魔導士としては興味深いものなんだろう。

「ヘリオードの町で見たのと同じ……」

「エアルは弱いけど間違いない。でも――」

でも――、そこから続けようとした言葉を遮るように、ドンと巨大な影がふってきた。

「さあて、ウワサのギガラルヴァがやってきましたよ」と

「うう、また虫……」

……カオル、第一声がそれか？

まあ、それでもキッチンと武器を構えてるから………………。訂正。その殺虫剤に手を伸ばしている時点で完全にビビってる。

「あ、あの魔物、ダングレストを襲ったのと同じです！」

「来やがったぞ！！」

脳内でパリンと何かがひび割れる音がする。
その瞬間、スイッチが入った。

「ラピード、カロール、遅れるなよ！」

「ワウッ!!」
「オーケイ!!」

前もって伝えて置いたため、一応の策はある。内容は単純に前衛が引つ掻き回して後衛魔術で吹っ飛ばすだけ。さらに此方では戦闘参加人数に制限はない。デュークが来るまで持ちこたえるのは簡単だろう。

「フォロー頼むぞ……！」

《邪を討つ朧氣の光……》

「《煌めいて、魂揺の力……》」

「《たゆたう闇の微笑……》」

三人でほぼ同時に詠唱始める。おっさん？あの人は俺達のフォローを“進んで”でやつてもらっている。（実際はおっさんの使う風の魔術は奴に対して今ひとつだからなのだが。

ただおっさんが“進んでやっている”のであって、“どこか残念そうにやっている”のではない。

だから決してさっきのお返しとばかりにリタに役立たず扱いもされていない。ええ、されていませんとも。

……まあおっさんなりにそのことは考えていたようだから、自分でどう動くべきくらい分かっているだろう）

「フォトン……！」

「スプレットゼロ……！」

一足先にリタとエステルが完成し、発動する……！

「ギ……！！……」

声に成らない苦悶の叫び。それは硬い牙と牙をこすりあわせるようにして発せられた音だ。

「うわっ！」

「おい、そっちいくぞ！」

そしてその一撃でこちらを優先して倒すべきと考えたのか、ユーリたち前衛を振り払い此方にむかって来る！

「ショウヤ！？」

エステルが今にも飛び出しそうになるが、その行動は意味をなさない。

なぜなら――

「はい、ご苦労様」

――バンツ！！！！

突然にギガラルヴァの足元が爆発する！

その衝撃をダイレクトに受けたためかバランスは崩れスピードも一気にゼロに落ちる――

「よっしゃー！これでおっさん、もう役立たずなんて言わせないわよー？」

「レイ！！！」

――そしてその怯んだ隙に中級術を叩き込む！！！！

――ガッ――！！！！

「よし、このまま一気に――」

「！青年。走れ！！」

！？

この分だと楽に勝てる。そう思っていたのが呆気なく打ち砕かれる。その正体はギガラルヴァ。

それも――2体目のギガラルヴァ――だ。

おいおい、登場すんのが早すぎんだろ……。

「ど、どうしましょう。このままでは……」

「だな。兎に角、必死に足掻くかなさそうだな、烈碎衝破！

おい、シヨウヤにリタ！何かいい手はないのか！」

「何かと言われても困るんだがねー。っと！」

「木も魔物もこのエアルのせいだと思っただけ……一体、何をどうすれば……！」

また来た！」

ドン、ドンと衝撃が走ると同時に大きな蠍のような影が現れる。

「ああ、ここで死んじゃうのか。

さよなら、おれの世界中ファン」

「世界一の軽薄男ここに眠るって墓に彫っというてやるからな！」

「そんなこと言ってないでさ、『一緒に生き残ろうぜ』とか言えないの……!？」

「コントしてないでちよつとは真面目に……!」
――来た。

スタッと静かに降り立つ白髪の男。赤を基調とした服を着て、不思議な形をした紅く輝く剣をてにしている。

そしてその男――デュークは、その剣――宙の戒典【デインノモス】を掲げる。

すると彼を中心に一つの術式が浮かび上がる。ベースは二重の円、そして円と円との間には小さな剣のような形をした複雑な線の集合体が数個浮かぶ。

さらにその術式が空中に僅かに浮かぶと、光の竜巻が立ち上った。

光の奔流。それは辺り一面を白く染め上げる。

……そして、目を開けるとエアルの暴走も収まりギガラルヴァ達の姿は無くなっていた。

……逃げたのか？

「誰……?」

「……デューク」

誰にも聞き取られないように小さく呟いたのだろう。だが、安心してきっていた俺には響くようにさえ聞こえた。

――

- - - - -

当のデューク本人は俺達をあまり気にしていないようで、奥のエア
ルクレーネに一度だけ目を向けるとすぐに踵を返した。それを見て
すぐさまリタが止めに入る。

「ちょっと待って！」

「……………」

「その剣は何っ！？見せて！」

「今一体何をしたの？」

「エアルを斬るっていうか……。ううん、そんなこと無理だけど」

「知ってどうする？」

「そりゃもちろん……。いや……。それがあれば、魔導器の暴走を止め
られるかと思つて。

前にも魔導器の暴走を見たの。エアルが暴れてしてどうすることも
できなくて……………」

「それは『歪み』
当然の現象だ。」

「ひ、ず…み……………」

デュークはただ肅々と告げる。
それを受け固まってしまふリタ。

恐らくリタ自信が持つ知識がデュークの発言の意味に追いついていないのだろう。

「あの、危ないところをありがとうございました」

「エアルクレーネには近づくな」

「エアルクレーネってこのことよね？世界中にあるエアルの源泉だっていう……」

「？……そうだ。

誰から聞いた？」

「え？そこにいるショウヤにだけど……？」

リタの発言を俺の方向くデューク。

俺の顔を見たときには納得したという表情が浮かぶかと思っただが、その顔には感情らしい感情が現れていない。

ただいつも通り、悩み続けているかのようなポーカーフェイス。

「なるほど。お前か……」

「……久しぶりだな。デューク。

最も初めて会った頭領の紹介の時からだけ」

とりあえず返事を返す。ただデュークがどのようにその発言を受け取ったのかがいまいち分からず、居心地が悪い。

「あー……。言っちゃあ拙かったか？」

「いや。別に構わんだろう。」

「……………それでは、私は行くぞ」

「ああ」

「……………本当に分かりずらい奴。それもまともに話したのはこれが初めてだからのもあつて余計に、だ。」

「まあ悪い人間では無いんだが。」

「……………知り合いか？」

「まあな。と言つても微妙だけど。」

「俺もこれが二回目だからデュークのこととはよく分かん」

「ふーん。」

「ま、散歩をしに来たつて訳ではなさそうだな」

「……………まさか、あの力が『リゾマータの公式』」

「……………ここだけ調べてもダメね。他のも見えないと」

「他の……………か。ショウヤもさっきこうというのが世界中にあるっていつてたよね？」

「ああ、いったぜ？」

「それを探し出してもっとよく見てみないと。確かなことは何も分かんない」

「じゃあ、ここで調べることはもつないんです？」

「ならダングレストに戻ってドンに会おうぜ」

ああ、とかええ、とかみんなが返事をする。
やれやれ、これでやっと終われそうだ。

- - - - -
- - - - -

「なんてことを考えた時期が俺にも……」

「太刀影！」

「つぶねえ！？」

本当、なんでこんなことになってんの！？
おかしい、このイベントはユーリだけであつた筈。なのに、何で俺
まで巻き込まれてんのぉ！？

「ちいつ。孤月閃、義翔双閃！！！」

「フン、まだ甘いか。鳳凰の宴！！」

「があッ！」「ショウヤ！」

近づいて斬れば受け流され吹っ飛ばされる。
魔術を使えば詠唱の隙にまた吹っ飛ばされる。

てかこのじいさん相手にどう立ち回れと？

ユーリもよくああやって動き回れるなつと。

「まだまだあ！」

「おーっと、2人ともここまでだ。これ以上は本気になっちまうかな」

まじで化け物だよ、このじいさん。

顔にはシワが深く刻まれ今まで生きてきた年月を表している。それなのに力はまるで衰えていない。

バルボスといううちの頭領といい、ドンといい、ギルドのボスは高い戦闘能力がデフォなのだろうか？

- - - - -

「痛く、あのじいさん歳偽ってんじゃないだろうな？」

「あの、大丈夫ですか？ケガないです？」

「ん？ああ。こっちは大丈夫。治療済みだ。

全く、こっちは毎日鍛錬してるってのに、こつも手も足もでないと
は……」

正直凹む。

自分に才能が無いことも自覚はしているが辛いものは辛い。

「まあ、こればかりはすぐにどうにかなることではないし、気長にやるしかないよな」

「……うん、そうだよな」

「カロール？」

「僕も頑張っつていつかドンみたいに……」

「……………」

……やれやれ。夢に満ち溢れているっていつのは……いつのを言うのかね？

「ほらカロル、行くぞ？」

「あ、うん」

……俺の場合も必要なのは努力か。面倒だけど、

「やるしかないか……」

はあ……次はどう動こうかね？

第二話〜翠の争乱：後編〜（後書き）

作者

「二週間ぶりの投稿お待たせしました！」

翔矢

「なんかこれも久しぶりだな？」

作者

「ですねー。まあこの空間は作者の気まぐれだし」

翔矢

「それはいつものことだろ？」

「てか今回もテストだったんだろ？どうだったんだ？」

作者

「あつ H A H A H A」

「うん、死んだ」

翔矢

「おい」

作者

「さてさてやっとケーブモックが終わりました。

もう少しスピード上げて行かないと何年もかかりそうで怖いですねー

まあ諦める気はありませんから

あと、そのうち各話を調整するつもりです。プロローグをまとめた
りとか」

翔矢

「はあ、まったく」

作者

「それではまた来週！」

第三話　紅の絆傭兵団へフラッドアライアンス　：前編

- - - 何時かの会話 - - -

逃げた。逃げた。とにかく逃げた。

脇目も振らずに。頭の中が真っ白になって。でも逃げた。

始めは3人。次に2人。

でも……最後は1人。

初めて見た場所。

初めて感じたほどの怒り。

初めて身近に感じた死。

そして、それと同時に初めて ■ ■ ■ ■ 。

だから恐怖を感じた。

よって恐怖を感じた。

そして恐怖を感じた。

故に恐怖を感じた。

自分が今何処に居るのかも分からなくて。

■ ■ が ■ ■ されかけるのを見て。

剣が目の前で振りかざされるのを見て。

そして、そんなことをした自分に対して。

あの時覚えていたのはそのくらい。

…… ああ。あと絶対に助けてやるって、思ってたっけ。

まあ極限状態だったからな。俺にしてはそんだけ考えられたただけでも上出来だろ？

……… なんだよ。今の俺にはこれが精一杯の冗句なんだから、少しくらい笑えよ。まあ笑ったら笑ったで殴ってたけど。

なあ、少しまいいからさ……。何か言えよ。

悪態でも、冗談でもなんでも良いから。

それが無理ならせめて……………。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……………ドンがお待ちです。此方へ」

やけにガタイのいい男に奥の部屋に通される。

場所はギルドの総本山にしてダングレストの中心。ユニオン本部。

その最も奥にある最重要人物の為の部屋。即ちドン・ホワイトホースの私室だ。

扉を順番にくぐる。

まず目に入ってきたのは――紅い生地^{ニオン}に白のラインが走った、ユニオンの旗。

そしてその前に座してこの自分こそがユニオンを統べる者なのだと、そう主張するはドン・ホワイトホースだ。

左右の壁には対称的に並んだ五大ギルドの紋章。

五大ギルド、それはユニオンに所属するギルドの中で最も大きく影響力を持つギルドのことだ。

ラーギイ氏を筆頭とし、アスピオの魔導器研究機関と共に魔導器の発掘を行う。採掘ギルド『遺構の門』^{ル・インズゲート}

一般家庭からギルドにまで広く武具、^{いもの}鋳物を提供するが、自らの技術^{ソウル・ザ・スミス}を秘伝のものとするためあまりその実態が知られていない。鍛冶ギルド『魂の鉄槌』

バルボスを団長とし五大ギルドの一角でありながらユニオンの信条に反する行いが目立つ傭兵集団。傭兵ギルド『紅の絆傭兵団』^{ブラッドアライアンス}

メアリー・カウフマンを社長としギルド、帝国の街問わず世界中の物資の流通を担う。商業ギルド『幸福の市場』^{ギルド・ド・マルシェ}

そして――

大首領ドン・ホワイトホースが率い、新生ギルドへの仕事の斡旋や
ユニオンの諸ギルドへ監督役を担う。ギルド最大勢力『天を射る矢』
アルトス

因みに俺が所属するのは。始祖の隸長ベリウスを首領とし、『天を
射る矢』と肩を並べノードポリカで闘技場を経営すギルド『戦士の
エンテレケイア
バレストラレ
殿堂』

まあノードポリカは戦士の殿堂が建設に携わっていたから実質、街
の運営も担っている。

ギルドは嘗て帝国の支配を嫌ったものたちが作り上げた自治組織で
そのころから帝国との仲は悪い。

だが現在では帝国もギルドの存在は一方的に敵視することは出来な
い。それは帝国市民の生活が最早ギルド無しでは成り立たなくなっ
たからだ。

例えば流通、生産、護衛、娯楽、魔導器の発掘。
結果として帝国はギルドの存在を沈黙という形で容認している。

……とまあ、長々と説明してみたがつまりギルドと帝国は対等の存
在だということだ。

事実、帝国とギルドが手を結ぶことは珍しくない。………良く
も悪くも、ね。

「よお、てめえら。帰って来たか」

「……………ユーリ」

此方に気づき真つ先に声を投げかけてきたのはドン・ホワイトホースだ。

そしてその後にユーリを呼ぶのは未来の騎士団長フレンだろう。かしこばったその鎧はこの空間には酷く不似合いに思える。

……………いや、そもそもこのダングレストに居ること自体が奇妙だろう。

「なんだ、てめえら。知り合いか？」

「はい、古い友人で……………」

「ほう？」

面白い偶然があるもんだ。ドンの顔はそう言いたげだった。

……………目の前でデジャヴがため、俺自身は居心地が悪い。

この後の展開の大まかな流れは分かっている分、興味も関心も正直言って、ない。

「ドンもユーリと面識があつたのですね」

「魔物の襲撃騒ぎの件でな」

ユーリのことを話す様はどこか嬉しそう。恐らくユーリのことを気に入ったのだろう。

……………俺？それはないだろ。ユーリ程強くないんだし。

そりゃ全力は出してないけど本気でやってああだったんだし。

「で？要件はなんだ？」

「いや……」

「俺達は紅の絆傭兵団のバルボスってやつ話を聞きに来たんだよ。魔核泥棒の一件、裏にいるのは奴みたいなんだな」

「なるほど。やはりそっちもバルボス絡みか」

「………ってことはお前も？」

一つ頷き、フレンはドンに向き合った。そして口を開く。

「ユニオンと『紅の絆傭兵団』の盟約破棄のお願い参りました。バルボス以下、かのギルドは各地で魔導器を悪用し社会を混乱させています。ご助力頂ければ共に『紅の絆傭兵団』の打倒を果たしたいと思っております」

「………なるほど、バルボスカ。」

確かに最近の奴の行動は少しばかり目に余るな。

ギルドとして『けじめ』はつけにやあならねえ」

「貴方の抑止力のお陰で昨今、帝国とギルドの武力闘争は治まっています。」

ですがバルボスを野放しにすれば、両者の関係に再び、亀裂が生じるかもしれません」

「そいつは面白くねえな……」

「バルボスは今止めるべきです」

話しているうちに勢いがのってきたのか、どこか弁に熱が籠もってきた。

「……協力ってからには俺らと帝国との立場は対等だよなあ？」

対するドンはどこか冷めたようにも思える。だがこちらが普通だと俺は思う。

帝国の犬である騎士と自由を求めたギルドの人間。元々相容れないのだ。

「はい」

「ふん、そういうことなら帝国との共同戦線も悪いもんじゃあねえ」

「では……」

「ああ。ここは手を結んでことを運んだ方がが得策だ」

なんかきれいにまとまりそうですねー、と他人ごとのように考えて聞きなが……

「おい、ベリウスにも連絡しておけ。いざとなったらノードポリカにも協力して貰うってな」

……そう思ったんだが。

「ドワーチェ？ 統領に……？」

思わず体が反応して、眩いた。

……その言葉は俺が思っていたより大きかったようで、次の瞬間にはこの部屋にいた全員の目が俺に向いた。

やべ、更に居心地悪くなった。

てか、ゲームで全然出てきてないから忘れてたんですけど……。

「お前、シヨウヤだったか。

ベリウスのことをそうやって呼ぶってこたあ、『戦士の殿堂』の一人か？」

「え、ええ。一応。統領および統領代理の補佐つてのをやってますが……」

いきなりだから思わずテンパる。

てかあれだぞ？

ドン・ホワイトホースは地球で言うところの某国の大統領クラスの超重要人物なんだ。俺みたいな小市民が緊張するのは当たり前だ。

……其処まで考えて気がついた。

その理論でいくとベリウスさんもその位の人物ということになる。

やべえ、職業も俺にあってねえ。

統領補佐……大統領補佐官つてとこなのか……！？

……なんか凄い地位だったようです。

「なるほど、お前が例のやつか」

「……………」

「ベリウスからの手紙に書いてあったんだよ、なかなか厄介なのを拾ったってな」

……………。

「つまり、ドンは統領から」

「ああ。最初っから最後までな」

「そうですか……………」

つまりはこれで三人目ということになるのか。
ベリウスさんにナッツさん、そしてドン。

すげえ顔ぶれだ。

「でだ、ものはついでだ。お前からベリウスへの口添えしといってくれや」

「……………分かりました。そのくらい、お安いご用です」

まあ、この件に関して『戦士の殿堂』は大して関わりがなかったしな。

「なら、早速頼む。なにか用があるのなら後で聞いてやるからよ」

「はい」

うん……。後でドンと話す機会が出来たと考えればいいか。

どうぞ此方へ。促されるままに部屋を出て行く。
ユーリ達御一行が何か呆然としているけど無視。

あと、心なしか胃が楽になった気がする。俺の心は硝子なんですよ？

第三話、紅の絆傭兵団へフラッドアライアンスへ：後編、（前書き）

グ・ダ・グ・ダ

第三話　紅の絆傭兵団へブラッドアライアンス　：後編

『嘗て我らの父祖は民を護る勤めを忘れし国を捨て、自ら真の自由の護り手となった。』

しかし今や悪政者の鉄の鎖は再び我らの首に届くに至る。

我らが父祖の誓いを忘れ、利を巡り互いの争いに明け暮れたからである。

故に我らは今一度、ギルドの本義に立ち戻り持てる力をひとつにせん。

我らの剣は自由のため

我らの楯は友のため

我らの命は皆のため

ここに誓いを新たにす』

これ即ち、ユニオン誓約全文なり。

- - - - -

ユニオン本部から外に出ると街は酷く騒がしくなっていた。

先ほどまではずっと本部の中にいて統領への口添えの手紙を書いていた。

とは言ってもそれ自体の意味はたいしてなく、ドンの部下たちに対するポーズのようなものだ。だから、「ついでに個人的な手紙を送りたい」といつてもう一通で、ドンの本来の狙いにふれておいた。まああの人（？）なら大丈夫だろうけどよ。

因みに手紙は伝書鳩ならぬ伝書ホークで送った。

ホーク種はノードポリカでもよく見かける鳥型の魔物で長距離を飛ぶこともできる、らしい。まあ幽霊船でも出ていたくらいだからそうなんだろう。

「どけどけえー！ドンがお通りだぞー！」

ユニオンで見かけた気がする男が奥から走って来て、人の山を切り開いていく。

そしてその後ろを部下を二人引き連れたドン・ホワイトホースが歩いて来ている。

………カリスマってああいうことなんだなあ。

目の前の広場では、さっきの男の声を聞きつけたのか様々なギルドの人間が集まって来ている。

大手のギルドから規模の小さな傭兵ギルド。戦士から魔導師。剣から杖。勿論、男から女まで。

『魔狩の剣』なんてのもいるのな。

「いやー、実に壮観ってか？」

「……何やってんすかダミーさん」

後ろから掛けられたら声に振り返ると「凛々しいおじさん」ことダミーさんがいた。

年齢は三十代くらい、本名不詳。ギルド『天地の穴蔵』の一員。

よく分からない人だが優秀で真面目に仕事をこなす人。他のギルドからの信用も厚い。

かと思えば小さな子供からの眉唾な噂をかなり真剣に調査するなどしているらしい。

「ドン自らお出ましなんだ、来なきゃ損だろう？」

「損って……。それに仕事があるって、その仕事のついでだよ」……」

俺が黙ったのを確認すると、ダミーさんは真剣な顔で続けた。

「今回の件には『紅の絆傭兵団』と帝国評議会が裏にいるみたいだな」

「……みたいです」

「……………あれ？もう知ってた？」はいと返すと何か気まずそうな顔をする。

おい、さっきのシリアスモードはどこに行った……………。

「てかそんな重要なこと俺に話していいんですか？」

「いい。ドンに報告したらもう知ってたみたいだしよ…………。だから誰かの驚く顔見ないと気が済まないんだよ！」

「……………。ハア……………」

これで本当に優秀な人なんだろうか……………？
この人を重用しているギルドの人は苦労してるんだろうな……………。なんて人事のように考えて踵を返した。

「ん、もう行くのか？」

「俺にはまだ用事があるんですよ」

「そうかい」

俺達を見下し侮辱しやがった帝国のクソ野郎共に、思い知らせてやるっじゃねえか……！！

ドンの宣言と様々なギルドの人間の叫びを背後にしながら歩みを始める。

……………次は、歯車の楼閣ガスファロスト。

『紅の絆傭兵団』の本拠地にして、原作第一部のラストダンジョン。

「先回り、しますかね」

面倒だけど、という言葉は飲み込んでおいた。

まだまだパーティーメンバーに付いて回らないとならないような気がするし、その度に面倒だなんて言っていられない。

まあ、もっとも今回はそれだけじゃあないんだが。

可能性は低いけどあいつ等に関する手がかりがあるかもしれない、ということだ。

可能性はもの凄く低い。だがバルボスは帝国評議会議員、ラゴウと繋がっていた。だがこの2人も――

「ブルツ……」

な、なんだ？今の寒気……。

なんか……いやーな予感がする。よく分からないけど。

大丈夫、だよな？

- - - -

Side Rita

今、あたし達は『紅の絆傭兵団』のいる酒場に侵入するためにダン
グレストの地下に張り巡らされた地下水道にいる。

先ほどユニオン誓約だかなんだか知らないが、埃にまみれたカビ臭
い壁に彫られた文字を見つけた。それに対してガキンちょ（カロール）
がやけに嬉しそうな声を上げていたが、あたしにはその価値がどれ
ほどのものか分からないし、興味もない。

「でも……ショウヤに何も言わずに来てしまつて良かったんでしょ
うか？」

「さあ？あいつなら別に大丈夫なんじゃない？」

エステルは不安そうに呟くような声でいった。

確かに上は大変なことになっているだろうが、別に戦場になってい
るわけではない。よつてあいつを心配する必要がない、という訳だ。

……話は変わるがショウヤといえば、未だに分からないことが多い。
い。

あたしでも知らないようなことを幾つか知っていたし……。

「リタ？なにを考えているんです？」

「え？…うん。ちょっとね。」

あいつって一体何者なのか、って」

「あいつ…はシヨウヤのことですね」

エステルはうーん、といったすぐ口を開いた。

「リタはシヨウヤのことが気になるんです？」

「な！？」

頭の中が真っ白になる。

突然何を言い出すのだ、この子は！？

こっちは大真面目にシヨウヤとは何者なのかとか何故あんな事を知っていたのかとか考えていたのだよってこんな突如放り込まれた爆弾に対処するだけの思考能力は持ち合わせていない……！

……しかも面倒なことに視界の端っこで何故か戦慄しているおっさんがいる。

「ま、まさか……！青年2号が、このカタブツ天才魔導少女にフラグを立てていはぐッ、ぶベラッ……！！」

「リ、リタ!？」

……うん、実にスッキリした。そして思考も正常に戻ってくる。

考えてみれば、さっきのあれは本人にそういった意図エステルがないのは明らかだ。

……単純に天然全開だっただけだろう。

「と、とにかくリタはどんな事が気になっているんです?」

端っこで未だにのた打ち回っているおっさんがいるが無視する。

……エステルも随分染まってきたようだ。

「シヨウヤがなんであんなことを知ってたのかってことよ。
証明した訳じゃないけどあの様子だと本当みたいだし」

「うーん、シヨウヤいたというノードポリカにも、アスピオと同じように魔導器研究機関があったんでしょうか?」

「それはないわ。魔導器、ひいてはエアルの研究には特殊な測定装置が必要になるの。そんなものが他にもあるならあたしの耳にも入ってるはずよ」

それにシヨウヤ自身も言っていたではないか、上司に聞いたと。そしてシヨウヤは役職は統領補佐というらしい。恐らくその上司と

は統領のことだろう。

……普通ならここで「ではその統領とは？」なるところだがそれだけではない。

あたしのような魔導師だから分かるが、シヨウヤがもたらした情報は有益なものだ。それもあり。

であるなら、何故シヨウヤにその情報を「統領」とやらは渡したのかということになる。

その「統領」がこの重要性を理解していなかった可能性も無くはないが、これだけのことを知っていたのならそれはないだろう。

……つまり要約するとシヨウヤとその上司は何か（あたし達魔導師にとって）重要な秘密を抱えているということだ。

……なにも進んではないが、それは仕方がない。

その時には、本人から直接聞きましょう（……………）。

s i d e o u t

……この時話の中心となっていた翔矢が突然、寒気に襲われて
いたことなど、彼女は知る由もない……

- - - - -

第三話　紅の絆傭兵団へブラッドアライアンス　：後編（後書き）

作者

「……………（汗）」

翔矢

「さて……言い訳を聞こうか？」

作者

「いや、その前にこの物騒な刃物を閉まってくれませんか」「ああん？」「いえ、なにもありませんですはい！！」

翔矢

「……………で、なんでこんなに遅れたんだ？」

作者

「いや、試験的にギャグと女性視点からやろうとしたんだけど、なんかこんなグダグダに……………」

翔矢

「……………もう一つの理由は？」

作者

「モンハンやってm」「弧月閃！！」「ぬわああ！？」

翔矢

「明らかにそっちのほうが比重が重いだろうが!!」

作者

「ひ、ひえ〜!？」

- - - - -

作者

「さ、さあさて。実質今回は次への繋ぎの回です。

次回の更新は今週の土曜か日曜に行いますのでどうかご容赦を……」

翔矢

「なら、ちゃんと更新していれば良かったじゃないか」

作者

「う、もう勘弁してくれ……」

.....

作者

「因みに言つときますと今作品のヒロインは決まっています

リタがヒロインなのか?とか思った方ごめんなさい。まだどうなる

か分かりません(汗」

第四話　友が為、己が為：前編　（前書き）

遅くなりました、すいません（汗

第四話　友が為、己が為：前編

乾いた夜風は砂を運ぶ。

一見すると砂漠のように思えるがその本来は全く違ったものなのだと容易に想像でる。

……足元には干からびた草木の根がころがっているからだ。

それはつい数ヶ月前までは草木の生い茂る場所であつたことを示していた。それが今や、目に付くものは魔物たちくらいのものだ。

因みに襲いかかってくる様子がないのは魔物除けのホーリーボトルを撒いたためだ。

確実にこれから戦闘をしなければならぬというのに魔物とまでやり合っているのは身体が持たない。

再び、強い風が吹いた。

当然それを防ぐことが出来るものなんて何一つない。

……故に砂は舞い上がり小さな竜巻状の塊を作り出し目の前を横切っていく。

- - - 見えた

足元の三十センチ強の風の塊などとは比べ物にもならない、黒い雲の塔。

その塔から少しずつ、ゆつくりと雲が離れていきそこに隠された本来の姿をさらし出す。

黒鉄の塔。一キロは離れている此方からでも頂上の幾つもの噛み合った歯車が確認できた。

原作通りの流れを踏んでいるのならこうだ。

『ユーリ達一行はドンとの話し合いを終え、ダングレストの街に出る。』

するとそこで紅の絆傭兵団を発見するも見張りがいるため近づけない。

だから街の地下に張り巡らされた地下水道を通り、直接紅の絆傭兵団のボス、バルボスの下へ行く。

しかし後一步の所で逃げられてしまう。

そこで突如、以前からユーリ達の目の前に現れていた竜使い……ジュデイスが現れる。

その竜使いにユーリはバルボスを追うのを手伝ってくれと頼み、竜使いと共に紅の絆傭兵団の本拠地『ガスファロスト』を目指す』

……ユーリとジュデイスは無事に辿り着いたようだ。

「ちょうどいいくらいかな……？」

原作での時間の流れがどれほどのものだったのかは分からないが、多分。

近くまで行って見張りの連中に見つからないかが心配だが、今は闇夜。ギリギリまでは見つからないと思う。

- - - ?

フアーン

言葉にするとそんな感じの甲高い鳴き声が聞こえる。

俺はその声に聞き覚えがあった。……バウルだ。

よくよく目を凝らすと豆粒ほどのものが塔より飛んでいるのが見えた。

こっちに、向かって来ているのか……？

だんだんと高度を下げいつているようで、その姿がはっきりと見えるようになる。

「バウル！」

その名を呼ぶと返事が返る。更にスピードがあがったようだ。

それから数分もしなかっただろう。

バウルがじゃれつくように俺に近づく。そしてその瞳は確かに何かを訴えている。

それに俺は諭すように声をかける。

「分かってるよ、そのくらい。まあ、ジューデイスなら大丈夫だろうけど」

正直な感想を述べる、とバウルは抗議をするように頭を俺に押し付けてきた。

だから分かってるっての。

「……じゃあ、バウルにも手伝ってもらおつかな？」

フアーーン………？

- - - - -

s i d e Y u r i

「さっさと歩け！」

「っ………分かってっから急かすなよ」

どれほど、歩いただろうか。

頭には黒い布のようなものが被せられているため、辺りの様子が分からない。そのため、やけに今までの距離が長く感じる。

分かっていることは、此処が紅の絆傭兵団の本拠地だブラッドアライアンスってことくらいだ。

……今は大人しくして様子を伺ったほうがいいのか……っ！

新たな気配、数は1。

そしてそれと同時に、

斬！――ドゥン、

誰かが倒れる音がした。

な、なんだてめえ！？

くそ、やっちまえ！！

ため、動いてんじゃガッアア！

辺りの連中が騒ぎ出し、更に誰かが倒れる。内容から察するに、例の白い鎧を着たやつも動いたようだ。

……何だかよくわからないが、俺達にとっては好都合。

「ハッ！！！」

「ガッ……！！」

俺の身体を押さえていた奴に渾身の蹴りをお見舞いする。
そしてすぐにバックステップで離れる。

「……………」

ドン、と誰かにぶつかった。マツ、ズ……………！
……………だがそれは次の瞬間、杞憂となる

「大丈夫、俺だ」

「！？ショウヤ、お前何でここに！？」

ぱつと頭の布は取られ、やっと視界に光が入る。
そこに、いたのはダングレストで別れた筈のショウヤだった……………。

……………

Side Show ya

「！？ショウヤ、お前何でここに！？」

頭に掛かっていた袋を取つてやると、ユーリは心底驚いたという表情を浮かべていた。

まあ、驚くことに無理はないだろう。しかし今は戦闘中だ、悪いが

呆けている暇はない。
ウオーバイク
ジューデイスにだって槍を渡して戦ってもらってるのだ。

「いいから両手を出せ」
「ん、ああ」

ガン!!

簡易的な手錠を破壊し、その次には腰に刺さっていた予備の刀を押し付ける。

ユーリはそれを受け取り……っておい、他人の刀の鞘投げ捨てんなよ………!!

「何呆けてんだ、さつさと動けよ」

「!おい、さつきの鞘。ちゃんと後で取ってこいよなあ!!」

「へいへい、分かってるよ!!」

ステップ、そしてすぐに傍にいた奴に袈裟斬りを放つ。が…

ガアンツツツ!!!!
「っ、っ~~~~!!」

……剣の刃で受け止められる。

「くっ、止めるよなあ。刃こぼれしちまうだろうが!!」「うるっ、せえ!!!!」

っ……！力で無理やりに押し返され、こちらはそれから体制を立て直そうと距離を取った。だがそうはさせまいとそいつは直ぐに肉薄して来る。

速い……！

そして、恐ろしく戦い慣れている。

………ブラッドフライアンス 流石は紅の絆傭兵団の一員、と言ったところか！

ブラッドフライアンス

紅の絆傭兵団。それは、その名が示すようにありとあらゆる戦場を駆ける戦いのエキスパート。

その戦いは魔物は勿論、対人戦もこなす。

こいつらはよくありがちな、力に胡座をかき日和ったような連中とは訳が違う。

だが、それが負ける理由にはならない……！

「ハアアアアア！！」

「っ！」

闘気を解放し、近づいて来ていた奴を吹き飛ばす。

――オーバーリミッツ――。

一定以上の技量をもつ者なら誰でも使える、身体強化の術。

………原作で登場していた雑魚敵にも使える奴はいたのだろうが、

使う奴がいなかったのは恐らく魔導器を持っているやつが魔導士を除いて居なかったからだろう。

だが、こつちでは案外普通に持っていたりするから面倒なんだよなあ！！

「義翔双閃！喰らえよ、詠唱破棄、レイ！、レイ！！」

義翔双閃でさっきの男を倒し、立て続けに二発の中級術をユーリやジューデイスが戦っている方に叩き込む。

……あれ？珍しく早くに勝てたんじゃね？

あと………オーバーリミッツの最大の強みとも言える利点。それはこの詠唱なし《ノンスペル》での魔術行使だと俺は思う。うまくやれば敵に反撃させずに倒せるし。

……、消費が半端ないからやらないけど………。

「そこで何をしている！！」

「っ！おいショウヤにアンタも、こつちだ！」

「お、おうー！」

「……………」

っ……………増援か……………。前衛三人に魔導師二人……………。

勝てないことはないが……、うん逃げた方が得策だな。

後ろを気にしながら、ジグザグにユーリの後を走る。

追尾性のあるファイヤーボールもこのそうやって走ればあまり当たらないからだ。

「……！こつちだ！速く！！」

それから……うん。

二・三分ほど走って偶然、鍵が開いていた部屋に飛び込む。

なんか……ベタだなあ。そんなくつだらないことを一瞬考えた気がするが、心底どうでもいいことだから頭から締め出す。

足音が近づいて、遠ざかっていくのを確認してから、やっとひと息をつく。

ユーリは扉のすぐそばの壁に背を預け、目を閉じた。

「ふう……。やっとまいたか……」

「ああ、お疲れさん。ユーリと……ジュデイス」

その言葉を待っていた。そんなタイミングで彼女は白兜を外した。

「ん？クリティア族……？」

- - - - -

「ユーリだ。ユーリ・ローウェル」

「私の名前はジュデイスよ。よろしくね」

「ジュデイスか。ジュデイのほうが言いやすいな」

「それでいいわ」

「……、ふう……」

……何とか一段落し、まあ……。……うん、それだけだな。
なんかハブられてる気がしないでもないが……。……気のせいだと思う、
多分。

次にユーリはやつと此方を向き、口を開いた。

「でもシヨウヤはなんでこんな所に来てるんだ？」

「ん？ああ。俺は俺の超個人的な用事があつてね、そのついでだ」

「ついで……ね」

「そーそ、ついでついで。まあ、それだけじゃないんだけどよ……」

「？」

訳が分からない、そういった所だろうか。
最も、関係あるのはユーリじゃあないんだが。

「………… ジュデイスの友達、バウルに頼まれたんだよ。
ジュデイスを助けてくれ、って」

「………… そう、あの子が…………」

困ったものだ。ジュデイスは笑うがその表情はどことなく、嬉しそうだ。

「何か状況が飲み込めねえけど、要するに個人的な用事のついでに俺達を助けにきた、ってことか？」

「おう、そんなとこだ」

「物好きな奴だな…………」

こっちは…………。だめだ、表情が読み取れん。

………… まあ、野郎に今のところを嬉しそうにされても気持ち悪いだけだが。

「そういつなつて。」

………… まあそれはともかく、次はどうする？」

「そうね………… それじゃ、頂上へ行きましょう。場所もはっきりして

るし」

「だな。んじゃ、その案採用で」

「いいのか？あいつらを待たせてるんじゃないのか？」

「あいつらなら俺が居なくても大丈夫だよ。それよりそつちこそ良
いのか？」

「ん？俺？俺はこの件を終わらせた後に好き勝手させてもらっさ」

「そうか、ならさっさと行こうぜ。こんなカビ臭いとこ、いい加減
ゴメンだ」

同感だ。

……扉をゆつくりと開けながら辺りを確認する。どうやら近くに、
連中は近くにいないようだ。

「じゃあ、行くぞ………！」

「おう………！」「ええ………！」

そこからユーリ掛け声とともに部屋を飛び出す。やれやれ………あ
んまり闘いたくないな。

第四話　友が為、己が為：前編（後書き）

翔也

「はあ、……………もうこのパターンなれたけどよ……………」

作者

「……………（ガタガタブルブル）」

翔也

「おーい、どうしたー？遂に壊れたかー？」

作者

「い、いやあああああああ！？」

翔也

「！？」

作者

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ勘弁してくださいその両手のウサミミとネコミミはやめて下さい俺はイロモノキャラの烙印は押されたくないんですマジ勘弁してください先輩……………！！！！！」

翔也

「……………」

……………

翔也

「で、どうしたんだ？いきなり絶叫して」

作者

「うつつ、部活のクリスマス会での新たなる黒歴史がぁ……」

翔也

「そ、そうか……」

作者

「うつつ、もうやだ。」

………えと、遅れてしまつて申し訳ありませんでした。次回は週1
を守るよう頑張りますので、長い目で見守って下さい………」

翔也

作者

番外編〜いつかの会話・蛇足編〜（前書き）

少し遅いですが……

番外編〜いつかの会話：蛇足編〜

一年の始まりを祝う行事というのは全世界、もとい異世界でも共通らしい。

この世界、テリユカリユミレースに放り出された後、『戦士の殿堂』パレストラレに拾われて約一年。やっと慣れてきたこの世界の生活で、そんな新しい発見をした。

ただ、こういう時に羽目を外しすぎるやつがいるのも共通のようで、いまでは大変力オスとしか言いようのない光景も広がっていた。

「ほら、次はこれ頼む」

「……………」

そして『戦士の殿堂』の執務室。その中にある俺の机の上にドサリ、と書類の山が置かれる。それも、今にも土砂崩れを起こしそうな山だ。あの……そんなマンガみたいな要らないんですけど……………。

嫌々ながらにして、試しに頂上の書類2、3枚を見てみるとどうやら修理代に関するもののようなのだ。

え、なにが起こった？

「あのー、ナッツさん？なんですか、この馬鹿げた書類の量は？」

俺はその山を持ってきた上司――ナッツさん――をジト目で見上げる。

すると、苦笑してナッツさんは言った。

「また酒に酔った男一人が暴れたんだよ、しかも今度は町中で」

「あー……、さいですか。因みに今日、何件目でしたっけ？」

「12、いや13件だな」

「13……………」

よくもまあそんなに事件を起こしてくれたものである。

そのせいでこちらは執務室で係りきり……………はあ。

あの酒臭い宴会の空間に居るのもイヤだが、何故俺ひとりがこの急な書類仕事をしなければならないんだ……………？

「……………で？怪我人とかは？」

「止めに入っ たうちの警備の連中が二十人程。死んだ奴はいない」

「へー二十人……って多っ！え、何者ですかそいつ！てか一人で二十人って化け物ですか！？」

「……かもな。あいつを見た瞬間、鳥肌がたったよ」

「ちょ………！？」

『戦士の殿堂』の中でもトップクラスの実力を持つナッツさんを戦慄させるって……何者だよ………！？（因みに俺が思うに一番強いのは統領で、次は警備部長だと思う。だから………三番目か）

「ち、因みにどんな奴だったんですか……？」

「俺には理解できん趣味だが、筋肉隆々としているのに青いタイツを着て、青のロングヘア！。そして得物は黒い戦斧、というなんとも奇抜な格好をしていたな」

「なん………だ、と………？」

え、えええー………？

な、何故にこんなとこに居やがりますか、アナゴ野郎？？

え、アイツらってたただの原作のおまけ要素で、実際には登場していないんじゃないのかなかったのか………？

あゝ、頭痛え……。。

「っゝゝ！……で！その変態野郎は捕まえたんですか！？」

「い、いや………」

ナッツさんは気まずそうに目をそらす。

まあ、しゃあないっっちゃあしゃあないけどよ……。いくらナッツさんでもアイツに勝てるとは思えないし……。

「はあー……、まあ捕まえられなかったとしても次から気をつけて起きましよう、うんそうしましよう」

「お、おう。だな（ど、どうした……？今日はどこか性急だな……？）」

……この時、統領代理は翔矢の妙なプレッシャーを受けて、何も言えなかったそう。

……ま、まあ、とにかくこの話題はこれで終わり！これ以上気にするのは精神衛生上毒にしかならないし……。

「まあ、それにしても………何ですか、この書類の量。まさか俺ひとりでやれと………？」

「お前ならこの程度の書類、夕刻までには片付くだろう？」

ナッツさんはさも当然、という風に言い切る。

内容は……修理費用の計算だけか？まあこれならそのくらいには終わるかもしれんが、流石にはいよろこんで、とはいかない。

他の奴らは……だめだ、あてにならん。

だがナッツさんは……。

「いや、そうかもしれませんが……」

「それに俺は面倒くさいからやりたくないしな」

「それが本音ですか！？」

いや、テメエだって暇してるんだからやれよ！！！！？

思わず上司、しかも直接命を救ってくれた恩人に暴言を吐きそうになったが、どうにか心に押さえ込む。

さすがにそのくらいの理性は残っていたらしい。

だがそれでも手伝わせようと思っているのでカツと顔を上げ、ナッツさんのほつを見ると……

「いやでも手伝わてくださ、っていねえ！？」

……………。

あの野郎つ……………！

「ちよつと待てえええええええ！」

ボタン、キーツ。

.....
いない。

急いで廊下に出たのだが、いないのだ。

……こうなると本気で逃げているのだろう。

捕まえて手伝わせるより、さっさと終わらせた方が早そうだ……。

「はあ……ん？ ショウヤ？」

「は、はい？」

いきなり声を掛けられたので反射的に返事を返す。
こ、この声は………（何

「カレルさん？」

「やあ、昨日ぶりだな」

……カレル。『戦士の殿堂』の警備部の長にして俺の剣の師でもある。

そして彼は遊牧民を思わせるくたびれた服を着て腰には長刀を携えている。

どこか陰のあるその顔は人を惹きつける魅力があるものだ。

だが……なぜここに？

「いいんですか？奥さんと娘さん放つという」

「あはは、言うようになったね」

あはは、って……。

この人は本来なら仕事がなく休暇中のはずなのだ。

それを不思議に思っ^て聞いてみると、例の青タイツ事件のことを聞いてきたらしい。

仕事熱心な人だな……。それに対して俺はどうにか、まあ無理やり言い含めた。

こんなおかしな（とはい^い切れないが）ことにこの人を巻き込みのにはやっぱり気が引けたからだ。

……それからお祭り騒ぎの結果、酒による大量の屍がでたとか、こんな日なのに仕事が大変だとか、他愛もないが俺にとっては重大なことを愚痴る。

それに苦笑しながらカレルさんは応じてくれた。

一瞬、迷惑かと思ったが「いつそのこと今のストレス全部ぶちまけよう」という結論に至ったので最後までノンストップで続けた。

……俺なら途中でキレてしまっただろうに、カレルさんは最後まで聞いてくれた。

ああ、ホントに良い人だ………（涙）

「とにかく、すみませんでした。愚痴に付き合ってもらって」

「いやいや、気にすることはないさ。偶には発散しないと、な？」

「あ、あはは………、ありがとうございます」

「だから……まあいいや」

そう言っただけでまた苦笑する。

この人には本当に頭が上がらない……。それを言えばナッツさんもベリウスさん《ドーチエ》も同じだが、その2人とはどこかベクトルが違う。

穏やかな人間味の中にある雰囲気。それが自然と他人に頭を下げさせる。

不思議な人だよ本当に。

「……………」

「?、どうしました?」

「いや、お前がギルドに入ってそろそろ一年なんだな、ってさ」

一年。短いけど随分濃密だったなと、思った。

「最初の頃は随分焦ってたようだけど、今ではすっかり落ち着いた」

「……………いろいろありましたからね。」

カレルさんには扱われましたし」

「だな。私にとってあの貪欲な目が懐かしくてね、つい力が入ってしまった」

「だからって最初の方にダークシール基本装備はやりすぎでしょう?」

違うない、そうカレルさんは笑う。

いや、笑って済まさないで欲しいのだが……………。(ダークシールは経験値が1・5倍になるかわりに術技封印、二倍ダメージを受ける装備品)

「とにかく、さ」

「?」

「お前が何をしたいのか、お前は話さなかったからな。私には分らん」

でもな……カレルさん、いや我が師は言う。

「短い間でも私が育てたんだ。

……焦ってチャンスを取り逃がすなってことだ。分かったかい？」

「……はい」

「うん、よろしい」

言いたい事は全て言ったのか、俺に背を向けゆつくりと歩く。

窓ガラスから光が差し込む姿は絵になっていて……。

うん、そのなんだ、カッコいいですねー、としか言いようがない。

………そこまできて、言わなければならないことを思いだした。

「せんせい
師匠」

「？」

「今年も、宜しく願います」

「……うん、こちらこそ宜しく」

俺の声で足を止めたカレルさんが改めて歩きだす。

……やっぱりこれを言っとかないと、どうにもすすきりしない。

カレルさんが廊下の角を曲がるまでを見届けると、執務室の扉にてをかける。

……さて、仕事するか。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

自分の机の前まで戻って来て、はたと気がついた。

「……カレルさんに仕事、手伝わさせれば良かった……」

.....さすがに間に合わなかったらしい。

第四話　友が為、己が為：後編（前書き）

カッとなってやってしまった。後悔はしていない……かな？

第四話　友が為、己が為：後編

周りからは歯車が回るの重低音が響き、辺りを照明魔導器が静かに照らす。

先程ユーリとジュデイスを助けてから数えること10数分。

その重苦しい光景が俺の心情に拍車をかけているような気さえする。それは俺が内心、頭を抱えていたからだ。

というのは前回、結構いい感じに意気込んでいたのに、いきなり出鼻を挫かれた感じになってしまったというのがある……………。

「……………まあ、それならそっち行く前に一旦下だな。そこで準備してから行こう」

「そうね、それがいいわね」

簡単に言うと、

ところで2人の荷物は？ ↓誰かが先に下に持って行ったみたいだな
↓…なん…だ、と…………？

……………みたいな感じだ。

お陰で一旦下まで降りなければならなくなった。

……まあ、本来の流れを踏まえて考えるとその方がいいのだろうけど、

無理矢理でもここで加わつといた方が後で色々やらなきゃならないときやりやすいかなー

なんて思ってたわざわざこの塔を登ったのだ。

つまり何度も往復しなくちゃなくなる訳で、正直面倒だ。

……まあ登ってきた理由は、それだけじゃないんだが。

……、まあいい。んなことは後だ。

そのジュディス達の荷物を持って行ったやつと、入れ違いになってしまったみたいだが、

「場所はだいたい分かっているからな。時間もそうかからないだろうし」

「そうか、なら案内を頼む」

「へいへい……」

……因みに、原作を知っている人は分かるだろうが、ガスファロスには多数の人達が捕らえられていた。

流石にそういった人達を放っておくほど人を辞めた覚えはないので、ちゃんと助けておいた。

.....あれ？

誰に対して説明してんだ、俺？

「おい、何やってんだ？」

「え？ああ、スマン。今行く」

はつとユーリの声で気がつき、我に帰る。

……考えごとしてる場合じゃないか。さっさと行って、さっさと終わらせよう。

- - - - -

所変わって同じ塔内ガスファロストの倉庫らしき部屋。

所狭しと槍やら剣やら錫杖やらが並べられていて、その手の物が好きな人間にとっては垂涎ものだろう。

まあ、俺からしてみれば一部を除きどこが良いんだろう、と言ったところか。

「で、見つかったのか？」

「オレのはこの通り」

ほら、と挙げられたら右手からは黒いひもが伸び、剣と小さな袋とをぐるぐる巻きにしている。

恐らく、袋の中身はグミやライフボトルだろう。

「私のは……ないわね………」

…やはり、か……。

ジュデイスが愛用していた槍は素人目から見ても分かる見事な物だったと記憶している。

だから連中の誰かが持って行ったのだろう。

実際、原作ではそうだった。

だからさつさとジュデイス達に合流した、という理由も一応あったのだが……。

……無駄足だったか………。

ジュデイスは仕方がない、と先程まで振るっていた槍を改めて握りしめた。

「いいのか？」

「ええ、これ以上探してもここには無さそうだし。探しながらいくわ」

「そつか。じゃあオレらも気をつけとくとするか。な？」

「…ああ、俺も気をつけとくとするよ」

「…ありがとう」

……………ありがとう、か。

いやまあ、その件に関しては何の役にも立ってないわけだから、立つ瀬がないというか心が痛いというか……。

自分の頭をガシガシとかく。

ああ……クソ、サブイベントまで一々覚えてないっての……………。

「あら？シヨウヤやどうしたの？さっきから考え事してばかりのようだけど」

「え……？ああ、その……………」

そして気づいたら目の前にジュデイスの顔があった。

途端に居心地の悪さが倍増したかのような気さえする。

そしてこうなると、何かしら言わないと更に居心地が悪くなるような感覚に苛まれる訳で……

「その……悪かった」

「？」

「いや、もっと早く来ていればあれ槍がどっかいくこともなかったかもしれないんだし……」

「……俺の場合、そんな時は悪手をつってしまつことがよくあるよ
うだ。」

「……別にそんなことは気にしていないわ。寧ろ、謝られても困るもの」

「でも、大切なものなんだろう？」

「それでもよ。貴方は私達を助けてくれた。それだけで十分よ」

「っ……」

そこでジュデイスはニコリと笑う。

ああもう、……そんなふうに笑顔を向けられては何も言えないんだが……。

「あら、どうしたの？今度は急に黙って」

「っ……！な、なんでもない……」

「ふふ……」

なんか、見透かされているような気がするよ……いや、見透かされてるんだろっけど……。

はあ、と取り敢えずため息。
頭を切り替えないと……。

ふと部屋の扉の方を見るとか呆れたような表情を浮かべたユーリがいた。

何故に？

「えーと、終わったか？」

「え？ああ」

「ならさっさと行こうぜ」

それだけ言っと、本当にさっさと部屋から出て行くユーリ。
なんだっただ……？

……とは言えイマイチ釈然としないまでも言っていたことはもつと
もだ。

“さっさと”行くとしよう。

そうしてユーリの後を追うように、俺達は部屋から出る。

これでやっ和本格的に始められるかな？

- - - - -

倉庫を出てすぐのことだ。

塔の外部通路に繋がる大きな扉。その向こうから聞こえる爆音、轟音、怒号。

即ち - - 戦いの音だ。

「まさか……！あいつら！」

「！おい、ユーリ……！」

その音から今外で何が起きているのか察したのだろう。

ユーリは突然、俺とジュデイスを置いて扉の向こうへと走って行った。

それはもう、こっちの事なんて見向きもせずだ。

「まったく……」

「ふふふ……。なんだかんだ言っても彼も友達の事が心配だったみたいね」

「……、だな」

まあ、つまりあれか？ツンデレならねクウデレか？

……最近は何んでも有りなのか？バンナムさん。

俺が変なことに疑問を持ってふけていると、ジュディスにトンと肩を叩かれた。

そして、我に帰る。

……なんかこんなこと、さっきもあつた覚えがあるぞ……。

「…アナタは取り敢えず、その考え事をしだすと周りが見えなくなる癖を治すべきじゃないかしら？」

「ははは……気をつけるとするよ」

ジュディスからジト目でまたか、みたいな感じで睨まれて肩を狭める。

いやまあ、気をつけてはいるんだが、こればかりはなあ…。

つと………ただこうしてユーリを放って待っておく訳にもいにかん、か。

「とにかく行くでしょうや」

「そうね、いつまでもこうしている訳にもいかないし」

人一人通れる程に開けられたら扉の隙間を通り、外に出る。

そこは中とは違い石で作られていて、俺にはどうにもそれが繋がらなかった。

それは恐らく、この塔の作りに問題があるのだろうと勝手に推測する。

この塔、下から上へと行くにつれだんだん新しくなっているのだ。つまり、もとからあった建物を無理矢理増築したのだ。

……日本人としてはこんな作りで地震とか来たときどうすんだろ、とか思ってしまうがそれは蛇足だ。

つと、まあそれで、今俺達がいるのは、最も下の方の階でこの場所にずっと昔から建っていた建物の上だ。

それでいて中身だけは機械が大量に並べてあるもんだから、見た目に数十年近くの開きがある。

――閑話休題。

そしてそこにいたのは、エステル、リタ、カロール、ラピードと原作通りだ。

……ん？ああ、あとおっさん。

そこにいるみんなは驚いたような表情を浮かべていて、約一名は異様に目を光らせていた。

「……だ、誰だ、そのクリティアっ娘は……！どこの姫様だ……！？」

「おっさん食いつきすぎ……」

「オレと一緒に捕まってたジュデイス。なんか、シヨウヤが助けてくれたっぽい」

「ぽいって……」

まあ、別にいいんだがそういう扱いされるとなあ……。

そして目の前で先ずは、と自己紹介タイムが始まったようだ。

「こんにちは」

「ボク、カロール！」

「エステリーゼって言います」

「ボクらはエステルって呼んでるんだけどね」

「リタ・モルディオ」

「そして俺様は――」

……よし。

「「おっさん」」

おお。リタと俺の声が綺麗にハモった。
なんとなく心地良い。

「レイヴン！レ・イ・ヴ・ン！！」

「そういう言い方する人って信用できない人多いよね……」

「まあ、てかこんなおっさんを信用しろって方が難しいと思うぞ？」

「ああ、それ言えてるかも」

「……ううっ……」

三人（上からカロル、俺、リタ）の連続パンチを浴び、うなだれる
おっさん。

……うん、実に心地が良い。

ストレスは時々発散しとかないとね？（笑）

「それにしても、ショウヤも来てたんだね。驚いたよ」

「…そうね。てかアンタ何者よ、こんな所にまで現れて。また個人的な用事ってやつ？」

「ん？まあな。…まあとにかく、俺にも色々あるって事だ」

「…ふーん……あと、そういえばアンタのお友達も来てたみたいだけど？」

嘘を言えば許さん。…そんなとこだろうか。
目には静かな火が灯っているようにさえ見える。

だけど、俺の返事は

「みたいだな」

……

「え？それだけ……？」

「？、おう」

「……あたしが言うのもなんだけど、他に言いようってのがあると思うわよ……?」

カロールとリタは面白いように俺の思い描いた反応を示してくれる。

まあ、言いたいことも分かるんだが本当のことを言うわけにもいかないからな……。

そして、そうこうしているうちに、やっとおっさんが復活したようだ。

「……な、なーんか納得いかないわ………」

「まっ、いいんじゃないの? とりあえず」

「ウフフ……愉快的な人たち」

「おお? なかなかの好印象?」

「バカっぽい………」

「まあ、そう言ってやんな。みんな知ってるから」

「……チミたちさつきから酷くないかね……?」

知らん。

……………何故だか先程から真面目な話をする空気ではなくなってしまっている。

ならここで仕切り直さないと。

エステルはそう思ったのだろう。

遠慮がちに話を切り出した。

「えと……ところで、ジュデイスはここに何しに来てたんです？」

「私は魔導器を見に来たのよ」

「わざわざこんな所へ？何しに？」

「私は……………」

「ふらふら研究の旅してたら捕まっただと」

ジュデイスの言葉を遮るように、ユーリは言う。

ウソをつくのは苦手と公言する彼女だ。

普段ならそう思えなくても、こういう時は本当にそうなのだと実感する。

「ふーん。研究熱心なクリティア人らしいわ」

「……………」

小さく微笑むだけのジューデイス。

………そういえば原作のジューデイスも語らないだけで、ウソを決してついていなかったな。

…それからユーリ達は水道魔導器アクエプラスティアの魔核コアは見つかったのか、とか相談をしていた。

まあ、その事は俺は関係ないから聞き流しておく。

………この時、俺はすっかり忘れていた。
この瞬間シーンで、少なくとも二つの可能性があったということ。

「う、うわあああ!？」

「っ……!？」

突然のカロルの絶叫。

それに驚いて声のした方を向くとうとういうことだか分かった。

あるうことか、上の階から紅の絆傭兵団ブラッドファイアンスのメンバーが飛び降りてきたのだ。

「ちっ………!」

「まず……っ!!」

生存本能からか、自分でも驚く程の速さで刀を引き抜く。
だけど、間に合わない……!

- - - 斬、斬ッ!

「……え?」

突然のことで今度こそ思考が追いつかなくなった。

なんでまた、人が増えている(……………)んだ……?

それは騎士の鎧を着て金の髪をしている。

そして一瞬早く現れていた傭兵に斬りかかる。

って、まさか。

「大丈夫かッ!」

「フレン!?!」

フレン・シーフォ……?
なんで、ここに……???

.....

ああ、そう言えばこの世界は、分かっているだけでも二通りの流れがあった。

森での件で一応わかっていたつもりだが、忘れていた。

言っまでもなくP S 3かX B O Xかという意味でだ。

……この世界は前者のようだ。ところが俺が持っていたのは後者。

前に前者もやったとは言ったが、あくまで一応。
それも友人の家で一度だけだ。

いちいち、覚えている訳がない。

「今更だけど、これは……危なかったな」

こんな細かな差異でいつの間にか後ろからバツサリ、なんて笑えねえぞ……。

……そろそろシナリオを書いたノートを見直しておくべきか。
……… 未来の預言書モドキなんて読んでもいい気分にならないから、嫌いなんだが。

未来を知る、なんてのはパンドラの箱からでさえついぞに漏れ出なかった災厄だ。

人が簡単に背負えるほど軽いもんじゃねえよ……………。

「……………話は纏まった？じゃあいくわよ」

リタの声ではつとして、顔を上げる。

そして見回して今がどうという状況か認識する。

……………成る程、フレンもパーティーに加わる、と。

まあ、俺達がいるのは敵陣の真っ只中である以上当然か。

「ワフ？」

「ん？ああ、ラピード。分かってる。行くに決まってる？」

「ワンっ！」

「へいへい、急ぎますよつと」

……………まあ、なんであれ前向きに前向きに。

そつでなきややってられんよな。

第四話　友が為、己が為：後編（後書き）

作者

「今回のテーマは
ヘタレ（弱）＋不思議生物Ⅱシヨウヤ」

翔矢

「んだよそれ」

作者

「いや、感想読んでたら思いついた」

翔矢

「……………」

作者

「てか君はプレスリー版はちゃんとやってないんだよね？」

翔矢

「……ああ。そんなに金なんてないしな」

作者

「なんともまあ、現実的な問題で……。
（勿論意味はありますよ？ストーリー的に）」

翔矢

「？どうした？」

作者

「いんや、なんでもない」

作者

「感想とご意見をお待ちしています！
次回も宜しく願います！」

第五話　悪意の野望・前編　（前書き）

遅れてすみません……

第五話　悪意の野望：前編

ガタ、ガタ、ガタ、ガタ。

歯車は一定のリズムを刻みながら回り続ける。

その合間に、明らかに異常な金属と金属がぶつかり合い新たな音を生み出す。

……言うまでもなく、それは戦いの音色だ。

塔を上へ上へと上がるにつれ、紅の絆傭兵団フリットアライアンスの抵抗が激しくなっている。

まあ……てかなんとかで流してるけどよ……。

「烈碎衝破ッ！」

「天月旋！風月ッ！！」

「ワウ、ワウッッ！」

明らかにあっちの方が何倍も数が多いのに俺達がどんどん勝っていつてゐるって……………。

……………これが補正か……………スゲエ。

ジユデイスもそうだが俺の技は基本的に1対1を想定している。

まあ、彼女は空中での1対1だから外野は気にしなくても良いんだけど。

だからあまりに敵の数が多いとどうしても術中心になる訳だが、それだと直ぐにTP切れ、もとい精神的に疲れてくる。

直ぐ道具を、^{グミ}という訳にもいかずそうなると結果的に敵陣に突っ込まなければならなくなって……………うん疲れる。

俺は基本、ヒットアンドアウェイ戦法だから敵陣の中心だとずっと走りつづけないといけなくなるのだ。

……………カレルさんに放り込まれた闘技場を思い出したよ……………。

「くたばれエ!!」

「お断り、だよ!」

全く、大変……だ！

「そこッ！孤月閃、義翔双閃ッ！でッ鷹爪襲撃……！」

空中に打ち上げ、最後に叩き落とす。

鷹爪襲撃は着地の際に衝撃波を飛ばすから降りる時も安全だ。

そして一時的に後ろまでさがる。

「つく、キリがないな……」

「そうだね。全面的に同意するよ」

「！……フレン、か」

気がつくと隣には白い騎士の鎧を纏った青年がいた。

正義感に燃え真面目な性格、帝国を中から変えてやろうと意気込む人物だ。

原作では21で物語終盤、全騎士を纏め上げるほどの実力を秘めている。

……まあ、あまり俺とは合わなさそうだけど。

そついう暑苦しい奴はアイツだけで十分だ。

いや、精神的に。

「こつ、連戦だと辛いね。いい加減、みんなも疲れてきているし」
「……………そうだな。」

だけどここまで来たらもう直ぐだと思っただが……………」

仕掛けも結構解いてきたし……といってもユーリが指に嵌めたソーサリーリングで歯車を撃っただけだが。

……………てか何でこんなに面倒な構造してんだよ。

「あーも……！いい加減に……しろおおお……！」
……………バンっ！

リタが連中の真ん中でスプレットゼロを発動させる。

荒れてるなあ……………気持ち分かるが。

まあ、それはともかく。

あと…… 4人か。ならすぐに終わりそうだ。

腰からナイフを探り当て、左手に持つ。

「ふッ、ふッ！」

- - ノクタールライト - -

…… TOAのヒロインも使っていた技だ。

今のところ直ぐに離れた相手に攻撃できるような技はこれ以外に持っていない。

カレルさん曰わく、カレルさん自身の持つ衝撃波による攻撃は少々複雑故に、俺にはまだ早いとのこと。

だから今はこれで我慢しとけ、とかなんとか。

まあ、…… あんなに凶悪 - - 衝撃波で魔物を二枚に卸すような - -
- - ものはそうなんだろうな - - と無理やり納得した。

…… てかあれを素人相手に飛ばすなといたい。

俺の投げたナイフを避けようとしたサーベルを構えている男はバランスを崩す。

そして、その隙にラピードが攻撃を加えていった。

お見事、流石ラピード。

「これで最後!!」

声のするほうを振り向くと、ユーリの足元で大男が崩れ落ちていた。

やっと終わったよ。長かった……………。

「あのね、まだ連中の親玉がいるでしょうが」

「……………声にだしてたか？俺」

「なんとなくそんな顔してただけよ」

「そ、そうか」

そんなに分かりやすいか俺……………？

……………ともあれ暫くは体を休めることは事実。

今のうちに少しでも休んでおかないと、辛くなる。

ふう、と息を吐く。

どのくらい登ったかな？

階段が多すぎて分かりやしない。

「ねえ！昇降機があつたよ。これ以上階段はないから、多分これが最後だと思う！」

「おっ、でかしたぞカロール先生」

……………元気だなあ。

いや、まあ俺もまだ戦えるけどよ。

でももう少し休ませて貰いたいな、っていうのも事実だったり。

てか昇降機……………ああエレベーターか……………。

あつたなそんなの。覚えちゃいないが。

「え、もう行くの？おっさんもうへとへとよ……………」

「あらあら、まだお若くていらっしやるから大丈夫よ」

「う……うおお！何か急にやる気出てきたあー！」

「……………」

突っ込まんぞ、もう突っ込まん……………。

しかも何回かこのやりとり見たし……………。

……てかおっさん、簡単に乗せられすぎだ。

態と（わざと）か？態となのか、おい。

「ハア……おい、そこー。っーか主におっさん。
さっさと準備しとけよ」

「ほいほい」。只今」

ユーリが呆れ顔で言った声に、真逆な表情を浮かべたおっさんが反応する。

あれが素なのか演技なのか……………残念ながら、生まれて二十年以上もなっていない俺には分かりそうもない。

………そこまで考えて、ブンブンと頭を振った。

今考える必要のあることではないな……。

「さてみんな、準備はいいね？」

「ま、これに乗ってあの大男のところに着くとは限らないけどね」

「だな。でも結構登って来たし、ここにきて急に上がる方法が変わったとくれば、強ち間違いでもないと思うぞ？」

「そんなものかしら……」

「そんなものだよ」

流れるにね。そんな、自分でも馬鹿げたことだと感じるようなことを思いながらエレベーターに乗り込む。

カタン、カタン、カタンと扉が閉まる。

同時に空気が固くなる。

それも迂闊に近寄っては怪我をしてしまいしそうなほどに、だ。

……俺達が入った小さな鉄の箱が引き上げられる。

あの独特の感覚が襲ってきたかと思えば、すぐに解放された。

- - ついた。

鼓動が煩わしい

……何時もの緊張だ。だが今回は心なしか早い気がした。

- - -そして、闘いが始まる - - -

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

これは……やばいな。

それが第一に思ったかんそうだ。

まず飛び込んできたのは、光だった。

最も夜はすっかり明けているが、まだ日も高くないためかあまり暑

さは感じなかった。

故に、やばいのはこれではない。

塔の頂上、その中心。

そこにバチバチと眩い光を放つものがある。

それは少しでも魔導器の知識があるものなら、直ぐその答えにたどり着ける。

ブラスティア コア
魔導器の魔核だ。

……通常の運用をするだけではあのようにはない。

異常な量のエアルが流れ――否。吸い込まれている。

確実にここ周辺の土地が荒れているのはあれが原因だろう。

「性懲りもなく、また来たか」

「待たせて悪いな」

バルボス
隻眼の大男は心底忌々しげに告げる。

……そしてその手にはまるでチェインソーのような剣……いやこの場合は稼機剣魔導器とでも言うべきか……が握られている。

オペレッシュ・ラスティア

その剣を見て、気づいたのだろう。

リタははっとした。

「もしかしてあの剣はまってる魔核、水道魔導器の……！」

アクエブラスティア

「ああ、間違いない……」

「分を弁えぬバカ共が。カプワ・ノール、ダングレスト、ついにガスファロストまで！」

俺たちを目の前にしてから、頭に血が登ってきたのだろう。

忌々しげに、吐き捨てるように、吠える。

「忌々しい小僧共め！」

「バルボス、ここまでです！潔く幕につきなさい！」

「間もなく騎士団も来る。これ以上の抵抗は無駄だ！」

「そう、もうあんた終わりよ……！」

「ふんっ、まだ終わりではないわ……！」

バルボスは手にした稼機剣の切っ先を上に向け、天高く掲げる。

オベレッシンプラスチック

……よくよく見ると刃にもエアルが小さく迸るのが見えた。

あんなんじゃないあ壊れるぞ？

「十年の歳月を費やしたこの大楼阁ガスファロストがあれば、ワシの野望は潰えぬ！」

声高らかに、我を疑うことなく、吠える。

「帝国と『あの男』を利用して作り上げた、この魔導器があればな……！」

「ふん………本当に利用されていたのはどっちだか………」

それに対し俺は呆れて誰にも聞かれないように呟いた。

バルボスはどう思うのだろうか。

今の今まで『あの男』の手の上で踊らされていたのだと、知ったら。

閑話休題。

次の瞬間には、切っ先が天ではなく此方に向いていた。

……………走るか。

バンッ！

一見すると、ただの衝撃波に見えるだろう。

だが、それだけではない。俺には分かった。

途轍もない量のエアルも同時に射出されたのだ。

……………もし、あれが直撃していたとしたら、体内を循環するエアルが乱れる可能性があるな。

爆風から逃れるために、一段下、軽く十メートルほど下の足場へと飛び降りる。

その際、体内のエアルを使い身体強化するのも忘れない。

「っと……」

着地成功……。

全く、物騒な武器だ。

あれがある限り、近づくこともままならないだろうな。

「下町の魔核をくだらねえことに使いやがって」

「くだらなくなどないわ。これでホワイトホースを消し、ワシがギルドの頂点に立つ！

ギルドの次は帝国だ！この力があれば世界は私のものだ！！」

ブンっ！

再度、此方に剣を向けられる。

「手始めに失せろ！ハエども！！」

ズガァン！

二回目の爆発。しかし、こちらには当たってはいない。

成る程……コイツ楽しんでやがる。

「大丈夫か、みんな！」

「あの剣はちつとヤバいな」

「ヤバいつて言うか。」

「……こりゃ反則でしょ」

「圧倒的ね」

「だな……さて、どうしたものか」

皆思い思いの感想を漏らす、意味は同じだ。

……これに真正面から、なんてのは当然無理だ。
だから、まあつまり、今まで通りの方針で行く。
即ち、原作通りに。

「グハハハッ！魔導器と馬鹿にしておったが、使えるではないか！
」

そう言うが早いか、今度は剣を高く掲げる。

稼機剣魔導器がバチバチツと音をたてた。

そしてそれを中心にエアルの渦が出来上がる。

刹那。――ズガァン！！

――大爆発。それも何度も立て続けに引き起こされる。

うわー……。――

……改めて圧倒的な力の差を感じる。

「そんな………！」

「どうした小僧共！口先だけか！」

「はっ、まだまだ」

「お遊びはここまでだ！ダングレストごと吹き飛ばがいいわー！」

――――やれやれ。

タイミング、実は狙ってたんじゃないのか？

「伏せろ」

何時かの声が聞こえた。

そして光の奔流。

しかしそれは、ケープモックの森で使われた目的とは違う。

「なにっ!？」

稼機剣魔導器が異音を上げる。

エアルの流れに注目すると、外部から魔導器に絡みついているように思えた。

……力技か。

- - - - -!!

再びの閃光。

その瞬間、確かに何かが爆発するのを聞いた。

- - - - -。

光が収まると、バルボスの剣は途中から吹き飛んでしまっていた。

カタカタと今も僅かに動く動力部が寂しげな音をあげる。

俺は顔を上げ、この足場に飛び移る前の階層に目を向ける。

そこには予想通り、白髪的美丈夫、デュークがいた。

「――」

その時、目が合った気がした。

……そして不思議な感覚に襲われた。

ここからデュークまでの距離は何十、下手をすればざっと百メートル単位で離れている。

なのに、だ。

デュークの声が聞こえた。

『このくらい、これからはお前1人でどうにかして見せる』と。

……どうということだ？

「あいつ……！」

「リタ！今は余所見すんな！！」

ブンっ！

縦に折れた剣を振る。

だが先程までの力を発揮する事はない。

それどころか、その僅かな衝撃で魔導器が小爆発を起こし、今度こそ完全に動かなくなった。

「くっ！？貧弱な……」

「形勢逆転だな」

「……賢しい知恵と魔導器で得る力など紛い物に過ぎん……か」

「そんなの、テメエなら初めから解ってたんじゃないか？」

「はっ、ちげえねえ」

俺が声を掛けると、自らを笑うように言った。

それと同時に片側しか光を写さない両眼には、確かな戦意の焰が宿っていた。

「所詮最後に頼れるのは己の力だけだったな。
…さあ、お前達剣を取れ！」

ガチャリ。バルボスはまた別の剣を取り出した。

今度こそ、なんの仕掛けもない剣だ。

「あっちゃあ……力に酔ってた分、さっきの方が扱いやすかったのに」

「開き直ったバカほど、扱いにくいものはないわね……！」

バルボスを見て、うんざりしたようにレイブンとリタが声を上げた。

そしてちょうど俺の隣にいたジュデイスは横目気味に俺に言う。

「もしかしたら、アナタの言葉が彼の戦意を引き出したんじゃないかしら」

「いやそれは無いだろ。てかこの状況の責任を俺に押し付けようとするな」

「フフフッ、冗談よ」

……勘弁してくれ。

こんな状況じょうきょうでもなければ笑っていたかもしれない。

やれやれ。まあ、さつさと終わらせますか。

「ホワイトホースに並ぶ兵つわもの、剛嵐のバルボスと呼ばれたワシの力と
- - ワシが作り上げた紅の絆傭兵団ブラッドアライアンスの力。
とくと味わうがよい!!」

その時、その瞬間、その刹那。

パリンと、何かが割れるような音を俺は聞いた。

-

第五話　悪意の野望：後編

パリン。

硝子が割れるような音。

俺の中で、その音は戦いの始まりを意味している。

「こい、僕共！」
しもへ

それはさながら獣の叫びだった。

そしてバルボスの左腕が高く挙げられる。

すると、それに呼応するように四方のに伸びる齒車の橋から紅の絆
ツトアライアンス傭兵団が入り込んできた。

……あっちゃー…予想より多いな。

「なら………」

とりあえずとも言うように、俺は各橋の袂に設置されている機械
に向かって走る。

……先ずは、このままだと延々と続くであろう増援を止めることが

先決だ。

なにしろ、相手は五大ギルドの一角、紅の絆傭兵団なのだから。

「後悔しやがれえ!!」

その言葉は連中にとっての始まりだっただろう、一斉にスイッチが入ったように動きが変わる。

――眼前には三人。

得物はサーベルが二人、錫杖が一人。

タツと剣使い達が飛び出し、俺を狙う。

その間を埋めるのには数秒も要らない。

右肩から袈裟切りに腰へ。

鼻先で振るわれる刃を身体を低くし、更に右に傾けることで避けた。

間一髪、しかしこのくらいの賭けは慣れたもの。

この世界に来たばかりの頃の俺だったら、間違いなく刃の沁みとなっていたこと請負だろう。

その刹那マズい、と男の顔が歪む。

体制をそのままに、勢いを殺さずに……右手の刀の切っ先を向けた。

即ち、突き。

ズンと重みを右手に感じれば直ぐに次の動きに入る。

一瞬も呆然としてはいられない。

敵はこの程度では倒せない！

「ふッ……！」

そこには俺に振り下ろされようとしていたサーベルがあった。

カッ、動きを左の拳で強制的に止める。

続いて動かしたのは左足だ。

鞣し革の鎧の腹へ、全体重を掛けて蹴り飛ばす。

「ガアッ……！！」

懇親の力を込めたのだ。

当然、一人一人を怯ませる程度の威力位はある。

例え、それが百戦錬磨の強者だったとしてもだ。

僅かに浮き上がる肉体から、今度は逆方向に無理矢理白い刃を引き抜く。

その時共に舞った血で、ヌメリとした感覚を右手甲に感じたがただそれだけだ。

――ここまで恐らく数秒にしか満たないだろう。

短い時間を長く引き延ばし、認識する。

単純に言ってしまうえば胴体視力のようなものだが、カレルさん曰わく俺のそれは獣並みには優れているらしい。

………貶されているのか、誉められているのか。

イマイチ判別し難いがあの時は取り敢えず後者で受け取っておいた。

「次ッ！」

タンッ！

今度は此方が大きく前へ踏み出す。

二人目もさっきと同じ様な装備をしているのが分かった。

……ただ得物を振るう程の間合いはなく、互いの身体をぶつけ合う結果になったが。

「ちイツ！」

力は大体同じ、なら引いたほうで斬られる。

その条件は互いに同じだ。

……なのに、そこで動きがあった。

相手が引いたのだ。

「……………！！！」

チャンス…………いや違う！

俺の足元に一瞬で展開される薄い青の陣。

……基軸第式式、収束式、立体形成式、浮上式、射出式――作製難易度中。

よって判定――水属性、中級術式、スプラッシュ――！

インという甲高い音が耳に届く。

そこから、僅かな間での判断を生存本能の下に手繰り寄せる。

――目の前に水瓶が宙に浮き上がり口が傾く。

――体内のエアルから球状に魔術防御の陣を編む。

――瞬間、衝突した。

轟！という鉄砲水を必死で受け流しながら耐えた。

……時間を賭けて組み上げたならまだしも、コンマレベルの粗悪品ではほんの少ししか防げない。

少なくとも、まだ………！？

「――！？」

音が途切れ、視界が開けた。

それと同時に、白く湾曲した刃を認識する！

（やっべえ……！）

時の流れがゆつくりとなる。

陣を解き防御の姿勢に持っていくまでの時間なんてない。

だがこのまま身に受ける、なんて考えは絶対がない。

ヒュン、風切りの波が顔の横を通り過ぎるのが分かった。

ザッ！次に聞こえるのは男のうめき声。

見ると敵の振り上がった右腕、その二の腕を矢が貫通している。
今度こそ、チャンス！

そう考えると次の動作は早かった。

右手の刀に身体から直接エアルを流し込む。

下から上への斬り上げ、敵の右腰から左脇へ。

「孤月閃ッ！！」

動きが止まった相手を斬るのは難しくない。

まあ、それにしても……我ながら呆れる。

人の体に刃を通すことに、躊躇も全くなってきたからだ。

「ありがと、よ！」

「なら次から気をつけてちょーだい！」

背後のレイブンに対し声を上げる。

……尤もそうでなければ今生きていない、というのも事実ではある。

まあ、結局のところ目的の為ならどんな事でもやるような男、ということだ。

……目の前には先ほど俺に向けて魔術を放ったであろう魔導師がい

る。

そしてその敵のすぐ後方には、橋を支える装置――円柱から伸びる細い四本の突起に緑の球体が支えられている――がある。

「なら、」

――走り、肉薄する。

一気にトドメを刺すつもりだ、そう受け取ったのだろう。

敵は錫杖を両手に構えた。

……恐らく棒術の類だろう。

それに関しては驚くことはない、寧ろ当然だ。

魔導師は近づかれればその強みである魔術が使えない。

故に護身術を身に付けるのは――特にギルド所属の者にとっては当然となっている。

……まあ、アスピオの帝国直属の連中は学者だからほばいないが。

後一步踏み込めば互いの攻撃範囲内。

そこで――跳んだ。

アスリートのような綺麗なフォームではない。

だが、エアルを用いた跳躍なら人一人くらい余裕で飛び越せる。

狙いは敵の魔導師――ではなく例の装置だ。

高さは十分。己の得物をそのまま――振り下ろす！

「はああアア!!」

装置にバチバチッと火花が走り、緑の球体は本からなかったかのよう
うに消えてゆく。

やっと、一つ目。

そこから間を置かずに遠心力にものを言わせて後ろの魔導師に斬り
かかる。

まあつまりは孤月閃を緑の勇者風に横に一閃させたのだ。

刀と杖とがぶつかり合う。

その時だった。敵の背後で影が動くと、敵が力無く倒れる。

俺にはその影が誰か直ぐに分かった。

「どうも、ジュデイス」

「フフ。どう致しまして」

ジユデイスは柔らかな笑みを浮かべて応じた。

……戦闘中だと考えると可笑しな感じだが、少し空気が和らいだ気がした。

「？」
「！」
○

背後で何かが動いたのに気がつき、振り向いた。

そこにあつた橋、噛み合わせた歯車二つで出来ているそれがクルクル回り始めていたのだ。

そして直ぐに、上からみると一つにしか見えないようにコンパクトに纏められる。

……これで取り敢えず、増援の数が少しは抑えられるな。

「つまりショウヤはコレを狙ってたということかしら？」

「まあな……。上手くいって良かったよ」

「……一目見ただけで分かるなんてスゴいわね」

「なに。ちよつとした筋から、ね」

ジユデイスは疑問の声を上げた。しかしそれには何かを疑うようなものが含まれていた。

……まあ、そうなるのは当然だよな。

俺の場合それは勿論、原作知識からだ。

ゲーム中では俺がやったように、『橋を支える装置』を全て壊すことでシークレットミッシェンクリア……つまりは戦闘終了後、追加でアイテムが貰えたりするというものだった。

……まあ尤も俺からすればアイテムより増援を防ぐこと優先だが。

あと付け加えると、原作と此方が食い違っている可能性もあったので心配だったのだが、杞憂だったようだ。

「じゃあこれで確証も取れたし、みんなに伝えて……」

「いえ、どうやらその必要はなさそうね」

「？」

その言葉を疑問に思い、周りを見渡すとその訳が分かった。

……すでに装置全てが壊されていたのだ。

誰の手によってかは言わずとも分かる。

「みんな仕事が早いのかな……」

つまり、ついさっきの俺の行動から判断した、ということか。

まあ、俺とジュディス以外で五人と一匹がいたしそんなものなのだろう。

今からは……時間の問題だろう。

なにしろこっちは補正付きのヤツらばかりだし。
今も現に、敵の数は刻一刻と減り続けている。

そして紅の絆傭兵団の親玉、バルボスはユーリとフレンのコンビに
追い詰められつつあった。

「あの二人に近づいて加勢するのは下策か……」
なら、と俺はエアルを集め、術式の構築始める。

位置はバルボスの真上。

- - - 収束開始。

そして詠唱を始める。

「『邪を討つ朧氣の光』！」

……何故、魔術を使用する際に詠唱を行うのか。

一見すると無駄に思える行為だが、きちんと理由はある。

それは仲間と連携を取る為だ。

戦っている所にいきなり魔術をぶち込まれれば、それが味方のもの

であつたとしても邪魔になるだけだ。だが特定の詠唱^{ワード}を用いれば味方間で前もって知らせることができる、と言つわけだ。

「『レイ』!!」

術式の完成とともに、その名を叫ぶ。

するとバルボスの頭上に五条の光の柱が降り注いだ。

そして一瞬、身を焼く光によつてバルボスの動きが止まつた。

ユーリやフレンはそんなチャンスを棒に振るような連中じゃあない。

その一瞬を逃すまいと一気に技を叩き込んでいく。

「紅蓮剣!」

「爪竜連牙斬!」

連続斬りの後に放たれる炎、交互にくり返される蹴りと斬。

その攻撃を受け、バルボスはズサアア!と後方に飛ばされる。

「ガッ…ハア……!!」

口から血を垂らしながら再び立ち上がる、紅の絆傭兵団フラッドアライアンスのバルボス。

見ると辺りには奴しか残っていなかった。

これで最後。

ユーリは口を開いた。

「部下ももっていない。

器が知れたな。分を弁えないバカはテメエだってことだ」

「グッ……………ハハハッ……………」

その乾いた笑いは息苦しそうだった。

だが愉快だと、確かに笑っていた。

息も絶え絶えだが力強さを感じた。

「な、なるほど……………。どうやらその通りの様だ」

「では大人しく……………」

「これ以上無様を晒す積もりはない……………！」

エステルの声に対して語尾を強めてピシャリと言いつつ放った。

……当然だろう。奴もギルドの人間。

同じギルドの人間に斬られるならまだしも、帝国騎士に捕まるなど屈辱以外の何者でもない。

バルボスは少しの間黙り、また口を開く。

……だがその声は憑き物が落ちたようだった。

「……ユーリとか言ったか。

お前は若い頃のドン・ホワイトホースに似ている。そっくりだ」

「オレがあんなじいさんになるってか。ぞっとしない話だな」

「ああ、貴様はいずれ世界に大きな敵をつくる。あのドンのように」

……そして世界に食い潰される。

そうバルボスは付け加える。

……その迫力は周囲を圧倒した。

その時、バルボスは何故か俺の方を向いた。

それからの俺は……………先ほどの迫力の為、呆然と話を聞いてしまったのだろう。

「貴様、名は？」

「……………守里翔矢」

「そうか……………」

そこでバルボスは口を歪めた。

愉快だと、嘲笑うように。

「ワシのように、貴様はいつか自らの狂気によって身を滅ぼすだろうよ」

「……………どういう……………意味だ……………？」

「……………クッククック……………」

俺が絞り出した問いに、奴は終ぞに答えることはなかった。

……………そこで気付いた。

俺が思った憑き物が落ちたような声が、今度は『狂気』を纏ってい

ることを。

そして全てを呪うようにこう告げた。

「悔やみ、嘆き、絶望した貴様等がやってくるのを、先に地獄で待つでしょう」

――俺が、嘗て聞いたように。

……何故だろうか、ただの言葉をこんなに不吉に感じるのは。

ユーリ達はその言葉からバルボスが次を取る行動を感じ取ったのだろう。

ユーリ、フレン、エステルが走りよった。

……だがもう遅い。

バルボスの身体が、フワリと浮き、身を投げたからだ。

ここは塔の中心から外付けするように作られた円形の足場の一つ。

そこから身を投げれば、次にぶつかるのは地面しかない。

後は……想像に難くないだろう。

……バルボスが居なくなっ
た後、俺達は妙な静けさに包まれてい
た。

第五話　悪意の野望：後編（後書き）

えー、遅れてすみません。

こんなに遅れたのになったこれだけのクオリティとか……ハア。

第一閑話、調査、そしてジュデイスの考察、（前書き）

ジュデイスがヒロインっぽい件について……

そして短いです。

正直、読まなくてもよいかも（苦笑）

第一閑話、調査、そしてジュデイスの考察

扉を開けるとまず、青く広がる空が目に入った。

来たときに広がっていた黒い空とは違う、輝くような青だ。

その景色が俺の心を僅かに解きほぐす。

やっと戦闘独特の緊張感から抜け出せたため、大きく伸びをする。

するとパキパキと背中から音が聞こえた。

「まったく魔核^{コア}が無事で良かったぜ…」

「水道魔導器^{アクエプラステア}の魔核ってそんなに小さいものだったんですね」

安心して呟くユーリの手には、水色に輝く球体が握られている。

水道魔導器の魔核。

この時代でも再現可能な筐体 コンテナ とは違い、魔核はどうしても過去の遺産に頼らざるをえないのが現状だ。

一部例外はあるものの、それがこの世界の常識だ。

だからユーリは帝国の下町から魔核を取り戻すためだけに、ここまでやって来ていたのだ。

「さて魔核も取り戻せたし、これで一件落着だね」

ユーリの事情を知るカロルの声は明るい。

だがそれに応えたのはユーリではなく、どこか沈んだエステルだった。

「でもバルボスを捕まえることができませんでした……」

「ええ…それだけが悔やまれます」

エステルとフレン。

彼女らはバルボスを法で裁けなかったことは残念なのだろう。

その考え方自体に異論はない。

だが今の帝国の法に、となると疑問が残るのは俺だけではないはずだ。

皇帝の椅子が空席である今、司法や行政を牛耳るのは帝国評議会。

最近こそ騎士団長アレクセイの力から少しずつ変わってわきているものの、まだその影響はありすぎる。

「何言ってるの、あんな悪人死んでと、ふぎや……………!？」

リタが反論しようとして奇声(?)をあげたのは、俺が止めたからだ。

まあ、奴が悪人なのは否定しないが死んだ人間を悪く言うのも、な

「まあ、なんであれアイツもギルドの人間だ。
なら捕まった後、牢の中で舌を噛み切るくらいはするだろうよ。だからあんまり変わらないと思うぞ？」

「さすがにそんな……………」

「それにバルボスは人一倍プライドは高かったらしいからな。
騎士に捕まるなんて屈辱でしかないだろうよ」

「……………」

それは、全てのギルドの人間にとっても言えること。

彼ら、いや俺もこれまでに帝国の悪行を見てきた。

全員が全員そうではないと分かってはいても身構えてしまっ

俺にとっては騎士なんて人間は特に。

「……………とにかく、一件落着にはまだ早い」

「だな…こいつがちゃんと動くかどうか、確認しないと」

「……………」

「魔導器の魔核はそんな簡単に壊れないわよ…」

「ふーん、そうなんだ。知ってたレイブ……………」

そこまで言いかけてカロルはたと気がついた。

あの胡散臭い独特の空気を纏っていた中年男おっさんがいつの間にかいなくなっているのだ。

「レイブン？」

「あのおっさんなら塔の途中からいなくなってるよ」

「はあ？またあのおっさんは……本当に自分勝手ね」

「それをリタが言っただ……」

瞬間、ピシリとカロルの頭をリタの拳が直撃する。

カロル自身痛がってはいないので手加減はしていたようだ。

……あとカロルの言い分が尤もだというのは、多分殆どのメンバー
共通だと思う。

ガスフロスト内にも幾つか仕舞われていた魔導器があつたのだ。
それを見つける度に彼女は静かな喜びの表情を見せ、そして自分の
世界にトリップしていたからだ。

「人それぞれでいいんじゃないかしら」

「ダングレストに戻ったんだろ。会いたきゃいつでも会えるさ」

「だな。ってーことで俺はここで失敬するかな」

またすぐ会っただろうけどという言葉は飲み込み、俺の頭の中だけで
響かせた。

……俺の本命はここからだ。

早まる気持ちを抑えながら、ユーリ達の旅を変えないようにしながら、俺はこの時を待っていたのだ。

……まあ、そんなご大層な事をいっても、今回はあまり期待していない。

俺の目的に対しバルボスは少し遠すぎる。

「ああ、そういえばお前も目的があつてここに来たんだよね？」

「え、そうなの？」

俺の声にユーリは、今思い出したと返答する。それに続くように声を発したのはカロルだ。

てか用が無ければこんな所に普通来ないだろ……。

内心苦笑しながらも話を続ける。

「……ちょっとした探しモノ（、）があつてね。手掛かりでも落っこちてないかなーってさ」

「ふーん………」

「………はあ……。なんだよ………」

状況も落ち着いている。

そんなことは誰もが分かっている。

だから、俺がパーティーに加わったときから時折不満そうに此方を睨み付けているリタを『いい加減煩わしい』と非難を込めて問いかけた。

全く、なんでそこまで気にするのやら。

……まあ、その理由は大体分かっている。

だが俺にとって理解がイマイチだ。

……彼女が一方的に敵視している白い竜使い《ドラゴンライダー》
――正体がジユディスだと知っているのは俺とユーリだけだ――と
俺があの時一緒にいたのは確実に知っている。

その竜使いが魔導器を破壊したのは、彼女にとって許されるものではないのだろう。

だから俺も敵視されているのだ。

まあ最も、ダングレストで二度目に顔を合わせた時よりは幾分か柔らかくはなっているのだが。

そつえば……リタはこのガスファロストで合流してから、なにか

と俺から情報を聞き出そうとしていた。

恐らく竜使いが何故魔導器を破壊して回っているのか知りたいのだから。

「……一つ聞くけど、あんたの探し物にあのバカドラは関係あるの？」

「バカドラって……」

いやリタは気がついてないからとはいえ、ここに本人シュデイスいるからな？

頼が僅かに引きつるのを感じる。

だがそれになるだけ面に出さないよう続けた。

「関係ねえよ。俺がここにいるのは、俺が知りたいことがあるからだ」

「知りたい、こと…？」

またしてもリタは怪訝な表情を浮かべる。

……これ以上はフライングになりかねないし、今言う気もない。

俺はくるりと踵を返し、楼閣の大扉を再びくぐる。

……たしかそれらしい小部屋は下の方だけで、途中から上にはなかったハズだ。

何か、あればいいんだが……。

s i d e o u t

s i d e J u d i t h

これ以上なにも語るつもりはない、彼……ショウヤは言外にそう告げると一人中へと戻ってしまった。

「ちよっ！………全く、なんなのよアイツ」

「さあな。でもショウヤにはショウヤの事情があるんだろうよ」

「そうかもしれないけど………」。

あーもうッ！ケープモックの時といい今回といい………！」

ユーリが言うとりたは渋々と引き下がったが、まだ彼に聞きたいことがあるらしい。

尤も、私も彼もおいそれとは人に言えないことを抱えていることは事実。

多くを語らなかったのも当然だろう。

……でも彼がよくわからない、という点ではリタと同じかもしれない。

ショウヤは……見ていてどこかチグハグなのだ。

どこかと聞かれるとなんとなくしか答えようがないが……本当にそう感じる。

出来合いの素材だけで作られた不出来な人形のように。

今にも崩れそうな石橋を悠然と歩くかのように。

端から見ると可笑しいのに、本人はそれが当然であるかのように存在している。

……私には彼が意図的に目を逸らしているようにしか見えない。

そして、そこに彼の探しモノが絡んでいるのは火を見るより明らかだった。

『俺の手で、助けなきゃならない奴らがいる』

それが嘗て私が彼に問い掛けたときに返ってきた言葉だ。

その人が肉親なのか友人なのか、男性のか女性なのかも知らない。

ただ、その『奴ら』が彼の大切な人達だというのは分かる。

そして探しモノとはその人達を捜すための手掛かりなのだそうだ。

「ほらほら、いいからそろそろダングレストに戻ろっよ」

大きな鞆を肩から下げた少年――カロルがそう言った。

「じゃあ私はここでお別れね」

「相棒のどこに戻るのか？」

「相棒？誰ですそれ」

私とあの子……バウルとの関係を知るユーリが問い掛ける。

そしてその後。エステルも問い掛けてきた。

勿論なにも知らない彼女の問いに応える訳にもいかない。

だから二人には小さく笑みを返したただけだ。

そして少々強引に続ける。

「……ここからは別行動。お互いの行動な干渉はなしね」

「そっか。じゃあな」

「ええ……」

小さく別れを告げると、背後に石の壁に背を預けた。

そしてユーリを筆頭とした5人と一匹を見送る。

……暫くはカロールとエステルがこちらを向いて、手を振っていたので同じ様にして応えていた。

だが、更に少し経つと彼らは振り返らなくなった。

それを確認すると私も大楼阁の中へと入る。

……たしかこの中にも幾つか『あの魔導器』があつた筈だ。

もしかしたら、先に中へ入ったショウヤがみついているかもしれない。

「ショウヤ！」

そう呼びかける。

するとぐもつた声が聞こえてきた。

これは………下？

中央の階段のある区画に寄る。

果たして、そこには先程までなかった新たな階段が降りていた。

……たしかこの階段は特定のキーがなければ――ああ、成る程。

「まったく、無茶苦茶ね………」

恐らく……いや確実に彼自身の力で開けたのだろう。

……シヨウヤとは、既にそれなりには付き合いがある。

初めて会ったのは彼の所属する『戦士の殿堂』の頭領パレストラーレ ドウーチェの部屋だった。

頭領、ベリウス。

彼女の石造り部屋はまったくの装飾品はなかった。

ただ申し訳程度に燭台が設置されているだけだったのだ。

そしてそこでベリウスに紹介されたのがシヨウヤだった。

初めてみる漆黒の髪に、少し鋭い同じく漆黒の瞳。

燭台の火に照らされた顔はそれなりに整っていた。

互いに自己紹介をして不思議な名前だと、思った気がする。

……そういえばその時のシヨウヤは驚愕の表情を浮かべていたが、何だったのだろうか…？

それが半年以上前の出来事だ。

それからこういう強引なやり方を偶に目にしたが、いつも呆れてばかりだ。

「そういえば彼はどう思っているのかしら……」

何を、というのはあのピンクの髪で空色の瞳をした少女――エステルのことだ。

バウルが感じた彼女の能力。

「ひよつとしたら――」

そこで小さく首を振る。

――いや、まだそう決まった訳じゃない。

彼らが知れば最悪、彼女を■すことも有り得る。

私とは関係のない人だが……やはりそれとこれとは別問題だろう。

まずはショウヤにも聞いてみないと……。

カッン、カッンと音を立てながら鉄の階段を降りていく。

……干渉はしない。

そういったものの本当にそうなるかは正直疑問になってきた。

s
i
d
e

o
u
t

第一閑話、調査、そしてジュデイスの考察（後書き）

うーん……なんか微妙ですね……。

本当は5話の最後にくつつけるつもりだったのが……どうしてこうなった

まあここは内容もたいしてある訳じゃないですからあれなんですけど……

感想、ご意見をお待ちしております。

第六話〜海凶の刺客：前編〜（前書き）

今回は、あの双子？の赤い方が登場です。

第六話　海凶の刺客：前編

朝日が目にしみる、とはこういうことを言うのだろうか。

俺がいるのはガスファロストの正面扉、その外側だ。

彼方の空からは眩しく輝く太陽が昇り始めている。

ケープモツクの森でモンスターと戦った後、紅の絆傭兵団の本拠地
フラッドアライアンス
――大楼阁ガスファロストに赴いて、更にそこで寝ずに戦闘……。

それに付け加えて、バルボスを倒してから今の今まで探し物……。

つまり俺は――途中軽く睡眠を取ったとはいえ――3日間ほどマト
モに寝ていない事になる。

「ふわ……………ふう」

……………ねむい。

さて、これからどうしようか。

探しモノも見つからず、マトモな戦利品もない。

……………いや、唯一あるとするなら、

「この剣だけ……か」

肉厚な刃が、俺の両手の中で光を反射する。

その剣は、銘『偽剣デインノモス』。

……皇帝の証である紅剣、『デインノモス宙の戒典』。それを模造してある男（、）によって作り出された偽剣だ。レブリカ

だが一つ驚いたことがある。

刀身にレアメタル使いすぎじゃないか？

剣と刀、その違いを一言で言うならば、『断つ』か『斬る』かだ。

剣が発展した西洋。その鎧は厚くなっており、その鎧を『叩き斬る』ために剣は重く肉厚に重くなっていった。

因みにメイスなどが発明された理由もこれにある。

つまり剣の威力は重さありきで切れ味はあまり重要視されていなかった。

この剣も実戦に耐えうる位のものだ。当然その条件を『十分』満たしている。

……とどのつまり、それだけの威力を出せるほど、レアメタルを使っているということだ。

……………これに気がついた瞬間、売り払ったらいくらになるのか考えてしまった俺は別に悪くないと思うんだ。

まあ、実際は売り払う訳にもいかないのだが。

と言うよりは、俺がこの剣を持っていることを、（一部を除き）誰かに知られる訳にはいかない。

どこから情報が漏れるか、分かったもんじゃないからな。

- - ファーン - -

甲高い鳴き声。

それが聞こえた方を向くと、青い影が飛んでいるのが見えた。バウルだ。

どうやら此方に向かって来ているようで、その影だんだんと大きくなっていく。

「やっと終わったみたいね」

「ん、ああ。まあな。そっちは終わったのか？」

「ええ。もうバッチリ」

次に後ろから聞こえてきた声に、振り向かずに応えた。

ジューデイスはガスファロスト内にあった例の魔導器ブラステイアを壊して回っていたらしい。

個人的にはこんなところにもあったのかと驚きだが、そんなものと納得していたりもする。

……さて、もう行くかな。

そう思うが速いか、俺は両手の偽剣デインノモスを布に巻き、更に袋へ入れた。

端から見れば剣が入っていることは分かるだろうが、詳しく何なのかは分かりようもないのでよしとする。

「私は取り敢えずダングレストに行くつもりだけど、あなたはどうするのかしら？」

「俺は、そうだな……。次は、カプワ・トリムだな」

「そう、残念。一緒にいかないのね」

「流石にダングレストと一緒に居るところをあいつ等に見られでもしたら、面倒だろ？」

さも当然というように俺は言い返す。

するとジユデイスは一瞬間を置いてからそれもそうね、と同意した。

少しでも筋は元通りであつた方が後々動きやすいからな。あまり目的に関係無さそうなところとまでは動きたくない。

……まあ、それを乱す筆頭が言えたもんじゃないが。

それはともあれ、今度はジユデイス方に振り返り短い（はずの）別れを告げようとする。

するといつの間にいたのか、バウルがジユデイスの側に、甘えるように寄り添っていた。

その微笑まじさに一つ笑みを浮かべ、バウルの頭を軽く撫で始める。

「話は変わるけど、こうして見るとバウルもまるで子供みたいだな」

「みたい、というよりまだまだ子供よ」

「へえ？そうなのか？」

ゲームでは始祖のエンテレケイア隷長としてはまだまだ若い、としか触れられてはなかったからな。

「正確な日付とかは分からないけど、私とそう変わらないみたいよ」

「てことは20かそこいらってところか」

人からすれば十分な月日だろうが、数百年もの時を生きる種族にとってはそんなものか。

納得納得、と新たな事実を噛み締めながら顔を上げた。

……その際バウルから手を離すと、寂しそうに小さく鳴いた。

……ええい、やめんか。そんな目をするな。俺の罪悪感を刺激するな……！

「そ、それじゃあな、ジユデイスにバウル。また会おうや」

「ええ」

フアーン……

なんとか心を支えながら歩み出す。

えーと……、シナリオでは確か次、ユーリ達は新興都市ヘリオードへ向うはず。

そしてそこでも騒動が起きていた。

……ヘリオード、か。

ヘリオードはカプア・トリムに行く途中にある街だ。

そのため俺も当然、そこを通る訳だが、あまり通りたくないんだよな……。

新興都市ヘリオードは所謂、帝国の街だ。

そしてそれが建設されているのはトルビキア大陸の中央部東。

そして今現在、帝国騎士団が駐留している。

……これだけでは何も可笑しいことは無いように思えるが、そこに『ギルドの巣窟・ダングレストはトルビキア大陸の北部にある』ということを踏まえると、話は変わってくる。

つまりヘリオードは対ダングレスト、延いては対ギルド用に建設されている街、だということだ。

だからかは知らないが、ヘリオードに滞在するギルドメンバーなんてのは聞いたことがない。

……俺もヘリオード近くの森にでもテント張るかな。

中に泊まって面倒事に巻き込まれるよりはましだ。

よし、とこれからの予定の確認を終えて、脚を止め空を見上げる。

そこには何時の間にか黒々とした雲が広がっていた。

「うわ……雨降りそう」

傘なんてものは勿論ないから、これはずぶ濡れ決定かな。

止めていた脚を前に進め、顔を前へ向ける。

魔物に出くわさなければ早く着くんだが、それは無理だろう。

「面倒だなあ……」

その眩き誰に聞かれる事もなく、木が茂る森へと吸い込まれ、消えていった。

- - - - -

いつかの会話

「なに？それは本当か？」

思いはぶつかる。

「ふむ、やつとか。あの無能共め……」

それぞれの策謀が交錯し、化かし合い、そして暗躍する。

「……まあいい。奴に伝令を、『生きて捕らえよ、手足の一つや二

つは無くても構わん』」

人にとっての利益は時として他人を陥れ、そして時として他人を助ける。

「……オウ、なかなかハードな命令ですね。まあ、仕事は仕事デース」

そして愚者も、その利益の恩恵を受けている。

「……バット、誰かが1人勝ちするのもディライトではありませんね……」

図らず、己が敵によって。

- - - - -

ザーッと雨が降っている。

ガスファロストから歩いてから四時間程経っただろうか。

魔物には出くわしたものの、数はそんなに多くなかったため、さほど苦労はしなかった。

もうそろそろヘリオードに着くだろうか。

当初は外にテントでも、なんて考えていたがこつこつ濡れになると、街の宿で泊まった方がマイナス面を考慮してもまだいいような気がする。

服を早く乾かしたい。

だっというのに……

「なんでこう邪魔が入るかね？」

雨で押し流されそうなほど気配は小さいが、確かに感じる視線。

周囲のエアルが不自然に歪んでいる点を……4つ見つけた。

恐らくは人間だろう。

初めは魔物かと思ったが、それにしても動きが静か過ぎるからだ。

細い糸を手繰るように、気づかれないように、相手の動きを探る。

すると、まるで暗殺者のように気配を押し殺し、俺からつかず離れずの距離を保っていることが分かった。

……そこまで分かって、思考を一瞬止める。

そして、今気がついたことに注目した。

「暗殺者……？」

暗殺者と言えば、海凶の爪だ。「ウァイヤサンのつまめ」

……だが、それが正しいとして、なぜ連中が俺を狙う？

まさか……俺がああ剣を持っていることがもうバレた……？

……いや、だがそれはつい数時間前のことだ、除外してもいい、か……。

他に心当たりがないわけではないが、それが目的なら俺は連中に一年以上前には捕らえられているはず……。

どういうことだ。

……この時の俺は一つの可能性を考えることが出来なかった。

……誰かが今まで意図的に俺を見逃していたという可能性を。

……まあ、誰であれ敵であるならやることに変わりはない。……の
だが、4人が……。

俺は内心頭を抱えた。心なしか、雨音が大きくなった気がする。

ハッキリはしないが、相手が手練れであるのは確実。

その手練れ相手に俺1人で挑むなんて、無謀だ。

……それでも勝つのなら、一対一に持ち込んで倒すしかない訳だが
……！

……止まった。

俺を追っていた連中の動きが、そして同時に空気が止まる。凍る。

身を刺すような殺気は首筋をチリチリと焦がし、雨は俺の体温を少しずつ奪っていくのがありありと感じられた。

恐らく、もう囲まれていると考えて間違いない。

そしてどうやら隠れることも辞めたようだ。

シュン、と刀を鞘から抜き去る。

腰を落として、右足を半歩前に。

どの方向から攻撃があってもいいように、重心は出来るだけ中心にする。

刹那――――ビュンと風切り音。

「！ ふッ！！」

咄嗟に振り向いて刀を斜めに払う。

果たして、弾いたのは矢だった。

全く、勘弁してほしいよ本当に……！！

続いてバックステップで飛び退く。

その時、ザザッと新たに二本の矢が地面に刺さっているのが見えたが、一々反応する暇なんてなく、再び構えた。

「俺一人相手にこそこそ隠れて狙い撃ち、ってのは卑怯じゃねえか

？」

速まる鼓動を抑えながら、問い掛ける。

すると、そろそろと影が形を持った。

やはり、影は赤眼共――『海凶の爪』か……。

ボウガンを構えた影が二つ、歪な櫂のような刃を持つのは一つ。

………三人？いや――！？

「『墮ちる衝撃の雷』――サンダーブレード！――」

「！？　があアッ！――！？」

―――衝撃！

その瞬間視界は白に塗りつぶされ、身体は燃えたようにさえ感じられた。

続いて分かったのは、自分の体が浮いているということ。

（サンダーブレード！？それにこの声……まさか。マジか、よッ！）

リカバリングを使い、空中で体制を立て直し、着地する。

丁度着地した所は水溜まり、顔には泥が跳ねついた。

どうする、どうする、どうすればいい！？

キツと前を睨みつける。

そこには新たな人影――朱の髪と瞳、元の世界でいう学制服のような服を着た少女がいた。

「てめえら、何が目的だ……？」

……本当に訳が分からない。

暗殺が得意技のギルドメンバーが……何故、俺を殺そうとしない（、
、、、、、、、、、）？

例えばボウガンの矢。

――すべて急所をはずして狙っていた。

例えば魔術の後。

――隙があつたのにも関わらず、向かって来なかった。

そんな俺の疑問に答えたのは、凜とした少女の声だった。

「貴様が知る必要はない。ただ、我々と共に来てもらうだけだ」

……前言撤回。俺が知りたい答えではなかった。

少女――ゴ―シユは更に命までは取らない、と続けたが、俺にとっては関係なかった。

なぜなら、俺の頭には始めから、捕まるなんて選択肢は存在していなかったからだ。

でも、……………、！？

……………賭けるか。

「…断る。何故俺がテメエらに着いて行かなくちゃならない」

「そうか。…では――やれ！」

黒い影達が――爆ぜた。

第六話　海凶の刺客：後編

――黒い影が爆ぜた。

その様は俺の心臓を狙う弾丸のようだ。

そして弾丸達は各々の手に刃、あるいは矢を携えている。

……敵だ。これ以上ないくらいの、敵だ。

今までは俺が顔をつ込み、その結果として敵を――本来関わらなくてもよい敵を倒してきた。

だがこいつらは、命こそ刈り取るつもりではないようだが、俺を狙っている。

「てッ、ヤアアアッ！」

オーバーリミッツ・Lv2。一気に体内のエアルを活性化させる。

それと同時に、不思議と体が軽くなる――ように感じた。そう、つまりは錯覚なのだ。

……だが動きや技のキレは上がっているので、同じことかもしれない。

左手を腰のポーチへと伸ばして目的の物を探り、握りしめた。

……………よし。

バツ、と跳びだす。狙うのは両手に椀の様な刃を持った男だ。

間合いに入るか入らないか、そのタイミングで刃が左右から振り放たれる。

両の椀は、そのままだと俺を肉を裂き、命を脅かすまでの傷を負わせるだろう。

オモチャ
玩具じゃないのだから。

だから俺は、さらに（、、）踏み出す。

「……………!？」

その結果 - 男の手が僅かに戸惑い、椀は軌道を変えた。

刹那、両方の頬が熱せられる。……刃が浅く、切り裂いただけだ。

気にするまでもない。

まったく、相手が仕事熱心で良かった。

連中は依頼で俺を連れていこうとしている。

その過程でこの男は、俺が命の危機に瀕すれば怯むと考えたのだから、とんだ悪手だ。

利用されることを考えてない。

それで俺はその策を利用して、致命傷を負うような位置に首を差し出した。

だがコイツは依頼がある以上、俺を殺せない。

そうして、現に刃は狂い、隙が生まれた。

……こう言つと俺が計算高いように思われる、だろうから不思議だ。
いや、俺はただ傷覚悟で突っ込んだだけという話で、偶然こうなっただけだ。

……まあ、てかコイツもしかして、場馴れしてないのか？

「ふッ……」
――弧月閃――

最早定番になりつつある、三日月の一閃。

だがそれは……男の服、もっと詳しく言えば、胸の薄皮一枚を斬つ

ただけだった。

咄嗟に身体を仰け反らされたからだ。

まあ、それでも別にいい。

新たな、しかも特大に大きな隙ができた。

だから俺は、左手の物を思い切り、男（しかも顔面）へとブン投げた（、、、）。　

バリィン！

その衝撃からか、男は気を失う。

……うん。気を失っただけだ、死んではいけない。所謂ピヨリ。

取り敢えず、一人目。

残りはボウガンを携えた奴が二人と、赤緑コンビの赤い方。

ヒュンと風切り音がした方へと咄嗟に刀を震ったが、敢え無く失敗し左肩に突き刺さった。

「つあッ、」

イタイ。でもまだやらなくちゃならない。

力任せに引き抜く。傷は悪化しただろうが、この方が動きやすいからだ。

それに、この世界は傷の治療に関しては事欠かないのもある。

一瞬で辺りを見渡すと、ゴーシュが魔術の詠唱に入っているのが見えた。

……流石に術を二発食らうのはマズい。

だが、周りが邪魔だッ！

「邪魔、なんだよ！」

- - 飛刃爆符 - -

取り出し、ボウガン共に投げたのはナイフ。

だがそのまま投げてても、大した効果はない。だから - - -

バン！！バン！！

- - - その名の通り、爆発の追加効果を仕掛けておいた。

蛇足ではあるが、一応俺のオリジナルだ。

将来的には、おっさんの『土竜なり』程度の威力を持たせたいと思っている。

ボウガン組は一瞬怯み、俺はその隙にゴーシュへと走る。

オーバーリミッツで強化された足なら、間に合う！

「ハッッ！」

「くっ！」

鋭く上段から振り下ろす。

しかし赤い剣で以て防がれてしまった。……まあいい、詠唱は止めた。

続いて二度三度、得物を振り下ろす。

……悲しいかな、俺に剣の才があれば即座に無力化できるのだろうが、生憎と無才の身。

全力でかからなければ、負ける。

……しかし、少女とも言える年齢の彼女に、躊躇する自分がいた。

そして、振り下ろされた刃は、その小柄な身体一杯を使って流される。

……ひょっとしたら、孤児院出身だという彼女より、俺の方が、剣の歴は短いかもしれない。

ヒュンと、今度は横一閃。だが避けられ、虚しく空を斬る。

……このまま切り結んでも、埒が空かない。

そう判断したのだろう。ゴーシュはバックステップで、俺から距離をとったのだ。

俺はそれに対し、苦し紛れにポーチから取り出した瓶を投げつける。当然その程度はダメージに成るはずもなく、瓶は少女の剣で割られ、中身がその身にかかったくらいのもの。

なら、何故きちんとした追撃をしなかったか。

それは視界の隅で矢を捉えたから。だから即座に刀を向け、落とす。

ちっ、ホントに面ど、お！？

身体から力が抜ける……………マズい、オーバーリミッツがキレた。

左手の中指、その指輪型武醒魔導器から、砂時計の印しが消える。
ボーティフラスティア

覚醒時間延長の印し《クロクス》がだ。

……いや、まだ負けない。あと少し、時間を稼げばいい。

刀を鞘に戻し、両手でナイフを構える。

……… 当てなくていい、少しでも多く、時間を稼げばそれでいい。

何度も言い聞かせながら、ナイフを投げる。

技は『飛刃爆符』。牽制にはもってこいだ。

ああ……、後で新しく買わないと……。

そうして長いのか、短いのかすら分からなくなった。

終わりの見えない戦いは、流石に精神的にキツイ。

そのうえ3対1……否、先程の男が戦線復帰して4対1。

……… もっと痛めつけとけば良かった。

……… さて子どもの掌ほどの小さなナイフだが、さすがに持てる数に限度はある。

少なくとも、二十は投げた。腰のベルトにずらっと提げられていたナイフは、既に半分以上がなくなっている。

「ちいッ……！」

投刃、そして爆音。

まだか！？まだ――

「――きた」

ゴゴツと地を揺らし、空は更に黒くなった。

その時の俺の顔は、疲れと喜びで歪んでいたことだろう。

その正体は、この世界では見慣れたもの。

「なっ！？――ま、魔物だと！？」

――空を飛ぶモノ、地を這うモノ。

だが通常、こんなに群れたりはしない。

それなのに何故、こんなことになっているのか。

原因は勿論、俺。……………正確には俺が投げたモノだが。

男やゴーシュに投げたものは、テイルズファンご存知のアレ。

見た目は……………てか入れ物は黒い丸底フラスコ、中身は無色の液体。

――ダークボトル。

中の液体をばらまけば、魔物を呼び寄せることができる。そんなアイテムだ。

……戦って勝てないなら、有耶無耶に持ち込めばいい。

そんなことでやってはみたのだが、ちょっとやりすぎたかもしれん。

「…、まあいい……」

また、ポーチを探る。

だが、取り出したのは白いボトルだ。

ホーリイボトル。名前からして分かるだろうが、魔物を避けるアイテム。

その中身を頭から被る。

よし、逃げるぞ。

………とはいえこの際だ。

徹底的に逃げの策を講じて、完璧なまでに消えてやろう。

そのために、即興の術式を、魔導器を介さずに組み上げる（、、、、

、、、、、、、、）。

属性は光、用途は目くらまし、殺傷能力は無くていい。

一瞬、身体の中をナニカが這いずり回る感覚。

そして次の一瞬には、鳩尾辺りに陣が引かれる。………のような気がした。

識別名称、命名――決定、『グリント閃光』！

バツ！と辺りは色を無くす。

………どうやら成功したようだ。

さて、この間に逃げなければ。

そう思うものの、俺の身体は悲鳴を上げ、乳酸は筋肉の動きを阻害する。

どうやら安心したためか、今現在の自分自身の身体の状態に気がついてしまったようだ。

………可笑しな汗と壮絶な悪寒がはしるあたり、本格的にヤバいかもしれない。

――動け。

…なら尚のこと、こうしちゃられない。

痛みなんて錯覚だ、疲れなんて錯覚だ、だから、動け！

そうして一步一步、走り出す。

……因みに海凶の爪ヒウアサノメの連中は、魔物に囲まれて身動きがとれなくなっているようだ。

現に、俺に追いついていないのだから。

途中、木の根に引っかかりそうになりながら、はしる。

……悪寒は相変わらずで、平衡感覚も怪しい。

だけどいまなら魔物の側を通っても、相手にされることはない。

効果が切れる前に、ヘリオードに入れば、俺の……っ！？

少々大きめの石に躓き、倒れる。

お、おいおい、ホントにどうしたよ、俺の身体。

こんな雨の中だが、流石に短時間で風邪をひいて、さらにはこうも

悪化するとは思えない。

…だと、すると……………

「毒、でもやられたかな…………？」

だとすると、該当するのはなに、にだ？

普通の（この表現も可かしいが）毒？それとも麻痺毒…………ではないか。他にはきよ弱とかだろうか。

腰のポおチを探る。…………きよ日は散ざ、いしてばかりだな…。

そしてすぐ、お目アての物はみつかる。

「あつた…………」

茶色のひょー筆、パナシアポルト。ゲーむお決まりの万能薬、というやつだ。

その小さなフタを空けようと。してテが滑る。

…………まずい。いしきがもうろう。だ。

ちからもはイらねエし…。

……おいおい

「じゃれに、なんねーって……」

バシャットみず溜まり二倒れる。

ああ、まア。……取りアえず、次才きたときイノチあれば、いいヤ。

……

……

……

……

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

……そこで、俺の意識は暗転する。

そこを偶然通りかかったユーリ一行に助けられるのは、それから更に数時間後の話だ。

……まったく、俺は本気と書いてマジと読めるくらいには、運がないようだ。

第六話〜海凶の刺客：後編〜（後書き）

えーと、取り敢えず一言

「作者的にはゴーシュの実力にはマイナス補正を入れています。

……あと、俺は今テンションが可笑しいようです」

感想、ご意見をお待ちしております。

……切実に、お願いします。

第七話　悪夢と海凶：前編

俺の周りの世界は、他の人達に比べて変わってしまっていたと思う。

その世界が変わったキツカケは、なんだったつけ……。

……ああ、あれか。

普通とは違っつて、気づいた時か。

それまでは何とも思ってたなかった。

親が死んじまったとか、イジメとか、その辺。

……まあ、今にしてみれば、心理防壁の一部だったのかもしれないな。

そのせいか、ガキながらに随分と老成していた。

……それでアイツに、お父さんみたいと言われたのは、かなりのダメージだった。

……蛇足だな。

それからまあ、いろいろあって……。

その心理防壁が崩れてから、俺の世界も全部崩れて、何もかもが厭になって、投げ出しそうになって。

そして最後の最後で、あの野郎にぶん殴られて、正気に引き戻された。

……はは。その時が黒歴史ってやつかな。

何か悶えなくなるようなこと吼えてたし。

そして言われてたし。

……うん、べったべたの、青春のイチページだと思ってくれればいい。

まあ、今ではいい思い出だ。

お陰で親友とも言える奴らが出来たし。

……そして、そんな奴らだから、助けなきゃならないんだって、思えたし。

……さあ、目を覚まそうか、俺。

もう十分休んだらう？

- - - - -

- - - - -

- - - - -

- - -

頬を涼しげな風が撫でた。

「……………」

暗い微睡みの中から、徐々に意識が浮上してくる。

……そうだ、確か。赤眼共に襲われたんだっただか。

ゆっくりと目を開ける。見覚えのない建物の中で、しかもベットに寝かされているようだ。

……ああ、そついやこんな時にピッタリな台詞があったな……。

せーの、

「知らない天井だ……」

「……ん？起きたのか」

あ、スルーされた。

……。

返事を返したのは、聞き覚えがありすぎる男の声だった。
何故こうなっているのか、イマイチ掴めないが無事だったのだ、よしとしよう。

「ユーリ……か？なんでここに？」

「なんでとは失礼だな。倒れてたお前をジュディが見つけて、姫さんがさっきまで治療に当たってたんだよ。
で、どうだ？調子は」

「調子……、ああ。大丈夫だ。強いて言うならすこし動きが鈍いつだけ」

苦笑するとそいつはよかった、とユーリは笑った。

それから部屋の中を見渡す。すると、何処かで見たような構造をしていた。

……たしか、ゲームで見たヘリオードの宿屋が、こんな風だったような……。

……まあいいや。

……あと、まさかユーリ達に拾われるとは、思わなかったな。

「そついや、なんで森の中で傷だらけで倒れてたんだ？」

「、……………」

だけど今回はかりは、タイミングが悪い。というのはこの“流れ”でのボス戦の相手が、海凶の爪の首領・イエガーだからだ。
リヴァイアサンのつめ

海凶の爪。暗殺、ホフロープラスティア兵装魔導器の売買等を行う、所謂、裏のギルドというやつだ。

そして連中は、俺を狙っていた。

だから、関わりたくないんだが。

「……話せないなら、話さなくていいさ。でも、カロールにエステル、それにジユディも心配してたぜ？」

「……ユーリは心配してくれてないのか？」

「オレが？お前を？まさか」

「うわー、ひつでえ」

俺はまた、苦笑を浮かべた。

それにしても、どうしようか。

話せば恐らく、自分達に同行すればいいと言われるだろう。

それだと、先の通り連中と殺り合うことになるのは、間違いない。

だが一人でいるよりは安全だ。

……そうして俺が悩んでいると、ガチャリとドアが開いた。

そちらを見やると、予想通り、ジユデイスが入って来るところだった。

「あら、もう起きていたの」

「おかげさまでね」

「そう。…でも良かった、心配したわ」

と、本当に心配しているのか、していないのか分からない声で言う。

まあ、ジユデイスのことだ、本当に心配してくれているのだろう。

それからジユデイスは、エステルが凄く慌てたとか、それを（珍しく？）カロールが諫めていたとか、そんなことを話してくれた。

……でもそれを話し終わると、他はなににも話さなかったことに俺は疑問を持った。

「……………それだけか？」

「それだけ、って？」

「いや、ユーリはどうしてこうなったのか聞いてきたからな。な？」

「お、おう」

まさかここで振られるとは思っていなかったのか、少し詰まっ
てからユーリは同意した。

するとジユデイスは優しい笑みを浮かべた。

え、なんで？

「アナタのことだから、私が言わなくても、話したくなっ
たら自分から話すわよ。」

そのくらいにはアナタのこと分かっているわ。そうでしょう？」

「……」

……あーなんだ。男としては今の台詞にこう、グツと来るもの
が……。

俺が何も言い返せなくなると、代わりにユーリが続けた。

「へえ、シヨウヤのこと分かってんのな」

「ええ、知り合って長いもの。…と言っても半年くらいだけ
ど、それだけあれば十分ね」

「ふーん。案外単純、と」

「……それは酷くないか？」

呟くと、2人は小さく笑った。

ここでも俺はこんな扱いなのか……。ちょっと憂鬱。

「ところでアナタはこれからどうするのかしら？一緒に来る？」

「おいおい、そんな勝手すんなよ。こいつらにも聞か……。なくて
も大丈夫か。どうせ答えは分かり切ってるし」

ユーリは呆れて言う。

……。そうだな。連中にも狙われていることだ、ここは開き直った
方が得策なのかもしれん。

「じゃあ、頼む。助けて貰った礼もしてないことだし。
因みに俺の目的地はテズエールのノードポリカだ」

「そうなのか？そりゃちょうど良い。オレ達の目的地もテズエール
大陸だからな。」

「（……本当は偶然じゃないんだけどな……）」

「え……？」

「いや、なんでもない」

慌てて首を振る。

……それにしてもまたボス戦か。今の身体の調子からして恐らく、明日には回復しているだろう。

なんか耐久性がこの世界に来てから超人じみてきた気がする……。

「……じゃあ、今日はもうそろそろ休もうぜ。明日には出発だろうし」

それから情報交換をされていて、区切りがついたところでユーリが言った。

……確かにもう深夜過ぎ、明日のことを考えると夜更かしはすべきではない。

ユーリの提案はすぐさま受け入れられ、この場はお開きとなった。

……その際ジュディスにベットを譲る譲らないの押し問答があったことを、ここに記しておく。勿論、俺が彼女に譲る側で。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

次の日は大変だった。

目を覚ますと、既に起きていたエステル嬢の質問責めが始まり、それを誰も助けてしてくれなかった。

結局最後には向こうが折れるコトになったが、体力をかなり浪費したことだろう。

……それを言葉で言い表すなら、『げっそり』といったところか。

……、えーと。シルトブラスティアそれから取り敢えず、今はリオードの街の広場の中央に聳え立つ結界魔導器ブラスティアの調子を見に来ている。

それは（俺は関わっていないが）この魔導器ブラスティアが突如として暴走し、それをユーリ御一行、というより魔導器研究の天才であるリタがそれを止めたからである。

時期は『亡き都市・カルボクラム（プロローグ）』と『ギルドの巣窟ダングレスト（第一話）』の間だ。

理由はその時期そこに大量に駐留していた騎士に会いたくなかったから。

……だってその当時は少なくとも二つの部隊がいたはずだし。騎士

って基本、ギルドの人間を快く思っていないからな！。

まあ、それはギルドも似たようなもんだけど。

「…周囲の異変も収まってますね」

「あの後、暴走とかしてないみたいだね」

魔導器の暴走……確かこの結界魔導器に大量のエアルが流れ込んだのだった……。その量が多すぎて爆発寸前だったとか。

「……あれ。あいつら、ノール港で会った……」

ユーリの視線の先には、6、7才くらいの男の子と、その子と同じ髪色をの女性が立っていた。

そして、あちらもこっちに気がついたのだろう。表情がパツと明るくなる。

「あの時のおねえちゃん！」

「お元気でしたか？」

男の子がエステルに駆け寄る。

あー、この子ってたしか……。

「どちらさま？」

「前に助けたんだよ、ノール港で」

ノール港。カプア・ノールの街で悪政を執っていた執政官をユーリたちが追い払ったんだったか。

そのキツカケがこの親子……だった気がする。

ゲームでは最初の方のエピソードだ。

「あの時は本当にありがとございました」

「お父さんは一緒じゃないの？」

「……………」

「……それが夫は……ディグルは三日前から行方が分からなくて……」

「あの噂、本当っばいよ」

「だな……………」

聞くと、この家族は現在も建設途中であるこのヘリオードで仕事をする為に来ているそうだ。

……この街が完成した暁には、貴族になれるという謳い文句で。

これはそもそも可笑しなこと。何故なら今、平民から貴族になることは出来ないのだ。

……法の一節だろう。エステルは『貴族の位は――云々』と説明していたが、要するに貴族になるには皇帝のお墨付きが必要ということだ。

この世界、テリユカリユミレースは国は（、）帝国のみ。

だがその帝国の頭足る皇帝の椅子は現在、空席なのだ。たしか理由は……皇帝の証が十年前の戦争で失われたから、だっただけ？よく覚えちゃいない。

一応後継者として、ここにいるエステル……エステリーゼ姫と、ヨードル殿下が候補に挙がっているが決まるのは時間の問題だろう。

……エステル話を聞くに従い女性の顔は蒼白になっていき、そして言った。

「そんな……それじゃあ私達の苦勞は……。それにディグルは……」

「おとーさん、もう帰って来ないの……？」

……悲痛。悲痛な呟きだ。

そっぴゃ、こんなことが罷り通る世界があるなんて、こっちに来るまで考えたことなんてなかったな……。

「あの……ユーリ」

「ギルドで引き受けられなかったんだろ？」

どうする？とユーリはカロルに目で問いかける。

だがカロルは答えを出すことを、躊躇していた。……引き受けたいのが7・8割、厄介事に巻き込まれたくないのが残りといったところか。

「報酬は私が後で一緒に払いますから」

「……えと……じゃ、いいよ」

「え？ですが……」

女性は続けようとしたが、ユーリが遮る。

「決まりだな」

「次の仕事は人捜しね」

「キュモールが馬鹿やってるってんなら、一発殴って止めないとな」

「はい！騎士団は民衆を守る為にいるんですから」

みんなの空気が不思議と軽くなる。……ユーリもジュデイスも、そして俺もだが、どうにかしたいとは思ってはいるのだ。

まあ、やはりこういうことになにも出来ないのは心苦しいものがあるからな。

「こ、行動は慎重にね。僕たちみたいな小さなギルド、騎士団に睨まれたら直ぐに潰されちゃうよ」

「了解」

こちらを向いていたユーリとエステルは、やや混乱している親子に
向き直る。

そして二人は……というよりはカロールもジュデイスもだが……優しい
げな表情を浮かべた。

「……そういう訳だ、引き受けたよ」

「お父さんは私たちが探し出してあげるからね…」

「ありがとうございます！」

……うん、まあ一応良い方向に進んでいるようだ。

もう細かいところなんて覚えてないけど、元通りの流れのようだし。

「んで？俺もそれを手伝えばいいんだよね？」

「え？でもショウヤは……」

「仲間ハズレにしてくれんなよ。借りも返してないし、ここにきて何もしないのは俺が納得できないからな」

「…うん！そうだね。じゃあよろしく！」

「おう、よろしく」

俺が右手を差し出すと、カロールもその小さな右手を差し出した。

おつ、当たり前だが鍛えてるな。……そついや成長期に筋肉付け過ぎると背が伸びなくなるとか言われてるけど、どうなのだろう。

「……話も纏まったことだし、さくつと探ってみるか」

「ならあそこの先なんてとっても怪しいわ」

ジューデイスはスッと顔をその方向に向ける。

そこには下の階層へ降りる昇降機と、^{エレベーター}それを守ように立つ一人の騎士団員の姿があった。

「ああ。立ち入り禁止で部外者が入れないようになっているのが特にな」

「こ、行動は慎重に、を忘れないでよ！」

分かってる分かってる、そう言うとユーリはその騎士の方に歩いていく。

……即行動ってか。いくら何でも早すぎる気はするが誰も突っ込まない。え、普通は打ち合わせしてからじゃないのか？

……まあ、いい。任せるか。

魔導器の影からその様子を見守る。するとユーリは二三言葉を交わして直ぐに此方に戻って来た。

………うん。一瞬強行突破するのかと考えてしまったことを謝りたい。

「よかった……。ユーリのことだから強行突破しちゃうのかと思った」

「……って、カロールもそう思ったか」

「……おい。……ま、慎重に、^{ボス}が首領の命令だったからな」

「ええと。で、どうするんです？」

皆が皆、互いに顔を見合わせる。

だが直ぐに案は出なくて、沈黙する。

「……やはり、強行突破が単純で効果が高いと思うのだけれど」

「それはダメだよ！とにかく、見張りを連れ出せばいいんだ」

「見張りを連れ出すって、どうやってです？」

「……………色仕掛け、とか？」

エステルの問いに、カロールは苦し紛れに言った。

………そういやこんなイベントもあつたな。

確かカロールと女性二人から選んでその選んだキャラが、イベントを

こなすというものだった。

……てかカロル《12さい》、意味分かって言ってるのか？

「じゃあ……」

まあ、なにはともあれゲーム通りだろうし、特に文句はな……

「……シヨウヤ、やるか？」

……い、訳あるかああ!!??

しかもその両手は何だ、肩を掴むなよ!??ちょっと痛えぞ!!

「……ちよつと待てや、何故俺がやらねばならんツ!?
あとテメエ目がマジだろ!!」

「いやだつて。礼をしたいとか言つてたし」

「だからつてそれとこれとは話が別ツ!
ジユデイスもなんか言つて「あら、それは面白そうね?」ジユデイスさああんツ!?

ええい、カロルにエステル嬢も助け……つて目を逸らしないで助けて!?!いや助けてくださいお願いします!!
ちよ、ユーリ俺はやるって言つて……」

「はいはい、腹括れよ？それに自分の言ったことには責任を持たないとなあ？」

「そうそう。それにおもし……もとい、あの母子のためよ？」

「うおおおい！？ジュデイス、明らかに今おもしろいつて言いかけたよな！？」

「てかそんなキャラだったっけ！？あといいかげんは・な・せ……！」

「あらあら、静かにしないと（ガスッ！）近所迷惑よ？」

「えーっと、ジュデイス？シヨウヤ気絶してますよ？」

「ならちようどいいな。今のうち連れて逝こっぜ？」

「……なんかユーリ楽しそうだね？あと字が違っよ？」

ズルズルと哀れな獲物^{しゅつぶつ}は引きずられていく。

起きたときの最初の感情はおそらく、羞恥と絶望だろう。

……南無（笑）

第七話ゝ悪夢と海凶・中編ゝ（前書き）

再びの中編。

そして遅れて申し訳ありませんでした。

一度吹っ飛んだものをもう一度作り直すことが、こんなに気が萎えるとは…………。

第七話　悪夢と海凶：中編

人は何故過ちを犯すのか。

良かれと思つた小さなコト。それが時間が経つにつれ、いつの間にやら大事へと成り果ててしまっている。

そんな経験は誰にでもあるのではないだろうか。

まさに斜面を転がる雪玉の如くだ。

時間が経てば経つ程にスピードは加速し、終ぞには止められなくなる。

……だが、それを更に早めようとする者がいれば数年も数ヶ月も数日もいらぬ。あれよあれよという間にほんの数時間で事足りてしまうのだ。

気がつけば後の祭り。だから後は野となれ山となれ。

……つまりは、まあ。受け入れるしかないということだ。

それがどんなに受け入れられなくても。

例えばそう……

俺のように。

『おおー!』

昨日泊まった宿屋の一室。そこで数人の男女の歓声があがった。

言うまでもなく、ユーリ達だ。

ああ嗚呼………実に鬱だ。

……俺はユーリと問答をしていた筈だが何時の間にか気絶していた。

……恐らくユーリだろう。ジュディスや他のメンバーがやったとは考えにくい。

そして起きてみれば目の前にイイ笑顔を浮かべたジュディスが、『ピンク色の布でできた何か《さいしゅうへいき》》を持っていたのだ。

……ふははは。うん、死んだ。

逃げられないと悟り、これから自分に降りかかる悲劇を幻視した俺。

その様は某ボクサーマンガの最終話の如くだったに違いあるまい。

……読んだこと無いけど。

そしてジュディスとエステル嬢主導による改造が始まったのだ。

そして小一時間後。全てを終えてそれを披露した反応が、上記の歓声なのである。

因みに下は個別の反応。

「へえ案外似合ってたんな」

全く嬉しくない。

「そうですね。肌も白いですし、線も細いですからね。……ちょっと羨ましいです」

そりゃ数年ヒッキーモードキをして飯を食べなきゃそうなります。あと羨ましいいうな。

「ワフッ！」

うん。分かん。

「うんうん、とっても似合ってるよ。…プクッ」

あはは。カロル、後で覚えてろ。

「目つきが悪いのはマイナスだけど、素材はいいもの。ね？」

訊くな。あと人のコンプレックスをピンポイントで刺激するな。

……え？どんな格好か？

……。

膝上の薄いピンクのスカートに藍色のブーツ。

当然ながら男と分らないように設計された服は、ゆったりめに作られていている――が、背中や肩が大きく露わになっていることは、激しく抗議したい。（速攻で却下されたが）

色は白でピンクの花の模様――ハルモネ、ルルリエ、ルーネンスなどの通称ハルルの樹の花が咲く。

そしてラッパのように袖の先の方が膨らんでいる。

……ああ、そうか。浴衣のような服と云えばいいのかな。それが最も良く言い表している。

まあ……分からなくても適当に脳内で補完してくれ。これを今着ていることを少しでも意識したくないからだ。

……まあ、『女性らしい服』であることはここに記しておく。

……そういやみんなは似合う似合うと連呼していたが、それは絶対にないだろう。

百歩譲ってそうだったとしても、男としてその賛辞は絶対に受け取りたくない……。

……そして遂に4人と1匹の一方的攻撃によりライフポイントの尽きた俺は、部屋から押し出され一步一步階段下っていく。

ああ……！擦れ違う人達の視線が、しせんがあっ！？

心の中で悶え、のた打ち回りながら歩を進める。

ヘリオードにあるこの宿屋は比較的大きな方ではあったが、体感的にえらく長くなったように感じられる。

そっぴゃ、みんなは横で頑張れとか大丈夫だとか言うが、これほどまでに自信のつかない応援があるだろうか。いやない。反語表現。

「ああ、鬱だ……。今なら羞恥で百回は死ねてる……」

「まあまあ。シヨウヤならきつと上手くいきますよ」

「そうそう。そう気負う必要はねえって」

「他人事だと思って……。あと、微妙に噛み合ってねえよな」

「？」

ホント、どうしてこうなったよ……。

また、一歩一歩歩く。そしてまだ（、）一歩一歩歩いている。
……これからやることを考えれば、この辛さはフルマラソンに匹敵するよ……。

……そして、ヘリオードの広場に着いた。着いてしまった。

そして一時的に姿を隠すために、中央の魔導器の影へと隠れた。

そこは丁度、例の騎士から死角になっているのだ。

「はあ……………」

「ほら、そんな顔しないの。綺麗な顔が台無しよ？」

「だ・れ・の・せ・い・だっ……………！！！」

「さあ？ユーリじゃないかしら」

「おいおい。ジューデイだって楽しんでるじゃねえか」

「フフフ。まあね」

「…もうやだ……………（涙）」

……自分には味方はいないのだと、実感した瞬間である。

ああ、そうさ。何時かも思ったが、俺の扱いは何処でもこんなものなのだ……。

ぐつと瞳から流れる汗を堪える。

……え？なんだユーリ、もう行けってか？いや、もう少し待ってくれても……ああもう、わーったよ、やりやいいんだろ！？やりやあ！……その代わり期待はするなよ？……はア。

本日何度目になるか分からない溜め息をつく。

そうしてから、シルトプラスティア結界魔導器の影から踏み出した。

「……あの、すいません……」
心境を声に出さないように、努める。

……さっさと終わらせよう。そしていざとなったら強行突破……！

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

S i d e K a r o l

…あ、あはは……。

…シヨウヤ、大丈夫かな……。

さっきまでずっとこの世の終わりみたいな顔をしてたし。

何も思い付かなかったから色仕掛けって言うてみたけど、まさか採用されるなんてなあ……。

……で、でもボクは悪くないよね。ユーリとジュディスが押し進めたみたいなものだし……。ウン、悪クナイッタライ。

……あと、シヨウヤが殺気立った目で見てきてたけど……。気のせいだ。……気のせいなのだ。

シヨウヤが隣で深呼吸をする。

…… やつと行くみたいだ。

ヘリオードの宿屋の店員が作った服は（シヨウヤは気に入らないだらうけど）とても似合っている。

あと、シヨウヤの顔は中性的？っぽいけど別に女顔ってわけじゃない。

ただどジュデイスが手を加えてて本当に女性みたいだから、見た目だけじゃ分からないだろうなあ。

……、シヨウヤが騎士に声をかけた。

それをボクらは固唾を飲んで見守る。

シヨウヤの性格からして強行突破にはでないだろうけど、アレほど嫌がってたから心配だ。

最初こそ騎士の男は怪しんでいたが、二・三言葉を交わすと警戒を解いたようだ。

何となくだけど、分かった。

……無理もないな……とボクは一人納得する。

だって他の人の目を気にして辺りに注意を払っておどおどしているその姿は、どうみても内気な女の子にしか見えないからだ。

……あ、男（騎士）がシヨウヤの肩に手をおいた。こう、肩を組むカンジで。

それにシヨウヤは顔を伏せているけど、スッゴク嫌そうな顔をしてるだろう、というのは直ぐに分かった。

「あー…、あれは完璧にシヨウヤの性別を勘違いしてるみたいだな」

「ですね……。とりあえず、作戦成功でしょうか…」

ユーリとエステルは安堵を表す。

うん、それにはボクも同意だ。

そのままの姿勢で徐々にこっちに歩いてくる。

その間男はシヨウヤに話しかけているけど………うわぁ、引きつ
つてる。

「でも、このままなら………ってアレ？」

「立ち止まった……？どうしたのかしら」

ボクとジュデイスが疑問の声をあげた。

ここから騎士の男が始めに立っていた位置、その丁度中間あたり。

その辺りでシヨウヤが立ち止まったのだ。

兜でよく分からないけど、男はシヨウヤに対して怪訝な表情をしているのだろっ。

シヨウヤの表情を覗きこむようにしている。

けどそれはボクらも同じだ。

兎に角、なにをどうすればいいのかも分からないから、その様子を見守ることにする。

すると、さらに変化は現れた。

「……………？　なんか、シヨウヤの肩がピクピクと？」

……………うん。震えている。

よく分からないけど、震えている。

ただ勿論、寒いから、とかでは無さそうだ。

と、そこで……………

「……………や、…や……………」

……や？

「やってられつかああアアアアアアアッッッ！……！」

どばーん、がたんがこん。

……………。

「へー……。ただのアップーで大の男があそこまで吹っ飛ぶのかー……」

「すごいです……ってそうじゃなくて、ショウヤが羞恥心で暴発しましたよ！？」

「どうやら心が限界だったみたいね」

あ、あはは……。

まあ、一応見張りはなくなったし、成功……なのかな？

取り敢えず、ショウヤに労いの言葉をかけようと思って近寄る。

「と、とにかく、見張りはなくなっただし、行ってみる?」

「そう、ですね。シヨウヤはあの調子だと回復するのに時間が掛かりそうですし……」

「クーン……」

最後にラピードが同意するように鳴く。

今頃シヨウヤは大変なことになっているだろう。主に心労で。

ありがとうシヨウヤ。君の犠牲は無駄にはしないよ……!

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

S i d e S y o y a

「って、人を死んだみたいに言うな!!」

・・・ってあれ?

今誰にツツコんだんだ？俺。

つやバツ、またぶり返してキタ……ツ！？

「P矢 d a ! , t 怒 p : l ? S ト f ω H ケ @ / α N r ! ! ! ! ! !
! ! ! ! !」

うぐ、ごおおお！？し、静まれえー！

(理性：うん、それムリ)

うがぁあー！ー！っ！？

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

……さて、シヨウヤが己の理性にさえ見捨てられ一人悶えていた頃、
ユーリ達一行の姿は未だにヘリオードの中央広場にいた。

S i d e Y u r i

「……じゃあ、次はコレね」

そう言つてジュディが持つて来たのは騎士団員が身につける、ごく一般的な兜だつた。

……それも確かさっきの騎士が身に着けていたものだ。（因みに当の騎士は目に付かない物陰に適当に転がしている）

「騎士の格好をしていた方が怪しまれずに動きやすいでしょ？」

とはジュディの弁。

確かにその通りではあるんだが……。

「……それ、オレがか？」

「カロールでもいいわよ？」

「ええっ！？ボ、ボク？」

カロールは予想外だつたのか驚きの声を上げた。

ま、それは当然か。カロールと騎士の男の背格好は大きく違いすぎる。

「それじゃあ……」

……正直言つとオレは騎士の格好をしたくない。

それは幼馴染み兼騎士時代の同僚であるフレンがオレの騎士甲冑を見て大笑いした、苦い記憶があるからだ。

……曰わく、シュールらしい。

……それを踏まえると、答えはひどく単純だった。

「カロール、やってくれ」

「え？ボクが騎士のかっこ？

……別にいいけど、ボクの体に合うかなあ……？」

そう言いつつ、カロールはジュディに渡された装備を身に付けていく。

……と言ってもカロールの体格で装備できるのは、ヘルム ガントレット冑と手甲だけだ。

そして三十秒後のカロールは……とてもシュールだった。
頭デッカチだった。

「う、動きずらいよ……」

「大丈夫だって、すぐ慣れる」

「そうかな……？」

胃から苦笑が漏れる。

胃も手甲も防具とはいえ、いや防具だからどうしても動きを阻害してしまう。

それを身に着けて思うように動けるようになるには、慣れしかない。

オレもそうだった。

…そのときだった、

「…おい!!」

野太くて、低い声が聞こえた。それにカロルは、…へ?と情けない声を出した。

見ると、斧^{ハルバード}槍を担いだ騎士が此方に走って来ている。

「こんな所で何油売ってるんだ!? 今詰め所が大変なことになって
いるんだぞ!!」

えーと? 取り敢えず……カロルが騎士じゃないことはバレてないんだよ……な?

自分で頼んでおいてあれだが……本当に分からないのか?

（騎士団員の身長平均、約170センチ。カロルの身長、135センチ。それに加えて冑と手甲以外は普通の子供服）

「ち、違ってます！待って、離して、助けて……！？」

……………ハッ。

「……ユーリ、どうしてカロルを助けなかったんです……？」

「いや、あまりに突然だったから反応できなかった……」

エステルに問い掛けられて、どうにかして返す。

……いや、本当に反応できなかったんだ。主に、身長云々で。

「とにかく、行ってみましょう？そのうちシヨウヤも回復すると思うし……………」

「ああ……、そっぴやそっちもだったな。なんか忘れ欠けてたわ」

「ワンツ……！」

ラピードがオレを非難するように吠えた。

……そういえばお前、地味にシヨウヤと仲良いよな……。

第七話〜悪夢と海凶：中編？〜（前書き）

あ、あるえ〜？何故、また中編に？

可笑しいぞ、俺のプロットでは既に終わっていたはず……………。

はっ！これが（ry

……………いつも亀更新ですいません
（by他の作者さまの週一更新宣言を見る度戦慄し、毎日更新の作者さまを拝み続ける玄ブ）

第七話　悪夢と海凶：中編？

S i d e J u d i t h

私達はヘリオードの町、その東エリアにいた。

そしてそこで、物陰に隠れ、息を潜めて目の前のある建物の様子を見守っている。

帝国騎士の詰め所だ。

そして現在、その中にカロルもいる。

……それにしても、さっきカロルを連れていった騎士はえらく慌てていたわね。

普通の格好に、^{ヘルム}胄と^{ガントレット}手甲を着けただけのカロルを本当に騎士だと思
い込んでいたことが、その証左だろう。

まあ、それは兎に角として、今はこの詰め所で何が起っているのかを知らなければならぬ。

カロールを放つて訳にはいかないからだ。

でも、外からだとか中の様子は分からないのよね……。

……そんなことを思った、その瞬間、

バンッ！！！！！

爆発音。

『……………』

……そして、沈黙。

「……中にカロール入っていったのよね？」

「……おっと、そうだった」

ユーリが咄嗟に走り出し、鉄製のドアを開ける。

一瞬、中から出てきた白煙に視界が遮られたけれど、直ぐになかの

様子は理解できた。

……騎士団員が倒れている。
それも、10や20じゃ収まりきらない数。

私はその光景に啞然とし、エステルとユーリも声すら出ないようだった。

……最もたる理由は、その惨状ではなく、惨状を作り出した（、
、）であろう人物を見たからだけど。

左右非対称な赤い服装に、明るい茶髪のショートカット。
肩を震わせているその姿から、恐らく怒っているのだろうということが分かる。

「リタ……？」

エステルの呼びかける声に振り返る。

「エステル？」

「これ、リタがやったのか？」

「なんであんだ達がここに……？」

「それはこっちのセリフだって」

リタはまだ状況が飲み込めていないのか、目を白黒させて、疑問の声を挙げるばかりだ。

……そういえば、カロルの姿が見えない。

この様子だと、リタの無差別攻撃にでも巻き込まれたのかしら？

「カロルはどうしたのかしら」

と少々わざとらしく言う。

「と、そうでした。カロルー？」

「ガキンちよがどうかした」

「の？と言おうとしたとき、彼女の背後でのそり、と起き上がる影があった。

リタはそれに振り返り、

「なに？まだやる気ッ！？」

「！待てって！……カロル？」

リタが振り上げた右腕を、ユーリが掴んで止めさせ、その人影に向かって小さな声で呼びかけた。

「うん……、……ひ、ひどいよ……リタ……」

……当たり前だったようだ。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

「落ち着きました、リタ？」

「え、ええ……」

詰め所から、今は出て町の通り。そこでリタの話を聞くことになった。

「どうしてこんな所に来たんです？」

「…帰る途中で、この町の結界魔導器シルトプラスティアの様子を見にきたの」

「で、余計なことに首を突っ込んだ。……面倒な性格してんな」

「変な使われ方してる魔導器プラスティアほおって置けなかったから……」

「それで嗅ぎ回ってたら捕まったと」

ユーリの呆れ顔に対し、リタはいいやと首を左右に振った。

「嗅ぎま回ってなんかないわ。忍び込んだのよ」

「で捕まっただ」

それに応えるカロルの声はにべもない。

「だって、夜中にこっそりと魔導器が労働者キャンプに運び込まれたのよ？その時点もう怪しいでしょ！」

ああ、またか。そんな空気が流れる。

彼女と一緒にいたのは、ガスファロストで共闘した間だけだが、なんとなく理解できた。

それに何となくで伝え聞いた噂もある。

曰わく、アスピオ・帝国の管理する魔導器研究学術都市・には孤独の天才魔導師である少女がいるそうだ。

だがその人柄から、同じアスピオの魔導師からもあまり好かれていない。その為からか、魔導器を家族のように愛する変人と聞く。

……やはり血は……私はそこで思考を停止させる。

……確信なんてない上に、今は関係ない。

……そんな風に考えにふける私を、リタの言葉が一気に現実へと引き戻した。

「それに見たの。町の人たちが無理やり騎士に働かされて……！」

「！」

ああ、また空気が変わった。

私はそう、思った。

S i d e O u t

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

S i d e S y o u y a

「うわー！……」

……全く、酷い目に遭った。

漸く精神的にも落ち着き、宿屋の外へと踏み出す。

先ほど、宿屋一階にある売店のおやじさんに“……あんな友人がいて大変だろうけど、頑張れよ”と言われた。

……今度ヘリオードに来たときは、必ずあのおやじさんの店で何か買っていいこう、そう決意した瞬間である。

「早めに合流しないとな。置いていかれてはかなわんし……」

最低でも、今頃はリタと合流している筈だ。

だとすれば、次にあるのはボス戦。敵は海凶の爪首領、イエガー。リウアイアサンのつめ

昨日俺を狙ってきた連中のボスなのだから、俺がこのこ出て行くのは、得策ではないのかもしれない。

自らの命を危険に晒す。

別にそんなマゾい趣味嗜好をしていない俺にとっては、正直遠慮願いたいところだが、後々を考えるとこれがベターな方法なのだから質が悪い。

……ああ、そういえばこの思考も、何回目だろう。

ここ最近はずっとこれがループしてばかりだ。

まるで自分に言い聞かせているかのようだ。

その考えに至った瞬間、自己嫌悪。

「……ふん。人でなしが今更なにを気負うってんだ……」

自らのエゴ、目的の為には全てを利用すると決めたのに、その対象が知り合いになるだけでこのざま……。

……友人……親友曰わくだが、俺は一定の円の外と内とでは他人の扱いが天と地なのだそうだ。

……まあ、その定義でいくと、取り敢えずジュデイスは円の内側にいるのかもしれない。
ユーリ達は……違うかな、まだ。会って一月も経ってないのだから、それが普通だ。

……っと、またワケのワカラナイ方向に思考が。
ホント、悪い癖だな。

気がつくとも一人黄昏、身を堀に預けていた。

いつの間に……。

……ああ、そういえばこれも悪い癖かな。考え事していると周りが見えなくなる。

かつん、かつん。

レンガで舗装された道を歩き、広場へと向かう。

まだ連中来て……、っ！？

「……………」

「……………」

背後から、聞いたことのある声がした。

気持ち悪さを感じさせる声と伸びきったカタコトの声。

このままここに居れば、確実に見つかる。

「ちっ！」

隠れられるのは広場の中心に聳^{そび}え立つ、螺旋状の結界魔導器、その影しかない。

背を魔導器に預け、そつと様子を窺う。

すると、

「おい、シヨウヤ？」

「！　っ、シッ！」

ぎょつとしてそちらを見る。ビククリして声を上げなかったのは奇跡だった。

……ユーリ達だ。

「……ええっと、何があつたんです？」

「見てみるよ、あれ」

「？」

俺に倣つて皆、魔導器の影から少し顔を出して、様子を窺う。

……すると、ジュデイスを除いた四人が息を呑むのが分かった。

「キュモール、あの野郎………！」

「なに、あのバカが今回の元凶なワケ？」

「みたいだよ」

それぞれ反応は違うが、静かな怒りを覚えているのは共通だろう。

俺はなにかめぼしい情報が聞けないか、二人組の話声に耳を澄ませた。

「おお、マイロード、コゴール砂漠にゴーしなくて本当にダイジョブですか？」

「ふん、アレクセイの命令に耳を貸す必要なんてないね」

恐らく、俺が嘗て聞いたセリフと一字一句違わないのだろう。

そして話はキモールことキュモールがイエガー、ひいては海凶の爪ホフロープラストイアから兵装魔導器を買ったらしいことに始まり、途中、イエガーがユニオンの首領、ドン・ホワイトホースを侮るなど苦言を呈していた。

「心配はない！僕は騎士団長になる男だよ？

にしてもアレクセイもバカだよ、ユニオンを監視しろってそのくせ友好協定だつて？」

一際大きな声上がる。

……やれやれ、この手の馬鹿の妄想話は聞くに耐えないな。

まあ、てかイエガーも大変だよな。

ビジネスとはいえあんな話を延々と聞かされるのだから、心労も人一倍だと思うのだが。

そんな心の声が聞こえたかのように、イエガーが此方を向き（、、、、、、、、）、そして嗤った（、、、、、、）。

「なッ――！？」

そう呟いたのは誰だったか。

まずい、敵を呼ばれる。

だがそんな予想とは裏腹に、イエガーはなにも言わず向き直ってしまった。

「イエー！オフコース！」

ここからでは奴の顔は伺えないが、声色からして、さぞ楽しそうな表情を浮かべていることだろう。

ガタガタガタ！と音を立てて、エレベーターが降りていく。

そして次に耳に入るのは稼動音に掻き消されながらも、なお響く高笑いの声。

本当にまあ、耳障りなことだ。

「あのトロロヘアー、こっち見て笑ってたわよ…？」

「ありや完全に気づかれてたな」

「っ、あたしたちを馬鹿にして……！」

「どうどう、兎に角落ち着けて」

「あたしは馬かつ！ってなんであんなにここにいるのよ！」

ズビシツとリタの人差し指が俺の顔を差す。

「まあ……昨日色々あったんだって。ホント」

「…そう言えば、なんでショウヤがあんな所で倒れていたのか、聞いてないのよね」

「？ 倒れてたって……」

……このままだと、なにやら別の方向に流れていきそうだったので、ぶっきらぼうに言う。

「今は別に俺のことはいいだろ」

「……………」

すると、ジュデイスからの視線が突き刺さる。

訳をするなら“無茶はするな”。

……そんなところだろう。

「取り敢えず、この下に町の人達がいるんだな？」

「ええ」

「……みんな助け出そうぜ、あの馬鹿共から」

『ああ／ええ／うん！』

ユーリの掛け声は、俺たちの気持ちを一つにする。

……まあ、さっさと行こうかね。

上がってきたエレベーターに乗り込んでいく。
そしてパネルのスイッチを押して、起動。

カコン、カコン／トクン、トクン

という小さな稼動音／心音が

ガコンガコン／ドクンドクン

と早く／大きくなっていく。

- - - - -

- - - - -

「っ……、っ……」

狭く、張り巡らされた道を走る。

見るからに見^み窄^{すぼ}らしいテントが立ち並ぶ、労働者キャンプ。

人の気配は全くせず、偶にすれ違う人の顔もやつれきっている。

「こりゃ相当に末期だな……」

ユーリの声は重く、怒り満ちている。

……ホント、その通りだよ。

「……あそこいるの、さっきの人たちじゃない？」

「……それに赤眼の一団もいます」

ジュデイスの言葉に、皆が立ち止まる。

とりわけ大きなテントの前にいるのは、キュモールに騎士一人、そしてイエガーと三人の海凶の爪の配下。

そのうちの三人の海凶の爪はイエガーの前に正しく横一列に並んでいる。

「ねえ、もしかして、あのイエガーとか呼ばれてるあの男、海凶の爪の首領なんじゃない？」

「……そうだ」

重々しく、口を開く。

今の気分は最悪か最高か、それすら分からなくなっている。
必死に押し留めていないと、今にも飛び出してしまいそうだよ。

「知ってんのか？」

「それでも、戦士の殿堂の統領補佐役なんだね」
バレストラーゼウーチェ

……俺からすれば、まったく理由にはならないが、誤魔化すのにはこれで十分だ。

「の割にはこんなところで油売ってけどね」

「その天才、一言余計だ」

これでも色々あるんだってーの。

「じゃあ、いくぜ?」

ピシリ。

硝子に罫^{ひび}がはいる。

……戦闘^{くたけ}開始^{しゅう}まで、あと僅か。

そして――

第七話　悪夢と海凶：後編

ユーリの言葉から、俺たちは少しずつ進む。
ギリギリまでバレないのに、越したことはない。

連中がいるテントのから少し離れた位置に、ある人物を見つける。
そこには赤い髪に布をまいた男性が、息も絶え絶えといった様で座り込んでいた。

「ほら、あれディグルさんじゃない……！？」

静かに声をあげたのは、カロルだ。

「じゃ、カロルとラピード。任せるぞ？」

コクリと頷く1人と一匹。

ユーリの中で、何かが限界だったのだろう。
足元から適当な大きさの石。

ひゅん。

ユーリの手から放たれた石は、綺麗な弧を描いて飛び、最後にはキモールの額に、ガンとぶつかった。

……コメントするなら、よい子は真似をしないようにしましょう、
か？

「だ、誰!？」

マヌケな声をあげる。

その後は……まあテンプレとでも言おうか。

ユーリやエステルが現れると、面白いように慌てる。

そしてエステルが、怒り心頭と言った表情で告げた。

「あなたに騎士として名乗る資格はありません!すぐに町の人達を解放しなさい!」

その後は……あれだな。

某世直し御老公に追い詰められる悪代官?

世間知らずな姫様には消えてもらうと言う。確かにエステルは世間知らずなお姫様ではあるが、それ故に純粹だ。

そして純粹であるが故、凡人には出来ない何かができるのだろう。

なんとも生き辛そうだ。

そしてまあ……こう続けた。

「イエガー!やっちゃいなよ!」

「イエス、マイロード」

イエガーの静かな声と同時に、何処から出てくる三つの人影。何れも両手の甲に楯のような刃がついているのが分かる。

……つまり前衛型だ。

「ユーたちに恨みはありませんが、これもビジネスです」

イエガーの右手に提げられた黒色のライフル型兵装魔導器。
ホブローブラスティア
それがカチンと音を発し、形状を変える。

長い棒状の柄に、そこから伸び、妖しく煌めく彎曲した刃。
デスサイス
死神の鎌。

そう呼ぶのに相応しい。

殺気が流れた。だが……それはイエガーのものではない。すべてそれ以外から放たれたものだ。

そしてその光景は、其処までやる必要はないと、そう物語っている。

ナメられているようで、腹立たしくもあるが、実力が足りないのは自覚している。

……一泡吹かせられれば良いところか。

- 硝子が砕け散る（せんとうかいし）。

ユーリやジュディスといった前衛は武器を構えて、飛び出した。ラビードとカロルは遠回りをしながら、ディグルと呼ばれた男性に駆け寄っていく。

後衛であるリタとエステルはいわずもなが、魔術の詠唱を始める。

…俺その瞬間、身体全体をバネのように収縮させた。

そして両脚にエアルを流し、強化。

イメージするのは爆発、地面を力一杯蹴った。

視界が一気に流れる。

こうすれば、二十メートルという距離は無いにも等しい。

正に奇襲だ。

一直線に狙うのは海凶の爪メンバー、ゲームではティターヌと種別されていた存在。

「っ！？」

一気に振り下ろされた刀。

だが敵を切り裂くには及ばず、ガンッ！と激しい音を立て、敵の両手の刃に阻まれてしまった。

だが敵は咄嗟に防いだだけ。結果として、僅かだが体制を崩すこととなる。

脇腹に蹴りを入れと、苦しい息を吐き出しながら、バックステッ
プで距離を取られる。

…深追いはしない。

ティターヌは俺を真つ正面に捉え、肩を震わせている。

どうやら真つ先に倒すべき存在だと、認識されたようだ。

…一人、引きつけた。

敵は4人。その内三人は、このメンバーでも倒すことは出来るだろう。だが海凶の爪首領、イエガーは無理だ。

ゲームではこの戦闘で倒すことになるが、それはあくまでゲーム。現実とは違う。

ならば俺は、少しでもユーリたちが戦い安いよう立ち回るしかない。

一合、二合と切り結ぶ。

だが三合目には、刀が敵の右手で抑えられている一瞬の隙を突き、左の刃が俺の頬を浅く裂く。

「つあつ！」

- 弧月閃！ -

大きく振るい、敵が避けるとバックステップで大きく跳んだ。直ぐにくるであろう、黒い影の斬激を迎えようとして――弾！と衝撃に襲われる。

「――！？」

――痛い。ジクリと右肩の傷から血が流れ出すのを感じる。

一体どこから…そう考える暇もなく、直ぐにきたティターヌの刃を受け止める。

ズン！と思わぬ重さが掛かる。

これだけでは支えられないと判断して、慌てて左手を刃の部分に添えた。

力ずくで弾き返すしか……。

と、ふと、相手の右手が持ち上がっているのが目に入った。

そして――それが高速に向かってくる。

一直線に俺の首へ、しかしそうはさせまいと左腕の肘を上げた。

「づッ！？」

スパン、と腕が裂ける。

動脈を傷つけたか、ドクンドクンと大量の血が滴り、地面を赤く濡らした。

必然的に支えられなくなる。

手について地面に倒れて込む。

（まずっ！）

こんな大きな隙を敵が見逃す訳がない。
事実、すぐそこに敵が留めをさそうとしている。

「――『ロックブレイク』！」

地面から巨大な岩石がガッガッ、ガンッ！と上がり、ティターヌを吹き飛ばした。

「……まったく、なにやってんのよ。エステル」

「はい！『ファーストエイド』」

背後から強気な少女――リタの声がかかる。
そしてエステルが魔術を唱えると、俺の身体を光が包み込んで癒やしていった。

「サンキュ、二人とも」

「はいはい。そう思ってたんなら、今度から気をつけなさいよ」

はいよ、と返事をして再び向かう。

先ほどの、リタが使ったロックブレイクで吹き飛ばされたティターヌに向かおうとして――再びの衝撃。

だが今回はくらうことはなく、刀を横に構えることで防いだ。
そこで、初めて衝撃の正体を見た。

――薄く青に煌めく光の“弾丸”

そう認識したときには、続いてガガガッ！と三発の弾が衝撃を齎し

もたら

た。

「ワオツ、ヒットしませんでしたか」

「……よく言う、わざと甘くしたくせに」

その弾丸を飛ばした銃を持つのは、イエガー。

彼は鎌を再度、ライフル型に変形させていたのだ。

「……一つ聴きてえんだけどよ、昨日アンタの部下に狙われたんだが……何故だ？」

何故——その言葉には様々な意味が込められている。
それにイエガーは表情一つ変えずに応えた。

「ミーが言うことは何もありません。バット……強いて言うなら『ザ・デューティー・トゥ・プロテクト・プリビレッジド・インフォメーション』でしょうかネ」

——つまり、守秘義務か。

海凶の爪……ギルドの人間がそれを語るとするならば、答は自然と絞られる。

依頼ってことか。

俺を生け捕り（、、、、）にするよう依頼するような人間とくれば、
思い浮かぶのは限られてくるが……

「——今更、何故？」

「アイドノウ。ミーの知ったことではありません」

「…そうかい」

明らかな進展はなし、か。

内心、落胆する。

その時、僅かに集中力が落ちたのを、奴は見逃さなかった。

タツ、と地面を蹴る音。

すぐさま反応してみれば、眼前には鎌を擡げるイエガーの姿。

「なっ!？」

「バトルの最中に余所見とは――」

鎌は大きく振り上げられた。

「――関心しませんねッ!」

一撃、俺は体制を低くし、刀を水平に構えることでまっすぐ振り下ろされる刃を受ける。

だがロクに力も入れられなかったため、すぐさま腕は軋む。

二撃、振り下ろされた刃は、今度は黒紫の光を纏いながら振り上げられる。

防ぎきることも出来なくなり、刀は大きく跳ね上げられる。右手でどうにか掴むも、それ以上、なにも出来ないと悟った。

イエガーの顔が、歪む。

「お別れのタイムッ!!」

次の一瞬で、鎌は銃へと形を変え超至近距離で俺の胸元へと向けられた。

銃口に多くの光——エアルが収縮し、凝縮され、破裂寸前の風船が連想させられる。

「『カーレス・オブ・デス』!!!」

「ガァァッ!!!?」

身体に加わる衝撃と激痛で意識が弾き飛ばされそうになるのを、必死で手繰り引きつける。

そして身体が地面に二度、三度叩きつけられバウンドしたのだけは分かった。

「ショウヤ!？」

「っ！エステル、回復を！」

「は、はい！」

視界は歪み、聞こえる音はまるで洞窟のなかであるかのように、響いている。

その中で、何が起こったのか、ようやく理解した。

（まさかの……秘奥義とは……）

成る程、これは痛い。昨日くらった『サンダーブレード』も痛かったが、此方の方が遥かに痛い。
ゲームで、たったの一撃で沈められるのも、分かるというもの。

「ショウヤ口を開けて下さい、早く！」

その声に従うままに、僅かだが口を開けると、ドロリとした液体が流し込まれる。

……飲み込め、ということだろう。

十秒以上かけてどうにか全てを嚥下すると、途端に視界がクリアになる。

そして身体の調子も回復した。

ライフボトル（戦闘不能を回復させるアイテム）か……。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ……」

起き上がり、辺りを素早く見回す。

ティターヌが1人とイエガー、計2人。

……往くか。

駆け出した、狙うはイエガーだ。

……勝てないのは分かっている。だが今イエガーはユーリと対峙している。

そこに加わって2人プラス、リタやエステルの支援があればあるいは……。

「ユーリ！」

「！」

「『飛刃爆符』！」

ユーリは最低限の言葉だけで、俺の意思を汲み取る。

彼の頭の横をナイフが疾く、奔る。

そしてそれがイエガーの鎌に触れた瞬間、爆風を撒き散らす。

「ぬっ！」

「……」

爆風が奴の視界を遮り、チャンスを生み出すのだ。

三尺弱の飾り気の無い、無銘の刀。仕事で知り合った友人お手製のそれに、^{エアル}力を通す。

「『弧月閃、義翔双閃』 ツ！！！！！」

下段から三筋、月光色の斬激が往く。

果たして、その弧月の刃はイエガーの身に届き、傷をつける。

「ツ———ラアア！」

「、くうっ！」

舞う、血飛沫。

イエガーの顔は愉悦ではなく、痛みで歪んだ。

イエガーは俺の腹を蹴り上げ、距離を取った。

「フウーツ、思いの外ストロングですね」

「そいつはどーも」

ユーリの横に並び、イエガーと対峙する。

するとユーリが小声で大丈夫か、と聞いてくるので、頷くことのできる。

各々がまた、武器を構えた。さあ、まだ俺たちはやれるぞ？
斬激の宴が再開される――かに思えた。

「キュモール様！フレン隊です！」

「ちっ、さっさと追い返しなよ！」

「ダメです。下を調べさせると押し切られそうです」

「くっ」

突然、1人の騎士がキュモールへと駆け寄る。

……やれやれ、短いやら長いやら、だな。

「ゴーシュ、ドロワット」

静かに、呼びかける。

するとテントの上から、2人の少女が飛び降りてきたのだ。

2人とも学生服風の服を身に着けている。1人は若草色の髪、そしてもう1人は――昨日見た（というより戦った）赤い髪の少女だった。

「……ふん」

その少女は俺が見ているのに気がつく、私、今スッゴい機嫌悪いです、と言わんばかりの目で睨みつけてきた。

「はい、イエガー様」

「やっと思番ですよー」

「ここはエスケープするのがベター、オーケー？」

若草色の髪の少女――ドロワットが煙玉を地面に叩きつける。途端、白煙と悪臭が立ち込める。

「な、なに！？この臭い？」

その煙のせいで、此方からはなにも見えない。

「早くこちらへ」

「逃げろや逃げろ、スタコラ逃げろー！」

「今度会ったただじゃおかないからね！」

1人は真面目に、1人は陽気に、そして最後はお決まりにの一言。

煙が晴れると、そこには誰もいなかった。

「ものの見事に逃げられたな」

「っ」

エステルが後を追おうとして、カロルに止められる。

「ちょっと待つてよ！今の僕たちの仕事は、ディグルさんを助け出すことなんだよ！」

「でも……！」

その時、背後から（彼等にとっては）心強い声がかかる。

「抵抗は無駄だ！武器を捨てろっ！」

如何にも好感の持てる、青年の高らかな声が聞こえる。
コトリ・ローウェル フレン・シーフォ
影とは対極の光。

その人の声だ。

「あーも！あんたらの仕事とか知らないけど、追うの？追わないの？」

「……ここはフレンに任せて行くぞ！」

「すみません……」

ナイスタイミングこれで取り敢えず、大丈夫だろう。
皆、同じ気持ちだ。

一斉に、近くに設置された扉へと向かう。

……たしか、ヘリオードの南側にある森に出るはずだ。

「……………」

ふと気がつくと、隣にはジュデイスがいて俺をジッと見ていた。

「な、なにか――」

「昨日のことだけど……………」

俺の言葉を遮って、ジュデイスは言う。

……底冷えのする、笑みを浮かべて。

「あとでしつかり、聞かせてもらっわよ?」

「は、はひ……………」

……何故か、逆らえる気が起きなかった。

番外編〈在りし日の日常：PV十万記念〉（前書き）

PV十万記念！

そして妙技さんのリクエストで、ショウヤのギルド時代の小話です！
ああ、反応が怖い……！

「足掻き続ける愚者」も始めてもう半年です。

それでたったこれだけしか本編が進んでいないので、作者も心配ですが、未長いお付き合いをお願いします！

番外編〈在りし日の日常：PV十万記念〉

〈日常での出会い〉

新月の晩、戦士の殿堂の頭領パレストラー・ドゥーチェの自室の前。

今考えてみると、最初にこの部屋に入ったのはこの世界でいう半年前。俺の感覚だともう少し長いが。

そこでの出来事が切欠でこのギルドに入ることになった。

もう、随分昔のことのように思える。

「失礼します」

『うむ、ちょうど良かったの。入られよ』

どこからともなく響いて聞こえる。老婆の様な印象的な声だ。

扉を潜ればそこは闇。己の足元さえ見えない。

ボツと部屋に規則正しく並べられた燭台に、勝手に紫の火が灯る。それに照らされるのは金の体躯、大妖狐を思わせるその風貌。

そう、頭領ドゥーチェベリウスは人とは違う。古より生きる『始祖の隸長』エンテレケイアと呼ばれる生き物だ。

初めて会った時から別に怖いだとかは思わなかった。

『久しぶりじゃの、シヨウヤ』

「はい、お久しぶりです」

一見堅苦しく思えるが、互いに交わす視線は祖母と孫、もしくは母と子のそれだ。俺にとってはそれが少し心地良い。

父子家庭で育った俺にとっては、新鮮で懐かしいのだ。

『どうかの、ギルドの仕事の方は？』

「楽しいですよ、毎日。ただナッツさんに職権乱用で仕事を押し付けられるのは、勘弁願いたいですけど」

『ほっほ、そうか。まあ、少しは大目に見てやってはくれんかの。あやつは今の今まで一人で、妾の代わりを努めてくれているじゃから』

「…分かっていますよ、それにナッツさんは恩人ですからね」

『そうか、それは重畳』

「というか頭領が人に化ければ、堂々と仕事ができるのでは？」

『ほほほ、あまり老骨を働かせんでくれ』

「ははっ、冗談ですよ」

自分がこの異世界でマトモにいられるのは、間違いなくこの優しい

時間のおかげだ。もしもあの時、彼等に会えなかったらかと思うと、ぞっとしない。

「…ところで今日は何故？」

『おお、そうであつた。いやなに、そなたに会わせたい者があつての』

「は、はあ…？」

『……む？来たようじゃな。入るがよい』

会わせたい人？頭領自らとくればそれなりの人物だと思ふのだが…。

カツカツと響く足音。

それに振り返つて……驚いた。

「ベリウス？これはどういう……」

この世界、テリユカリユミレースを舞台に、主人公ユーリ・ローウエルらが繰り広げる『物語』。

――目の前に

――その主要人物である

――『ジュデイス』がいた。

「っ……………！」

叫び出しそうになるのを、どうにか抑える。表情にも、出来るだけ

出さないように。

まさか、このタイミングでとは思わなかった。

『シヨウヤ、彼女じゃよ』

「え、ああ、はい」

突然のことでもう、訳わからないが、取り敢えず……

「…翔矢、守里だ」

自己紹介は、大切だよな？

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「それじゃあ私はこれで、縁があつたらまた会いましょう」

「おう、その時は頼む」

聞くと頭領は、俺が世界各地を回るジュデイスと知り合うことで、今後役にたつかもと思つたらしかった。

……確かにそうだ。俺の事情も彼女の事情も、共に訳有り。原作知識という武器を持つ俺だから分かる。

俺と彼女は目的と行動が違えど、それが互いの利益になるのだと。

……これがジユデイスとの出会い。
願わくば、この出会いが俺たちの一助とならんことを。

～日常での出会い：END～

— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —

～剣士の日常～

闘技場。

昼間は戦士たちの熱気と観客の怒号に包まれるその場所も、夜となると、何処からか入ってきた虫の音色を響かせる。

そして今、その音色を聴くのは、2人しかない。……尤も、当の2人に本当に聞こえているのかは疑問だが。

ビュン。

身体を全力で曲げると、そこを不可視の刃が通り過ぎる。当たれば、

人間なんて間違いなく二枚に卸されるに違いない。……嘗て、それが分厚い毛皮を持つ魔物がそうだったのを見たことのある俺としては、まるでシャレになどならない。

「っ、りやああああー!」

さらに二発。

黒の上着を切り裂かれながらも、その刃を飛ばしている対象へと接近。一気に――振り下した。

……が、

「甘いなア!」

「まそつぷ!？」

剣の柄で殴られ、地面にダイブ。……壮絶なキスすることになった。

……本日の鍛錬。いつも同じように、終了した。
これは俺、守里翔矢と、我が師、カレル・ウィンバードの日課である。

――
――
――
――
――
――
――

「だいたい、お前は前に出過ぎだ。魔術を使えるのだからそれを生かせなくてどうする」

闘技場の壁に背を預けながら、カレルさんの話を聞く。

彼は若い頃、各地を周り強者を求めた旅をしていたとか。……まさかの元リアル戦闘中毒者に会うことになるとは、世界は広い。

さて、今は鍛錬の反省会。

何時もは素直に聞くが、今回はかりは別だ。

「……いやいやいや。カレルさん相手に、んなのしても当たらないし、詠唱の最中なんて只の的じゃないですか。しかもあんな技まで使つて。」

因みに耐えて詠唱しろなんてのも無理ですからね?」

「それでも手加減をしてるのだから——」

「あれを見て、そう言えますか?」

スツと指差した先には、半分あたりを断ち切られた鉄製の燭台が転がっていた。屈強な闘技場参加者の斬激程度では、ビクともしないものが、である。

……間違はなく、言うまでもなく、カレルさんがやつちまったものだ。

「……途中で手加減を、忘れてましたね?」

「い、いや……。ほらね、ついつて言うか何て言うかね?熱が入ってたって言うか……」

「……………」

前言撤回、この人元じゃなくて、今も戦闘中毒者だ。

……だめだこの人、早くどうにかしないと危険だよ、主に俺の命が。てかりアルチートの戦闘中毒者って、害悪以外の何者でもってないと思うんだ。

それに燭台も無料^{タダ}じゃない。この人は、分かっているのだろうか？……まあ、カレルさんを師と仰ぐ俺が言えたことじゃないが。そもその原因は俺がこの鍛錬の相手を願ったからだし。

「まあ、兎に角、修理費は俺が出しておきますから」

「や、流石にそれは……」

「遠慮いりませんよ、俺、どうせ金は使いませんし。それに奥さんとあの2人がいるじゃないですか」

人が生活するには当然、金がかかる。それが4人家族となれば尚更だ。

……それに、知ってることは内緒だが、家庭の財布は奥さんが握っているらしい。

「……面目ない」

心底すまなさそうな声。俺の申し出がよほど有り難かったと見える。苦労、してるんですね。

「じゃあ俺はこれで……」

「ああと、シヨウヤ」

そそくさと退散しようとする、呼び止められた。なんだろう？

「今から時間、あるか？」

— — — — —
— — — — —

鍛錬が終わり、約三十分後。俺は今—

「はい、遠慮しないで食べてね？」

「は、はい」

—とある家庭の晩御飯に同席していた。

とある家庭というのはモチロン、カレルさんのとこだ。

食卓に並ぶのはサラダにスープ、パン、あとバタンギの煮付け。

バタンギ

ノードポリカ近海で大量に捕れる魚。の割には味はよくなかったが、近年になって急に味が良くなったので、特産品化を計画中。

>ノードポリカ漁業組合員の手記より抜粋<

……うん、無駄知識。

「んー？どしたの、早く食べないと冷めちゃうぜい？」

「いや、それは分かってるんだが、あれは……」

話し掛けてきたのはカレルさんの娘その1、もといリュンヌ。
綺麗なブロードも持つが、だいたいふざけてる。

「おお、登場初回でバカにされた気が…」

メタな発言はしないで貰いたいものだ。

……、俺の視線の先、そこにはスープとパンだけの、え？こんなに
貧しい家庭でしたっけ？というようなメニューを目の前に並べたカ
レルさんがいた。

因みに椅子の上に正座で涙目。
いや、何故に？

「どーせまた、ギルドの物品でも壊したんしょ？」

「は……！？」

つい、さっきのことが何で分かった？

「おっ当たった？流石は母さんだね、んね、クレっち」

「…いつものことだから気にしない方がいいよ？」

「おいクレっち、クレール、クレールさん？わたしのことは無視
ですか？」

この微妙にふざけてるのを無視したのは、彼女の実の妹のクレール。
カレルさんの娘その2だ。

「因みに今後の登場は未定とか、正にそげぶだよね!？」

「リユンヌ、俺にはお前のことが分からねえよ……」

此方からすれば人の言語でok、である。宇宙の彼方から電波でも受信したのだろうか？

俺が、何かもう訳分からず頭を悩ませていると、クレールが人差し指で肩をつつく。

「お姉ちゃんが意味不明なのは何時もことだから……気にするだけ無駄」

「うわーい、辛辣なお言葉だね、我が愛する妹よ」

「うつとおしい……」

「あ、あはは……」

えーと、まあ、これでも仲は良い？みたいだから気にせずスルーで。てかクレールって本当に辛辣だな……ほぼ彼女の姉と父親に対して彼女たちの母親のリユミエルさんには、普通なんだが。

「そ、そっぴやさっきの口振りだと、カレルさんは前にもああいう？」

「うん。お父さん……ショウヤが来る前から……暇つぶしにいろんな人にケンカふっかけてた」

「……なにやってんだ、42才警備部最強剣士」

てか何だよ、その辻斬り紛いの行動は。

……そういえば俺の周りの大人って、何かしら致命的なのがあるな。

頭領代理とか情報屋とか警備部長とか受付嬢の方々とかk（ry

やべ、結構大量に出てきた。大丈夫か、うちのギルド。

「ま、うちのダメオヤジのことは放っておいてさ、食べよ食べよ。
あ、クレっち、あゝんしてあげよっか？」

「…少しは黙れば？」

「…うん、お前らも大概だよな」

まあ、取り敢えずリユンヌの提案に従い、料理に箸を伸ばす。
モチロン完食させて頂きました、と。

〈剣士の日常：END〉

— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —

ドゥーチエ
〈頭領補佐の日常〉

「やっと終わったー…」

とある満月の晩。俺は上司に押し付けられた仕事を片付け、帰路に
ついていた。

といつても、自室はギルドの建物である、闘技場内の空き部屋を改
装したものだから、執務室からそう時間は掛からない。

…最近になって、ナッツさんが俺を遅くまで仕事させるために、
その位地にあるのではと最近になって考えるようになった。

すれ違う同僚や、闘技場内で店を開いている他ギルドのメンバーに
挨拶をしながら帰る。

「少し、よいかの？」

独特な話し方の艶やかな声。何処かで聞いたような話し方だが、気
にはならなかった。

「、はい、どうかしましたか？」

一瞬、息をのむ。

磁器のような肌、月光を思わせる白銀の髪は、床につきそうなほど
伸びている女性。年齢は二十代半ば位。何処か、人間離れた美し
さを感じさせる。

「ふむ、そなたでも分からんか」

口元を右手を隠し、満足そうにクスクス笑う。

……？、誰だ？口振りからすると俺を知っているようだ？……？

「あの…失礼ですが、どちら様ですか？」

「ほほ、妾じゃよ」

いや、それが分からないから聞いて……って、『妾』？え、でも…
…ああ、そんなことも出来たっけ。

「まさか、頭領…？」

「あたりじゃ」

「……何やってるんですか…」

「なに、そなたが面白いことを言っていたのでな、試しにやってみただけのこと」

・・・あー、あれですか。いや確かに言っただけ、実行しますか。
マジで始祖の隸長の姿から化けて、人の姿に成るとはね…。

しかも新月の晩にしか人と会わないってポリシーはどうした。

「別に、今の妾は人間『ベリウス』だからの、問題はあるまいて」
「さいですか。」

呆れたように呟くが、気持ちは驚くほど穏やかだ。それに、何故だか分からないが嬉しさもあった。

……姿は違えど、頭領が楽しそうに笑う姿を初めて見たからか？
…母を思っ子供の気持ち、といったところのようだ。

「ところでその姿、ナッツさんに見せました？さぞ、驚くと思いますけど」

「…いや、今回は辞めておこうかの。なに、この場所を楽しみたいが故じゃ」

僅かに思案する仕草を見せたが、直ぐに否定される。

……自分が治める組織を客観的に見てみたいということが。

「分かりましたけど、それとナッツさんに言わないことに関係が？」

「ほほ、あやつは真面目じゃ。故に知られば、羽を伸ばせぬだろうと思っただけのこと」

「じゃあ俺に言ったのは？」

そう聞くと、ニッと笑った。それこそ、待つてましたと言わんばかりに。

「妾がここにこうして訪れるのは初めて、なれば案内役が必要じゃろっ？」

「…分かりました。お供いたします」

「うむ」

頷くと、俺の右腕を取って彼女の腕と絡ませた。

……エスコートなんて、やったことないんだが。まあ、これも恩返しかな。

それに昼間に比べれば人は少ないから、それなりには回れるだろう。

――この時の俺は知らなかった。

はっちゃけた頭領の真の恐ろしさを。

「金を払ってから食べましょうねどこぞの赤髪公爵の息子じゃないんだからや試食コーナーのものの全部食べちゃだめでしょ売店の人困ってるしナイフとフォークはそう使うんじゃないですねて面倒だからって手でガブリはマナー違反です試着室のカーテンは閉めてください今の自分の姿を少しは自覚してくださいよそっちは選手控え室ですよちよ何処行ったああいたってなんかゴツイ連中にかまれてるしって拳で瞬殺ああもう面倒だから行きますよおいなんか増えたぞえいやさすがにボコるのはまずいですって一応客だしはあはやつとまけたって何か凄い入り組んだ所に来ちまったあああああああああああああ！！！！？」

ドゥーチエ
（頭領補佐の日常：END）

第八話　潮風吹く旅路：前編（前書き）

時間があれば、後書きをご覧ください m — — m

第八話　潮風吹く旅路：前編

「……姿が見えません……」

「結局、逃がしちゃったみたいね」

トリビキア大陸、中央部の森。ヘリオードから見て南に位置するそこに俺たちはいる。

まあ、森と言うが周囲はそこそこ拓けており、見晴らしもよい。そのため、連中らしき人間は直ぐに分かった。

…雨雲は去り、天気は晴れ。先ほどのことを一瞬忘れて、長い伸びをする。

こんな状況ではなければ、地面に寝転んで睡眠を貪りたいほどだ。

「このままヘリオードに戻るよりトリム港に行った方が良さそうだな」

「え？キュモールはどうするんです！？放っておくんですか？」

ユーリが呟くように言うところエステルは声を荒げた。

なんと言うか、彼女の年齢の割に精神は幼いようだ。なかみ

正義感があるのは結構だが、目先に捕らわれてばかり、のような気がする。

まあ、それはともかくとして、俺としては奴らが逃げ切ったままのほうがり難い。勿論、原作云々ということだ。

と、そこでジユデイスが前にでる。……なんか、怒ってないか？

「あら、フェローに会うことが貴女の目的だったと思うのだけど」

「そ、それは……」

「貴女の駄々っ子に付き合うギルドだったかしら、『凛々の明星』
は」

「……ごめんなさい……」

……なかなかキツイ言葉だ。でも彼女にとって必要だとは思っ
彼女はまだ幼いうえに次期皇帝候補。何かしらのプラスにはなる。

そして同時に思い出したような……、たしかこんなイベントもあっ
た……っけ？

はつきり言っで、全く覚えちゃいなかった。今、見ただけでもうっ
すらとしか分らない。

「……まあ、ヘリオードにはそっちの知り合いがいるんだろ。なら、
大丈夫じゃないか？」

「そうそう、フレンがいるからよ。そうかつかすんって」

しかし、俺の記憶云々は兎も角として、このままの空気というのは
頂けなかった。

故に何か言おうと思ったが、結局、無難な言葉しか浮かばない。そ
れが少し恨めしい。

「ちょ、ちょっと、フェローに会ってなに？『凛々の明星』って
？説明して」

慌てたように切り出すリタ。

てかそう言えばユーリたちのギルド結成イベントはもう過ぎてたんだな。完璧に流していた。

次辺りに質問して、怪しまれないように――

「そうそう、説明してほしいわ」

なんか出た。

一斉にバツと振り向くと、ユーリに“胡散臭さが服着て歩いてる”と表されたレイブンこと、おっさんがいる。

……え、逆？気のせいだ。

「ちょ、ちょっと、何よあんだ」

「あれ、もう忘れちゃったのゝ天才魔導師少女。レイブン様よ」

「な・に・よ・あ・ん・た」

「だ、だから…レイブン様……………」

20も年下のリタ《しょうじょ》に凄まれる小さくなる35歳。情けないことこの上なかった。

そして小さな声でガキンちょ怖い、と呟く。

「で？なんでここに？」

「おたくらが元気すぎるから、おっさんこんな所まで来るはめになっちまったのよ……」

勘弁してくれと憔悴した顔、だが皆の心に響くものは何もない。扱い方がアレだった。

それを知ってか知らずか、おっさんは表情を変え告げる。

「まあ、兎も角トリム港の宿屋にでも行こうや、話はそこで話す。おっさん腹減って腹減って……」

「…それにはオレも賛成だ」

「じゃ、次はトリム港ね。それでいい？」

「…はい。ごめんなさい、我が儘言って……」

ジユデイスに向け、頭を下ろすエステル。

や、ユーリやカロールにも……まあ、いいか。俺が考えることでもない、と考え直す。

それに俺の頭の中は一刻も早く休みたい、ということに支配されている。

……毒盛られた後にボス戦（しかも秘奥義直撃）は、流石に身体に堪えるらしい。関節が僅かだが痛む。

まあ、これで関節が痛い程度で済む俺も大概かもしれないが。

時と場所に移ろい、カプア・トリムの町も夜の帳が落ちる。
適当に目についた宿屋に入り、二部屋手配した。

この世界の宿屋は遅くまで受け付けをしていることが多いから有り
難い。町の外には魔物の蔓延る世界だ、安全安心予定通りの旅など
幻想に近いものがある。

「――という訳なんよ」

「なるほどな、ユニオンとしては帝国の姫様がぶらぶら知ったときな
がら放つとく訳にはいかない、と」

「ドンはわたしが次期皇帝候補だったこと、もう知っているんです
ね」

「……あれ、なんかもう話終わりかけ？てかマジで聞いてなかった
んだが。」

「……でも、いいか、別に。現実逃避とも言えなくもないが気にしな
いようにしよう。内容を想像することは容易だ。」

「そういうことで、エステル嬢ちゃんを見ておけって言われたんさ」
そこで、はあと溜め息をつき、

「まあ、追っかけてみればいきなり厄介ごとに首突っ込んでるし……
…おっさん大変だったわよ」

「……帝国とギルドの関係を考えれば、当然、か。今は腹を探り合
つてゐる状態ってことでもいいんだな？」

「おつやつと話し合いに参加かい青年二号よッ。……まあそんなと
こだな、今両者間はちよつと捻れかかつてるし」

そこでエステルはえつ、と目を丸くする。

…あとどうでもいいが、二号ってなんだ二号って。

「両者つて、帝国とギルドですよ？でもそれは友好協定が――」

「ヘラクレス…だったか？」

「そそ、正解ー。あんなデカ物がダンゲレストの目の前に出現しち
やったもんだから、今反帝国ブームは再燃焼中、おかげで協定どこ
ろじゃないってね」

ヘラクレス、要塞であり兵器である超弩級兵装魔導器、ホブローブラスティア帝国の最終
兵器。

フォルムはヘラクレスオオカブトだかサイだかトリケラトプスだか
よく分からない物で、びっしり取り付けられた砲門は脅威である。

おまけに、海を歩いて渡る（、、、）規格外つぷりだ。

てか地球の兵器相手でもドンパチできんじゃないかね？と考えてしまっほ
ど。

……ゲーム通りなら、俺たちが大楼阁ガスファロストで戦ったのち、
ダンゲレストにそれが出現したんだったか。

ユーリは盗まれた水道魔導器の魔核を取り戻す目的を終え、体を休
アクエブラスティア コア

めるためにダングレストに戻る。

そして翌日にはエステルは帝国に戻ることになり、ユーリやカロルはギルドとして別れる、ハズだった。朝、エステルが発発しようとしたところに巨大な鳥型の魔物、フェローが現れたのだ。

結界があるにも関わらず街の中に現れた魔物。

辺りは混乱の渦に巻き込まれる。

その場にいた騎士団員が撃退を試みるも、失敗。

だが不思議なことに、必要以上、騎士たちを攻撃しなかった——
早い話が、無視されていたのだ。

戦場と化した街の真ん中で騎士の傷を癒やすエステル、そこにその魔物——フェローはこう言ったのだ。

“——世界の忌まわしき毒消す”

……“何故魔物が人の言葉を、そして毒とは？”

そのままだと、エステルは危なかっただろうが、瞬間、フェローの巨体がぐらりと揺れる。

ヘラクレスによる砲撃だった。

更なる砲撃の雨に晒されるフェロー。

そうしてフェローは逃げ、それ以上の被害はなかった。

……“何故魔物が人の言葉を、そして毒とは？”

だが彼女の中に生まれた疑問は、彼女を新たな行動に掻き立てる。
その結果、彼女はユーリたちと半ば強引にダングレストを去り、新

たな旅を始めるに至った。

……あとは、俺が経験したとおりだ。

「んで？あんたらはフェローってのを探しにコゴール砂漠に行こうとしてると」

「はい」

「……砂漠がどういうとこだか分かってる？」

リタは表情と声色、その両方を真剣なものに変え、問いかける。エステルを心底案じてのことだろう。

そこで何故か、俺のなかで一つの疑問が湧いた。人間嫌いの克服され始めたかと捉えればそれまでだが、別の視点から考えるとまるで――

「暑くて乾いて砂ばつかのところでしょ」

「……全く、簡単に言うわね。そんな甘くないわよ」

「――リタはコゴール砂漠に行ったことがあるのか？」

そんな訳はないと知りつつ質問する。だが絶対ではない、ゲームとの差違があるんじゃないかという不安がくすぶりだし――

「別に。ただ親戚、いや顔見知り聞いただけよ」

――一瞬にして鎮火した。

そして思う、彼女の触れるべきではないところに触れてしまったと。

……そして設定を思い出す。彼女は孤独の身、両親を早くに無くしたが故に、人との関わりを遠ざけ魔導器に傾倒していった。天才と呼ばれるほどに。

そして彼女に砂漠の話をしたとすれば、ただ一人しか浮かばなかった。

……彼女の父親だ。

彼女の父親は、たしかクリティア族。コゴール砂漠を超えた先にあった（、、）クリティア族の集落に住んでいたのだったか。

リタの言葉を聞いた瞬間に思い出される情報の羅列。忘れてしまっていた記憶。

んとに、異世界転移者は難儀な生き物だ。知りもしないことを知り、一部の未来をも識っていることさえあるのだから。

「ま、それは置いとくとして、それからどうするの？」

「はい。とりあえず皆さんと一緒に近くまで行って、それから色々回ってフェローの行方を聞こうかと」

「……いろいろツツコミたいところはたくさんあるけど……」

まあ、早い話が行き当たりばったり、そんな時どうにかする、ってことだしな。

砂漠に無計画でゴーとか、命知らずにもほどがある。

「お城に帰りたくなかったってことじゃ、ないんだよね」

「えと……それは……」

「おっさんとしては、お城に帰ってくれた方が楽だけどなあ」

「ごめんなさい。でも私知りたいんです、フェローの言葉の真意を……」

ま、分かってはいたが。そんな表情をリタとレイブンは浮かべた。

「ま、テズエール大陸つてのは好都合っちゃ好都合だけどさ」

「…どういうことかしら？」

「ドンのお使いでノードポリカに行かなきゃなんないのよ。ベリウスに手紙をもってけて」

ほれ、と片手の掌サイズに纏められたものが見える。

「うわ、大物だね」

「たしかノードポリカを治める闘技場の首領の方、ですよボスね」

「正確には統領ドワーチエな」

「そっか、シヨウヤは戦士バレストラーレの殿堂の一員だもんね」

カロルはうんうんと頷く。
そしてヒュッ、とユーリに封筒が投げ渡され、ユニオンの印が入ったそれを見つめた。

「中身は知ってんのか？」

「ん、ダングレストを襲った魔物に関する事だな、お前さんたちが追ってるフェローってやつ。」

ベリウスならあの魔物のこと知ってるって話した」

「こりゃオレたちもベリウスに会う価値がでてきたな」

「ですね」

そしてバツと此方に向くエステル。なんとなく、この展開は分かってたけど、目の前でいきなりそれは心臓に悪い。

「シヨウヤは統領補佐なんですよね」

「まあな」

「わたしたちをベリウスに会わせて頂けないでしょうか」

お願いします、とエステルは頭を垂れる。

はいどうぞと笑顔で勝手に了承しても、統領は流すのだろうか立場上そうはいかない。

演技は得意じゃないんだがと、溜め息をついてから言う。

「や、それはいいんだけどな……」

「？ 何か問題でもあるのか？」

「うちの統領、新月の晩にしか人と会わないって決めてるんだよ」

偶に例外あるけど。

「なにそれ」

「じゃあねえだろ、そういう主義の持ち主なんだから」

偶に例外ある（ry

「ドンには直接手渡せって言われてるし、おっさん地味に疲れそうなんですけど……青年二号より、特別ルートで何とかならない？」

「無理だな、俺らだってそう会える人（？）じゃないし」

偶に（ry

人の姿で街中歩いてたりするけど。

売店で菓子買ってたたりするけど。

人間モードの時はあくまで統領じゃないとか言っただけのらりくらりさけるし……。

もういっそのこと仕事手伝ってもらいたかったものだ。

「まあ、そういうことだから向こうに着いてからだな。今は確実なことは言えん、だからそれで納得しておいてくれ」

「……分かりました」

しぶしぶといった様で頷く。

これ以上は只の不毛な問答だ。それは納得してくれたと思う。

「とにかく、つつー訳だから、おっさんも連れてってね?」

「分かったよ。でも一緒にいる以上は凜々の明星の掟には従ってもらうよ」

「了解了解、でもそっちのギルドに一時的に所属するって訳じゃないから、そこんともよろしくな」

そういえば、今頃統領は何をしているだろうか。や、迷惑はかけていないことは分かっているが、なんとなくだ。

それに……いや、目の前のことが優先だ。まだ先は短いようで、長い。

「話は終わり? んじゃそろそろあたし休むわ……」

「リタはどうするんでしょう」

「さあな」

リタは一人部屋を抜ける、自分の部屋に戻ったのだろう。

……でも、心構えはしておくべきか。認められないことも、あるわけだし。

我が儘といえは我が儘。
そして独善。

自分にとって都合の悪い部分だけ、改変しようとしてるのだから。

「明日の朝まで自由行動かしら」

「だな。んじゃ解散、てことで」

それを皮切りに、それぞれが別れる。

俺は……外で夜風にでも当たろうか。そう思って、実行に移す。

……俺はどうしようもなく、愚か者だ。

でも今回ばかりは、

そうであっても、

『足掻き続ける愚者』であろうと思う。

……じゃあ、そろそろ現実を見ようか。

顔をあげると、そこにいるのは一人の女性。

月光に照らされた青い髪と長く尖った耳、後頭部から伸びる水色の二本の触手——それらの持ち主は、ジュデイスだ。

「じゃあ少し『オハナシ』しましょうか？」

……どう切り抜けよう。

.....

.....

.....ギニャー。

.....辛うじて、辛うじてだが、肉体言語での『オハナシ』にはならずすんだ。
身を案じてくれているのは分かるが、説教は勘弁してほしかった。

イエガー戦のときよりも精神を消耗したのは、気のせいだと信じた
い。

.....うん、信じたい。

第八話　潮風吹く旅路：前編（後書き）

THE説明回&オリイベフラグ、そして相変わらずのスピーース。

……早い話、内容全くねー、最近スランプ気味です。

因みに作者の部活の先輩から挿し絵でも描いてみたら？と言われたのですが、皆様はどう思いますか？
美術部であることを活かせ、とか。

皆様からの反応次第で決めようと思います。
雰囲気が悪くなるからやめれ、とかの意見があれば描かないかもしれません。

……え、感想稼ぎ？

ふははは、気のせいですヨ？

……ご協力をお願いします。

因みに来週は作者が修学旅行に行くので、執筆時間が取れないと思われるわ。

第八話　潮風吹く旅路：後編

翌朝、天気は快晴となり白い朝日が燦々と降り注ぐ。外に出ると独特の匂いが鼻についた。

もう既に通りには市場が開かれ、威勢の良い声が響いている。

活気に溢れてはいるが、時間の割に採れている海産物の量が少なく見えるのは、気のせいではないのだろう。

この時期はカプアノール、カプアトリムの両方の港町共に、水揚げ高が少なくなる時期だ。

原因は単純かつ一般的。時期的にこの近海には魔物が出没するようになる。

魔物の種別は俗に言う魚人、テイルズファンご存知の二足歩行するサメが船の碇を武器に構えている、アレである。

ゲームでは怖いとか強そうとか、そんなものとは懸け離れた見た目だったが、あの二頭身、近くでみると案外グロテスクだ。

おまけに群れで獲物を襲い、力も強い。

漁船や輸送船が襲われればひとたまりもない。

だから大抵傭兵を雇って運航に当たる訳だが、どこその最大手傭兵ギルドはだれかさんが潰したから、この町は混乱中。

……まあ、そんなこんなで出航は自粛ムード真っ盛りだ。

グミ各種にボトルを数種類買ってポーチに放り込む。

暫くは船旅であるため、ある程度はしっかり準備しておかなければならない。

……こういう時、原作知識は便利だ。旅の予定を立てるのにもってこいだと言える。

「あー、あとこれも下さい」

「はいはい、まあいど」

独特な間延びした声を聞きながら内心呟く。

しかし、この町は物が多いな、流石は商業ギルド『ギルド・ド・マルシェ幸福の市場』のお膝元、世界の流通拠点。

この町だと大抵のものは揃うから有り難い。食料品から日用品やお土産、そして武器。

うちの町は観光スポットを兼ねているから、それなりに賑わっているがこの町には負ける。

「おーい、シヨウヤ」

「おっ、やっと来たか」

振り返ってみると、案の定、ユーリたちがそこにいた。ん、全員揃っているようで何より。

買い物はもう済ませたようで、食料が入っているであろう袋をぶら下げている。

「勝手に出歩くなよな、探したぜ?」

「え？ラピードに伝えた筈だが……」

「いや、それじゃあ分かんないでしょうが」

バカっぽい、と呟くりタだが少し待つてほしい。そして冷静になれ。
なぜなら……

「ユーリならラピードの言葉が分かるだろう？」

「おいおい……」

「確かに…青年、ワソコの言葉を理解してる節があるわね……」

「オレにそんな不思議パワーはない。あれは何となくだつての」

嘘だッ！……！

と叫びたくなつたが自重する。ネタなんてやつても、理解してくれる人間はいないのである。
悲しいことだ。

「てかりタも付いて来ることになつたんだな」

予定通りでなにより。

「エアルクレーネは世界中にあるつてあんたが言つたでしょ。な、
なら研究ついでに付いていけば護衛にもなつていいかなーつて」

「……ツンデレ乙」

「は？」

「いや、なんでもない」

聞かれれば間違いなく殴られていただろうから小さな声で。
てか理由なんて十中八九エステルが心配だからに決まってる。聞く必要はなかったな。

「じゃあ早速だけど、船の手配は？」

「今からだ、今から適当に見つけるさ」

「…そうかい」

……今だから言えるが、ご都合じゃないか？今の時期、そう船は出てないのに。

完璧に無駄なことを考える自分を、どこか呆れながら歩を進める。

途中、もう一人の皇帝候補でヘラクレスの件で揺れるユニオンとの競技で丁度来ていた『ヨードル・アルギロス・ヒュラッセイン』とも遭遇したが、大した内容ではないので割愛する。

あと名前長え…。

栈橋のあるエリアに着くと、大きな輸送船から小さな漁船など幾多の船が留められている。

やはり、満足に海にも出られないか。

「船は沢山あるから、虱潰しに探せば乗せてくれるのもあるだろ」

「そうですね」

……、本当に大丈夫かよ。まあ、別にいいが。
大量の船の中でも一際大きなそれに、一人近づく。恐らくだがそれが幸福の市場の船だろう。

理由なんて単純に、でかい船だから。ただそれだけ、後はカン。

その時、その船から魔物毛皮を纏った二人の男が飛び降りてきた。
や、4、5メートルの高さを武器背負って飛び降りるとか……。

「ぎ、魚人なんてムリだあああ……！！??」

「そんな依頼、命が幾つあっても足りねえよッ！！！」

……いや、さらに待て貴様等。数ヶ月前に十体規模の魚人の群れの真ん中に放り込まれた俺の苦勞はどうしてくれる。

マジで死にかけたんだぞッ！?

貴様らで足りないなら、俺なんてとうに死んどるわ……！！

「こらーッ！待て！！払った金の分は働けえッ！！仕事しないならかせえええーッッッ！！！！」

つとと、なんか飛んでた。

女性の声で我に帰ると、そこにいたのは赤紫の髪と眼鏡の女性、如何にも出来る女性実業家といった風貌の人物だ。

『メアリー・カウフマン』、ギルド『ギルド・ド・マルシェ幸福の市場』の女社長だ。
ボス注意事項はファーストネームで呼んではいけないことだ。

そして当の人物は後ろのグラスンの人物に命令を下す。

「ギルド、『蒼き獣』をブラックリストに追加よっ！」

「はい、社長^{ボス}」

あちゃー……これであのギルドは終わったな、実に哀れだ。
帝国、ギルド共に強い影響力のある五大ギルドの一角をナメちゃいけない。や、これ洒落になってないって。

「あれって確か……」

「し、知り合いなの……!？」

「いや、デイドン砦で少し話ただけだ。カロルこそ知り合いか？」

「知り合いもなにも、五大ギルド『^{ギルド・ド・マルシェ}幸福の市場』の社長だよ!」

「つまり、ユニオンの重鎮よ」

後ろの方でチュートリアル的な会話が繰り返されているが無視だ。
ユーリがおい!とか声を掛けてくるのも無視。

口角が引きつらないようにしながら、出来る限りの笑みを浮かべて、
その女社長の背中に話しかける。

「お久し、ぶりですねカウフマンさん」

あん?と不良のように振り返るが、俺を認めた途端、フワツと表情
を変える。

その変わり身の速さには敬服するよ…。

「あらあら、誰かと思えばショウヤくんじゃない?久しぶりね。え、

なに？うちのギルドに鞍替えに来た？あらあらあなたなら大歓迎よ、じゃあ早速この書類にサインを――」

「って待たんかいっ！話をややこしくしないでくださいよっ！？」

スパコーン！と何処から取り出したハリセンで叩く。この際相手が幸福ギルド・ド・マルシェの市場の社長とか知ったことじゃねえ。俺の能力を買ってくれてるのは有り難いんだが少しは勘弁してほしい。

「っくく！痛いじゃない！」

「じゃあ息なり暴走しないでくださいっ……！！！」

全く話が進まない。

大して疲れてはいないが肩で息をしたくなる。

大体なんでギルドの人間は変わった人が多いんだ！？

実に、今更な叫びだった。

「ね、ねえ、シヨウヤは知り合いなの？」

「はあ、はあ、…前に少し」

誰と、なんていわずもなが、この人は商業ギルドの長だからノードポリカにも来ることがあるのだ。その時知り合った。

「ってあら、ユーリ・ローウェル君もいるじゃない」

「…手配書の効果ってすげえんだな」

「すっかり有名人だね、ユーリ」

あー…。ユーリはエステル誘拐の容疑で手配されていた時期があったんだっけ。

そんな設定空気にも等しいが。

「で、なんのご用かしら」

「いやー、ちょうど良い護衛役を紹介しようかと」

「へえ…？素敵ね、じゃあ商売の話をしましょう？」

キラーン、と目の色が変わる。そこにいるのは先ほどのイタいヒトではなく一人の商人だった。

…：…なんとなく、近寄りたくないのには変わらないが。

「詰まるところ、船に載せてほしいってことかしら」

「話が早くて助かります」

「…おい、話を勝手に進めんなって」

肩を掴まれ、クルリとそちらを向かされる。

…：…なんだよ？

「お前、いきなりハードル高い所にぶつかってないか？」

「そ、そつだよ、それに護衛って……ボクらはエステルの依頼は受けてるから……」

「あら、相談ごと？じゃあ一言言っておくけど、この時期海に出るなら危険はどの船も一緒よ。尤もこの近海だけなんだけど」

「うう……」

「それならまだ大きな船の方がいいんじゃないかしら」

うおー、カロールが揺れ動いてる。二つの気持ちで板挟み、てやつ？
なんだか見ていて面白い。

「で、でもボクたちは依頼を——」

「じゃあギルド同士の協力ってことにしましょう、それならギルドの心義には反しなくてよ」

あ、陥落した。

「て、確認してなかったけど行き先は大丈夫なの？」

「そうですね、ギルド・ド・マルシェ幸福の市場の船がノードポリカに行かないのなら意味がありませんよ？」

「いいえ、そこは問題ないわ」

少女二人が話し掛けるのを遮って、カウフマンさんは続ける。

耳聡いものだと思えと感心が半々の心境だ。流石は商人。

「此方としては余所の港に行けさえすればいいの、あとはそこからいくらでも船を手配できるから」

「うわ、流石は幸福ギルド・ド・マルシェの市場……」

羨ましい限りである。いくらでもとか、俺には一生縁のないさような言葉だ。

「なんか上手く丸め込まれてない？」

「商売上手だね」

「いいんじゃないかしら、テズエール大陸に行ければそれでいいもの」

「なら、もう一つ良い話をつけてあげる」

ふと、いつの間にか皆カウフマンさんの言葉に引き込まれていることに気づく。これも所謂カリスマの一種だろう。

そして彼女はみんなの気持ちが傾きかけた所に、更に止めを放り込むつもりなのだ、俺いつの間にか舌を巻いた。

「良い話？なにそれ？」

「ノードポリカまで上手くだどり着けたら、使った船を進呈するわ！」

ガバアツ！と両手を大きく広げて宣言した。そしておおー！と歓声をあげるカロールとエステル。

……… なんだか安っぽくなってしまった気がしないでもないが、スルーしておこう。何となく触れない方が良い気がしたから。

比較的冷静だと言える俺のよこでキラキラ目を輝かせながらカロールは声を上げた。

「ホントに！？ホントにいいの！？」

「へえ、ボロ船だけいい船ね」

「でしょでしょ？」

「… どうか、それだけ魚人が危険だってことだろ」

「さあ？そこはご想像にお任せするわ」

そうして最も肝心な部分はぐらかされる。明らかに詐欺もいとこだが、リスクより見返りは遙かに高いため、悪い話ではないと判断したんだろう。

はあ、と溜息をついてからユーリはカウフマンさんの目の前に右手を差し出した。握手の意思表示だ。

「その取引乗った」

「素敵！じゃあ契約成立ね」

その手を握り返し、夢見る少女のように言う。

「一時はどうなるかと思ったけど、シヨウヤ君が来てくれて助かつ

たわ」

「いえいえ、相互利益は商売の基本、でしたよね？」

俺が言うで一瞬、ぽかんとしてから一拍置いて笑い出した。……そんなに可笑しかっただろうか。

「ふふ、言うようになったわね。じゃ準備はいいかしら」

「ええ、そのつもりで準備は終わらせていたんですもの」

「分かったわ、じゃあ早速この短い船旅の同行者を、紹介しなくちやね——」

少々腑に落ちないが、まあ、いいか。俺たちは順番に棧橋から船へと架けられた、薄い板の橋を渡る。

案外甲板は広くて、これなら戦闘に支障を来すほどではないだろう。

航海の間命を預ける船によろしく頼む、と心の中で頭を下げた。

そして、あり得ないがそれに応えるように碇は上がり、船は進み始める。

魚人からの船の護衛に——アーセルム号の探索。やることはこんなにもあるのだ、決して短い航海ではないだろう。

若干ではあるがウンザリ、と言う気持ちがある。……戦闘疲れの鬱憤を戦闘で晴らすのも可笑しな話だが、効率の良いストレス発散は戦闘ぐらいでしか行えないから仕方がない。

長期間ではないにせよ船旅は結構ストレスが溜まるのだ。

海賊映画ではないが飲んだくれがいるのも分かると言うもの。……

俺は下戸だけど。

因みに大航海時代、酒は水に比べて長持ちがするのとストレス発散になるという経緯があつて重宝されていたようだ。

……うん、トリビア。

……てか戦闘でストレス発散とか、思考回路が戦闘狂のそれになつていような気がしないでもないが、取りあえず否定しとこう。俺の恩師じゃあるまいし。

「まあ、なんであれなるようになるか……」

なにが、とは言わない。敢えて言うならいろいろだ。

第八話ゝ潮風吹く旅路：後編ゝ（後書き）

が、がんばった、ぜ……………（ガクッ）

引き続き挿し絵に関する意見を募集中です

詳しくは前話の後書きを……………というほどではありませんが、宜しく
お願いします

第九話 悲劇の欠片呼ぶ暗雲・前編（前書き）

000000

第九話　悲劇の欠片呼ぶ暗雲：前編

麗らかな日差しと爽やかな風を浴びる。港を出航して数時間後、今のところはまだ楽しむ余裕があった。

見上げるとカモメが一羽船を追うように飛んでいた。

久方振りの船旅は波も穏やかで、これから起こることなんてとても想像出来そうにはない。平和そのものだ。だがエステル嬢は不安げに呟く。

「魚人に会わなければいいのですが…」

「世の中そんなに甘くないわよ」

「若いのに悲観的なのね」

「現実的と言ってー」

そういつも通りに軽口を叩き合う。…ホント、平和だ。

「でも船を沖に出せて良かったわ。また大口の取引先を奪われるところだった」

「ええ、これで海凶の爪に遅れを取ることもなさそうですね」

カウフマンさんはほっとした声で言い、部下のサングラスを掛けた

男がそれに応じた。

ゲームでは淡々とスルーしていたが視点が変わると抱く感想が違う。正直言うと、俺としてもそうなるのは心良くない。

ああいう裏側の組織が経済を動かすまでにいると、自然と町の雰囲気が悪くなる場合がある。

しかもノードポリカの路地裏に海凶の爪傘下のギルドが商売していることがあるのだ。連中の上が大きくなれば間違いなく此方にも影響がある。

リウアイサンのつめ
「海凶の爪が、名前をちよくちよく聞くな」

ホブローブラスティア
「そう？兵装魔導器を専門にしてるギルドよ。最近うちと客の取り合いになってるのよ」

「ああ、それでヘリオードで」

「……あと因みに連中は暗殺とかの方面もやってるな」

一応重要なことなので付け加えておく。

「しかし連中は、どうやって物資を仕入れているんでしょうか……」

ホブローブラスティア
「それが疑問なのよ、兵装魔導器なんてそうそう簡単に手に入るものでもなし」

「……まさか、帝国が……？でも管理は魔導師の方で……」

その時突然、僅かに船が揺れた。明らかに、波によるものではない、ナニカによって。

「来たわね」

「皆さん気をつけて！」

この船の操舵士トクナガの声があがる。

いよいよだ、そう思い愛刀に手を滑らせる。

そのまま船の縁へと寄り、眼下の水面を見下ろす。見える黒い影は三つ。逆側にも同じくらいの数がいると考えていい。

刀を抜き去ると、鞘と触れて独特の音を耳へと届かせる。

同時、ザパアンツ！と三つの水柱が築かれる。連中が飛び上がった。来た。

海面から数メートルの位置の甲板に上がる、二メートル近い巨体をそうする為にどれだけの勢いをつけたのか、上手く想像は出来なかった。

ダンッダンツ、と船を揺らして鈍い音が鳴る。

数は計、五体。プレデントと呼ばれる、魚人の中では最もよく見られ、そして被害報告の多い種だ。鰭ひれを兼ねた腕に錨が握られている。もしかしたら、嘗て襲った船のものかもしれない。

低く野太い咆哮、宣戦布告だろうか。そんな事をしなくても喜んで買うというのに、ご苦労なことだ。

右足を半歩前に出し、腰を僅かに落とした。その時、

「……………うっ……………、ちょっと……………船酔いしたのじゃ……………」

……はい？

この場にいる俺たちの内の誰かの声ではなかった。明らかに目の前の魚人たちの方から苦しそうな声が聞こえた。

「魚人が喋った!？」

「ま、まさか、あの魔物と同じ……!」

いや、そんな筈は……それにこの声には覚えがある。
だが、どこで……。

「っ、来るぞ!」

「迷ってられない、ってか……」
ビシリ、硝子に輝が入り。
バリン、硝子が割れる。

- 戦闘開始。

執るべき戦法はヒットアンドアウェイによる各個撃破。奴らのスピードは陸の上だと鈍重になる。

……尤も先ほど述べた奴らのパワーは、その弱点を補うには十分だ。
振り下ろされる錨を避けつつ、縦に横にと刀を走らせる。
表皮は存外に堅い。倒すのは苦勞するかもしれない。

真横に一閃される鈍器を上跳到び上がることで避け、できた隙を使い、そのグロテスクな顔面を思い切り蹴りつける。
流石に堪えたか、バランスを崩した隙は先程の比ではない。

刹那、全身のエアルを活性化させた。

その時の感覚は、全身をなにかが這いずり回るように違和感だらけで、固くなってしまったゴムが元通り柔らかくなるように滑らかだ。続いて体を収縮させてから、踏み出す。

時間は一秒前後、その間に刀を水平に構え……斜めに振り抜く。それはプレデントの横を通り抜ける時に行われ、

「らあッ……!!」

その結果、青と白の鱗の体躯がビクリと一度だけ震えると甲板に倒れ動かなくなる。

フェイタル
Fストライク

敵のバランスを崩し、その隙に加える一撃で敵を倒す技術。

……まあ、倒せるのは自分よりある程度下の技量の相手くらいだが、それ以外は追加で攻撃を与えるだけとなる。

なにはともあれ、まずは一体、なかなかのスタートだ。

それを見たレイブンはヒュウと口笛を吹いて茶化したようにいう。

「やるね〜青年二号、この調子でバンッバン働いてちょーだい」

「…アンタも前衛^{こっち}来たらどうだ、良い運動になるぞ？」

「いやーそれは勘弁、と『風よ起これ、さつと吹いてさつと斬れ…
…ウインドカッター』!」

…まったく、こんな状況でも軽口を叩くのはレイブンくらいだよ、なんて呆れた。

だが次の瞬間に、少し離れた所でカロルのだした大振りの技の隙を補うように敵に当て、危険を潰しているのを見ると今度は感心する。

「……ホント、人は見掛けによらない」

「そ、そうだよね……」

「なにより、折角助けたんだからもつとオレ様を褒め称えなさいっての」

や、それは単にアンタのキャラのせいだと思う。これはパーティーメンバー全員が賛同してくれる筈だ。なんとなく溜息。

その僅かに気を抜いた瞬間だった。ザバアンツ！と再び水中が築かれる。

「っ！？」

「ありやりやー、新手かあ」

バタンツと甲板に新たな魚人が降りる。だが……それはプレデントではなかった。

「マジかよ……」

その特徴的なフォルムに軽く絶望する。

身体全体は薄く紫がかり鰭に持つ錨はギザギザでより齷つくなつて

いる。そして……最も特徴的なのはその頭部、まるでノコギリザメのような姿。

魚人、ギガデント。

「なんだか他の魚人とは違いますね」

「群れの親玉登場ってか？」

……そうだな、確かに他のとは違う。今の俺達では、ボス級の相手であることには違いない。

それにコイツは本来、此処には存在しない。もっと後に登場する筈の魔物なのだ。具体的に言うのなら、第二部最終ダンジョンの雑魚敵として。……雑魚にしちゃ随分強かったのを覚えているが。

「なんでも良いけど、さっさと倒すわよ！」

そう言い、詠唱に入るリタ。

その間には前衛が敵を足止めするのが大前提だが……。

「！？ 鱗堅過ぎだろ！」

「っ、これは倒すのが大変そうね」

ユーリ、ジューディス共に得物が敵に満足な傷を負わせられていない。……嫌な所でゲーム的だ。ざっと見て、パラメータ能力値はプレデントの二倍くらいだと考えていい。

「なんて地味に面倒な……」

そうごちて、俺も詠唱を始める。

「『邪を討つ朧氣の光……』」

幸いなのは相手の攻撃手段は近づいてからの接近戦しかないこと。ならば足止めをしているあいだに術を叩き込み、バランスを崩した所を一気に叩くかＦストライクで倒せばいい。

「レイ！」

敵の頭上に光の球が現れ、そこから光の柱が降り注ぐ。他には岩が突き上がり、風は鱗を斬りつけ、光の球が対象に襲いかかる。余程の規格外でなければ耐えられるものではない。思惑通りに事は運び、そして――

「はあっ！」

「っ……！」

「ワウッ！」

一差し一閃一刀。槍が鮫頭を貫き、剣が頸を裂き、短剣が腕を切り落とした。

鮮血が、跳ぶ。

その鱗に覆われた体躯が、崩れる。

「コンビネーション抜群の大勝利だったね！」

「バカっぽい……」

「で、でもいい感じに倒せたんじゃないでしょうか？」

周りに動く魚人の影はない。ギガデントが出たことはイレギュラーだったが、難はなかった。

離れた所にいたカウフマンさんも満足気に頷いている。

みんな一仕事終えた解放感に浸る中、おっさんレイブンは酷く疲れたように溜息をした。

「とほほ……ブレイブウェスベリア凛々の明星はおっさんもこき使うのね……アパテイア聖核探したりいろいろ忙しいのに……」

「聖核って前にノール港で探してたアレか」

「そうそう」

レイブンは肩を落としたまま力無く肯定する。
それに対してリタは有り得ない、と声を上げる。

「でもそれって御伽噺でしょ？あたしも研究してみたけど、理論では実証されないって分かったわ」

「御伽噺だつてのはおっさんも知ってるよ？」

「じゃあ、そんなものをどうして探してるんです？」

「それは……ドンに言われたからね」

少し言葉に詰まりながら言う。

そこで……倒れた魚人の一体が、のそりと動いた。

「ま、まだ生きてます！」

声を上げるエステル、だが冷静に見てみると、傷だらけで正に死に体。

放っておいても大した障害にはならないだろう。

そしてそいつが空を向き、喉を振動させ、まるで何かを吐き出すかのように……っ！？

直ぐにある考えに至り思わず鼻を覆う。

一瞬後、バシャーっとプレデントが胃袋の中身を全て吐き出した。ものすっぱえ、魚くさい……。

「っ……」

（直視はしなくなかったが）見てみると、それは魚であつたり航海服を着た少女であつたり様々だ……って、はあ！？

「パティ……！」

顔を真つ青にして魚にまみれている少女、パティ・フルールが、そこにいた。

……え、じゃあなにか、さっきの声の主はこの娘で、魚人の胃袋の中で喋ってたと？……いろいろと規格外だな、おい。

彼女は直ぐにエステルによる治療を受けたが、数分後、エステルの見立てによると本当にただの酔い、だったらしい。

だった、というのは、目が覚めると直ぐに体調を回復したからだっ

「快適な航海だったのじゃ」

いや、そのりくつはおかしい、魔物に飲み込まれたまま海を渡るのを航海とは呼ばない。

「魔物に飲み込まれておいて、快適もなにもないだろ……」

「どうしてここに……」

「歩いていたら海に落つこちで、そのまま魔物と遊んでたのじゃー」

「良かったな、そのまま栄養分にされなくて」

「なんでも良いけど、船出していいかしら」

「ああ、頼む」

呆れながらに言うユーリ、だがその対応の仕方からみるに、もう慣れているようだ。

……たしか、ケープモック森より以前にも会ったことがあるんだっ
たな。

ならばその態度も当然か。

……けどまあ、俺にとつてはこういう手合いは難しそうだ。ワザと
じゃなくて自然にこんな人柄だ、という時点で。

「ある意味、大物だよなあ……」

パティ・フルール、恐るべし。

ふと、甲板の現状が目に入った。

周りに転がる魚人の死骸はギガデントが一体に、プレデントが四体、合計五体。……これ、掃除大変そうだ。

、
……………？

そこで一つの疑問が浮かび上がる。

……………五体？

「うわあああああああ！？！？！？」

『！？？』

突然の男の悲鳴、それもあり切羽詰まったそれ。

「ちいつ……………！まだ一匹いやがったか！」

「まさか、トクナガ！？？」

走り出した先は甲板の逆側、舵がある場所。

そこにはアフロ頭の男と、得物を振り上げる魚人。

「喰らえよッ！」

それを見たユーリがいち早く駆け寄り袈裟斬り、そして仕留める。

「大丈夫ですか！？？」

「なんとかね……………いいつつ……………！」

見るとトクナガの日に焼けた腕は、傷口がパツクリと開き、だらだらと血を流している。傷を負ってしまったか……！

「大丈夫ですか！？ すぐに見せてください」

「ああ……」

エステルは傷口に手の平を向け、そして詠唱。

「ファーストエイド」

暖かな光が、それを包む。

「うつ……」

「一応治療はかけましたが、当分安静にしておいた方がいいですね」

治療術というのは取り敢えずの応急処置、それでも十分だがやはり万全を期すなら、医者に見せた方がいいだろう。

トクナガ氏の治療の様子を窺っていたカウフマンさんは、頭痛い、というような表情を浮かべる。

「困ったわね…… あなたたちの中で誰か船の操縦できる人………いるわけではないわよね」

「ウチがやれるのじゃ」

でん！と腰に両手を当てて自分をアピールしているパティ。そういや確か…… アイフリードの孫、だったか。

「パティ？」

未だ目を白黒させるカロル、いや他のメンバーも同じ。
それに対してパティは胸を大きく張り、自慢げに続ける。

「冒険家足るもの、船の操縦くらい出来て当たり前なのじゃ！」

「じゃあ船の操縦はあなたにお願いするわ」

あら、あっさり。少しも迷わなかったぞ、この人。

「本気かよ……」

「心配なのは分かるが……大丈夫じゃないか？航海士の服着てるし」

「……シヨウヤは気楽でいいよな」

失敬な。人を考えなしてみたいに言わないで欲しい。……まあ、そう見られても可笑しくないとは一瞬思ったけど。

「少し余裕はあるけど、ノードポリカまで真っ直ぐ頼むわ。トクナガを医者に診せたいし」

「了解したのじゃ！ふっふっふ、ひさびさに腕がなるのー」

……心の目で見れば、パティの背後には炎が煌々と燃えているに違いない。なんか、逆に心配になるぞ……？

それを知ってか知らずか、カウフマンさんは言う。

「今いる『十六夜の海』、通称『内輪の海』だけど、この海域は霧

が出るから迷わないでよ?」

「ふむふむ、セロスプラスティア駆動魔導器は良いものを使っておるの、さすがはギルド・幸福ド・の市場の印付きの船……」

『……………』

聞いて……………ないな。さっきからブツブツなにやら呟いてるし。

「本当に大丈夫かしら?」

「…………ジュデイス、言わないでくれ。みんな思ってるけど、口に出すと余計に心配になるから…………」

今すぐに船を降りたくなってきた……………無理だけど。

- - - - -
- - - - -

フェアルティアこの船はパティ・フルールが舵を取り、広い海を進んで行く。
やがて空には暗雲が広がり、辺りは霧に包まれる。

そこに現れるは無念の証と、悲劇の欠片。

そこに青年は……………何を見る。

第九話〈悲劇の欠片呼ぶ暗雲：前編〉（後書き）

最近、他作者様のある作品を見てまじで戦々恐々した玄ブです、今後のプロットの的な意味で。

挿し絵に関するご意見は引き続き募集中です。

第九話　悲劇の欠片呼ぶ暗雲：中編

十六夜の海……通称、内輪の海。六つの大陸に囲まれた大海だ。

ここには、その円形の海をグルリと一周するように、海流が流れている。そのため、漂流物は気が遠くなるほど長い時間漂っていることも珍しくない。流木や難破船……そこに際限はない。

そんな海の真ん中で、俺たちの乗るフィエルティア号は進む。時に晴れ、時に曇り、時に雨。だが今は……そのどれとも違う。――霧、黒々とした重いベールが辺りを覆う。

例えるのなら黒煙。それが一番しっくりくるような、独特な霧だった。

「不気味……」

「こういつ雲つてのは大体、何か良くないことの起こる前触れだつて言っわな」

そんな空をぼんやりと眺めながら、レイブンが呟いたのを聞く。憂鬱げな心象とは裏腹に、おっさんの声は何処か楽しげで、からかいを含んでいるように感じられた。間違いなくお子様組の反応を引き出して、楽しもうと思っているのだろう。

……何となくその気持ちは分からないでもない、が、流石にこの状況では悪趣味かつ不謹慎だぞ。

「や、やめてよ」

「余計なこと言うと、それがホントになっちまうぞ」

レイブンに対し直ぐに非難を開始したカロール（それがおっさんを増長させるとは気が付いていない）とやんわりと諭すユーリ。

そういえばこの世界にフラグの概念ってあるのだろうか。……いや、やっぱりないか。何故ならユーリの台詞で立てちまったから、フラグって言葉を知ってるなら、ユーリなら言わないと思うし。

そしてまあ、俺にはそれが見えてしまっている。霧に覆われて確かに見ずらいが、黒い船の影が、はつきりと。それも船の先端がこちらを向いて、フィエルティア号の真っ正面から近づいているのだ。

「てな訳でユーリ、もう手遅れだ」

「あっ！前、前！」

「これは……ぶつかるわね」

——一拍後、ドカンと衝撃が走った。

『うわあっ！？』『きゃあ！？』『おっと……！』

立ってられないほどの衝撃に、思わず尻餅をつく。……この衝撃でホントに船が無事か気になったが、取りあえず排除しておく。ゲームでは無事だったし、なんでも、船の先端部は構造的に丈夫らしい。そして逆に横からは弱いのだとか。

……なんかのニュースで、たしかそんなことを聞いた。

「何……！？」

すぐにカウフマンさんが、船の中央に逃^{あつら}えた小部屋から飛び出してきた。そして彼女は、黒い船を見て息を呑む。

それは明らかに『難破船』であった。船の側面にはびっしりとフジツボが張り付き、垂れ下がるマストはズタボロ、明らかに、人の手が長い間加えられていない証左だ。

そして側面には文字が刻まれていた。それは俗に言う古代言語……

……今では魔導器研究という限られた分野でしか使われていない文字。

……こんな船の名前^{いっぽんてき}にはもう長らく使われていない。

「……古い船ね、見たことない型だわ……」

「『アーセルム号』……って読むのかしら……?」

その時、ガタンツ！と鉄製の渡し橋が『黒い船』^{アーセルム号}から『此方の船』^{フィエルティア号}に降りてきた。……本来固定されている筈のそれが、独り^{、、、}でに。……まあ、衝突したときの衝撃が時間差で影響を及ぼしたと考えられなくもないが。

「ひゃっ……!」

「人影は見あたらないのに……」

「ま、まるで……呼んでるみたい」

「バ、バカなこと言わないで！フィエルティア号出してっ!!」

今にも泣き出しそうな表情でそう言うが早いか、現在、この船の操舵士を努めているパティが、座^{セロス}つて^{スフ}駆動魔導器^{ラスティア}を見ている。釣られて彼女の小さな手の元を覗き込むと、本来、薄緑色の光が灯るべき部分が、完全に消え失せていた。

「むーダメじゃの。なぜかセロスプラスティア駆動魔導器がうんともすんとも言わないのじゃ」

「というより、燃料になるエアル自体が動力部に流れていつてないな」

「——え？」

絶望、リタの表情はそれ一色だ。真っ青になった表情は、続いて焦りでピンク色に染まった。そして素早い動きで動力部に詰めより、そして再び真っ青に染まる。……やれやれ、忙しいことだ。

「いったいどうなってるのよ……っ!」

「原因は……こいつかもな」

「あゝ……うん、そうかもな。招かねざる『お客様』も居るみたいだし……」

いや、正確にはこっちが客かな？ ストーリー的にあっちの船に乗り込まなきゃならない訳だし。

あとお前ら耳敏いのな、俺の言葉を聞いた途端固まったし。……尤も、ジュデイスだけは、ニヤリ、と擬音が付きそうな笑みを浮かべているが。

彼女はありったけの期待を込め、声帯を震わせた。

「あら、ひょっとして、いるのかしら？」

「……い、いるってなにがッ（ですッ）!?!?」「」

なにつて……………ねえ？

ジュデイスと顔を見合わせて笑うと、ビクビクビクツツ！…！とお子様組に戦慄が走った。やべえ、クセになりそう。あと俺って悪趣味？っ！かあんまり怖がることもないと思うんだが……。

俺とジュデイスから三人が微妙に距離を取ったのを見て、苦笑する。

「うひひひ、お化けの呪いつてか？」

「そんな事……」

「入ってみない？面白そうよ。こういうの好きだわ、私」

「なに言ってるの！」

お子様組とは対照的に余裕のある大人組。こっちは怖がるどころか、楽しむ余裕さえある。……あと特筆するのなら、ジュデイスの瞳が輝いている事だろうか。

「原因分かんないしな、行くしかないだろ」

「ちょっと、フィエルティア号をほっていくつもり！？」

「んじゃ四人が探索に出て残りが見張りでどうだ？」「良いと思うわ」

即答だった。ジュデイス、そんなに行きたいか……。

まあ、今更だが本当にジュデイスは他のクリティア族とはどこかずれてる。あの種族独特の楽天さと、行動力が合わさってるからなあ……。

他のクリティア族は……何というか、『楽天的かつ超ボケボケした天然』みたいな感じだ。

「決まりだな。じゃ、行くのは俺と、ラビードは行くよな」

「ワフツ！」

「……つぎは誰だ？」

その時の目の輝きを俺は見逃さなかった。あれは完璧におっさんと『同じ目』だ。…結局、みんな考えることは同じらしい。

「分かってる？ちゃんと戦力配分考えて分けてよ。私だっていつ魔物に襲われるか分かんないだから」

「あ、あたし行かないわよ！」

「じゃあ私が行くわ」

はい、と手が上がる。

「ジュ、ジュデイス……」

「もう分かり切ってたけどな」

「そう？だって面白そうなんだもの。アナタは行かないのかしら？」

「俺は……パスで、厄介事が起こりそうだし」

そう俺は言うが考えることは単純。先でも後でも、どちらにせよあ

の船に乗り込むのは同じ、そして最後にはみんな揃って船から出る。ならば後から行った方が時間は少なくて済む。

…自分本位だが、魔物が出没する場所には少しでも長い時間いたくない。

「そう……、じゃあアナタは？」

「ふえっ！？わ、わたしは別に……」

ジユデイスは少し残念そうにいうと、突然話を振られてワタワタしだすエステル。

「じゃあエステルに決まりだな」

「う、わ、分かり、ました……」

面白そうだと思ったのか、ユーリから声がかかった。その瞬間、リタが明らかに安心したものだから面白い。……取りあえず心の中でドンマイと呟いておく。

それじゃあ、とカウフマンさんの部下であるサングラスを掛けた男から、声がかかる。

「一応、セロスプラットフォーム駆動魔導器を調べてみる、直ったら発煙筒で知らせるから、すぐに戻ってこい」

「サンキュ」

そうして四人……いや三人と一匹は船へと乗り込んでいく。此方に残ったのは俺にカロール、リタ、おっさん、パティの五人だ。なんだか……うん、一言で言うなら『微妙』だ。なかなかない組み合わせ

だからいまいち距離が掴めんのだが……。

だがまあ、面白そうではあるけど。……あと心配なのはこの状況下ではツツコミ役が他にいないことか。戦闘面ではリタが逆に蹴散らしてくれそうなので心配はない。まあ、巻き込まれないように注意はしなきゃならないけど。

……俺は更にこれからの戦闘について考えを巡らせる。たしかこのエリアで出現する魔物はガイスト系統のはず。弱点属性は主に火と光。フィールド画面ではその姿が見えず、鏡にしか映らないため、間接的に確認しなければならなかった。ゲームではバトル画面にシフトするとその姿は普通に見えていたが、此方ではどうだか分からない。……最悪、見えない魔物相手に得物を振り回さないといけなくなる可能性さえあるのだ。

……下手に倒して進もうとせず、ホーリーボトルを使った方がいいのかもしれないな。

「……………」

「？ どうした、おっさん」

視線を感じたのでそちらを見るとレイブンがなにやらもの言いたげな視線で此方を見ていることに気が付いた。そして何故か視線に白いものが混じっているを感じる。……なんです。

「いや青年二号は、本当にあっちに行かなくて良かったのかなー、と」

「？ どういう意味だ？あと青年二号言っとな」

身の危険は犯したくないんだっての。口に出してないから分かって

ないとは思っけど。

おっさんの疑問に疑問で返すと白い視線は更に強くなり表情は呆れのそれへと変わった。……や本気で訳が話からないんだが……。

「なにになに？本気で分からないの？」

「おっ」

『……………』

そして何故黙る。あとパティまで。リタやカロルは特に何とも思っていないみたいだが。思考のループに陥りそうになるがレイブンがまあ良いや、と話を切り上げることで止められた。

そしてレイブンは新たな話題——否、着火剤を投入した。

「そっぴやさ、さっきいるとか言ってたけど……もしかして靈感あったりする？」

「！？レイブン！」

「ちよつとおっさん、なに聞いてんのよッ……！！？」

さっきまで静かだったのに急に騒ぎ出すリタとカロル。気にはなっていたが怖くて聞けなかったといったところか。魔物と毅然と向かい合う姿を見ているとつい忘れそうになるが、この二人も15才と12才の子供なのだと、再確認する。二人のその様子とは対照的なのはパティだ。性格からしてこういう事が怖いというより好きなのかもしれないが、物怖じしないその様子に、俺はどこか年輪を数多く重ねた巨木であるかのように錯覚する。たぶん、その器と口調から一方的にそう思っているだけなのだろうが。

あと勿論そのことを口に出したりはしない、女の子にいう台詞じゃないってことくらいは分かっている。

「靈感、みたいなもんだけど、正確にはちょっと違うんだよなあ」

「というと、どういうカラクリなんじゃ？」

「それは――」

ミシリと何かが揺れた………気がした。俺は言葉を切り、辺りを見渡す。そして見た。黒い船のメインマストが、折れ始めているのを。

勿論俺にはどうすることも出来ず、そして数瞬後、ドゴオオオオオオッツツツッ！と轟音が世界を揺らせた。幸いにも此方へ倒れては来なかったが、当の船に、何の影響もない筈はない。

「ツツ……なにが起こったの……？突然マストが倒れるなんて……」

「僕たちは大丈夫だけど、ユーリたちは……」

「今の衝撃で、無事とは言い切れないわよ……」

カウフマンさんとカロルは顔を見合わせ、言葉を交わす。カロルの顔は先ほどとは打って変わって真剣そのもの、一ギルドの首領としての自覚がついてきたことを窺わせる。

「流石にこりゃ心配になるな……」

「ちょっと！船の護衛はどうするつもり！？」

「オレ様このギルドのメンバーじゃないし、船の護衛なんて知らない」

右に同じく。ゲームではなにも起こらなかった訳だし、心配していない。

てかカウフマンさんなら素手でも魔物倒せそうな気がするんだよなあ。

「ごめんなさい、でも僕たちだけで船守れないもの……」

「ちょ……！本気！？てかあたしも……！？」

「そりゃそうだろ」

そんな、トリタは言いたげだが生憎と黙殺する。彼女はこれからの戦闘では必要不可欠なのだから、ここで駄々をこねられて残る、なんて言われてはかなわない。

「でも、4人だけで大丈夫かなあ……」

「そうだな……」

「ここでウチの出番なのじゃ」

はいはい、と俺たちの方へと歩み寄ってくるパティ。その瞳にはなんだか煌々と燃える炎を宿している。

「あ、あんた、大人しくしてろって言われてたじゃない……」

「それしきのことでは、燃え盛る冒険心を消すことはできなぬのじ

「や」

「つまり……船の中を探検したい、そう言うことか？」

まあ、一人でも多いのに越したことはないな。それにケープモックの森の件で、この娘の戦闘能力の高さは分かっていることだし。寧ろ置いといても、勝手についてくるだろう。ならば全員で行ったほうが良いだろう。

「んじゃ。中からお宝の匂いがするのじゃ」

「匂い？…そんなのしないけど……」

「冒険家の嗅覚は、人食い鮫の牙より鋭いのじゃ」

そう言い一歩も退こうともしないパーティに、カロルは既に諦め気味である。もうどうにでもなれ、という感じである。

「はあ、まあ、ついといでよ。でもその代わり、お宝が見つかったら山分けよ……？」

「8…2で手を打つのじゃ…」

ふふふッ、と怪しく笑う2人。それを見るリタの目には呆れがある。少し、調子が戻ってきたか。

「…ハア、バカっぽい……」

「そう言ってやんなって、怖さも紛れるかもよ？」

「べ、別にあたしは怖くなんてないわっ！」

「あれー？俺は誰が、とは言ってねえぞ？」

「!?、~~~~~ッ！」

墓穴を掘った事に気づき、赤くなるリタ。…ベタだけで見ている方としては、面白い。

それに釣鐘のように叩いた分だけ反応を返してくれるものだから、イジリ甲斐があるというものだ。

「はあ……分かったわ……」

「ちゃんと戻ってこいよ、このまま漂流はゴメンだからな」

「はい！」

そうカロールが応え、次々と乗り込んで行く。

確か、さっきの衝撃でユーリたちが入った入り口は行けなくなっているはずだ。……だから入り方が少し面倒なんだよな。

まあ、取りあえず、気を引き締めていこうかね――。

- - - - -
- - - - -

「…流石にオレたちだけってのは心細いつすね……」

「そついうこと言わない！もっと楽しくなる話をなさいっ」

「すいません……」

「それに……」

「……はい？」

「ううん、なんでもないわ」

「は、はあ……」

「なんでもない……はずよね？」

第九話 悲劇の欠片呼ぶ暗雲：中編（後書き）

再びの中編！どうしてこうなった……。

因みにメンバー分けは、このキャラならどう動くだろう？という
とで分けました。

つまり迷ってキャラに任せただけとも言っ……。

次回！ギャグ&ボス戦（仮）！

第九話〜悲劇の欠片呼ぶ暗雲：後編〜（前書き）

いまさらですけど本作品にはネタバレ、捏造、独自解釈の諸々があるのをご注意ください。

第九話　悲劇の欠片呼ぶ暗雲：後編

「ちょ、ちよつと！さっきからフラフラ寄り道ばっかしてんじやないわよ……！」

「お宝があるかもしれないのじゃ」

アーセルム号の中、そうしれつとリタに言い返すのはパティだ。好奇心旺盛な彼女に取っては魔物蔓延るこの船も、なんでもないようである。対照的にリタのような非科学嫌いの^{オバケ}にとってはこの幽霊船チツクな雰囲気が耐えられないようだ。反応が良いため時折皆にからかわれている。

「そつ、そんなもの良いから、先進むわよ！」

「つまりは、怖いと？」

「うつ…別に、こ、怖くなんて……」

バタンツッ！

「ひゃっ……！な、ななななななななになっ！？」

「ドアが勝手に閉まったのじゃ。怪しいのうつ、調べに行くのじゃ……！」

すたたたたー！とパティは駆け出し部屋に飛び込む。……数秒後、バンツバンツ！と銃声が聞こえたところから考えるに、ただの魔物だったようだ。心なしか残念そうに部屋から出てくる。

あと彼女の強さはそれなりに分かっているが、あまり勝手に動かないで貰いたいものだ。

「ちょ、一寸待ちなさいよ！はぐれたらどうすんのよ！..!」

「まあまあ、そう怖がらずとも」

「だから、あたしは別に.....」

ガンっ、ガンっ！

「ひっ.....!」

「あっスマン、靴に小石が入ってた」

「あ、あんた...絶対にワザとでしょ.....!..!」

なにを今更、である。くししし、と笑うとリタの顔が怒りで真っ赤に染まった。.....尤も目に涙を溜める様は、怖いというよりは可愛らしいと呼べるもののため嗜虐心が刺激されるだけだ。なんだかなでレイブンのこと言えないな、と思う。

その時、かつんかつんと何処からか音が聞こえてきた。今度はだれ!?!と皆の顔を見回すリタ。だが皆が皆違つと知ると、顔を青くする。

「ま、まさか、今度こそ本当に.....!..!」

「いやだなあ、少年。へ、変なこと言わないでよ.....!..!」

いやいや、そっちの方が先に思い浮かぶのか.....?普通もう一つの

方が思い浮かぶだろうに。

ハアと溜息を一つ。うだうだやってもしゃあない、音がした方向に、制止を聞かずに踏み出す。取りあえず、リタの制止の音が最も大きかった事を記しておく。

歩を進めた先にあつたのは古びた扉。この中から聞こえているらしい。ギィィイツ！と開けるとそこには、

「おいおい、おまえらも来ちまったのかよ……」

そこにいたのは、お化け……ではなく、先に船の中に入ったユーリ達であつた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

みんなが集合し、円を描くように顔を合わせ、話し合う。

話を聞くと突然の衝撃があつた後帰り道が塞がってしまい、帰れなくなっていたそう。それを聞く内、リタやカロルは来て損したと言つような顔をする。

カロルが早く帰ろう！と必死の提案をしたところで……突然、キィィイと音がし始めた。振り返つてみると、先ほど通ったドアが閉まりだし……カチツ！と軽い音を続けて響かせた。詰まるところ、鍵が閉まつた、と言つことだった。

ユーリが駆け寄り、必死で開けようとするも、扉はビクともしていない。……退路は、断たれた。

「嘘でしょ……？」

「きつとこの船の亡霊達がわたしたちを仲間入りさせようと船底で相談してるんです……」

「へ、へんな想像しないでよ……！」

逞しい想像力なことだ……。

こうなってしまった以上は別の道を探すほかない、その結果に至りあからさまに肩を落としたのが二人、まだ探索出来そうだとうれしそうなのが二人。最早、どれがだれか、何て言うまでもあるまい。この船に乗り込む際ユーリ達は前方から、俺達は後方から船の中から入ったため大方の部屋は既に回っている。だとすれば、後は船の上層部だけだった。

「まあ、さつさと行こう。それに――」

スツと刀を抜く。みんなが何事か、と目を丸くするのを横目に背後の『空間』を瞬！と斬り上げた。

すると布で出来た人形のような魔物が虚空から姿を現す。苦しい奇声を発するそれに、今度は上段から刀を振り下ろす。すると今度こそ、本当の意味で空気に融けて消えていった。不意打ちつてのは勘弁願いたいね。

「早く動かないと、魔物もよってくるぞ？」

「……こういう時実感するなあ、仲間って大切だって……」

「ま、まあ、ガキンちよにしては良いこと言うじゃない」

安い仲間意識だな、と思った俺は悪くない。

- - - - -
- - - - -

ちょうど部屋に備え付けられていた階段を上ると、そこは船長室だった。この海域のものらしい海図や酒瓶が転がり、壁には装飾の施された鏡がある。そして部屋の中央のは陣取るように堂々とした机が置かれていた。

……そこには机に突っ伏す、今までは見かけなかった『影』がある。

——白骨化した死体。

「ひいっ！？」

カロルの悲鳴が上がる。その死体は船長服と思しき着て、白い頭には赤の立派な帽子を被っている。荒らされていないところを見るに、魔物はこの部屋にはあまり来ないようだ。

ふと気付くと、その隣には文字を綴った本があった。どうやら日記らしい。文字の形態から見るに当時書かれたもので間違いはない。

「『アスール暦ブルエールの月13』？」

「アスール歴もブルエールの月も、帝国の出来る前の暦ですね」

「千年以上も昔、か……」

「そんなに？」

船が漂流して40と5日、水も食料もとくに尽きた船員も次々と飢えに倒れる。しかし私は逝けない、ヨームゲン町に透明の刻晶クリアシエルを

届けなくては……。

エステルの静かな声が、船室に木霊^{こだま}する。

魔物を退ける力を持つ透明の刻晶があれば、町は助かる。透明の刻晶を、例の赤の小箱に納めた。ユイファンに貰った大切な箱だ。彼女にもう少し出会える、みんなも救える。

最後の方に行くにつれ、文字の形は崩れていった。……飢えに震える中、氣力を振り絞って書いたのだろう。お世辞にも読みやすいものではなかった。恐らくこれを書いて、そう間を置かずして逝ったのだと予想できた。

「……でも結局、この人は町に帰れずここで亡くなってしまわれたんですね」

「エステル、千年も前の話よ」

「そんなに長い間、この船は海の上を彷徨っていたのじゃな、寂しいの……」

ヨームゲンという町の希望を乗せた船も、今となつては魔物の巣窟か。皮肉なものだ。

「ボク、ヨームゲンの町なんて聞いたことないなあ……」

「これが本当に千年前の記録なら町だつて残ってるかどうか」

「ま、そうだよな。……^{クリアシエル}透明の刻晶ってのは？」

……ヨームゲンも透明の刻晶クリアシエルも、千年前の地名であつたり、呼び名であつたりするのだ。ユーリに訪ねられたリタも、知らないと首を左右に振った。

「魔物を退ける力ねえ」

「結界みたいなものじゃないかしら？」

当たらずとも遠からず。皆に聞こえないように呟く。

「その辺にないか？」

「明らかに……これだろうな」

俺の視線の先には船長の死体の下、これだけは死してなお離すまいとする『赤い箱』があつた。箱の色は褪あせ、金具部分は錆びているがまだまだ丈夫のようだ。

そして別の視点から視ると、箱が周辺のエアルを引き寄せ、活性化していることが分かる。……こんな風になつてゐるのか。

箱から感じる力はとても強く、これがフィエルティア号の駆動魔導セロスプラステイア器に影響を与えていたらしいことは、直ぐに予想できた。

「なんか大切そうに抱えてるわね」

「これが透明の刻晶クリアシエルかな」

「日記に書かれた通りなら、これがそうだろうな」

だが問題は、誰かがこの箱を死者から取り上げると言つことで……

…。

途端、おっさんが取れ、それは勘弁、おっさんは恐がり、じゃあそ
っちはどうなんだ等々の問答が開始される。子供か……や、分から
んでもないわけだが。

いい年して子供と張り合うなど、ユーリからの言葉がかかったこ
ろで、ジューデイスが動く。

「はい」

「うひゃああつ！？」

……。彼女の辞書に物怖じという言葉はないに違いない、むしろ
取るようにして死体から箱を剥がしたのだから。箱には死者の執念
が現れたかのように、未だ白い腕が張り付いている。

そして今度はその腕を両手に持って呪われちゃうかしら、等と楽し
げに笑う。

「あ、あ、あ、あれ………！」

「ん？…うおッ！？」

カロルが干からびたような声が聞こえた。彼が指を指す先は大きな
鏡。覗き込むとそこにいたのは骸骨の魔物。俺には見覚えがある。
コイツはプレ3版追加されたボス、雑誌やネットでも紹介されてい
た魔物だった。

……場所が場所だけに、似合いすぎだ。

「逆のようね」

「なにが！？」

「魔物を引き寄せてるってこと」

鏡の中からのそり、のそりと歩み寄ってくる魔物。そして、ズルリと本当に鏡の中から出てきた。……鏡に映っていた訳ではないようだ。

骸骨の戦士は俺の二倍強、大体四メートルほど。右肩に黒い布を掛け、身体を半分に覆い隠している。そして左手に持つのは黒い長剣だった。得物を持つのは他の魔物の例もあり、そこまで重要ではない。

ただ……場を圧倒する様な威圧感だけが、異常だった。魔物だってそりゃあ殺気を振りまくし、気高い、と思える空気を纏ったものもいる。だが、そのどれでもなかった。

> i 2 8 9 0 6 — 3 7 0 5 <

俺にとっては懐かしく、そして冷や汗が出てきそうな熱い感覚。夜風を感じた、あの闘技場での空気。

……そうだ、これは歴戦の戦士のそれだ。俺の師、カレル・ウィンバードもこんな清楚で重苦しい重圧を俺に与えていた。

——ビシリ、と硝子に罅が入り、

それが何を意味するのかは分からないが、取りあえずとも言うように刀を抜く。……この部屋は狭い、戦闘に参加出来るのは四人が限界だろう。

——パリン、と硝子が割れる。

「はっ、幽霊船におあえつらむきの親玉じゃねえか」

「ユーリ、余裕そうだね」

「そうか？」

全く、羨ましいものだ。戦闘だっていうのにブレないのだから。

「う、うん……？うー……、？」

「パティ？」

左を見ると、パティがなにやら頭を捻っている。悩んでいる、というよりは何かを思い出そうとしている、そんな表情。

……この魔物に覚えでもあるのだろうか？

「パティ」

「ほわ？なんじゃ、シヨウヤ？」

「なにを考えてるのか分からねえけど、戦闘中にそれは危ない」

「む、それもそうじゃの」

前線ではユーリやカロル、リタ、エステルといったメンバーが戦闘に参加している、他の俺たちは交代人員だ。ゲームと違い、4人しか戦闘に参加出来ないなんてことはない。

誰が危なくなった時に戦闘に参加し、手助けをする。こうじゃないと互いを互いが邪魔して、マトモにやってられない。

「え、わ、わあっ!？」

「っ、カロール!」

「俺が行く!」

考えてるそばから!

繰り出される刃の乱舞、カロールは自らが持つ大剣を横に構えて必死に受け流そうとしているが、それに必死で抜け出せそうになかった。地力が違いすぎる。

「らあっ!」

「■■■■オ——!」

跳び上がり、左肩に斬りかかる。……どうやら防御力はさほど高くないらしい、思ったよりは刀が通り、赤黒い鮮血が跳ねる。

床に足が着くとバックステップですぐに距離を取る。すぐさま振るわれたであろう長剣は、傾いた十字を描いて空を斬る。だが次の瞬間——衝撃波が飛んできた。

「づあゝっ!？」

腹に直撃、衝撃が全身を駆け巡る。だがそれより先に、とある疑問が駆け巡った。

——なんだコイツは?

漠然とした疑問、だが俺のことなのに、なにも分からない。なんで疑問に思っただんだ?

技を出すのは大して可笑しくない。ある程度成長した『魔物』なら、それこそ当然。

戦士に炎が飛び、動きが止まった瞬間俺の身体を暖かな光が包む。傷は癒え、再度刀を振るう。

「ちいつ……！」

「ぐ、っ！」

再び始まる剣の乱舞。ユーリの横に並び、2人でその嵐を受け流す。だがそれは、先程と同じものだった。

——剣技、だと？それも型に嵌った……。魔物が剣術を習ったとでも言うのか？

フィニッシュで剣が叩きつけられるのを回避し、懐に潜り込むと、刀を地面に突き刺し衝撃波を飛ばす——烈碎衝波。更にやろうとしたところで、俺は剣で飛ばされ、ユーリは蹴りで飛ばされる。そこにジュディスとパティが隙間を埋めるように、飛び出す。交代だ。そこから下がるうとして……驚きの中を見た。

——魔術術式。

それは、魔物が展開していた。有り得ない……。魔物が魔術に類するものを使う時、術式は展開されないのだ。

新たな疑問と、そしてあの感覚。どこかで、これと似たものを……。

—— いや、今はそれより、もッ！

「リタ！」

「な、えっ！？」

リタを腕に抱え、そこから跳び退く。危うく床から飛び上がる水柱の波に、貫かれるところだった。

アクアレイザー、水属性中級スキル変化術式。

…… 本当に訳が分からない。何だって言うんだ。

これではまるで——

「本当、オマエはナンなんだ？」

「ち、一寸！いいい加減離しなさいよッ！」

腕の中にリタがいることを忘れていた。リタに指摘され慌てて離す。

「つと、すまん」

「ふん…あ、ありがとう……」

それだけを言い捨てると、『イラプション』の詠唱を始める。

…… リタは気づいているのだろうか、この異常に。

「きゃあ！？」

「——！」

3つ目の異常が、目に飛び込む。骸の戦士が跳び上がり、黒い布に隠された右手がアルモノを構えているのが見えた。

——リボルバー——

「なっ!？」

一瞬思考が止まり、その間にババババツツツ!!!と銃弾の連打。俺は離れているうえ、あいつも此方を狙っている訳ではない。

……もしもこの時、ジュデイスやパティのポジションに俺がいたら、風穴を空けられていたかもしれない。それほど凶悪な代物。

それは単に、この攻撃を紙一重で避けるジュデイスたちの実力の高さを窺わせることにもなった。ああ……本当に強い。

そして、思う。そう、まるで——まるでこの骸骨の魔物は、人間みたいではないか。

そして、思う。そう、まるで——まるでこの骸骨の魔物は、■みたいではないか。

この時、結論に至った筈なのに、フィルターがかかったように入ってこない。それは本当は理解していないのか、それとも認めたくないのか。

恐らくは……後者。

予想はできた、予想はできたはずなのに——!!
……認めたく、ない。

そんなにもミトメたくナイか、■ ■が…… ■ ■が—— ■ ■二 ■ ■

■■■■可能性ヲ！

—— ああ、そうだ認められない。認められるか、絶対に認めちゃいけない。だが……認めなくてはならない。

二律背反、理想と現実、感情と理論。絶対ではないとはいえ、可能性はゼロではない。

魔物が剣を振り回しながら、リヴォルヴァーに弾を装填する、狙いは無防備な獲物……即ち、俺。だが動^{うご}けない。

俺はさらに、ある結論に至っていたからだ。もしかしたら俺は、もうこの事を予想していたのではないか。それで、自然と目を背けていたのではないかと。

……可能性がありすぎて、腹が立つ。勿論自分自身に。

視界の中心で光るマズルフラッシュ。弾数は5。

みんなが俺の名を呼ぶのがぼんやりと聞こえる。それと同時に、空気が貫かれるのも聞こえる。

だが、

「ああ、ああああああああアアアアアアッ——！！！」

遅い！

次に聞こえたのは俺が銃弾に倒れる音ではない。

……爆音だった。

足元の板は紙のように吹き飛び、軽く穴を空ける。その衝撃は、オーバーリミッツのそれに似て非なるもの。

放出したのは当然俺。怒りに身を任せて、不安を吹き飛ばすように。ただただ内から湧き出る力に身を任せる。

だがこの『魔物』に向ける感情は、波一つない水面のように静か。むしろ同情や憐憫さえ感じる。

せめて——安らかに。

そんなとても穏やかな気持ち。

掲げるは光の剣。水中から太陽を見上げたように、幻想的だ。

斬！と振るわれる。だが……

[illegible]

空気を斬り裂く叫びを上げるも、戦士は倒れない。

なぜ……？そう思った。手心を加えた心算は……ない、はず。

「ショウヤ……？」

クソ、と内心悪態をつく。自分で自分がコントロールできない。不安に押し潰れそうになり、なにかもを投げ出したくなる。

それほどこまでに……予想される現実是非情で残酷。この餓鬼が……！
 ホムンクルス
 そう客観的な自分が叱責する。……そうでもない、不毛な思考のループに陥りそうだった。

「——イラプション！」

「月光！」

目の前で巻き起こる光。超至近距離で行われるそれに、一抹の恐怖

を抱くも彼女らの声を聞き、霧散する。破壊を齎す赤と青の光は、今は俺を守る楯となるからだ。

剣が振り下ろされる寸前、戦士は光に吞まれる。

そして再び目の前に現れたとき、戦士の肉体は悲惨なものだった。肩に掛けていた布は吹き飛び、黒い肌には無数の傷。火属性魔術の影響からか、一部ケロイド化しているものもある。

「■■■■」

低い唸り声。そこに戦意の色はなく、どう生き残るかという生存本能のみがあった。突然、その体を紅い光が包む。

「ひゃっ!？」

リタが悲鳴を上げた瞬間、意を決したようにくるりと向きを変え、鏡の中へと飛び込む。ホント、こういう手品だ……？

「逃げるのじゃ!」

「待てって、別にあの化け物と白黒つけなきゃいけないこともないだろ」

骸骨の戦士をパティが追おうとするのを、ユーリが止める。……やっとボス戦が終わったか。少しホッとする。

だがその時、ふらりと身体が傾いたかと思うと、気づけば床に横たわっていた。右の頬がジン、と痛む。……何時の間に。……一瞬、意識が飛んだのだろうか？

たしか元の世界でインフルに罹ったとき、似たような経験があった。

「ちょ、いきなりあんたどうしたの！それにさっきの『技』……！」

「まあまあ、リタっち落ち着いて。つか青年二号の耳元たいちようふりようしやで大声出しなさんなつて」

そう言い、レイブンが俺の肩を支え、立たせてくれる。……少し、無茶をしすぎたかもしれない。

……これは怒られるかもな。でも、まあ、自業自得故に甘んじる他あるまい。

最後の一撃で、体内の生命力エアルを大量に消費したらしい。地面グラグラ揺れているようだ。……まあ、ここは船の中だが。

ああ、頭が痛い、割れそうだ。新たな仮題に頭を悩ませる。……そう言えばこの後のストーリーも……

ホント勘弁して欲しい。『これから』がもっとマシな未来であったなら良かったのに。

どうしようもないと分かっているながら、願わずにいられない。難儀なことだ。

第九話　悲劇の欠片呼ぶ暗雲：後編（後書き）

ちなみに本編で出てきたホムンクルスとは心理学的に「常に自分の姿を客観的に見つめるもう一つの自分」と言う視点ことです。多分、みなさんにも経験があると思います。

そして感想をお待ちしております。

第十話　くしき第二の故郷：前編

「これで、やっと安心できるな……」

すっかり霧が散り、見上げれば星空が見えている。雰囲気は先ほどとは打って変わり、恐怖という感情は浮かばない。

そこで俺は独りごちりながら、先ほどのことに思いを馳せる。

あの戦闘の後、ある審議が行われた。赤い箱……クリアシエル 澄明の刻晶をどうするか、ということだった。事の発端はエステルクリアシエルの

「クリアシエル 澄明の刻晶を待っている人に届けてあげたいんです」

という一言だった。

普通ならば、彼女の正気を疑うところだ。それか、彼女の我が儘加減に呆れかえるところだろう。

事実、ジユデイスはまたこの娘の我が儘でギルドが右往左往するか、と苦言を呈した。それにユーリのギルドは既に依頼を受けており、これ以上受けることは出来ない。

そこで結局、リタが調査のついでにヨームゲンの町を探し、ギルドブレイヴエスベリアの明星のメンバーは個人的に手伝いをする形で落ち着いた。

そこで聞こえたボン、とくぐもったような音。それはまるで——
この結果を、待っていたかのようなタイミング。

窓の外に目を向けると、白い煙が立ち上っていた。発煙筒——駆 動魔導器が直ったことを示した、カウフマンさんからのメッセージ。

そうして俺たちは幽霊船から帰ることになった次第だ。

「幽霊の呪い、か……」

突然停止したセロスプラスティア駆動魔導器、開かなくなった扉、残された無念の日記。怪談としては二流だが、案外馬鹿に出来たものではない。そう、今更ながらに考える。

『魂は高純度のエアル』

これは、ゲームのあるシーンでのリタの言葉。……もし魂——霊体が意志を持ち自由に動き回れたとする。だとするならば、幽霊の意志で同存在のエアルに干渉出来ることには、ならないだろうか？

……俺は澄明の刻晶クリアシエルの影響だとも思ったが……どちらが正しいのだろうか？

……まあ、どうでもいいか。それらしきエアルの塊はあったが、気にすることでもあるまい。

それよりも……。

視線を水平線の彼方から、向きを変え、背後に立っていた少女へと移す。

「さあ、聞かせてもらっわよ？」

「……やれやれ、正直勘弁して欲しいんだがな」

……ホント、馬鹿だよな俺。というより、精神的に安定してない、と言っべきか？

あの瞬間、感情に流されて自分の力を制御出来なかった。

「一々周りクドいことは言わないわ、聴きたい二つだけ。——ア、ンタもエステルと同じなんでしょ？」

「……………」

質問、と言うよりは確認だった。彼女はもう、自身の中に確信を持っている。

俺はさり気なく辺りを見渡し、一人の影を見つけ出した。もうすっかり見慣れた影。

(…………立ち聞きか？まったく…………)

『影』は俺が目を向けたことに、もう気づいている。隠す気はないらしい。

その姿に、言いなさい、そんな念が込められている、気さえする。

……答える義理はない、が、

「似て非なる、とだけ」

答えた。

その答えにリタは考える素振りを見せたが、まあいい、と頭を左右に振った。

そして上げた顔の、大きな瞳には……小さな灯火が宿っていた。唯、ひたすら只管に友を思ふ少女の感情。さけび……なるほど、だから他のメンバーのいないタイミングを見計らったのか。

「…今ので本当の意味で確信したわ。エステル力のこと、知ってるわよね？」

逃げたり、偽ることは許さない。

視線が重なると、互いの感情が流れ込むような錯覚さえ覚えた。

そこからジツと見合って……………先に離れたのは、俺だった。

俺は月並みだが、と前置きをしてから続ける。

「……もし仮に、知っていると答えてたら、どうする積もりだ？」

「そりゃあ……………！」

「……まあ、言うまでもないわな」

何故エステルが言葉を喋る魔物に命を狙われるのか、その答が目の前にあるかもしれないのだから、実力行使にでていない分、マシなのだろう。

「言つとくが、俺が知っているコトはリタが予想していることと大差ないと思うがね。」

それに魔導器なしに魔術を使う。ブラスティア魔物にも魔術モドキを使うのがいるだろうが」

「あたしが聞きたいのはそっちじゃないわ。本質の方よ」

……………やれやれ、どう言えば諦めてくれるかね？

あと本質と言うのは、エステルを襲った魔物…………フェローの言葉の真意を知りたいのだろう。

……ギリギリまでは、出してみるか。勿論、全ては語らないで、上辺だけで。

「『忌まわしき世界の毒』……」

「！？」

「そう、盟主殿フエロに言われたんじゃないのか？」

どうしてそれを……。リタの顔が果然となる。
まあ、普通そうなるわな。

「……それを語る前に一つだけ。これからの俺の発言は、只の憶測に過ぎない。俺は多くを聞かされていないからな」

「……ええ、いいわ」

結構。それに俺は『聞かされて』はないわけだしな。

……でも、こんな茶番を繰り広げなければならぬとは、面倒なことだ。

「……さっき言ったが俺と彼女の力は似て非なるものだ。その違いの一つに、エアルの存在と流れを感じ取れるか否か、というものがある」

「……………」

「それで分かることだが、彼女の力はエアルを乱し過ぎる」

「？ それってどういう……………」

疑問の声をあげるリタ。だがここで口を挟んで、余計な事まで聴かれては困る。

「まあ聞け。エアルは全ての生き物にとっての生命力、それが彼女の力によって乱されれば……」

「……………術技を使用した際、周囲の動植物に影響を及ぼす……………」

「そういうことだ」

後は……………勝手に推測してくれるだろう。

……………リタは頭が良い。ならば間違った方向にフル回転して貰おう。尤も、気付かないとも限らない訳だが。まあ、その時はその時だ。

「でも可笑的いじゃない。なんでエステルは狙われてアンタは狙われないの？『乱し過ぎる』ってことはアンタも少なからずエアルを乱してるってことでしょ？」

「そう難しいことじゃないさ。只単に、埋め合わせをしているだけ。そっち方面に関しては俺の方が遥かに上だからな」

これは本当。戦闘後にはできる範囲で周囲のエアルを沈め、調整を行ってきた。

……………そういや、アーセルム号のエアルは特に酷かった。あの狭い地点にあれだけの量。

そりゃあれだけ魔物も寄って来るさ。なんと迷惑な。

……………や、それで減った体内のエアルを補給出来たから、強ち迷惑で

もないのか？

「もう十分だろ？俺はもうこれで——」

「待つて」

歩き出そうとした俺の上着の端を、リタは掴んで引き留めた。
振り払っても良かったのだが、不思議とそんな気持ちにはならなかった。

「最後に一つだけ。エステルもアンタも、どうしてそんな力を持っているのよ」

「……今更だけどよ、質問は二つだけ、だったよな」

「あ……………」

俺自身が驚くほど、冷たい声で言い放つ。

別に怒った訳じゃない。自業自得だ。……なんか、自分の精神を地味に決ることになっちまったな。

カツ、カツ、と船の中心に向かう。そこに詠えられた船の内部へと続く扉に手をかける。

その時、『影』の声を拾った。

「何時か——何時の日か、あなたのコトを聴かせて貰えるのかしら」

優しく澄んだ重い音色は、ずっと身体の中へと溶けて消える。
そっぴや……………考えたことなかったな。誰かに話すなんて。

ふと、動きが止まる。
そして、ゆっくり紡いだ。

「縁があれば……或いは、な」

「……そう」

キィイツと夜空に響く。

夜風が入らないよう、開けるドアの隙間は小さめだ。そしてすぐさま中に入り込む。

「縁、ね。そんなものがあるのかね、こんな俺に」

誰にも聞かれないよう、小さく吐き捨てる。……尤も、中にいる連中は全員寝ているようで、聞く者はいないだろうが。

……それはさて置き、明日の夜にはノードポリカに到着だ。こちらの時間で半年振り。

土産なんてないが、なくても大丈夫だろう。……煩そうなやつは、何人か思い浮かぶが。

ベッドに横になり、考える。そしてなんとなくしに、気付いた。いつの間にやら、頬が緩んでいることに。

「……なるほど、これが円の外と内か」

結構、あからさまなのな、俺。端から見て呆れられるのも、少し分かった気がする。

……それがこの日、俺の最後の思考であつた。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

S i d e R i t a

……あれから時間は過ぎた。

太陽が水平線の彼方から登り、空を茜色に染め、沈んでいく。そして夜の帳には、一番星がキラリと輝いた。

「……………」

そんな空の下、あたしの気持ちは、どこか憂鬱だつた。

あれからアイツ——ショウヤとは言葉を交わしていない。アイツの言つたことを纏めたかつた、と言つのもある。けど、触れてはいけないようなものを思い切り踏み抜いた気がして……何処か気後れしていた。

「あら、どうかしたの？」

「え……？ ああ、あんたか……」

ふと、声のした方に目を向けると、ジュデイスが微笑みを浮かべていた。

……シヨウヤも謎だけど、ジユデイスも大概謎よね。

なんだかよく分からないけど、二度目に会った時にはガキンちよのギルドに入ってたし……。あたしには、何か目的があるんじゃない。

……ま、特にあたしたちを害するつもりはないみたいだし、気にしてはいない。

「……別に、なんでもないわ」

「……昨日の夜から、シヨウヤと話してないんでしょう？」

「！ ……あんた、聞いてたの？」

立ち聞きとは、悪趣味なことね。

一応他に人がいない時を狙ったが、注意が緩慢だったみたいだ。自然と視線に陰が籠もるが、それを受けて尚、ジユデイスは飄々としている。

「ごめんなさい。夜風に当たろうとして出ていたら偶然」

「あつそ。……ま、気にはしないわ」

それだけ言い、ぷいと視線をずらした。

……やっぱ嘘。とやかく言う積もりはないけど、少しは気にする。なら、迷惑料代わり訊いてもいいか。

「……ねえ、あんた、アイツのことどう思った？」

「アイツってシヨウヤのことかしら。そうね……」

ふと尋ねると、予想外に真剣に考え始めた。
そしてゆっくりと紡ぎ始める。

「優しくて不器用な人、かしら」

「…そう？」

というか、優しい？不器用？そんな印象はあたしにはない。

アーセルム号の時だって隙をみてはからかおうとしていたのだ。それが…優しい？

「あたしには分かんないわ、その気持ち。それに、アイツ自体謎の塊みたいなものだし」

エステルと同じ力——正確には違うらしいが——に、あたしでも知らない知識。家には他の魔導師が知らないような資料もあるが、それでも初耳だった。

…最近になって考えたが、恐らくアイツにも目的があつて話したのだろう。あたしたちには想像もつかないような目的が。
それであたしに情報を漏らしたんじゃないか？と予想している。

…エステルに言えば、純真なあの娘のことだ、軽く説教されるに違いない。

でもアイツは、最初バカドラと一緒にいたという私情を差し引いても、信頼できない。…でもま、あの時助けて貰った訳で…信用は、少しくらいしてるかも。

「そうね、確かにそう。自分のことは話そうとしない……」

「？あんだ……」

「あら、ごめんなさい。少しばーっとしてたわ」

何事もなかったように首を振る。

「なんだったのだろう。何時もとは違って何処かこっ……寂しそう
な感じだった。」

「それより、そろそろノードポリカよ？」

「え、ええ」

ふと気づくと、船の甲板にはみんなが揃い始めていた。

エステルや……アイツ、シヨウヤも。

「あれがノードポリカか？」

「そう、別名『闘技場都市』！」

「『嘗て罪人同士を戦わせ、貴族たちの熱気と狂乱を呼んだ。現在はギルド、戦士の殿堂が闘技場の運営権を持ち、市民の娯楽の場となっている』です」

……本当、物知りよね、エステルって。でも、それがお城から出られなかった結果だと考えると、少し寂しい。

「戦士の殿堂はね、パレストラーレドンのギルド、アルトスク天射る矢にも匹敵する大きなギルドで……」

その時、バン、バンという破裂音と同時、空が明るくなった。……
花火だ。

「あら、綺麗」

「毎日がお祭り騒ぎか、こりゃいいわ」

「まあ、主に観光で成り立ってる街だからな。只、人の行き来が多いから揉め事も多くて……」

海の上に浮かぶ街の影を見ながら、ショウヤは呟くように言う。その姿は何処か哀愁漂うものだった。

……とりあえず、同情くらいはしておこう。

「でもおっさんは遊びに来てる訳じゃねえだろが」

「あー、そうだった。下っ端はつらいのー……」

「ドンの使者なんだから、ベリウスに失礼のないようにね！」

いや、なんであんたが上から目線？ま、おっさんに物申したくなるのは分かるけど。

あとおっさん、バカっぽい上に煩いから、でひゃひゃひゃ笑うな。

「ところでコゴール砂漠ってのは、ここからまだ遠いのか？」

「ノードポリカからずっと西ね」

「あれ？でも途中に大きな山があるんじゃないかなかったっけ？」

「それは問題ない、『カドスの喉笛』って洞窟を抜ければすぐに着く筈だ」

その後、シヨウヤは慌てたように『コゴール砂漠に船着き場はないから』と付け加えた。

……そりゃ、只でさえ人が来ないところだ、都合良く有るわけないか。

……そつか。今更だけど、もう直ぐ砂漠に行くんだ。でも……。ふと気になり、エステルに近づき、言葉を紡ぐ。出来るだけゆっくり、諭すように。

「ね、あんた本気で行くつもり？前にも言ったけど本当に危険なところなのよ。そんなところにあんた行かせる訳には……じゃなくて……」
話すうちに、思い出される遠い日の記憶。……確かあたしたちが、まだ三人で暮らしてた時だ。

『彼』は色んなことを話してくれた。研究での失敗と成功のこと、世界中を回ったこと、遥か昔から語り継がれるお伽噺のこと。

……たくさんある。

……でも十五歳のあたしが、十年以上前のことを覚えているとは……我ながら感心すると言うか、呆れると言うか……。

てかそんな年の子供に砂漠の厳しさ教えるとか、どんな大人よ。

……つて、今はそれどころじゃなくて……ああ、もう！
考えが纏まらない！

「リタ」

「え、エステル……？」

目の前のエステルは嬉しそうに、だがしかし真剣にあたしに言葉を

かける。

「心配してくれてありがとうございます、でもわたしは大丈夫ですから」

「べ、べつに心配なんか……」

……ホント、この娘の前だと調子が狂ってばかりだ。それと同時に、あの結論に至る。

……あたしがこの娘と一緒にいてあげるしかないか。今までと変わらないけど、それが結局一番の策なんだし。

……でも、エステルもアイツも、これからどうなるのかしらね。

「入港するのじゃ」

夜の帳が降りてなお、喧騒に包まれる街へと入る。

……やっと、ふかふかのベッドで寝られそうだ。そんな、取り留めもないことを考えてみる。

——それで少しは、重たく腹の中に居座る気持ちを軽く出来るよ
うな気がするから。

あたしが夜空を見上げると、また一つ、バンと花火が上がった。

……確かに、綺麗ね。

第十話く久しき第二の故郷：前編く（後書き）

難産でした。

リタの口調とかが特に。

因みに今回はリタとショウヤ……というより、パーティーとショウヤの距離を表してみました。
なんだかんだで、まだ完璧には信用してないんで。

あと前半のあれはオリ設定が大いに含まれてますので、悪しからず

くだらないこと

く作者のある日の授業風景

先生

「はい、『cut』は不規則変化動作で形は変わらないので気を付けてください。

じゃあ後から読んでください、はい。

『カットカットカット』！

作者

「ぶッ！」

……思わず吹いた俺は、悪くない。

第十話　くしき第二の故郷：後編

「みんなご苦労様、どうもね」

「ううん、こつちこそ、大助かりだよ」

栈橋渡しを終え、港へと足を下ろす。

…… やつと来たな、ノードポリカ。我らがギルド、戦士の殿堂が治める町。バレストラーレ

その歴史は深く、千年以上は遡れるとか。

二人のギルドの長の挨拶を横目に見ながら、深呼吸。

ふと目を港の端に向けると、見覚えのあつてない男性がいた。その人物も此方を見—— 正確にはカウフマンさんを見留めて歩き寄ってくる。

「あ、こ、これはカウフマンさん。い、いつもお、お世話になってい、います」

「あら、また何処かの遺跡発掘？ 首領自ら赴くなんて何時もながら感心するわ」「い、遺跡発掘は、わ、私の生き甲斐ですから……」

妙にオドオドした口調の男性に、カウフマンさんは笑顔で話かける。それは二人が長年の友人であることを示している。

男性は土に汚れた服を着ている。これにライトのついたヘルメットと鶴橋つるはしを身に着ければ、型にはまった探検家の完成だ。

「あれ、誰……？」

「ルーンズゲートの門の首領、ラーギイよ」

「ルーンズゲートの門？ 何処かで聞いたような……」

そう言い、米神に手を当て、トントントンと叩くリタ。

……彼女が聞き覚えがあるのは当然だろう。発掘ギルド、『ルーンズゲートの門』、五大ギルドの一角。それだけでもビッケネームだが、より重要なのは、このギルドが帝国の魔導師と共に魔導師を行っているということだ。

つまり、魔導師たちとは切っても切れぬ縁の持ち主。リタが聞き覚えあるのも当然だ。

魔導師、というより魔核コアは現在の技術ではとても小さなものしか作れない。ならば何故、世界中の町に魔導師があるのか……答えは単純明快、彼らが世界中に供給しているからだ。

この世界の人間生活の根幹である魔導師ブラステイア。それを発掘する彼らは間違いなく、今の世界にとってもなくてはならない存在だろう。

説明すると、ああ、それでリタは納得する。……ホント、魔導師ブラステイアにしか興味がなかったのな。一応、リタも帝国直属の魔導師だろうに。

ラーギイ氏は此方に特に用事はなかったのか、それから二三言葉を交わすと、そそくさと立ち去っていった。

……まったく、まったくだよ。

「良い人そうですね」

「……ねえ、前に兵装魔導器を扱ってるギルドの話してたわよね」

ホーフローブラスティア
リヴァイアサンのつめ
「海凶の爪か？」

「そこに魔導器横流ししてるの、あいつらじゃない？」

まあ、そう考えるのは当然か。信用が重視されるギルド社会だが、大きな利益の前では裏切り・契約違反は珍しくない。

……まあ、それは結成初期のギルドぐらいだが。

ルーインズゲート
「遺構の門は完全に白よ」

リタのふとした問い掛けに、怒ったようにピシャリと言い放つかウフマンさん。

「どうしてそう言い切れるんだ？」

「真面目に、温厚に、コツコツと、それが売りのギルドだからな」

「……目立った見栄えこそないけど、正に世界の縁の下を支えてるギルドだよ」

信用で言えば、それこそ一二を争うギルド。

……まあ、同時に変人が多いギルドでもあるというのが、俺の素直な感想だ。

「それじゃ私はそろそろ行くわ。フィエルティア号、大事に使ってあげてね」

「はい！大切にします」

セロスプラスティア
「駆動魔導器とトクナガの輸送は手配しておくわ」

真面目な顔と優しい瞳でカロールを見つめるカウフマンさん。口調は少し堅いが、まるで何かを懐かしむように穏やかだ。

ブレイブウェスベリア
「凜々の明星、頑張つてね」

心からのセリフだったのだろう、口調を変えた彼女はメアリー・カウフマンとして言ったのだ。……そう予想できた。

プラスティア
「何処かの魔導師が魔導器横流ししてるとか……？笑えないわね…」

「リタ？」

「え…？ああ、うん」

ホロープラスティア
……兵装魔導器、ね。どんな世界のどんな技術も、使う者が人間である以上そう大差ないのな。
まあ、判り切っていることだが。

「んじゃ、そろそろウチも行くのじゃ」

「え、どこへ？」

「ウチにはウチのやることがあるのじゃ」

「宝探し、か」

…こんな人種がいるのも変わらない。一攫千金は多くの人間の夢だから、無理無いのかね。

「うむ、いろいろ世話になったの」

「こつちこそ、船の操縦ありがとう」

……そういや、本当にそうだよな。この娘がいなかったら、トクナガ氏が無理しなきゃならなかった訳だし。
箱？しか知らない俺としては、あれがpssでの予定調和かどうか分からないため、非常に不安だったりしたのだ。

「達者での。では、道中気をつける」

「お前がな」

そつパティらしい別れを告げると、走り去り、夜の町に消えていく。それを見届けたところで、レイブンが声をあげる。

「それじゃ、こつちはこつちのお仕事でもしますか」

「え？でもベリウスさんには新月の晩にしか会えないんですよ」

レイブンに疑問を呈しながら、かつ俺の顔を伺いながらエステル嬢が言う。

「そりゃそうだけども、だからって挨拶しない訳にもいかないつしょ？会えないなら会えないで、アポ取つとかないと」

「ま、普通そうだよな」

どの世界も、報告・連絡・相談は社会人の基本である。それに、こっちの方が連絡手段が少ない訳なんだし。

「じゃ、オレたちも、おっさんをダシに頼んでみようぜ?」

「ただ漏れで聞こえてるんだが……」

「はは…、判りやしたよ」

今頃の時間帯だと、あの人はまだ闘技場ないに居る筈。懐かしいけど、なんか色々怖い。(仕事の意味で)

…多分、会ったら直ぐに仕事の山を渡してきそうな……、や、もう考えるの止めよう。

コイツらナツツさんに引き会わせたら即、姿眩^{くら}ませよう。これ決定事項。

……あー…、そーいや、そういう訳にもいかないじゃねえか。前門の虎、後門の竜とか洒落じゃねえ。しかも、片方は命が掛かっている。

「……まあ、こっちだ」

六人と一匹をずらりずらりと引き連れ、闘技場の大きな門を潜る。

……見ると、闘技場内の大体の店は閉まっていた。開いてるのは、ギルド・ド・マルシェ宿屋と幸福の市場の支店ぐらいだ。

因みに丁度、店番の店員は知り合いだったので、会釈ぐらいはしておく。

向かう先は売店の並ぶ区域の端、そこには見事な装飾が施された重厚な扉がある。絵柄は盾を背景に数本の剣が交差しているもの――
――戦士の殿堂の紋章だ。

「っ……ふう」

小さく深呼吸。

その扉を開け、一人一人分の隙間をぐぐり抜ける。

目の前にあるのは無人のカウンター、闘技場参加者受付。

その左に逃えられた、階段を一段一段登ってゆく。少しずつ、階段の先が見え始める。

そして同時に、少し緊張したりもする。

「……誰だ？ 今、闘技場は――」

「お久しぶりです、頭領代行^{ヘッドマン}」

「！、なんと……お前だったか」

そこにいたのは我が上司であり、ギルドで世話になっていたあいだ散々こき使いやがった人物こと、ナッツさんである。

……優秀な人なのに、時偶ダメ人間になるものだから、質が悪い。

「久しぶりだな、だが、そっち人たちは……」

「天射^{アルトスク}る矢の幹部、レイブン。ドン・ホワイトホースの書状を持って来たんだそうです」

「ドン……！？ こ、これは失礼した」

先ほどの打ち解けた空気と打って変わり、真面目な表情を浮かべるナッツさん。慌てて、レイブンに対し畏まった態度をとる。……まあ、大首領ドンの使者だからな、当の使者の人間性は兎も角として。

「我が名はナッツ、この町の頭領代理を勤めている。ドゥーチェ

我が主への用向きなら、私が承ろう」

「すまないねえ。一応ベリウスさんに直接渡せってドンに言われてんだ」

飄々とした態度、普段なら只ふざけているだけにしが見えないが、この場に置いては別だった。

腹を探らせないように、かつ自分は相手の腹を探る。……この場ではあまり意味のないことだが、場合によっては役に立つだろう。

「そうか……しかしながら我が主は新月の晩にしか人とお会いにならない」

「分かってるよ、其方さんの部下から既に聞いている。だから、今回はアポ取りにきただけだ」

然もありなん、そうでなければ此処にはいない。

「そうか、わざわざ済まない。ドンの使いが訪れたことは連絡しておこう」

「頼むわ。次の機会にまた来る」

こうして、短く、緊張感に満ちた会談は仕舞いとなった。……やれやれ、だ、これまでも数度の対談・会談に同席したが、相も変わら

ず慣れる様子はない。

ユーリ達の方に向き直ったレイブンは先ほどと同じトーンで、しかし、明らかに違った温度で、これで終わりだと告げる。

「じゃあ、今のうちに砂漠の情報を集めておかない？ 次の新月の晩はまだまだ先よ」

「フェローの情報もね」

「あたしはエアルクレーネについて調べとくわ」

次々と湧き出す、希望要望提案。
そう言えば……

「あー…、『カドスの喉笛』にもエアルクレーネはあるから、覚えておくといい」

「え…あ、うん。分かったわ」

簡潔に答えた俺に対し、妙に歯切れの悪いリタ。…考え事をしていたのか、それとも、まだ引き摺っていたのか。いずれにせよ彼女らしくもない。

何時も（と言えるほど詳しくもないが）の彼女なら、此方を睨み返すくらいの気力を見せてもよいのだが。

「これだけ人の集まる町なら、期待が持てそうですね」

「おっさん先に宿に行っていていい？ 取り敢えず、ドンに経過報告の手紙出しとくわ」

「ああ」

それだけを言い残し、ふらりと立ち去るレイブン。
闘技場に入って直ぐの宿屋へと向かったのだろう。

「じゃ、じゃあそろそろあたし達も行こ！」

……俺も、そろそろ休むとするか。

ナッツさんにその旨を告げると、部屋は俺が発った時のままの
こと。因みに、某姉妹が数日に一度、掃除に来てくれていたらしい。

……まあ、なんだ。それは素直に有り難いんだが、正直不安を
禁じ得ない。特に姉の方。

ヤツの私物が俺の部屋を占領していた、なんてことがないとい
いんだが……。

ん、フラグ？んな訳……ないよな？流石にそんな床で熟睡できる程、
俺の精神は成熟しきつてはいないぞ。

こればかりは妹の方を信じるしかない。

俺が他のメンバーを先導するようにして、闘技場内を歩く。

ホント、職場に私室があるのは、迷惑なんだか便利なんだか……。
そんなコトを考えていた時だ。

「ありがとうございましたー……」

微妙に可笑しく、眠そうな挨拶を聞く。知り合いの幸福の市場のメ
ンバーの声。
ギルド・ド・マルシェ

……？こんな時間に客？

ハレストラーレ
戦士の殿堂の同僚が、残業でもしてたのか？

はてと疑問に思い、そう内心決め付けていた。……だが次の瞬間に、ソレは瓦解する事となる。

「うむ、確かに」

艶やかな声に、古臭い喋り方。続いて目に入るのは、床まで伸びる白銀の髪。

………は？

（な、なあっ……！？）

色々と絶句する。よりにもよって彼女が、このタイミングで、だ。こんな時期には、流れに影響は必然だろう。……どうする？

そしてそんな俺の気持ちなんてつゆ知らず、妙齡の女性——変化トウーチエを行った頭領は、笑顔で此方へと歩いて来るではないか。……、勘弁してくれ……。

「なんと、シヨウヤではないか。久しいの」

「お、お久し、ぶりです」

「……？誰だ？」

疑問の声を上げるユーリ。やべ……。全速で頭を回転させるが、思いつくものに良い案はなくて。

「え、えつとこちらはド……」

じゃなくて……！ええい、ままよ！

「……ミ、ミズクメさん、だ」

——名前を偽ることにした。由来は単純に、頭領本来の風貌から、連想されるものを辿った結果だ。

……まあ、伝承があれだから、幼名を拝借したわけだが。

「ふむ……」

頼みますから頭領^{ドワーチェ}、察して下さい！

内心必死に訴えかける。そして思いが通じたか、彼女はユーリたちに自分の名はミズクメだ、と名乗った。名乗ってくれた。

……ふう、とバレないように小さく溜息。

「ところでショウヤ、この女性^{ひと}とはどういう関係なのかしら？」

ふと思い付いた、というようにジユデイスが言う。関係……関係か。上司と部下、と言う訳にはいかないし……だとするならば、

「大切な恩人^{ひと}、て言ったところか？」

途端、ほうとかへえとか声が上がる。……一言言わせて貰うがな貴様ら、決してそういう意味じゃねえからな。

あとジユデイス、何故白い目で見える。一応お前も知り合いだぞ。

「ハア……兎に角、俺はもう自分のところにスツコムから、何かあつ

たら探せばいい」

「そっか、シヨウヤはノードポリカに帰るついでで、ボクたちと一緒にに来てたんだもんね。すっかり忘れてたよ」

忘れるな。……まあ、これからのこともあるから、暫くしか離れないと思うが。

……この頃医者に出された薬の減りも早いし、どうにかならんものかね。

「色々世話になったな」

「こちらこそ、シヨウヤが居てくれて助かりました!」

「……天然なところが、またグサツと来るよな……」

「……?」

もう良いよ、気にするだけ無駄だとは思えない。……俺の方が助けられっぱなしだったのだから。

連中に襲われた時や魔物との戦いでもそう。

それに人生初のボス戦では、見事に初めてライフボトルでの復活を経験するに至った。……今更だけど、秘奥義って当たる側は痛いじや済まないんだぜ?

てかあれを耐えきるとか、もうゲームでのパーティーメンバーは人間辞めてたんじゃないだろか。

実は人外でしたー、などと言われても、俺は納得する。

「それじゃー」

「ああ」

関係者以外立ち入り禁止的な扉を開け、そこそこ広い廊下を通って行く。

左に置かれている窓からは、白くて優しい光が差し込んでいる。…

…そう言えば、花火はもう終わっていたようだ。

………で、

「なんで付いて来てるんですか、ドゥーチェ頭領」

「……？別に問題はなかるう？」

…そうですね、詰まるところ貴女も天然が入っていたと。

尤も、ベリウスさんの場合、種族の違いによる視点の違い、とも取れる訳だが。

…つか、俺の後を付いて扉を潜る彼女を見たら、勘のいい彼らのことだ、何かしら気づくかもしれない。

……それではなく、今頃邪推をしていたりする可能性もある。――否、間違いなくしている筈だ。さっきの反応を見れば必ず。

「……ふふ」

「…？どうかしましたか」

「……いやなに、」

彼女は、勘違いかもしれないが、と前置きをしてポツリと呟いた。

「お世辞にも人間のナカミに敏感とはい言難いがの、妾も雌おんなであり、人間ともそれなりに接してきた、ということじゃ」

「は、はあ……」

まったく以て訳が分からない。何故そんなに遠回りな言い方をするのだろうか。

……多分、何かしらの意図があつてのことだろうが。

「で、これからどうするつもりです？」

「では……お主の部屋にでも行こつかの、泊まるのも良いかもしれん」

………まあ、予想はしてた。

ベリウスさんは、人間社会での常識は粗方（俺が教えたことで）身についている。だが自らの容姿に関しては、どうしても疎いところがあるのだ。

……尤も、今は彼女が生まれて数百年以上慣れ親しんだ姿ではないのだ。仕方ないと言えば、仕方ない。

「まったく……」

もう、どうにでもなあれ である。

自分の上司に部屋を見られる気恥ずかしさは変わらないが、人間、諦めと慣れとノリ、あと少しの度胸があればどうにかなるものだ。

「はいはい、到着しましたよ」

「うむ」

心なしか足取りの軽い上司を尻目に、自室の扉を開ける。そして――

「……………」

ボタンッ！と勢いを付けて閉めた。
いや……これはねえよ。

「何か問題でも？」

大有りです。

再び、しかし今度はそつと扉を開ける。

そこにあつたのは、ファンシーな小物に明らかな女性ものの服――
リユンヌの私物だった。

しかし、部屋にあつたのはそれだけでなく――

「クレールよ、おまえもか…………」

数点のヌイグルミ――某深淵の物語のブタザルもあつた――
に、数枚の絵画とその為の道具が、部屋の片隅でその存在を主張
していた。

……とどのつまり、彼女もアレの妹だと言うことだ。

「なる程、シヨウヤにはそのような愛いものを愛でる嗜好が――」

「ないですからねッ!!?」

……ホント、まったくだよ……。

第十話く久しき第二の故郷：後編く（後書き）

……アレですよね、女装って慣れとノリでどうにかなります。
……え？いや、文化祭で昨日着てしまっただけです？

第十一話　野望交錯の地：前編　（前書き）

何気にあの娘が再登場です

第十一話　野望交錯の地：前編

「いつつ……クレール、いくら何でもあれは痛いぞ……」

「ごめん。まさか…ああなるなんて」

思わなかった、と。……まあ、仕方はないか。

隣のブロンドの少女に苦笑を向けると、居心地悪そうに小さくなる。

パレストラレで迎える半年振りの朝。晴天に恵まれた日だというのに、俺の気持ちは何処か落ち込み気味だった。

原因は、先ほどの出来事と、それによる後頭部の痛みだ。

……何があったかと言うと、だ。

結局あの後、どうにか寝られるスペースを確保してから、ドゥーチェ頭領を泊めることになった。次の朝、つまり今朝目が覚めた時は居なかったことから、先に起きて出て行ったのだろう。

その後、着替えやら何やらを済ませた頃に、俺の部屋にクレールがやってきたのだ。まさか俺が戻っているとは思っていなかったのだろう。

その手に持った筆やパレットから、俺の部屋にある絵画に用があるらしかった。そして予想していた通り、それらは彼女が描いた物と
のこと。

そこで素直にスゴイと思ったことを告げ、他にも感じたままにほめちぎってみた——のがいけなかった。

照れからか拳動が可笑しくなったクレールが、絵を立て掛ける道具（名前？俺は絵に詳しくないからなあ……）を倒し、そこからドミノ倒しが始まったのだ。

そう広くない部屋だ、そうしてあわや大惨事、というところに無理やり身体を入れて止めた。痛みとは、その時の負傷だった。

……そっぴや、床に倒れた瞬間に目の前に絵を描くとき使うナイフが刺さったのはビビったな。

「ショウヤ…アレ」

「うん？」

クレールが指差す先、港部分の中心辺りに黒山の人集りが出来ていた。

……また、厄介ごとか。

「少し待ってろ」

そう言いくるめ、俺は一人其方へ向かう。

はいはい、ごめんよー。

……人を掻き分けた先にいたのは、得物を構えた男二人と見知った青年ユーリ、そしてどうしたものかとおろおろしている初老の男性

——ラーギ氏だった。

状況から見るに、男二人が揉めているらしい。……喧嘩っ早い人間が、武器なんて持つなよ。

「お、落ち着いて下さい、お、お二人とも。こんな町中では、み、皆さんにご迷惑が……」

「外野は引っ込んでろ！」

そういい、振り上げられた男の得物^{ククリ}。それが刹那、ギンッ！と音を立て宙を舞う。

……ユーリだ。

「町中で物騒なもん振り回すなよ」

「誰だ、お前！」

もう一人の男も得物^{サイベル}を構え、ユーリにその刃先を向ける——のを俺が刀で弾き返した。

「やれやれ、帰って早々だったのに……」

「っ！！テメエ……！」

「ああ、名前？」

怒りに顔を赤らめる男とは対照的に、俺は涼しげに答える。
……んとに、せめて喧嘩売る相手を選ばうな。

「戦士^{パレストラーレ}の殿堂所属、頭領補佐^{ドゥーチェ}、翔矢・守里。
理解したのならさつさと剣を収めろ、目障りだ」

「な！？」

「戦士^{パレストラーレ}の殿堂の幹部だと！？」

途端にざわつきだす男二人と、周囲の野次馬たち。……まあ、表にはあまり出ないからな、俺。

分が悪いと悟ったか、すごすこと引き下がる男二人。

「ほらほら、みんなも散った散った！」

……そのお祭り好き精神は、また別なところで発揮してもらいたいものだ。

それにこの町の住人は、町中でよく起こる喧嘩を端から見ても楽しむような連中ばかりだからな……。

刀を鞘に収め、ハアと溜息。

「なんだ、シヨウヤも来たのか」

「……まあな」

「お、お二人とも、あ、ありがとうございました………」

俺とユーリが話すところに、酷く弱腰で声をかけるラーギイ氏。

……あんた、一応五大ギルドの一角の長だろうが。流石にそのキャラはどうよ？

てかこの人あれだから、あまり話していたくないんだよな………。

「いえ、ラーギイさんも気にしないでください、他人事ではありませんから」

「い、いえいえ………」

「……ええと、俺は人を待たせてますので、これで」

そう言うが早いか、俺は踵を返してクレールの元へと足早に向かう。
ホント、苦手だ。

それに――

「すまん」

「ん……大丈夫」

ふと立ち止まり、今来た方向を見る。そこでは、ユーリたちとラー
ギイ氏が、なにやら真剣な表情で話し込んでいた。

「――それに、俺がいちゃあ物語に影響があるからな」

「……？ ショウヤ？」

「いや、何でもない」

……次に騒動が起こるのは、この町、ノードポリカだ。そこで俺が
行っ介入は、被害を少しでも小さくすること。

さあ、行こう。

恐らく、これからが本番だ。

S i d e o u t

- - - - -
- - - - -
- - - - -

怒号歓声奇声悲鳴、そんな耳をつんざくような音たちに包まれながら、オレは剣を振るう。

ここはノードポリ力を象徴する施設、闘技場。

そこでの大会に、オレは参加している。

そんな最中、オレ頭の中には先ほどの会話がリフレインしていた。

『じ、実は、闘技場を乗っ取ろうとしている男を、た、倒して頂きたいのです』

オレたちは、ひょんなことから遺構ルインズゲートの門の首領ボス、ラーギイの目に留まり、『お願い』を聞くことになった。

…… 本当に最初は、ただ聞くだけの積もりだった。

『も、もしも別の人間が上にたつて、こ、この町との縁が切れたら、始祖エンテレケイアの隸長に申し訳ないです』

目の前にいる男の剣の軌道を避け、その隙に剣を走らせる。

……だが語られたのは、酷く物騒な話。ギルドとしても退くに退けなくなっちまった。

更に話を聞くと、その男は闘技場大会のチャンピオンとのこと。
……なる程、それなら戦士バレストラールの殿堂も表立って動けない。

『や、奴は大会に参加し、正面から戦士の殿堂に挑んできたそうです。そ、そして大会で勝ち続け、ベリウスに急接近しているのです』

「ッ、らッ！」

横に一闪される大剣をバックステップで避ける。

そこで確か、アイツ……シヨウヤは知ってるのか疑問に思ったりもしたが、多分帰ったばかりだからにも知らないのだろう。で、今頃知って大慌て、と。少し、目に浮かぶようだった。

『と、とても危険な奴です。ベリウスの近くから排除しなければ……』

ラーギイの話は、そこで終わった。……要約すると、闘技場大会でチャンピオンに勝てと言うことだ。

これはオレたちにとっても悪い話じゃあない。

大会でチャンピオンに勝つ……つまり優勝すればギルドの名も上がる。

それにベリウスには、オレたちも用があるんだ、この依頼に成功すれば、結果としてオレたちの得にもなる。

……そうしたことあつて結局、依頼は受けることになった。

「『三散華』！『蒼破牙王撃』ッ！……」

ラストのボディーブローで、対戦相手の体が沈む。今のが三人目、次が噂の闘技場チャンピオンだ。

『まだまだいくぜい！そう！次こそメインイベントうつ！』

実況の声と共に、観客の歓声が一際大きくなる。……それに黄色いものが混じってるのを聞くと、そいつはある種のアイドル的な存在らしい。

『紹介しよう！闘技場至上二人目、無敗の闘技場チャンピオン！』

何処からか、愛犬の遠吠えが聞こえた。

続いて視界に入る、人影。こりゃあ、また……。オレって本当に、何か憑いてるのかな？

「はぁ……」

『甘いマスクに鋭い眼光！フレ~~~~ン・シ~~~~フォ！』

そう、オレの幼なじみが、闘技場チャンピオンだったのだ。

……ご丁寧に、隊長専用の鎧までつけて。

「……ユーリ……こんな所でなにを……！」

「お前か、闘技場乗っ取ろうとしてる悪党ってのは」

「冗談は止めてくれ、一体何がどうなってるんだ」

騎士の一隊長が闘技場のチャンピオンってのも可笑しな話だが、こいつが闘技場を乗っ取ろうとしているのは、もっと可笑しな話だ。こいつは、そんな話を受けるようなヤツじゃない。

てことは……

「こりゃ、ハメられたかな」

「そうらしいな」

スラリとフレンが剣を抜き去り、左には白銀の楯を構えた。……ま、
だとしても観客に八百長試合を見せる訳にもいかねえよな。

『男たちよ、燃え滾る闘志を見せよ！注目のファイナル―ファイ
ツツ！―！』

オレたちは正面から向かっていく。そしてオレは剣振り上げ、フレ
ンは楯を前に構えた。

ガンツツ！！と音が鳴る。

……どう切り抜けるかね。

S i d e o u t

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

S i d e S y o y a

眼前で行われる戦いは、見事の一言に尽きる。闘技場大会のメイン
イベント、チャンピオン対挑戦者。
闘技場の熱気は最高潮に達している。

『この世界での物語』での主人公であり影の存在、ユーリ・ローウェル。

『この世界での物語』でのライバルであり光の存在、フレン・シーフォ。

真反対に位置する二人の攻防は、全くの同等。

……ここまでの試合は、滅多に見られるものじゃない。俺は気付くと、握り拳を作っていた。

正に、手に汗握る戦い。

だがそんな戦いも……唐突に終わりを迎える。

「ユーリ……・ローウェル！」

隣でクレールが息を呑むのが分かった。

観客席から飛び上がる人影、陽光から具体的な姿は伺えないが、声からは男だという事は確実。男は今まで戦っていた二人の間を割って入るように、闘技場の中心へと降り立った。

実況からは焦ったような、それでいて、このトラブルを楽しむような……そんな声が漏れる。恐らくだが、観客も似たようなものだろう。もしかしたら運営側が用意したイベントか何かだと思っているに違いない。

『これは大変！大ハプニング舞台上の両雄たちも、お株を奪われた感じが！？』

「クレール、カレルさんたちに連絡頼めるか？」

「わ…分かった」

俺の頼みを聞き入れ、直ぐに動いてくれるクレール。リユン又だったら悪態の一つでもつきそうなところを、理由も聞かず聞いてくれるのは、ありがたかった。

とにかくこれで、これからに対する備えが一つ出来上がった。

「ユーリ！オレに殺されるために生き延びた男よ！感謝するぜ！」

確か、そんな台詞だった気がする。はつきりとは聞こえないが、二ユアンスだけはそう聞き取れた。ユーリが嫌そうに吐き捨てるのが分かる。

……あの男が、ザギか。こうしてみるのは初めてだ。

奴は俗に言うところの『裏の人間』、暗殺を専門に受ける傭兵で人を殺すことに愉悦を感じる稀代の殺人鬼。ゲームでは執拗にユーリの命を付け狙っていて、ストーリーでの戦闘回数はあのロン毛青タイツに並ぶとのこと。

……その様から、ヴェスペリアのファンからは、ストーカーやら『そっちの人間』やら何やらと呼ばれていた。

「――！」

ザギの左腕が天に向かって伸びる、と同時赤紫の光が起こる。瞬間、身体を寒気と吐き気がごちゃ混ぜになったような感覚が襲う。端的に言って、気持ち悪かった。

それにアイツの左腕は、人のそれじゃない。……魔導器だ。義手型
ブラスティアの魔導器だ。

それも、ただのものじゃない。幾つもの術式がツギハギに合わさっ

た、丁度カルボクラムでのアレに似ている。

その時、観客席からジュデイスを筆頭とした五人と一匹が飛び降りる。
……彼女も気付いたか。

『こ、こ、これはもう大会の熱気は何処へやら！てゆっか私も逃げるべき！？』

その言葉を合図にしてか、彼らの闘いが始まった。……あんなもの、人間が制御できる代物じゃない。そう長く闘いは続かないだろう。

俺は実況席へと向かって走る。マイク（のようなもの）がある彼処なら、指示を出すには最適だ。

……観客は未だにシヨードと思っているのか、パニックも何も起こっていない、お陰で楽にいけそうだ。

突然、ズンと身体が重くなった錯覚を受ける。闘技場の中心に目をやると、ザギが再び左腕をあげ光を発していた。そこをチャンスと思ってか、リタの閤属性魔術『スプレットゼロ』が叩き込まれる、が

「残念でした、ってか？」

リタの魔術がザギの左腕に、吸収、、、、、されたのだ。闘技場にザギの高笑いが響く。

更に、空気が重くなった。……まったく、迷惑極まりない。

再び走る、そして目的地が目に入った。俺は実況席の扉に手を掛け、目一杯に開く。

中にいて派手な服を着た実況の男性は、慌てて此方を見やった。

「ちょ、困りますよ！？こ、ここは……って、シュリくん！？」

「失礼、でも緊急事態ですから」

ギルドメンバーの中では珍しく、俺のことを姓でよぶ男性は目を白黒させている。言うまでもなく、彼も戦士バレストラーレの殿堂だ。

実況席から闘技場を覗き込むと、勝敗は既に決していた。

ザギは地面に蹲つづくまり、苦しいな声を上げている。左腕の魔導器ブラスティアの発する光は、先ほどの比ではない。

……まあ、俺としてはさっきまで制御してた方が驚きだがね。

バン！という爆発音と同時に、魔導器ブラスティアから光弾が放たれた。内部のエアルを留めておけなくなったのだろう、それは闘技場の壁に当たり、爆発を引き起こす。

……僅かにだが、闘技場全体が揺れた。

そして、更なる惨事が引き起こされる。爆発による土煙、そこから魔物が飛び出してきたのだ。魔物を閉じこめていた逆結界が壊れたのだろう。

「見せ物用の魔物が！」

「んじゃ、これ借りますよ」

「え！？」

男性の手にあったマイクをむしり取り、口を近づける。言うことは決まっている。

「『全ての戦士の殿堂のメンバーに告ぐ！観客の安全を最優先とし、避難誘導を行う。そして警備部は逃げ出した魔物の討伐です！さつさと終わらせましょう、俺らの力の見せ所ですよッッ！』」

何処からともなく、雄叫びが聞こえた。これで大丈夫。

放送が終わり、数秒もない内には、闘技場の舞台に警備部の連中が飛び込んで行っているのが見えた。……流石クレールだ。

俺はクルリと向き直り、マイクを返した。そう言えば目の色が違う……どうにも思うところがあったようだ。

「じゃ、後は頼みます」

「おう、任せときなさい！」

頷き、俺は実況席から出ていく。内部は騒然とした音が響いているが、差ほどの混乱はない様子だ。勿論、こんな時のために訓練は行っているのだ。

……こうして、闘技場都市での争乱、その序章が幕を開けたのだ。

第十一話 野望交錯の地：後編（前書き）

読む必要皆無な幕間編& epilogueです……

第十一話　野望交錯の地：後編

時間は過ぎ去り、騒動から三時間以上経った後だ。

結局のところ、被害は大したものではなかった。

直接魔物と戦った警備部に僅かな軽傷者がいる以外では、避難をしていた観客が転んで擦りむいた程度。

そう言えば、町に騎士の連中がいたそうだ。恐らくはチャンピオン殿が隊長を務めるフレン隊の面々だろう。

まあ、連中が手を出す暇もなく、こちらが全てを片付けた訳だが。

こうして一つ一つ見直していくと、ギルドにとって、苦勞して捕まえた見せ物用の魔物の一部を失ったことを除けば、損失は無いに等しかった。

『現実』なら安全云々で煩そうだが、迅速な対応もあってかそんな声は何処からも聞こえてはこず……詰まるところ、これまでと変わらない日常が続くかのように思われているのだ。

町の人の間で今回の件は、酒の席での一寸としたツマミとなるのが関の山。

それは『戦士の殿堂』パレストラーレとて例外ではないのだろう。

……そんな平穩を壊そうとする俺は、一体何様のつもりなのか、自嘲せずにはいられなかった。

閑話休題。

そう言えば予定通りユーリたちは町の外へ出たようだ。
たしか闘技場での混乱の最中に、あの幽霊船で手に入れた箱が奪われてしまつて、その犯人を追つたのだったか。

心情的には彼らに着いて行つても良かった、のだが今回ばかりは問題がある。

もし着いて行つた場合、俺はとある用事から途中でノードポリカに帰らなければならないのだ。……そんな中途半端コトは、流石に避けたかった。

あと付け加えるなら、ギガントモンスターに対する懸念もあった。
ギガントモンスターとは読んで字の如く、巨大な魔物のことだ。

それぞれが、その生息域の頂点に君臨する存在。そんな存在の一角が『カドスの喉笛』にもいる。

『ハーミットドリル』。『隠者の削岩機』の名を冠する、蜘蛛が甲殻類の特徴を持ったような、昆虫型魔物。

俺の使う光属性魔術や地属性、風属性に耐性を持つ。

ユーリたちと居るときならまだ良い。逃げ切れるだろうし、もしかしたら勝つ事も可能かもしれない。

だが一人ではどちらも無理だ。確実に言い切れる。

相手のテリトリー内で一人、しかも全長約十メートル・高さ四メートルの魔物と戦うなど、俺の実力では死と同義。喻え逃げたとしても同上。

……日頃の行いからか、運の悪い俺が行きたくないと思えるのは当然だった。

これをもし誰かが聞いたら臆病と嘲笑するか、賢明と吐き捨てるか、はたまた考えすぎと笑い飛ばすのか、多少の興味はある。まあ、実行する勇気も道理も無い訳だが。

「俺の周りの連中なら笑い飛ばすだろうな、絶対……」

一瞬のタイムラグなく、数人の顔が目に見えた。

……約一名大爆笑しているのが見えた気がしたが、この際無視しよう。

そんな事を考えながら、夕焼けに染まる路地裏を、食材の入った買い物袋片手に一人歩く。

当然、惣菜やらレトルトやらはこの世界にない。だが外食するような気分でもないし、余計な金を使うつもりはない。といった具合で導き出された結果だった。

あと、ゲームでは食材も回復アイテムも、一度に同じ場所、闘技場内の店で買うことが出来たが、此方ではそうではない。

これは考えてみれば当たり前前の事だ。闘技場で野菜や果物の二
ーズが有る訳がない。

そんなこんなで町に繰り出したが、時間帯的に開いてる店あまりが無く、思っていたより遅くなってしまった。

尤も、その分余りものを安く買えたから良かったのだが。

「……………?」

ふと辺りを見渡して気付く。

（…………ちと、静かすぎやしないか?）

街灯なんてもののない町の夕暮れ時だから、人の通りが少なくなるのは可笑しくない。

だがこの静寂には、狂気じみた違和感を感じるのだ。

視界を上を広げると、白い壁の家の窓が規則正しくならんでいた。

そこには洗濯物が掛かっていたりして住む人の生活が伺えるような気がする。

(……？ あれ、なんか……)

再び、違和感。 それに今、決定的なものを見た気が……。

「——待てよ、こんな時間に、洗濯物？」

取り込むのを忘れた、と考えれば何も問題ない。 だが……。

再び、上を見上げる。 そこにあるのは先ほどと変わらない光景。

そこにフワッと風が路地裏を吹き抜ける。

パタパタ揺れる洗濯物。 同時に——キラリと光る何か。

瞬間、俺は無意識にあることを実行していた。 即ち、エアルを

双眸に流し、強化。

すると見える、黒く光る筒。

(銃型兵装魔導器だ！？)
ホロープラスチック

理解した瞬間、全速力で走り始める。 パスツと拍子抜けする音

と同時に、袋の中身が弾け飛んだ。

「ちっ、サプレッサー減音器か……マジで最悪だよッ」

辺りに転がる野菜には脇目も振らず、出来るだけ人通りの多い所を目指す。　こんな時でも闘技場の近くなら人は居るはずだ。そうすれば流石に奴らとて手を出すことはしない——筈。　こういう時は対象以外に事を知られないように運ぶのがセオリーだが、良くも悪くもここには変わり者が多い。

仮にだが、一般人に危害が加わりでもすればギルドの名折れ……だからそれだけは防がなければ。　それに相手が誰かも分かってない。予想としては後ろ暗い傭兵ギルドや、アイツらを含む暗殺ギルド……。

当然だがロクなのがいない。

……そう言えばこの町には邪魔者きしだんもいたのか。

だとするなら、そちらに気取られる訳にもいかいかな。知られれば間違いなく面倒だ。

バレストラレ戦士の殿堂の人間が騎士に助けられたなどというのが広がれば、ギルド全体や町の人間にも迷惑が掛かる。

って、なにその無理ゲー。

「……それにいつの間にか、逃げるって選択肢が消えていつてる気がする、しッ！」

足元の石が弾ける。

……どこから狙ってやがる。　せめて場所が分かれば逃げるのも戦うのもやりやすいのだが。

……連中を捲くのが、今出来る最善手か。

そう結論付けると、丁度近くにあった路地に入り込む。最悪、この『姿の見えない敵』が裏路地を知り尽くしている可能性があるため、出来るだけ分岐点の多い道を走り抜ける。この時間帯の裏路地は日が当たらない、どんどん暗くなる一方だ。

「——ッ！」

シュツ、という風切り音と共に降り立つ黒い影。それは紛れもなく人で目が赤く光っている。……連中——リヴァイアサンのため海凶の爪特有のマスクだ。

「またデメエらか……！」

呆れと怒り、そしてやはりという納得を織り交ぜながら、言葉を紡いだ。刀を抜き去ると同時、力任せに斬りあげる——が体を逸らして避けられてしまった。くそ、やりづらい。

だが紙一重のどうにか逃げ出させる隙は作った。服の端を切り裂かれながらもそれを無視し、路地を左に曲がる。

するとそこには丁度良く、うずたか堆く積まれた木箱の山があった。……俺にとっては珍しい幸運だ。

刀で思い切り斬りつける。すると面白いように巻き起こる木箱の雪崩。

それに巻き込まれた『影』は、俺の目の前で沈んでいった。

「……はあ。全く、肝が冷えたぞ……」

まあ、兎に角、これで暫くは大丈夫だろう。……………このまま上手く行けば、逃げ切れるのかね。

刀を収め、今度は小走りで路地を走る。目の前には左右に分かれた道。

闘技場へ続く方向は右だ、考える暇さえない。そうやって壁に手を着いて右側を覗き込んだ瞬間……………フリーズした。

「ホフローブラスティアまた兵装魔導器、しかも火炎放射器とは……………」

俺よりも背の低い男が構える、その身に不釣り合いな大筒。銃や大砲の物とは違って、そこにはこんなに離れた位置からでも分かるくらい、強力な火属性の術式が刻まれている。

火炎放射器型……………確かゲームのサブイベントで名前だけは出ていた。数百メートル先まで届く、凶悪な代物だったような……………。

自分でも驚く位にスラスラ思い出される記憶。

だがそれが本当だとすると、これ以上マズいものもそうはない。

よって今度は左の路地を見て……………今度こそ、俺の顔が絶望に染まる。いや、ガトリングって……………。

「どう見ても、俺を消しに掛かっているよな……………」

命は奪わないんじゃないのかよ、オイ。数週間前の赤髪の少女たちだって、いくら攻撃してきても致命傷は避けていたのに……………。

……………それにこれはどう捉えるべきなのか。連中の依頼主が命令を変えたのか、それともこのくらいはしないと捕まえられないと考えたのか……………いずれにせよ、ヤバいのは変わらない。

右は火炎放射器、左はガトリング、後ろは塞がっていて登っているうちに奴らが来る、上は上がれそうにない。これこそ八方塞がり、万事休す。

……そう言えば結局、あの木箱の山は幸運の贈り物でもなんでもなく、悪趣味なトラップだったな。や、別に誰かが意図して仕掛けた訳ではないが。

「しかし、どうすつかね……」

そう呟くも、何も思い浮かばない。だがこうしている内に、連中は近づいてくる。

……どうする、どうする、どうする、ドウスル？

ぐるぐる回り、スピードを増す思考。そしてある時、ピタリと回転が止まった。

（……賭けには違いないが、案外単純に出来るかもしれない）

やる事が決まれば、実行するだけ。俺は踏み出し、奴らの目の前に、姿を晒した。

「――！」

——ここからは演技の時間。素早く左右を向き、男二人とそれぞれ目を合わせた。

二つの死を呼ぶ筒が、俺を向く。だが、それらが火を噴くことは無かった。

（予想通り……！）

その刹那、俺は慌てたようにして元の道に走り込む。

これで奴らには、俺が逃げたように見えた筈。 続いて素早く術式を展開させた。

——属性は光、用途は目くらまし！！

くるりくるりと円を描き、線が幾重にも重なり陣を為す。

約2秒半で完成させ、1秒の発動待機状態。

やっと、そして同時に、両方の道から二人ともが顔を覗かせた。

「待つてましたッ！」

そうしてカツ！と真昼の如く……否、それ以上に明るさに、辺りは包まれるのだ。

……先ほど俺がやったのは酷く安易な、作戦とも呼べない代物だった。

俺が姿を見せた時、奴らとその間の俺は、丁度一直線に並ぶ。もしこの状況で俺を狙えば、もう一人に当たるのだ。

……もちろん、連中がそれでも躊躇なく撃ってくる可能性はあったが、それでもどうにか実行に移せるだけの要素もあった。

一つは連中が手にしていた得物が、馬鹿デカイ兵装魔導器だったこと。

二つ目は奴らの格好のこと。

ホブローブラスティア
兵装魔導器、ひいては魔導器全体的に言って、そう易々手がでる程
安いものではない。何度も言うが、魔導器の核の製法は明らかでないからだ。

そして注目すべき点は、魔導器が大きいほど核も比例して大きくなること。ブラスティア

……つまり奴らが味方ごと俺を狙えば、もう一人の持つ魔導器ブラスティアがお釈迦になると同時、大金も吹っ飛ぶことを意味するのだ。

そして二つ目。奴らの格好は海凶の爪リヴァイアサンのつめのものではなく、普通の行商人のそれだ。

だが『普通の』行商人が兵装魔導器ホブローブラスティアなんてものを持ち歩く筈はない。そして状況から見て間違いなく、海凶の爪リヴァイアサンのつめ……赤眼どもの関係者。

更に言うと、俺はその2人に心当たりがあった。

ギルド、死を招く商会。マルシエテスデュンケル
リヴァイアサンの爪 海凶の爪傘下の兵装魔導器を専門に扱うギルドで、この町にも偶に姿を見せている。

どうして奴らが参加しているのかは知らないが、相手が本来戦闘を行わない人種なら、出し抜けるかもと踏んだのだ。

……こうして、俺は十分に成功の余地があると思い、実行している次第である。

(この隙に——ッ！？)

二人の間をすり抜けよう、とした時、一筋の熱が背中を通った。

……痛くて熱いが、振り返りはしない。 こんなのは見なくても、状況くらい分かる。

……斬られたのだ。

だが悲しいやら嬉しいやら。

既に俺はこの程度の傷では最早動

じることはない。

……まあ、それは敵さんも同じだろうけど。

でも、これを受けてなにもしないという訳でもない。

一秒にも満たない思考の後、左足を軸にして遠心力とエアルによる強化を用いた蹴りを放つ。案の定、そこにいたのは赤眼だった。

そいつは咄嗟に受け止めようとしたか、左腕を顔の横で構えて

——ゴキユ、と実に不快な振動が空気を揺らす。

「あ——！！？」

赤眼から漏れる苦悶のうめき。 だが、そいつは俺の脚を放そうとはしなかった。

「ちっ、放せ！」

「だ、誰が——！！！」

女、？ って……！！？

あろう事が、赤眼はバランスを崩しやがったのだ。 当然、そいつに脚を掴まれている俺も巻き込まれ、身体が傾き始めている。

（ああ、くそ！ め、ん、ど、い、なアツ！！）

……状況を再度確認しよう、俺は只今、三人の敵に取り囲まれているのだ。

それに先ほどの男二人に使った目くらましも、一瞬の隙を作る為ではない。 つまり、今はすっかり回復している。

……ここで倒れ伏せば、抜け出すのは難しい。 ならば——！！

体内のエアルを活性化、それを一点に集中させ、そして破裂させるようにして解放する！

—— オーバーリミッツ：Lv1

発動の瞬間に放たれた衝撃波は、周り三人を吹き飛ばし、周囲の家々の壁に激突させた。 僅かに白い破片が飛び散る。

続いて全員がバタバタと地面に落ちて…… 結果、完全に気絶していた。

「はあ、はあ…… つ、はあ、はあ……、行くか。 敵はまだいる……」

一人ごちで、また、走り始める。 ゆっくりと、しかし急ぎながら。

思えば戦闘の際、いつもオーバーリミッツに頼ってばかりだ。

オーバーリミッツ…… つまりは限界突破。 当たり前だが、これは負担の大きな技術。

発動している最中こそ、身体は軽いし頑丈にもなり、反応速度だつて上がる。 だがその分、終わった後は非常に辛い。

……だが忌々しいことに、この技術に頼らなければ、俺はこの世界で一人で生き残るなんて出来ないのが現状だ。

……だが、このことを理不尽だとは思わない。 元より、今の俺は身の丈にあわないものを要求しているのだから。 でも——、

約2町、もしくは約120間。　もつと分かりやすく言えば約200メートル過ぎを走り、見つけた曲がり角を右に回り、少しずつ闘技場へと近付いていく。

——でも、情けないと思うし、このままではいけないとも思う。　自分には、力が無いのだから。

力が無ければ、どんな高尚な目的や理由があろうとも実行できないし、それ以前に自分さえも守れない。

これに異を唱える人はいるだろうが、俺だって承知の上。　偶然、必要なものが武力だっただけ。

何かに言い聞かせるように思考しながら、俺は胸の何処かにぽっかり空いた穴を覆い隠していく。　　そういや今までも、何回か同じことを考えた機会があった。

——なんて、冷静な俺が居るのを感じ取りながら。

……後から考えてみれば、これは俺の、情けない自分に対する手遊てあそびびと叱責の入り混じった只の自慰行為だった。　　理不尽と嘆かないといいながら、力を求める矛盾を自覚している人間の、哀れな抵抗だった。

………まあ、何はともあれだ。

仕切り直すようにして、はあと一息。深呼吸未満な深い安らぎ。

今回は、生存競争には勝ったが敗走したことには変わらない。そんな小さな『心労』が今日も溜まり、沈む。

………そういや、傷を負ったなんて知られたら、煩そうだ。少しだけ、憂鬱。

「はあー……」

……こうして俺は今日も順調に、心労スパイラルに陥っていくのであった。

第十一話　野望交錯の地：後編（後書き）

これから暫くはオリジナル路線を行いますので、原作沿いを期待していた方はゴメンサイ……

明日か明後日には次話を投稿します

第十二話　落ちた雫が広げる波紋：前編

「ふー……」

連中からどうにか逃げ切り、昨日から（実際はもつと前からだが）引き続きでファンシーなことになっている自室へと逃げ帰ることが出来た。　すぐ目の前には見慣れた扉立っている。

だが安心はしていない。　赤眼共のことだから、俺の部屋で待ち構えている可能性すらある。

まあ、だからといって独りきりで安心出来る部屋がないと俺も困るから、こうして戻ってきた訳だが。

……ホント、何やってんだろ。

出す音を最小にするため、ドアノブを少しずつ回す。　スツとドアを開け、滑り込むようにして中へ。　窓から差し込む夕焼けに照らされた部屋には、どうやら誰もいないようだった。

「……一安心、だな」

そう呟いて、自分の血が滲んだ上着を脱ごうとして……

「すつきありいいいいいいっ！！」

「へ？　　ちょぶごお！！？」

……突然現れた金髪に押し倒されました（誤字に非ず）。　気配

も何も感じなかった為、完璧な不意打ちだった。

背中と腹の両面に痛みというか、痺れのようなものを感じながら、こんなことをしやがったバカの顔を見上げる。

「て、てめえ……突然なにしやがる！」

「やだねえ、そんなに怒らない怒らない。つか、気配遮断は社会で生きるための必須スキルっしょ？」

貴様はどんな社会で生き抜くつもりだ。しかも何処でそんな知識仕入れた。

「モツチロン、マイパピイにです！」

ああ、そうだな、だと思ったよコンチクショウ！
そしてお前はそんなのを真に受けるな。

「そんなこと分かってるって、いやだなーもう。ウチはタダのノリで習得しただけですよー」

ノリでそんなもん習得すんな。

そして何故に関西弁っぽく言う、つかそれも何処から……って、待てよ。お前は？

身体を起こしながら、ふと聞いてみる。

「そ、私^{わたくし}めは。でもクレっちはマジで受け止めちゃってんだよね〜。

でも、まったく出来なくては涙目になってるクレっちときたら……
……ジュルリ」

……よし、色々待とうか。　つか待て、待ちやがれ。
お前と話しているとツッコミどころが多すぎて混乱するんだよ。

「いやあ……」

「照れるな！　…じゃなくて、ああもう！」

イライラするなあ！　ガシガシと頭をかく、きっと俺の頭にはデフォルメされた青筋が浮かんでいるに違いない。

それを見てそいつはどうどう……って俺は馬か！　でなくて……

！！

いちいちやっていては話が進まないと判断し、どうにか溜飲を下げる。

「なんで此処に居るんだよりユンヌ……」

「……？　何でって、此処は既にあたしらの部屋だけど？」

よし、まだ巫戯けるか貴様、あと一人称を安定させる。

俺は拳を作り、若干の笑みを浮かべながら言う。　と、流石にこれ以上はマズいと思ったのか、リユンヌは乾いた笑みを浮かべてやっと口にした。

……んとう。

「実はねー、クレッチがシヨウくんが帰って来たから貴様は荷物をさっさと片付けろ！　って言われちゃってね」

「……なるほど」

道理で、だ。　道理で部屋に置かれていた絵の数が半分以下にな

っているわけだ。 あと口調についてはスルーする。

「まったく、あいつはそこまで気を使はなくても……」

「あ、そう？ じゃあミーはこの辺で……」

「てめえは例外だよ」

「オウ、ノウ！？ なしてですか、差別はんたい！ そりゃクレっちは可愛いし、ナデナデしたくなるし、クーデレだし、寝顔見てるとハアハアしてくるし——」

…… あ、頭痛え。 てか常日頃の行いの差だと何故分かん。

…… 分からのだろうなあ、コイツのこういうところだけは素だしな。

「口いっぱいにお菓子を頬張る姿なんてそれはもう……」

「分かった、お前がシスコンなのは十分に分かったから」

「それに——」

まだ続ける気が貴様。 げんなりしながら、もうコイツ放置してやることさつさと終わらせよう、なんて考えていると。

「——やることやったら、また出て行くんっしょ？」

「——」

信じられなかった、リユン又がこんな冷たいを放ってくるだなんて…… コイツのことは、本当に分かんよ。 まあ、結構今更だが。

そしてそれに俺は何を思ったか、口を開こうとした。

「えっとだな、リユン……」

「てことでシリアスは終了、序^{ついで}にあちしは退室」

「って待たんかいっ!？」

なんでシリアスが続かないんだよ!？ 半ば反射で動いた俺は、リユンヌの首根っこを掴み、拘束する。

……まあ、それからしない方が良かったと気がついた訳だが。

「……じゃあ待ったらさ、シヨウヤは事情を話してくれると解釈してもよろしいナリか？」

「うつ……」

ぐうの音も出ないとはこの事か。そしてリユンヌはその吸い込まれそうな碧眼を以て、俺を覗き込んでくる。
いやはや、何でこんなに鋭いのかね……。

「……分かってるって、言えないことなんでしょー？ だからシヨウチーは何も言わなかった、何も言わずにギルドを出て行った」

ブスリ、ブスリ、ブスリ。 例えるならば、そんな擬音と共に言葉が突き刺さってくる。

「兎に角さ、要はクレっちを心配させないことだね。……ま、それである娘と触れ合う口実が出来たのは、嬉しかったけどサ」

いやー役得役得、と満足げな表情で言うリユンヌ。
普段なら、ここで一言一言言い返してるところだ。……でもそんな行為すらできず、ぼそりとそうか、と言うのがやっとだった。まあ、なんと言うか……なんだかんだあってもコイツもあの娘の姉で、師匠夫婦の娘で……少しは見直したかな。

「じゃさ、なにやる知んないけどさ、頑張りなよ、青年！」

「いっ——！？」

「へ……？」

俺はうごおおーと悶絶し、再度床に横たわる。……こ、こいつ、あろう事が怪我してる背中を、セリフの終わりと共に思い切り叩きやがった。

……前言撤回だ、何が見直しただ。しかも素でやりやがるとか、マジで始末に負えん。

「ちょ、大丈夫！？　てか背中怪我してんじゃん！？　まさかマイハンドパワーが原因かッ！？」

「……て、ため、こんな時までボケかますとか……ないわ」

「……う、ま、まあ今回はマジで謝るわ。まさかこうなるなんて、普通思わないし」

分かる、分かるから俺の身体ガクガク揺らすの止めて、胃の中は空っぽだけど何かリバーズしちやいそうだから！

……そうしてこうして数分後、漸く治療にはいる事になった。

まったく……傷が悪化するは（たぶん、いや間違いなく）コイツに
バレるは、勘弁してくれ。

「大丈夫なの？　　やっぱ医者 of センセに言った方がいいんでなく
て……？」

それに手伝おうか？」

「大丈夫だよ、もう慣れた」

そう言いながら、包帯の束を身体に回していく。　　そしてついで

にアップルグミを口の中へ。

甘ったるい味と匂いが広がる。　　関係ないが、俺はこれの味は好

きじゃない。　　甘過ぎる。

……グミはこの世界では一般的な傷の治療手段の一つだ。　　だが
それは応急処置としての側面が強く、あと身体のことを考えるなら
多様はしない方がよい。

そんな事を最初に教わった。　　あと一つ付け加えるなら金額の問
題か。

例えばアップルグミ一つは1000ガルド前後だが、これだけあれば
屋台で一食分は食える。

……それだけ高いものを、一度の戦闘や日常での治療でいつも使う
など、出費が馬鹿にならないのである。

「これでよし、と……」

「……少しはさ、手伝わせてくれてもいいじゃん。　　その方が罪
悪感も軽くなるし」

「ならその方が都合が良いな、お前が静かになる」

まあ、自分から言ってちゃ世話ないが。でもその方がコイツらしいか、とも思う。

「ふん、そうですかー……って。なにどっか行くんでせうか？」

ベッドの下の収納から、適当な上着を見繕い、羽織る。この時、この服さっきと同じじゃん、とか突っ込んではいけない。

「お偉方との会議だよ、っと。つかカレルさんから聞いてないのか？」

「ん、なーんも聞いておりませんです、はい。でも大変ですなー、色々と……」

色々、の後はなにが続くのやら。

まあ、心配してくれてるらしいことは分かるので深くは追求しない。

俺は入り口のドアに手を掛け、もういくぞと言う。

「んじゃ、いつてらっさい」

「……て、何やってんだ、さっさと家に帰れ」

「えー」

「えーじゃねえ！」

どうしてテンションが最初に降りかけてんだ、反省してんじやないのか。

リyunヌを無理やり部屋の外に放りだし、ドアには鍵をかける。
勿論ぎゃーぎゃー煩いのは一切無視して。

「……はあ、疲れる」

「溜息してると、幸運が逃げますよー」

「誰のせいだ、誰の」

- - - - -
- - - - -

「失礼します」

「おう、入れ入れ」

場所は変わり、闘技場の一室。
室として使う部屋だ。

『バレストラレ戦士の殿堂』が一般的に会議

ズラリと並ぶ各部門のトップとその補佐、そして頭領代理ドワーチエの計七人
が既にそこにいた。やべ、最後か。

「すいません、遅れました」

「別に誰も気にしちやいないよ、それにキミは今日の件の立役者だ
もの」

「そうだね、それに帰ってきたばかりなんだから、もう少しゆっく
りしていても良かったんだよ？」

「でも戻ってくれて助かりましたけどね、うちの連中なんて頭領代ドワーチエ

理の扱いが酷いから逃げ出したって思ってたみたいですし」

次々に言うのは経営と経理、それぞれの長に経理部長の補佐役。
なかなか背中が痒くなる言葉だ。

トウチエ

……『頭領補佐』とは言っても、俺の役職は実質ただの全体的なサポートだ。　だとは言っても結構な役職ではある、出世欲などが全然ないギルドではあるが新人がいきなりそんなのに就くのは、色々問題があるのではと俺は心配はしていた。

だがまあ頭領補佐、つまり普段は頭領代理の補佐をするわけだが、この時のナツツさん人使いは酷かった。　……切実に。

そしてそんなことがあったからか、他のメンバーが俺を見る目は憐れみを含んだものになり、割と早い段階で受け入れられたのだった。

「もうその辺いいな、では始めるか」

挨拶もそこそこに、ナツツさんが会議の開始を宣言をする。

まあ、そこまで堅苦しい訳ではなくて、どちらかといえば和気あいあいとした空気だが。

ギルド、『戦士の殿堂』は、ギルド社会では少々特殊なギルドだ。
バレストラーレ

ノードポリカという街一つを治め、闘技場を運営し、当然ギルドの街だから帝国の法も気にせずギルドとしての掟を尊ぶ。
ここまでくるともう小さな国家だ。

「あの男に壊された結界魔導器だけど、筐体がイカレちゃってるから取り替えた方がいいね」
コンテナ

「そうか、じゃあうちの技術班に……」

そして大きく違うのが、ギルドの長たる存在、ドワーチエ頭領がギルドの運営にあまり関わらないというところだ。通常のギルドは、最大勢力の『アルトクス天射る矢』でさえも長が中心となり動く。だから首領にもしものことがあれば、そのギルドは機能しなくなってしまうという構図が自然と出来上がっているのだ。

……さて、蛇足終了。

そして会議も終了。

「……では、今回はこれで——」

「あの、少し良いですか」

ナッツさんの言葉を遮り、前にでる。

……さあ、我が儘な足掻きを始めよう。

誰にも気付かれないよう僅かに深呼吸、早まる鼓動を静める。皆の目かが自分に集まるのを感じ、そして口を開いた。

「俺、世界を色々と回っている時に、ある噂を聞いたんです」

「ウワサ？　どんなよ」

「——ギルド、『魔狩りの剣』がうちを狙っているという噂です」

——瞬間、空気が死んだ。

そして現れたのは、自らと仲間、そして主の居場所を守らんとする、七人の戦士たち。

「シヨウヤ、話を詳しく聞かせてくれるかな」

「分かつてますよ、せんせい 師匠」

久しぶりに見る真剣な表情のカレルさんに、俺は頷く。

——今此処に、『戦士バレストラーレの殿堂』の命運を賭けた壮大な、でも真偽入り混じる作戦会議が始まったのだ。

第十二話　落ちた雫が広げる波紋：前編（後書き）

短いうえにg d g dとか……

まあ、そう言う訳で（どういう訳だ）p v 2 0 0 0 0 0 0 も突破しましたので、作品全体の気分転換も兼ねて

読者の皆様から番外編のリクエストなどを募集しようかなと思います。

『期限は来週の日曜いっぱい』と言つことをお願いします。

第十二話　落ちた雫が広げる波紋：後編

「それにしても、厄介なことになったわね」

「……だな。　こんなことは初めてだ」

かれこれ三時間が過ぎようとしていた頃だ。　窓から差し込む光は夕日から月光に移り変わり、時間の経過のほどを知らせる。

一通りの『作戦会議』を終え、皆一斉に疲れた表情を浮かべていた。普段影でクールビューティーと呼ばれる経営の長でさえそうなのだから、俺の顔はよほど酷いモノを晒しているに違いない。

……あの件に関して、色々な事をぶちまけた。　勿論内容は選んでいるが、最初から最後まで突拍子のない話なのだから表現の間違いはない。

因みにあの件とは、だ。　魔物討伐専門ギルド『魔狩りの剣』が此方を襲撃してくる、というものだけではない。

その裏にはギルド『海凶の爪』リヴァイアサンの爪が居ると言うこと。　そしてさらに、裏には『依頼者』が居ると言うこと。

「でもシヨウヤ君が知らせてくれて良かったよ。　もしかしたらギルド社会全体に悪影響があったかもしれないんだから」

「……そう、ですよ。　もしウチらが何も知らなくて、かつユニオン経由の『依頼』という形で『魔狩りの剣』が来ていたとしたら……ぞっとします」

それは考え得る限りの最悪のシナリオで、最も実現していた可能性の高いシナリオだ。…………ゲームでは、そうだったから。奴らは五大ギルドに近いネームバリューと実力を誇る武闘派ギルド。さしもの『戦士の殿堂』^{パレストラーレ}とて、奇襲を掛けられればタダではすまない。そして最終的に待つのは…………頭領ベリウスの死。^{ドゥーチェ}だが負の連鎖は止まらない。『依頼』はユニオン経由、則ちユニオンが『戦士の殿堂』^{パレストラーレ}襲撃を助長したと言っことになる。そこには『だれかれに利用されたとは知りませんでした。だから許してください』なんて戯れ言は通用しない。

罪には罰を、裏切りには報復を、そして——死には死を。

ベリウスさんが襲撃によって…………考えるのも不快だが、死ぬような事になればそれに見合うだけの代償を要求することとなる。

『南のベリウス』に釣り合う人物とくれば只一人。…………『北の大首領』^{ドン}こと、ドン・ホワイトホース。

そしてドンは誇張でも何でもなくユニオンを支える、最も重要な柱。そんな存在がいなくなれば、ギルド社会全体が停滞することになる。

たとえそうならなかったとしても、次に待つのは戦士の殿堂と天射^{パレストラーレ}^{アル}の矢の全面戦争だ。^{トクス}

…………いずれにせよ、最悪。だから俺たちがそれだけは防がなければならぬ。

「取りあえず、今日のところはお開きだ。各自、街に入りこんで居るであろう『敵』に気取れないように。…………頭領には私から伝えておく」^{ドゥーチェ}

『はい』『ええ』『ああ』

静かな石造りの部屋に響く、幾人もの声。それは熱く、そして寒気に包まれたものだった。

……これからどうなるのか、それはわからない。俺は言いようのない不安と希望の渦巻く心を抱えながら、でも一步一步『漸進』するしかないのだから。

- -
- -
- -
- -
- -
- -

「ショウヤ」

「？ はい」

懐かしい面々と次々言葉を交わし会議室から退室しようとする、とカレルさんに呼び止められた。……あー、そついや挨拶してなかったっけかな。

お久しぶりですと言うも、ああ、と素っ気ない。でも不機嫌という訳でもなさそうだ。むしろ良いようにさえ感じられる。

「少しつきあえ。丁度届いたんだ」

「……？」

届いたって、なにが？ と訊こうかと思つても、それが憚^{はば}るべき事のように思われた。

何故って……だってカレルさんの顔が親に玩具を買って貰った子供

にしか見えないからだ。

言われるがままその後を付いていく。その先にあったのは警備部の執務室。……ほとんど意味を成していないから、通称『休憩室』と呼ばれているが。

カレルさんに続き中に入る。

「ウスツ！ カレルさんお疲れ様で……す？ ってシュリさんじゃないっすか！」

うわでたという言葉を呑み込み、ヒサシブリダナーと返す。カタコトになってしまったが気にしない。なぜならこのアホが気にしていないから。

暑苦しいのを適当にいなし、体力の消費が最小になるよう言葉を交わす。そしてタイミングを見て……

「で？ お前その格好……これから夜回りか？」

「あーそうだった、もう行かねえと。クッソー、シュリさん土産話が聞けると思ったのに……！」

「そ、そうか」

……分かったからさっさと行けよ。暑苦しい奴の相手なんてゴメンなんだ。

カレルさんなんて部屋の隅でゴソゴソしながら何か探してるから助けてくれない。

また後でー！ なんて言ってくるのに対して、もう二度と来るなど内心罵倒し殴り付けておく。

なまじ俺を慕って？来るからそう無碍にもできない。……誰かアイツを止める。具体的にはあのバカの幼なじみ（女）……！

「お、あったあった。やーっと見つかったよ」

「……なら片づけしましょうよ。なんですか、この不要物の山」

チェスモドキやランプモドキが転がっているのを踏まないようにカレルさんに近寄る。……って酒瓶。またここで酒盛りしてたのか……。

流石といふかなんというか、まさにダメ人間の巣窟だな……（偏見）。

「まあまあ気にするなつて。いつもの事じゃないか」

「……まったく。まあ、たしかにそうなんですけどね」

でも限度があるだろう云々と続けたかったがその思考は放棄だ。今はカレルさんがもってる細長い物体に興味がある。

長さがそれなりにあつて、全体を白い布に包まれている。あれ、これって……。

「これを作るのはいろいろ大変だったみたいだね。ノビスのヤロウがばやいてたよ」

「ノビス……？」

「ん、ああ。ギルド『ソウルサスミス魂の鉄槌』の知り合いだね」

俺は思わず目を丸くした。あのノビスかと。

彼はゲームでリタの最強装備、アイヴィーブレードを手に入れるサブイベントで登場していた。そんな人が『作った』とくれば……。

腕をふらふらとさせながらそれを受け取る。カレルさんの声にも生返事を返しなからだ。

するりと布をはずし、長方形の木箱が現れる。

木箱の蓋を開け、中身を外気晒す。

そこにあつたのは鋼の板と、拳二つ半程の長さの短めな鉄塊、そして鋼の板と同じくらいの長さで装飾が施された鉄の筒。

……刀と呼ばれる、最早芸術品にまで昇華された武器だった。

「これは……」

「いい品だろう？ 滅多にない業物だ」

「ええ……」

……綺麗だ、そう素直な感想が浮かぶ。

反りの少ない鋼は薄く、ブラウンの色合いと光沢を放っている。

刃は切刃造。きじは

そして注目すべきは鋼に走る、幾多の筋だ。それが、大地に根を張る大樹の年輪を連想させる。

加えて、柄に近い部分では筋が『戦士の殿堂』パレストラーレの紋章を作り上げていて、それがずば抜けた技量を持つ刀匠の作なのだと信じて疑わせない。

「噂には聞いてましたが、それ以上ですね」

「へえ？　これが何か分かるのか」

「まあ、一応」

ダマスカス。

その言葉を聞いた事はないだろうか。　また聞いたことのある人にとっては、それがファンタジーゲームの中だと言う人も多いに違いない。

この『ダマスカス』は、オリハルコンやミスリル銀などに次いでそこそこファンタジーに登場し、超自然的な金属として扱われるのことが多い。

最終的には剣などのインゴットとして使われるのが、通例だろう。事実、テイルズオブにも合成アイテムとして、同名のアイテムが存在した。

……だがこの金属、他二つと絶対的な違いがある。

『ダマスカス』は―――――
実際に存在する金属なのだ。

正式名称、ダマスカス鋼。

これはシリアのダマスカスで作られた刀剣に、この鋼が使われたことに由来する。

また元々の鋼自体はインドのウーツで製造された物であるため、ウーツ鋼と呼ばれることもある。

只惜しむべきは、この鋼本来の製法は、二百年以上昔に途絶えてしまったことか。近い所までは製法が再現されているが、完全には至っていない、らしい。

特徴としては、先程述べた色と木目調の模様を持っていること。

錆びにくく丈夫で、嘗ては本当^{かつ}に強靱な刀剣の素材として重宝されていた。

過去にはダマスカス鋼製と謳った贗作が出回っていたこともある。

身近なところでは、製法が再現された物がネット販売などで購入可能で、ナイフやキッチン周りの包丁などがある。

また、ナイフビルダーにはダマスカス鋼に取り付かれた者も多くいる。その為、高度な技術を施されたナイフも存在するのだ。

「でも、いいんですか？」

「ん？ …… まあね。そろそろその得物^{えもの}じゃあ息切れするだろう？」

いや、そうじゃないんだが……。武器なんてものは基本高級品だから、流石に気後れするというもの。

生涯小市民な俺としては遠慮しないことがあるだろうか、いやない（反語表現）。

「遠慮せずに貰っつけ、馬鹿弟子。お前は何でもかんでも遠慮しすぎだよ。少しは相手の顔を立てることも覚えろ」

「……はい」

そうまくし立てられ、受け取る事にする。

右手に刀、左手に柄を。そして槌の紋章の彫られた茎^{なかじ}をゆつくりと差込み、組み合わせていく。

「できた」

始めて一分弱後。 刀の切っ先上に向け、それを見上げる。

……刀、と言うよりは片刃の剣と言ったほうがしっくりくるな。色といいフォルムといい。

「ありがとうございます。 気に入りました」

「そうか、それじゃあ早速……」

「へ？」

ユラリと幽鬼もかくやという寒気と恐怖を纏いだす師匠。 どう考えても悪い予感しかない。

Warning! Warning! そう頭の中にアラームが鳴り響く。 いや、もう手遅れだから。

一瞬目の前で白刃が煌めき、半ば反射で右手の剣を構えた。 カアアッ! !と響く金属音。 動いた時に生じた風が、周囲の書類を紙吹雪のように巻き上げる。

「ちょ、なにやってんすか! ? 室内で物騒なもん振り回すな! 」

「ハハハ。 いやだねえ、弟子の実力をすぐにでも見てやろうという師匠の優しさじゃない力あ? 」

なんで既に戦闘モード! ? 果てしない不安、つか恐怖を抱かせ

る。

え、逃げ切れる気すらないんですけど！

「いらねーですよそんな優しさ！ どう見てもカレルさんの自己満足だろ」

「ク、クカカカ。 ここ半年丁度いいえも…… もとい相手が居なかったからなあ。 楽しませてくれヨ？」

「勘弁してください見逃してください。 てか話が噛み合っていない……」

それに獲物って言いかけてたし。 あれですか、俺はハンターに狩られる哀れな獣ですか。 冗談じゃない。

てか野生動物は殺して直ぐうまい具合に血抜きすれば案外臭くないんだよなあ。 …… うん、まったく関係ない無駄知識、兼現実逃避。

「『瞬連刃』！」

「ちよっ！ いきなり！」

迫る三つの斬撃を受け流し、最後の一闪が来る前にバックステップ。 ホント迷惑だな戦闘中毒者って！ …… もしかして普段から『休憩室』が荒れてるのはこれが原因ですか、そうですか。

「大体お前は私の娘達を誑かしやがッテ。 それに何故、家族内の私の扱いが酷いんだッ！！」

「人聞きの悪いことを言わないでください！ あと後半は只の八つ当たりですよね！？」

「日頃之鬱憤、此处で放出せん！」

「やっぱり八つ当たりだった!？」

瞬連刃、烈碎衝波、弧月閃。 斬撃や衝撃波の諸々が飛び交い、襲ってくる。

言うまでもなく部屋の中が悲惨なことになっていき、まるで台風の通った後だ。 同時に俺まで生傷が増えてくるから二重の意味でやばい。 ……って

「……？ なんでおm」

「ハあああ！」

「くツツ！ い・い・か・げ・ん・に、しろお！」

切っ先を床に向け、そのまま振り下ろす。 無論エアルを流し込みながら！

「『クルエルエディクト』！」

「又うつ！」

途端、俺自信を中心に数本の氷柱が姿を現す。 そして次の瞬間には、氷柱が砕け散り、こぶし大の氷塊が襲いかかった。

室内だから避けることが出来ず、カレルさんの動きを縫い止める。

「……カレルさん、いい加減にしません？ さすがにこれ以上は――」

「ほう、自ら技を編み出したか。 強くなったじゃないかあ」

「………………。 ダメだ、徹底的に性格変わってやがる……………」

リアルチート＋戦闘中毒＋二重人格。 ……社会的な意味でも個人的な意味でも、害ばかり捲き散らかす三連コンボだ。

…… 始末書を最低十倍にして課すしよう。 このくらいの嫌がらせは赦される筈。 むしろ正当だろう。

「てこで……………」

「…………… まつかされましたあ！」

「うごぺあ！？」

突如現れた金髪の少女が、カレルさんの意識を木刀で刈り取る。

…… や、頼った俺が言うのもアレだが、お前そんなに強かったわけ？ 仕舞いには尊敬し出すぞ。 …………… やっぱなし、それだけは

ありえん。

俺は安全を確認し終えると刀を鞘に収め、ベルトに差し込んだ。

「やれやれ、相変わらずだねー。 ウチのダメ親父は」

そして当の本人——リユン又は木刀でカレルさんをつついて様子を見ている。

…… 42歳警備部最強剣士も娘の前では形無しか。 あと奥さんも。

「スマン、助かった。 リユン又って強かったのな」

「ふふーん。 よいぞよいぞ、 もっとわらわを讃えるが良い！」

「調子乗んな」

「あでっ」

頭を小突くと大げさに転こけて見せる。 そっぴいば何故此処にいるんだ？ と訊くと帰りが遅いから迎えに来るよう彼女の母親に呼ばれたのだとか。

……でもホントに助かった。 そう素直に言つと、 リュンヌの表情がビシリと固まる。

「な、なに？ いきなりどったの。 ハッ、 まさかこれがデレイベントかッ」

「待てい。 俺は何かの属性を備えた覚えはないぞ」

「え？」

「え？ じゃねえよ」

……まあ、ある意味尊敬するかもな。 こいつはきつと相手が頭領ドワーチェだろうと大首領ドンだろうと態度は変えないのだろう。

「ま、 兎に角あたしはコレ引きずってくから」

「ああ、任した。 俺ももつかえ——」

——グウウウ。 俺の腹の虫が鳴り、リュンヌは笑みを浮かべ

ていた。　ちとハズい。

まあ、いいや。　笑うならいつそ存分に笑え……！

「まだ夕食食べてないの？　じゃ寄って来なよ。　母さんもクレッチも喜ぶから」

「なっ！？　リユンヌが優しいだと？」

「なにを今更、あたしは女神の如く慈愛に満ちたお方ですよー」

「はっ」

「鼻で笑うなー！　いいもん、ここで父さんの意識を覚醒させてやるもん！」

それだけは勘弁と即座に土下座に移行。　するとこいつ、俺の背中を踏みつけ勝ち誇ったように笑う。　調子に乗るな！

それからまた2、3のやり取りを交わしてやっと部屋を出た。　そこでクルリ振り返り、足下の生物を指さし口を開く。
ナマモノ

「じゃ、夕食食べてく変わりにソレお願いねー」

「お、おう……」

「大丈夫だって、あとでちゃんと告げ口しとくから。　ショウヤが卑怯な手使ったって」

「それ事態が悪化してるよな！？」

あっはっはと笑う声が、不思議と俺の気持ちを軽くしていた。

番外話〜第三のワタシの神話：IF編〜

ここは世界樹に見守られし世界、ルミナシア。

人々は大地の恵みである星晶ホスチアを採掘し、文明を支える糧としてきました。

ですが星晶はありとあらゆる生き物にとって必要なマナを生み出す、という側面を持っております。

……その意味するところは、世界は少しずつ、確実に破滅への道を歩んでいる、と言うことです。

事実、世界各地で生き物の住めない死の大地が広がり始めているのです。

そんな下り坂の星に……母たる世界樹は、一粒の希望を産み落としました。

それが……この世界ホシの新たな命——ディセクターの誕生です。

その世界の海の上には、今、パステル調のデザインの『船』が、燦々と降り注ぐ陽光を反射しながら飛んでおります。

その『船』の名は、バンエルティア号。ギルド『アビリビトム』の活動拠点であり、また彼らの家として、その名を世界に轟かせているのです。

これから始まる物語は……もしかしたらあり得たかもしれない、そんなIFもしもの物語。

主人公は、記憶を無くしギルドに拾われた謎の人物、『あなた』です。だが、“この世界”は“他の世界”とは少し違います。イレギュラーの名は突如として異世界へと来てしまった来訪者^{トリッパー}、守里翔矢。

……それでは、イレギュラーによつてほんの少し変わった世界をお楽しみ頂きましょうか。

時と場所は……そうですね。『あなたたち』が精霊に創世の話を聞こうとして、常冬の山にて精霊を守護する者リヒター・アーベントを倒し、誤解を解き、氷の精霊セルシウスが現れた時などいかがでしょう。

丁度、この辺りから『あなた』の視る世界が他とは少し、変わり始めたその時です。

……ああ、二つ忘れておりました。これは、同時に『あなた』の正体に迫る話でもあります。未だ『あなた自身の目』で確かめておらぬのであれば、注意なされた方がよろしいかもしれません。それにこれは、貴方が『第三のあなた^{マイソロジー}の神話』を知らなければ、理解し難くなること必須でございます。

……実は少々執筆者がヘマをやらかしましてな。文句は本人に言うのがよろしいかと。今ならば普段の数倍はダメージが効きますよ？

……まったく、祿に計画を練^ねらずに始めるからこんなこんなことに……あの能無しが……。

つと失敬。

それでもよろしいのでしたら、どうぞ御覧になってやってください。

長々と失礼いたしました。それではどうぞ……。

粉雪の舞う常冬の上——霊峰アブソール、その山頂。そこには
五つの人影があった。

……あなたは精霊に話を聞くために、わざわざ此处まで足を運んだのだった。

「それじゃあ……創世の時にについて、聞かせてくれ」

あなたの仲間の小柄の少年、カイウス・クォールズは目の前の女性に質問する。

だが目の前の女性……いや、見ようによつては少女にさえ見えるのかもしれないその人物は、困ったような表情を浮かべた。

「創世の時……。ごめんなさい。それについては答えられないわ」

「ええっ！？ そんなあ……」

残念そうな……否、事実そうである気持ちで声を上げたのは気弱
そうな少年、エミル・キャスタニエだ。

「だって、精霊にも世界の始まりの事はわからないんだもの」

精霊……すなわち、この女性は人間ではない。世界に満ちる生命^{マナ}力を司る存在の一面、精霊セルシウス。人智の及ばぬ、神秘の具現化した存在だった。

さも当然といった具合に言い返した精霊の女性は教え諭すように続ける。

「精霊という存在は、世界が創られた後に生まれた者。わたしたちは、マナを自然現象の循環に作用させる為に生まれたのよ。そして、ホスチア星晶により封じられていた『あの存在』の事しか知らないわ」

「『あの存在』ってなんだ？」

「わたし達、精霊にもわからないの」

またか、そんな表情をあなたたちは浮かべた。それを後目に、ただ、とセルシウスは言う。

「精霊が生まれる前に既にこの世界にいたものみたいよ。……精霊ですら届かない次元にいる、何か歪んだ力……。そしてそれが大きな災厄となるのを、本能的に理解しているだけなのよ」

「大きな災厄となる歪んだ力……。それを、ホスチア星晶が封じていたの？」

「けれどその封印は解かれてしまったわ。ホスチア星晶を人々が掘り尽くした事で」

「……やっぱり、いい話じゃないと思ってたけど……」

……当たってはいは欲しくなかった。その気持ちは皆同じであり……。同時にそんなものだろうと受け止めてもいた。

そんな中、あなたは気付いた。セルシウスの青き双眸が、常にあなたを捉えていることに。心の奥底まで見通し、見透かし、理解し、そして悟ったような厳しく、優しい表情。

「——だから、世界樹は『あなた』を遣わせたのかしら？」

「『あなた』……それって」

口の中がカラカラに乾き、やっとでた声も掠れていた。

「——『あなた』の事よ、ディセンダー」

一瞬、思考がショートし、火花をたてる。風の音が煩い。

どういうことだ、と言う疑問。
なるほど、という理解。

相反するものが混ざりあい、せめ 聞き合い、あなたは最終的に一つの
気持ちを抱く。

——そういえばそうだった、何故今の今までおもいださ 気付かなかった
のだろう、と。

「『あなた』って……えええっ！！！！ディセンダーだって……！！
？」

「あ……じゃあ記憶が無いって言うのは……予言で言う通り、世界
樹から生まれて何も知らないからだっただ」

「そういうことが、セルシウス。……こいつがディセンダーとはな」

周りが何かを言っているがあなたの頭には留まらず、反対の耳か
ら流れ出ていくようだった。

あなたは自分の中の気持ちを噛み締め、納得させようとさせてい
たからだ。……考えてみれば当然だろう。これは『あなたは救
世主です』と言われたことと同義だ、理解してもそう簡単に受け入

れられるような安易な言葉ではない。

そんな中でも、不思議とセルシウスの言葉ははつきりと聞き取れた。

「世界樹の福音受けし、『光纏う者』。——わたしもあなたに与して力を貸すわ」

え……？ と声にならない言葉を紡ぎながら、ぎよっとして氷の女性を見る。

「あの存在がどんな災厄かは分からないし、何を目的としているのか、わたし達精霊にもわからないけれど」

だとしても心強い。素直にあなたはそう思う。

漠然とした感覚でしかないが、そうあなたの本能——あるいはディセンダーとしての本能が訴えるのだ。彼女は強い、と。

「なあ、もしかして、その災厄つてのは『ラザリス』の事じゃないのか？」

「……『ラザリス』……それってまさか……」

小さな声であなたやエミルに掛けた声を耳敏く拾う氷の精霊。

その顔は驚きの表情を浮かべていた。

聞き覚えがある、とでも言うように。

「ねえ、リヒター。この地を護るだけでは済みそうにないみたいだわ。……『彼』の言っていた通りになりそうね」

「……不本意だが、そのようだな」

「あの、『彼』って……？」

3人の抱く疑問をエミルが代表して二人に訊く。

「今から数ヶ月にここを訪れた男のことよ。ここに来た者とリヒターが戦わなかったのは、あれが初めてじゃないかしら」

「殺気を当てられながらもかわらず、剣を捨てたからな。……
…そのうえ土下座までしてきたんだ、戦う気も失せるというものだ」

懐かしそうに、或いは呆れたように言う二人。

……自分たちも剣を外していれば、戦わずに済んだのかもしれない。
い。そうあなたは思う。

尤も、他二人の内一人は従いそうにないが。

「その『彼』が言っていたのよ。……もうすぐ、ラザリスという
名のあの存在が現れる。でも否定しないでやって欲しい、とね」

「否定するなって………どういうことだ？」

「それについては分からないわ。聞こうとしてもはぐらかしてばかりで、教えてくれなかったのよ」

「そこが一番重要なのに………」

……エミルの言う通りだとあなたは頷く。否定すると言われるまでも、理由が分からなければ納得し難い。

ましてや——現れた原因が人間だったとしても——被害は各地から報告されているのだから。

「そう言えば、そいつの名前は何て言うんだ？」

「——たしか、ショウヤ・シュリと名乗っていたわね」

「ふん……」

ショウヤ……どこことなくギルドの仲間であるしいなやすすに響きが似ている気がする。……同郷だろうか？

「兎に角、ディセNDER、わたしも『あなた』に付いていくわ。解き放たれた災厄より、この世界を護るために」

……これが、昨日あったことだ。アドリビトムのメンバーには、瞬く間にあなたがディセNDERだということが広がり、騒ぎになっていた。

だというのに皆の態度は変わらなかったことに、心が温かくなるものを感じたのはあなたの記憶に新しい。

そんなあなたは今、仲間の一人である藤林 しいなと藤林すずに謎の人物に心当たりはないか、話を聞いていたのだ

「ショウヤ・シュリ……あたしら風にいうとシュリ・ショウヤか。こういう名付け方をするのは今ではミブナの里だけなんだけど、聞いたことないねえ」

「私も聞いたことがないです。……すみません、お力に成れなくて」

いやいいんだ、とあなたは応える。しかしあなたは一拍ほど間を置いてからそう言えばと言葉を紡ぐ。

あなたはあの後、セルシウスやリヒターにその人物のことを聞いていたのだ。

なんでも異世界から来ただとか、帰る方法を探しているとか、さらには周囲のマナに自在に干渉して物質を空中から出して見せたとか、実に眉唾感漂うものだった。でも精霊とその守護者相手に嘘をつくとは思えない。

「はあ？ なんだいそりゃ。それ嘘なんじゃないの？」

「でも異世界云々は兎も角として、マナに自在に干渉して、というのは事実なんですよね」

こくりと頷く。そのことに関してはセルシウスとリヒターから確実な裏が取れているのだ。これ以上無いくらいの証明だろう。

「でもそうなるっていつは、ソウルアルケミーが使えるってことに

――」

「なーんか面白そうな話をしてるわね」

「じゃまするわよー」

「ハロルドさんにリタさん」

そこに現れたのはハロルド・ベルセリオスとリタ・モルディオ。因みにハロルドは、後世の人が勘違いして面白いと言う理由で男

性名で名乗っているが歴とした女性である。

そして当のハロルドは興味津々といったように目を輝かせている。

……知っているとは思えないが、念のため。 そう思い二人にその人物の事を聞く。 すると思いがけない返事が返ってきた。

「ああ、そいつなら知ってるわよ」

「ああ、あたしも」

「え、本当かい!？」

「嘘言つてどうすんのよ。 黒髪黒目、カタナって武器を持った異世界から来た男でしょ？ 前に異世界に渡る方法ないかって訪ねてきたのよ」

「話を聞く限りじゃ同一人物っぽいわね、尤もソウルアルミーの事なんて一言も聞いてないけど」

不満そうに腕を組むリタにちょっと待ってなさいよーと言い、ごそごそとポケットを漁るハロルド。

ハロルドはそれも違うこれも違うと言って目当てのものでは無いらしいものを次々放り出していく。

見る間に、何に使うのか分からない機材の山が出来上がった。

……この光景に、何故だかは知らないが見たこともない青狸ロボットの連想してしまったのは仕方のない事だろう。

「す、すごいですね。 これ、明らかにハロルドさんの体より体積が大きいです……」

「あつたあつた、これよこれ」

すずの呟きを無視し、ともすれば、音符が見えそうな表情でハロルドはその手にあるものを掲げて見せた。……何かの探知機、だろうか？

いずれにせよ、良い予感はない。

「……それがあたしの目には発信機の電波を拾う受信機にしか見えないんだけど、一応訊いとくわ。……それ、なに？」

「もちろん、その受信機よ！ 前そいつが来たとき丁度改良が終わったから実験代わりにつけてたの。ま、それっきり確認してなかったから無駄だったんだけどね！」

はあ、と四人同時に溜息をつく。そしてこれまた同時に思いつくのは、マッドサイエンティストと言う言葉だった。

……ハロルドの人柄をこれ以上ないくらい、正確に言い表せる言葉だ。

ハロルドがその機械に電源を入れると、甲高い電子音を規則的に響かせ始めた。

「これによると。方角と距離から考えるに、オルタータ火山にいるみたいね。戦闘なんかで外れるような構造はしてないから、あつてるハズ。丁度いいから連れて来なさいよ、私もそいつにもう一度会ってみたいから」

「あんたは行かないのかい？」

「私？ 私は今、実験が良いところで長時間研究室を留守にする訳にいかないのよ。今だってその間の数少ない休憩時間だし」

「ま、そういうことよ。あたしもからも頼むわ、きっちり連れてきてね」

依頼 謎の人物を連れてきて！ が出されました。
ハロルドから依頼が受けられます。 ▼

依頼人 ハロルド
難易度
種別 特殊クエスト
目的地 オルタータ火山
ターゲット ショウヤ
目標数
メンバー数 4人

報酬候補
1000ガルド 100%
メリット 獲得経験値15%増加
同行者 カノンノ
ジエイド

このクエストを受けますか？
↓ はい
いいえ

場所は変わり、オルタータ火山である。溶岩の上に掛けられた様に存在する岩の通路を通りながら目的の人物を捜していた。

人数は四人。あなた、カノン・グラスバレー、ジェイド・カーティスそして――

「あつちい……。なあーんでオレ様がこんなところに……」

「おや、ゼロス。だいたいあなたが来たいと仰ったんじゃないですか。今更文句は言わないでくださいよ」

ゼロス・ワイルダー。何故同行しているかと、ジェイドの言うとおり、珍しくあちらから声を掛けてきたからだった。

理由は知らない。強いて言えば大いなる意志が働いたからだろう。

「そうなんだけどよー、さすがに此処まで暑いとは思わないってな、カノンちゃんもそう思うだろ？」

「え？ えーと、そう、ですか？ ここには結構来てるから、もう慣れちゃいました」

「うわ、カノンちゃんマジメっ。そこに痺れる、あこがれ――」

「いつもチャラチャラしてる誰かさんとは違うと言うことですよ」

「うおおい！ 人の台詞に被せてこないでよー！」

「それは失敬、なにぶん歳を取ると耳が遠くなるもので」

「相変わらず都合のいい耳だよな、おっさん？」

「あ、あはは……」

なにやら普段の彼らとはイマイチ違うような遣り取りをしているが、気にせず歩を進める。

カノンノは二人のだす空気オーラに戦おのき、関わらないようにしようと決めたようだ。

その時、ジェイドの持つ受信機——ハロルドに出かける前に渡されていた——が一際大きな音を立てた。……目標が近い証拠だ。

「この方向は……ホスチア星晶の採掘跡地でしょうか」

「じゃあ、ここから結構近いですね」

「マジで！？　じゃあさカノンノちゃん、これ終わったらお茶でもしない？　近くの町にオレ様行きつけの良い店があるんだよ」

「ええ！？　ええと……」

「無駄話もいい加減にしてくださいよ二人とも。目的の人物が我々に敵対しないとは限らないんですから」

「って、なんでわたしまで悪いみたいになってるの……？」

呆然した表情で呟くが相手にされて……いや、していない。確実にワザとだ。

……そうして騒いでいると、いつの間にか目的地へと着いていた。おちゃらけていながらも道中の魔物はしっかり避け続けていたか

らこそ、早く着いたのだった。

そう言えば、着いた時ゼロスがご都合主義乙！と叫んでいたがな
んだったのだろう。

閑話休題。

岩陰に四人が隠れ、中の様子をうかがう。 やや薄暗く、ここか
らは見えにくいため、よくよく目を凝らして、だ。

「これでいいか……」

採掘跡で小さく呟く青年の姿、なにやら地面をぺたぺた触ってい
るのが確認できた。

四人が互いに視線を交わし、こくりと頷く。

ジェイドを先頭に岩陰から出て、近づく。 別に足音と気配を消
してゝなんてことはしない。 こういう場では相手の疑念を強くす
る燃焼剤にしかない。

歩き出してからものの数秒としない内に青年は立ち上がり振り返
った。 はじめの一瞬だけは瞳に警戒の色が浮かんでいたが、直ぐ
に消え去り、驚愕の表情に変わる。

「……！ あんたら」

「失礼、ショウヤ・シュリさんですね？ 私はギルド、アドリビト
ムのお手伝いをしているジェイドという者です」

「そうだけど？ 某国の大佐殿が何のご用件ですか、ジェイド・バ
ルフォア博士？」

「おや私をご存じですか。　こんな若人にまで名が届いているとは、私も有名になったものです」

空寒いものを感じさせるものを貼り付けたジエイドは、あくまで丁寧な敵対の意志がないことを表そうとしている。　もっとも、その泰然自若なたいどに誠実さだけはどうやっても感じ取ることなど不可能だが。

「おいおいそんなにお堅く成らなくても良いんじゃないの、ジエイドの旦那。　年寄りくせーぞ」

「はて、いったい何の事でしよう。　ちつとも訳が分かりません。あといい加減にしないと、その指のささくれ引っ剥がしますよ？」

「んな地味にいてえことを。　つか、さっき自分で年取ったって言うてたよな？」

「いやですねえ、これは貴方の脳年齢を計るテストですよ」

「前作のドラマCDネタを引っ張ってくんなくて。　……振ったのはオレ様だけだな」

「もう！　ちよつとはマジメに仕事してくださいーい！」

二人の態度に耐えきれなくなったのか、カノンノが突如として声を張り上げる。　が次々とジエイドからコレも作戦のうちだとか、それを台無しにするとか、我慢が足りないカルシウムを取れとか、相変わらずの添え物ヒロインとか……次々と口撃を浴びせられ沈んでいった。

今まであつけに取られていた青年——ショウヤがポツリと呟く。

「……え、ここってメタ発言ありな空間なのか？」

「メタ発言？ 彼は何を言っているのでしょうかね、ゼロスーかつこ棒読みかつこ閉じ」

「さあ、オレ様にもさっぱりだぜかつこ棒読みかつことじ」

なんとも形容しがたい空気が漂う中、ジェイドはしきり直すように、んん！と声を立てる。

……そもその原因を分かって無視しているあたり、質が悪いと言われること必須だ。

「いやー実はですね。 かくかくしかじか、ということがありまして」

「いや、それじゃあ分からねえから」

「チツ」

「舌打ち！？」

「そのくらい察せないからキャラが安定しないんですよ」

「大きなお世話だ！！」

またもや空気が元に戻り始めるのを感じ、嫌気が差し始めたあなたはふと気付く。 ジェイドの表情は、面白い玩具を見つけた子供か、もしくは鼠をいたぶる猫の笑みに準ずるモノだと言うことに。

……新たな犠牲者誕生の瞬間であつた。

「相変わらず追いつめるね。この陰険鬼畜ロン毛眼鏡は」

「そうですか？ 私はいたって普通でいるつもりなのですが」

「あんたの場合、それが一番質悪いよな。っとその野郎、ありがたいこのオレ様のお言葉だ。耳かっぽじってよく聞けよ？ 完結に言つとだ。ハロルド・ベルセリオス博士が会いたがつてから、連れてこいつて言われてるのよねー」

「は？」

シヨウヤは思いもしていなかったのか、ぽかんとしている。だがそれも束の間、真剣なものに成ると、どういふことだと問いかけてくる。

「なんでもあなたがソウルアルケミーの技術を使つたとかで話を伺いたいそうですよ？ 氷の精霊とその守護者相手にやって見せたそうじゃないですか」

「……ついでに言うなら原子と光の両精霊とその守護者にもな。てか悪い予感しかないんだが……」

「だろうなー、下手したらお前、変な実験のモルモットにされんじやねえの？ でひゃひゃひゃ」

「ま、マジで洒落になつてないんですけど！？ そんな不吉なこと言つな！」

「でも我々も、貴方を逃がすつもりはありません。力尽くにでも来て貰います。……それに何より私も興味がありますからね？」

「くっ……………抵抗はしねえよ、くそつたね。ついていけばいいんだろ、ついていけば！」

数の差から勝利はないと踏んだのか、自棄になりながらも両手を挙げてみせる。……この時、何故自分たちが悪役になっているんだとあなたは頭を抱えた。

無理もない。事情を知らない者が傍から見たら、これはただの犯罪行為だ。そのことをジェイドに聞いてみると

「いやですねえ、私は軍人ですよ。その辺は適当に後から理由を付ければどうともなります」

と実にイイ笑顔で微笑んでいた。

「んじゃ、バンエルティア号に戻るとしますか」

「……………おい、そこで蹲ってる娘はいいのか」

「えー、それって誰ですか？ そんなピンクの髪の女性なんてしりませんよー？」

などと黒い笑みで言う某国大佐。

「ってジェイドさん！ 完璧に気付いて言ってますよねー！」

「おや、カノンノ。何時からそこにいたんですか？」

「最初からいたじゃないですか！？ もういいですー！」

「因みにオレ様は忘れてないぜ、カノンちゃん……っであら？
カノンちゃん？ 置いて行かないでよー」

またもや緩い空気が流れ出すのを感じ、はあとをため息をつく。
同時に隣からも聞こえてきたため、そちらに目をやると、目的の
青年だった。 青年はあなたの視線に気づくことなく、ぼそりと嘆
く。

「よりにもよって、なんでこの人選だったんだ……」

シヨウヤの瞳からこぼれ落ちた滴を、あなたは見なかったことに
した。

とりあえず、彼のこれからの未来を幻視して合掌したことは言う
までもない。

……シヨウヤをハロルドに引きわたした後日、研究室の下働きを
させられているシヨウヤが毎日のように見かけられるようになった。
それから時偶、注射怖い、とつぶやくようになったとかならなかったと
か。

クエストが達成されました！

報酬の 1000 ガルド を手に入れました。

メンバーに シヨウヤ が加わりました。

パーティー編成からパーティーに加えることができます。

番外話〜第三のワタシの神話：IF編（後書き）

今回はruさんのリクエストで他ティルズ作品とのクロスです

読み直してみるとグダグダ感がぬぐえない

それに期待にそえたものが出来たのか非常に不安です。

……え、期待してない？ 左様ですか……。

リクエスト企画は二回目ですが、慣れませんね……つくづく文才の無さが痛感させられました。

因みにこれは、もし主人公がマイソロ3に出ていたら、という作者の妄想の具現化です

それっぽく見せるために、わざわざ前半の流れを持ってきましたが失敗したかもしれません……

第十三話　完結し得た存在：前編（前書き）

夏休みの方が忙しいってどういうことなの……？
ということで二週間ぶりの更新です

第十三話　完結し得た存在：前編

Side other

「開始、交差、接続、終点、指定、想定……」

月も雲に隠され、そこには深い闇が降りている。　もう深夜と言っても差し支えない時間帯だ。

そんな時に、温かな魔導器ブラステイアの放つ光に包まれながら、青年——翔矢は呟きながら、手元の紙に幾重にも線を描いている。　だが彼が居るのは、彼本人の部屋ではない。

翔矢が師と仰ぐ中年男性とその家族の住む家、その一室である。

何故彼がここにいるのかと、それは偏にひとえ、翔矢の友人にしてこの家の住人であるリユンヌが原因であった。

翔矢が彼女に夕食に誘われて、その食事の席でのこと。　リユンヌがすっかり（翔矢は後に、あれは態わざとだったとリユンヌの母に語った）翔矢と数時間前に会った際、背中に怪我を負っていたと漏らしたからだった。

当初は翔矢は事の次第を言う腹積もりは無く、彼の師のカレルも本人の意志を尊重して聞き出そうとはしなかった。

……因みにカレルは食事の前に目を覚まし、再び翔矢に突っかったところを妻に折檻され、何時も以上に冷静になっていたことをここに記しておく。

だがそれでは納得しなかったのが、リユンヌの妹のクレールだ。

日頃から仲の良い異性が、何者かに襲われて怪我をしたと聞いて心配しない訳がなかった。詳しい話を聞かせてと言い寄るクレールと、それを適当にあしらう翔矢。言い合いは徐々にエスカレートしてしまい、終ぞには自他共に子煩悩と認めるカレルが止めに入ったほどだった。

そこで……どういう訳か、リユンヌがある提案をする。

『そんなに心配ならさ、この頑固ボーイを家に泊めちゃえば？　いつそ一月くらい。最適なガードマンも居ることだしさ』

この時、一瞬にして翔矢は悟った。コイツはこれが目的だったのか、と。

彼女も血生臭く人間くさいギルド社会で生きる人間だ。　シヨウヤが何かを隠していることなど既にお見通しであり、また、それが原因で襲われたのではないかという見当も、勘に依るものではあるがつけていた。

リユンヌもクレールも、性格こそ反対だが非常に良く似ている。
——分かり切っていることを、彼は再び思考で反響させた。

そしてクレールもそれに賛成し、更には彼女らの母親もそれに賛成。……家庭内のヒエラルキーの最下位のカレルは当然の様に、同意することと相成った。

「危険だ、って言おうものなら確実に巻き込んでしまうし……」

そうなってしまえば、翔矢が言い返すことも出来なくなる訳で……。

こうしてあれよあれよという間に翔矢のお泊まりが決定したのだ

った。

「……はあ。 ホント、こうなんで世界は優しくないのかね」

誰に聞かせるでもなく、翔矢は嘆く。

「“一”を救いたただけなのに、それだけで難易度も危険も段違い。理不尽の一言に尽きるよ……」

翔矢の机の上に広がる紙、そこにあるのは不可思議な記号の羅列。変換効率、収束値、流動時の無駄^{ロス}、安定化の際の許容量、身体中物質への影響、etc、etc……。詳しい者が見れば、これらは全てエアルに関する記述であると知れただろう。だが同時に、真つ当な人間が見れば激怒するに違いない。

——全ての数値が“異常”なのだ。術者本人安全を度外視した、最早狂ったと思えない術。人体実験だとしても、なお質が悪い。

そしてこれらは、彼が作る保険の一端に過ぎない。だが最悪……否、五割以上の確率で実行の可能性があると彼は知っている。これに対し『まあ、その時はその時だ』と割り切っているのだから、大概だろう。

「——？」

突然、カッソカッソと言う音。それはガラスを叩いた時に出るそれであって……。

窓に寄ると、外の幅十センチもない壁の迫り出した部分、そこにやけに丸っこい“毛玉”があった。

夜の闇で解り辛い、黄色でフサフサの毛を持っているのが確認できる。――例えるならば、仔狐だろうか。

常人なら分かるのはここまで。翔矢は更に一つの事柄を把握していた。

その仔狐の纏う気配とでも言うべき感覚が、彼が酷く見知ったものだったのだ。

「また新しい芸でも身に付けたのかね」

只今上司のキャラが崩壊中です、と天を仰ぐ。実に今更である。それに加えて他にも崩壊中なのは大勢居るのだから、もうそろそろ慣れて欲しいものだ。

序でに、“仔狐”が何のことだか分からず小首を傾げる姿には癒されたいらしい。

――クウンッ！

「は……？ 着いて来いって、何処に」

“仔狐”がビシツと鳴いた後、翔矢はまるで狐語？が分かっているかのように返答をする。

この男、理由は不明だが一定以上の知性を有する存在となら、何とでも意志疎通が図れてしまうのだ。端から見れば只のイタい人間だが、ここまできると立派な能力である。

でも『知性を有する』自分には従わない』の構図が自然と出来

上がっている為か、何処ぞの魔王兼精霊の少年のように魔物を仲間には出来ないそうな。

——クンッ！

と胸を張る？仔狐。

「あー…。つまり付いて来いと」

合っていたのかぶんぶん首を縦に振っている。そして何処となく嬉しそうだ。

また一鳴きした後、とてとて駆けていく。

（やれやれ……）

翔矢は一瞬考えを巡らせるも直ぐに判断を下したのか、机に立て掛けられた刀と上着を掴み、窓から飛び出ていった。……不安げな表情を貼り付けたままで。

「昨日の今日だから……。何事もなけりやあいけど。まあ、ちようど良いつて言うちまえばちようど良いんだが」

街灯のない町の夜、そこは全てが闇となり、後ろめたい人間でも闊歩しやすい領域となる。

そのためか、激しく飛び跳ねて移動する仔狐はほぼ確実に人の居ない道、即ち屋根の上を移動していた。

それを見やると、彼は家の僅かな出っ張りを利用しすぐに屋根へと上がる。因みにこの町の屋根は傾斜のあるそれではなく、平らなものばかりと走りやすい。

ただ普段掃除の出来る場所でもないから汚れやゴミは目立つが、翔矢にとってそんなものは粗末事。

……尤も彼の足元を走るモノにとっては特大の障害物のようだ。時折立ち止まったりしては背後の人物に踏まれそうになっている。

それを可哀想に、またはうっとおしく思ったか、仔狐はヒョイと腕の中に抱かれる。

「こつちの方が少なくともマシだろ？ さ、早く案内しろ」

——クウ……、クウン。

「へいへい、分かりました、っと」

そんな奇天烈な道案内が始まってから、約三十分程が経った。ただろ
うか。

突然、ある家の上で仔狐が一際強く鳴いたのだ。

そして感じる、数日振りの気配。 清純で穏やかな命の胎動。

それは彼らの持つ、ある種の独特な安らぎ。

——誰かを呼ぶ、幼い獣の声が小さな世界を揺らす。

その声に応じるように、月光がスポットライトの様に彼女を照らし出す。

その姿を視認した途端、仔狐は翔矢の腕を抜け出し、彼女の下へと駆けていく。

「大役、御苦労であつたな」

——クンッ！

そんな事はない。　そういった意志を伝えるかのように、元気に鳴き。

彼女——人間化をしているベリウスは、肩に登ってきたそれを愛おしそうに撫でる。

> i 2 8 9 0 7 — 3 7 0 5 <

「こんばんは、ドゥーチェ頭領」

「うむ、善い夜じゃの」

対する翔矢は声こそ努めて柔らかだが、表情は硬く強張ってしまっていた。

……それは仕方無いことであろう。　刻一刻と時は迫っているのだ。

彼にとつては、今は一秒すら惜しい。

最悪の場合に……あるかもしれない未来に対応できるのは、自分だけのだから。

……だが彼は気づかない、気づけない。

——責任感は既に空回りを始め、焦りを生んでいることを。

——『最悪』以上の最悪が訪れる可能性があることを。

——自分自身という、イレギュラーの影響を。

この詰めの甘さは、何時か彼を苦しめる事となるだろう。これは最早必定じみた事項^{みらい}であり、これまで一切変わらなかったことがある。

一応彼は自覚しているものの、それでも尚変えられないといふのだから質が悪いとしか言い様がない。

「……して、本題は」

「むう……。そなたはもう少し、風情や趣を楽しもうとは思わんのかの？」

「今はッ……それどころじゃないんですよ」

「……………」

一瞬、爆発しそうになるのを寸での所で押さえ込む。分かつてはいるのだ、怒鳴り喚き散らしても意味は無いのだと。

「……善かろう、では本題に入るとするか。——お前はもう休んで善いぞ。楽しい夢をな」

——クオン！

返事をする、仔狐は静寂の中へと溶けていった。向かった方は町の外だろうか。

推測してみるに、このテズエル大陸に住む魔物だろう。……

だがあの様な魔物は見たことがないな。新種か？

道を選ぶ際の選択と家と家の間を軽々跳んでいく身体能力、彼女の使いだとはは分かったがコイツは何だ？ ただの魔物、とも思え

ないのだが……。

などと翔矢は疑問を浮かべるが、それは後だと首を横に振る。

「本題とは知つての通り、例の件のことじゃ。ことの次第は既にナッツから聞いておる」

「……では、その時頭領ドゥーチェは如何する御積もりで？」

——『魔狩りの剣』の狙いは、貴女なのですよ……？

彼は言葉の裏に、その意味を込めながら紡ぎ出す。
ベリウスは勿論、と喉を震わせた。

「——妾おもあの場に居る。……逃げなどせんし、たえそうした所で、奴らのやる事など変わりはせんじやろうて」

「……ですよね。 だろうと思いました」

「……ただユニオンに遣いを送ったとしても、裏にいる者共によつて彼方あちらの都合善きよう改変されるのがオチだろうというのは……流石に苦しいの」

頭が痛いという思いがひしひしと伝わってくる。

ゲームでの彼らが『戦士バレストラーの殿堂』に攻めて来た理由は、「頭領ベリウスが魔物に捕まったため、それを救出する」と言うものだった。勿論これは嘘であり、ギルド『海凶リヴァイアサンのシメの爪』が故意に流したものであった。

……だがこれには致命的な矛盾がある。

『魔狩りの剣』の首領・クリントは、これが偽の情報だと知っていたのだ。

では何故、彼らが話に乗ったのか。……それは単純なもの。

要は——ベリウスさえ“殺せさえすれば”他はどうでも良かったのである。

……そして同時に、見せ物用に魔物を飼う『戦士の殿堂』は、『魔狩りの剣』にとって忌むべき対象でもある。

それは彼らの殆どが、肉親や友人を魔物に奪われた者達であるが故。

だからもし、ベリウスがその時闘技場に居なかったとしても、何らかの難癖を付け『戦士の殿堂』を攻めるであろうことは想像に難くない。

もしかしたら、誘拐の件自体の濡れ衣を『戦士の殿堂』に被せていたのかもしれない。

「——なれば、戦力は多い方が善いからの」

「……はい」

翔矢は口惜しそうに、表情を歪ませる。ベリウスの言葉に対する賛成と反対、そしてゲームでの知識の総てが責め立てるのだ。

恩人を危険な目には遭わせたくないが、これからやギルドの被害のことを考えるとそうもいかない。

「何か異論は無いのかの？」

「……勿論、言いたい事があります。でも分かっていたから。」

——俺は、貴女に従うだけです」

泰然とした様子で、言い放つ。そこには迷いは見受けられない。溜息がベリウスの口を突いて出るが、白い肌に映える漆黒の瞳は優しげだった。

「……別にそこまで恩義を感じずとも善いと言っのに……。そなた、矢張り頑固じゃの」

「それも、分かっていましたよ。でも性分ですから」

何かを懐かしむ様に、翔矢は言う。そこに同時に浮かぶは悲しみか喜びか。

……第三者では判断のしようがなかった。

「ふふ……これ以上この問答は不毛か」

ここまで慕われていて悪い気はしないのだろう。小さく笑みを浮かべる姿は美しくとても様になっていると、翔矢は感じた。

じゃあそろそろ……と拳に力を込める。

「ところでショウヤ、他になにやら言いたいことがある様子じゃがどうかしたのかの？ 別件か？」

「っ、いえ……一応関係があることです。お願いがあるんですが……非常に申し上げにくいことで」

「ふむ、妾にか？　とにかく申してみよ、話はそれからじゃ」

「は、はい」

シヨウヤは口どもりながら、数秒の時間を要して言葉を成す。

失礼な事だと分かつていたために、己を恥じるかのように自分自身への侮蔑を込めながら、ゆつくりと。

それは自己嫌悪にも似ている。

「えー…つと、ですね。　実は――」

遠慮がちに、迷うに呻いて、最後には一息で言い切った。

「ふむ……………？」

ベリウスは得心を得なかった。　その言葉の意味が分からなかったのだ。

だが目の前の青年が真剣なのは語るべくもない。　それどころか、自分を思つての判断なのだろう。　それが更に彼女を混乱させる。　それにそれを知つてどうするというのだ。　たとえそれを翔矢が知つて何かに使うとしても、この子も技量では……。

何か裏があるのは確実だが、勿論この子は悪用などしない。　根は子供のような青年は、自らの周りの人たちだけはなんとしても裏切らない。　裏切ったとしても、それは朋を思つてのこと。

あと付け加えるなら、生き物としても少なからず抵抗がある訳だし……。

等とつらつら考えを巡らせて一秒弱。　結論は……別に善いか、という実に樂觀性に満ちたものだった。　この子は自分を慕つてくれているのだ、偶にはそれに報いるのも善いだろう。

「何も聞かぬ方が、善いかの……？」

「……お願いします」

「畏まらずとも善い。 かまわぬ、そなたの好きにせよ」

「は、はい……！」

翔矢は嬉しそうに、ともすれば無邪気とも取れるように言う。
ベリウスは再び、小さく笑った。

自分は変わったと、ベリウスは常々感じる。 ただの『^{バレストラ}戦士の殿堂^{ドワーチェ}』の頭領や、悠久の時を見守る始祖の隸長^{エンテレケイア}。
きっかけは、この小さく幼い人の子。 ベリウスから見れば、つい先日加わった新たな仲間。

完全現実態の証の名を冠する種族である自分が、こうも人間臭くなるとは誰が予想しただろうか？

古き朋達は失望するだろうか？ 世を憂う人間は軽蔑するだろうか？

でも、それでも善いと、最近はふと考える。

もしかすると自分はこの子と、嘗て産み、育て、独り立ちし、死んでいった我が子と重ねているのかもしれない。 ……褒められた事ではないが、それでもよい。

苦労も多いだろうが、何より楽しそうではないか。 それに聞くところによると、翔矢は自らの母の事を知らないらしい。 では自分が母親と成り、そう接することもやぶさかではない。

嗚呼、楽しそうで面白そう。 言い方は悪いが暇つぶしにだって成る。

エンテレケイア

『始祖の隸長』とは、総ての生き物の中でエアルという原始のエネルギーに適応し、種としての昇華を遂げた存在の総称である。もともとの祖体は魔物の一種である彼女は本来人間とは相容れない筈であった。

だが彼女は千年もの間、自らを主と慕い敬う者達と近く接していたのだ。

つまりこれは元々人と近い位置にいたベリウスだからこそ、抱いた気持ちである。

こうしてベリウスは若干自分の世界に浸っていた。

だが、

「――」

――ふと、気付くと警鐘がなっていた。待ちに備えられたものではなく、ベリウスの中にある、本能と言う名の警鐘。何か、マズい。

「それでは――」

「！伏せよ！」

「！？」

その声に咄嗟に反応し、ベリウスを庇うようにして翔矢は動く。一瞬後、自分の立っていた位置に、橙色の光を放つ雨が降り注いだ。轟！という音と、それに伴う土煙が威力を物語る。

—— 兵装魔導器。

辺りに住民のモノと思われる悲鳴が響く。

翔矢はベリウスの腕を肩に回させ、自らの腕を腰に回す。刹那

の間に、エアルを全身に循環させ身体能力を強化。

五間もの距離を、一足で移動する。

「こんな町中……しかも居住区でぶっ放すとかマジかよ！」

「港の南側に回れ、あそこならば留まっておる船はないつ。そこ

で迎え撃つとしよう……！」

狙撃するタイプの武器なのか恐ろしいほどの確に二人を……否、翔矢を狙ってくる。翔矢はベリウスを置いて自分が囿になれば良かったのだと歯噛みした。

（いや……今からでも遅くはないか）

兵装魔導器独特のエアルの乱れを探知——対象との距離、弾丸の速度、命中位置を算出。彼は一瞬にして得物を振り抜き、右腕に大量のエアルを装填させる。同時に、苦悶の表情から息が漏れる。

「っ……先ほどの話、聞かれたでしょう、か！」

「それは心配する必要があるまい。妾らの声が聞こえる範囲に、おかしな反応はないつ」

腕を振り下ろすと、翔矢の身体に穴を穿つ筈であった凶弾は、瞬、という一閃に断ち切られた。翔矢は改めて、この力に感謝した。

「頭領、貴女は——」

「それ以上言うて無いぞ？　今の妾は、少々機嫌を損ねて居るのでな……！」

「は、？　っと！」

厄介な狙撃手の近くを潜り抜ける際、ベリウスは空いている腕を横に振る。

……一瞬にして、狙撃手の頭上と足下に氷槍が完成し振り下ろされる。それが狙撃手に悲鳴をあげる間さえ与えず絶命させ、魔導器は爆ぜた。

再び轟！という音と、悲鳴。翔矢が周りを見回すと、幾人かの人影が自分たちと同じように屋根の上を跳んでいる。その服は闇にとけ込む黒いコートに赤く目を光らせる仮面、『海凶の爪』。

彼は追いつかれないよう、だが見失われないようにスピードを僅かに上げる。確認できただけで、追ってくる数は十二。ベリウスがこれが全員だという言葉を放つ。

「棧橋へ……！」

普通であれば追い込まれにくいようなものであるが、彼は彼女の言葉を信じ、また僅かにスピードをあげた。それから半分後、港に降り立ち、一足で棧橋の端に移動する。

後ろを見ると、すっかりと囲まれてしまっていた。じりじりと距離を詰めようとしている。

「で？　策は何なんですか？」

「ふふ、複雑な事をしようとする心算は無い。ただ——こうするだけじゃ」

手の平を上にして、それを上に上げる。すると轟轟轟！という音と共に水柱が登った。『リヴァイアサンのツメ海凶の爪』の者達の間に戦慄が走る。

「逝ゆけっ！！」

その声を合図に、水柱は意志を持ったかの様に、『リヴァイアサンのツメ海凶の爪』を飲み込み始める。棧橋という場所に逃げ込んだことに違和感を持った勘の良い者達も、逃げる間さえなく呑み込まれ、情けない悲鳴をあげる。

全員を呑み込んだあと、水柱……否、竜巻と呼ぶべきそれは一本に合わさり、離れた海上に移動していく。

「仕上げじゃ」

膨。小さな煌めきはフットボール大の炎となり、一直線に竜巻へと向かっていく。

それが竜巻に当たる瞬間、竜巻が解け、巻き込まれていた『リヴァイアサンのツメ海凶の爪』者達十二人が白い光と共に宙に舞う。

「――爆ぜよ」

たった3文字の言葉、それを鍵とするかのように――海上に極大の炎柱が奔った。その前では、人間など塵芥に等しい。

「不純物を取り除いてから、水素と酸素に分離させた……？」

不可能な事ではない。そう翔矢は愚考する。

『エンテレケイア始祖の隸長』の持つ能力とは、エアルを自在に操ること。そしてエアルとは、万物の源である。そ

この世界において物質とは、エアルが特定の構成を持つことで現れる質量を伴った存在のコトだ。

つまりエアルを操れば、物質を自在にとまではいかなくてもある程度操作出来る。……勿論、ベリウスのように強大な力を持つ存在に限られるが。

「なんつうチート……反則だろう。てかえげつない……」

「ちいと？ 何語じゃ？ ……ともあれ直ぐに移動せねば此処にも人が集まってくるぞ」

「え、あ、はい……」

急かすベリウスを抱え、翔矢は混乱に陥っている街の中へと消えていく。どうやらだんだんと落ち着いて居るようだった。ちらほらと、警備部メンバーの姿が見える。

……因みにその時、青年の表情は非常にげんなりしたものであったが、妙齡の女性の表情は何処か晴れ晴れとしたものであったことを、ここに記しておく。

第二閑話、もう一つの道、お騒がせの時（前書き）

先に言っときます。

『電波が作者の体を操ったんだ！』

……という訳で（どういう訳だ）主にユーリ側の流れの確認とおまけ（？）です。

あとかなり時間（数ヶ月）が掛かってますが、ようやく挿し絵ぽいのができました。いやー長かった（冷や汗）
今日はPCが使えないので明日にでも投稿します。

第二閑話　もう一つの道、お騒がせの時

Side other

「本当、不思議な町。……砂漠にある町とは思えない」

穏やかな日差し、優しく身を包むような風。そして極めつけには視界一杯に広がる作物の畑。

これはどういうこと……？ ジュデイスは幾度となく繰り返した疑問を、改めて浮かべる。

ここはデズエール大陸の西に位置するコゴール砂漠。

だと言うのに、青々と茂る植物たち。何れも砂漠のように水の少ない場所で育つようなものではなかった。

そして――。

ジュデイスは雲^{、、、、、}すらない青い空を見上げる。

「……こんなに大きな町なのに結界が無いなんて。まるで時代を遡^{さかのぼ}ったみたい」

これでは普通の人は夜も安心して眠れないわね。……そこに自分が含まれてない辺り、流石ジュデイスと言ったところか。

彼女らが何故ここにいるのか。

彼女たちは闘技場での混乱の際、あの幽霊船で手に入れた^{クリア}澄明の^{シエル}刻晶の箱を奪われてしまう。結局取り戻すことはできた。

そしてその場所が丁度“カドスの喉笛”、つまりはノードポリカ

に戻るより砂漠の町・マンタイクの方が近かったためそちらへ赴く。

だが——そこで驚きのものを目にする。

……騎士団がフェロー搜索に、マンタイクの住民を動員していたのだ。無論、無理矢理。

即ち、騎士団と彼らの目的は同じだったのだ。

それから彼女らは先を越されまいとフェローを探しに砂漠へと赴いた。

途中、フェロー搜索に駆り出され砂漠で倒れていた夫婦を保護し、何故か砂漠に埋まっていたパティを仲間に加えて。

そして遂にフェローの鳴き声を聞き、それを辿ると——異形がいた。

エイカマンタを彷彿とさせるフォルムに、半透明の何とも形容し難い色を持つナニカ。

魔物とすら——否、生き物とすら言えない。それほどに奇妙なモノ。

そんなモノが襲いかかってくるなど、悪夢のような光景だったと、彼らは記憶している。それに加え非常に力が強くタフだった為苦戦を強いられた。

——彼女ら一行が意識を失うほどに。

そして寝て覚めたら、彼女らはどこだか分からない町の宿屋のベツドの中だったという次第である。

「シヨウヤが此処に居たら、何か分かったのかしらね……」

ジュデイスは、一人の青年を思い出す。

あの何処か子供っぽく、そして何でも背負い込もうとする青年を。

…… 勿論、それは今更。 何があるのかは知らないが、あの顔に一瞬影が差したのを覚えているから。

恐らくだが、何か良くない事態が起こったのだろう。

私に知らせないように表情を取り繕っていたのだろうが、バレバレ。 あれでは心配してくださいと言っているようなものだった。

ジュデイスは誰にも気付かれないように、溜息をつく。

二つの意味を込めて。 自分達の現状とあの青年を憂う様に。

「まったく、何なのよアイツ……」

「独り言かしら」

「え？ …… ああ、あんたか」

赤を基調とし、アシンメトリーな服に身を包む少女はさも興味なさげに言い放つ。

リタ・モルディオ。 彼女は世界の魔導器研究における権威である。
プラスチック

……そして、そうであるが故に苛ついていた。

「“彼”から何か聞き出せた？」

「全然。 知る必要はない、疾く去れの一点張り。 賢人だか何だ
さかびと
か知らないけど、一体何様のつもりよ」

「そう……」

本心はどうであるか知れないが、いかにもという風に呟くジューデイス。そして再び考え事を始めるリタに合わせるかのように、思いを馳せた。

彼女達は当然、この不可思議な町について調べない訳ではない。寧ろ目を覚ますとすぐに、空腹を訴える腹の虫も無視して調査にあたっていたのだ。

その最中、驚くべきことを耳にする。

……それは町の名前だった。そして最も始めに聞くことである。『この町の名前は何かというんだ？ 倒れていたところをここに運んでもらったものだから知らないのだ』と。

すると返る予想外の返答。『——この町は、『ヨームゲン』と言うのです』。

『ヨームゲン』。彼の幽霊船で耳にした名。千年経っても残っていたのか。その時はそう思っただけ。

しかし。
しかし、だ。

再び、不可思議な事態が起こる。

町のある女性に澄明クリアソールの刻晶の箱を見せると、こう血相を変えて言い放ったのだ。

『その箱……その箱はロンチーの箱です！ これを何処で？』

彼女は—— ユイファンと名乗った。これまたあの幽霊船の

日記に記されていた名前である。

そしてロンチーとは彼女の恋人の名とのこと。そしてそのロンチー氏は澄明の刻晶クリアシエルを探して三年も帰って来ないのだそうだ。

最早、彼女たち一行の誰もが頭を抱えた。千年以上前の出来事が三年前？ 訳が分からない。

そんな彼女らに、ユイファンは気を払う余裕すら無かったのだろう。ともすると恋人の片見かもしれない品だ。他の事が思慮の外に追いやられてしまうのは当然である。

だから目の前の人達には目もくれず、彼女は“鍵”を取り出し、箱の中身を外気に晒す。

半透明で光を放つ塊。

所々にクラックのあるそれは、宝石のような飾り染みた輝きではなくもつと自然で暖かな煌めき。

それをしかと確認すると、今度は真っ直ぐと視線を彼女達に合わせ、切に願うように、言った。

『これを賢人様の所へ持って行つてくれませんか？』

何故彼女達に頼んだのかは分からない。彼女達が直接それを持ってきたからか、恋人の死を心の何処かで悟り耐えられなくなったからか。

でも、その時の彼女達にとっては、そんな事を気にする心の猶予はなかった。

溺れる者は藁をも掴むと言うが、当にそれである。

ジユデイスの言った“彼”。この『ヨームゲン』で賢人と呼ば

れる存在。

それは――

（デューク、だっけ……。初めて会った時から変だとは思ってたけど、一体何者？）

（まあ、“彼”が言わないのも当然ね。それに……はっきりとはしないけど、それを省みればこの場所のこととなしには分かる）

思わぬ所で再開した白髪の美丈夫は、なにも答えてはくれなかった。……いや、一つだけはっきりと自らの意志を滲ませて言った言葉がある。

それはユーリが彼に澄明の刻晶を手渡した時のこと。これは聖^{アバ}核の一種だと、彼は言った。

『――これは、私にも。そして人の世にも必要無いものだ』

そう、何かを恨むかのように悲しい表情で。床に置いたそれに紅い長剣の切っ先を向け、辺りに光が満ちると――次の瞬間にそれは、露と消えたのだ。

リタはそれに食ってかかり、ジュデイスはただ静かに状況を見つめた。……事を知らない者と事を知る者、知を求むる者と知を語らぬ者。時間は経ても、先程でもこの場に於いてでも、二人は対極に位置している。

（それに賢人って何？ 町の人間の言葉を聞く限り魔導器を作る人間の事みたいだったけど。それに――）

ブラスティア

（賢人……たしか千年以上も昔に、魔導器を生み出したクリティア族がそう呼ばれていた筈。でも彼はクリティア族ではない。それに加えて——）

疑問と回答。まるで互いの心と呼んでいるかのように続く心中の呟き。

（——時代があべこべってどういうこと……？）

（——恐らくここは、現実じゃない。似て非なる、創られた箱庭。だから時の流れなんて関係ない）

リタは考えが行き詰まり、あーもうと頭を掻く。ジュデイスはそれをあらあらと表面上暖かく見守る。ジュデイスは心の中だけで頭を振りかぶり、先程までの思考にピリオドを打つ。

（……でも、これ以上は考えるだけ無駄ね。専門家ショウヤが居れば良かったのだけれど）

「……決めた」

「？」

リタはポツリと零す。これ以上無いくらいに真剣な顔。そしてキツと顔をあげ、ジュデイスに誓いを建てるかのように宣言する。

……特定の人物が非常に困りそうな内容を。

「ノードポリカに戻ったら、アイツに根掘り葉掘り訊いてやる。
前は調子が狂って聴き損ねたけど、今度はそうはいかないわ……！」

「そう……頑張ってね」

「ええ！」

顔が引きつらないか心配だったジユデイスだが、リタからの視点ではいつも通り。

故にリタは気にせず、別の事に思考を切り替える。……エステルの事だ。

「……そういえばこの分だと、新月の晩までにノードポリカに戻れるかはギリギリかしらね」

エステルはノードポリカのギルド『バレストラレ戦士の殿堂』の頭領に、フェローの事を聞きたがっていた。この砂漠での搜索ではフェローの字も出なかったのだから、直ぐにでも話を聞きたい筈。

でもその“人物”は新月の晩にしか人会わないという。なのに、自分が知りたい事があるといって出発を遅らせてしまっていたことに、彼女は心配を募らせているのだ。

「あら、そうでもないわよ？ 目印になる岩とかは大体覚えてから帰りは少し早くなると思うわ。……だからそんな捨てられた子犬みたいな顔をしなくても大丈夫よ」

「だ、誰が子犬よっ！」

うがーと吠えるリタ。だがジユデイスはそんなリタを意に介さ

ず、いえ、寧ろ子猫かしら？などと呟く始末だ。

それがまたリタの耳に入ったものだから、顔はさらに紅潮し、耳まで真っ赤になっている。

「フフフ……照れちゃって、可愛いわね」

「ッ~~~~~!!」

……先程までのシリアスモードは何処へやら。 翔矢辺りがいれば話を無理矢理戻して……否。

（アイツがいたら、間違い無くあたしをからかってくるわね……!）

ジュデイスとショウヤと一緒に居るときは余り近寄らないようにしよう。 そう心に決めたリタであった。

……新月の晩まで残り僅か。 正史では無いところでも時間は優しく、でも残酷に過ぎて行くのであった。

- - -
- - -
- - -

……どうしてこうなった。

そう翔矢は目の前の状況に頭を抱える。

彼はこの世界にトリップして来る前は、ラノベも二次創作もよく読む普通の学生であった。 だからこの台詞も知っている。

……だが実際にその状況は起こらなくていいなと思った。何故なら、目下本当にその中心的立場になってしまっているから。

……さて、そろそろ現実を見るとしようか。

翔矢の目の前には、彼に詰め寄るクレール。

翔矢の右腕には、自分の両腕を絡みつかせているベリウス。少し離れたところにはそれをニヤニヤ見つめるリユンヌ。

……どうでも良いが、完全に『リア充爆発しろ！』と言われるような構図にしか見えない。

「ショウヤ…何処行つてたの？ ……こんな美人連れて」

「あ、あのークレール？クレールさん？クレール様？ 何やら壮大な勘違いをなされておりませんか？」

「よく分からんが、ショウヤよ。 この童こは誰かの？」

この会話だけを省みるとまるで翔矢が浮気をして見つかったみたいである。その事実気づいた翔矢は更に頭を抱えるが、今はそれどころではない。

因みにだが、クレールとベリウスの台詞の真意はそれぞれ別のところにある。

今の時間帯はもう夜明け。それは翔矢が“保険”の準備をほぼ終え、ギルドにも先程の騒ぎから顔を出していた為だ。

それをクレールは知る由も無く、それどころか翔矢が襲われたのではないのかと姉を引き連れ探していた。そしてそこに二人が現れ……という次第である。

ベリウスは単純に知らない人がいたから聞いただけに過ぎない。

「くひひ！ まさか頭領補佐が年上好きだったとは。 普段ちっちゃい子には優しいからロリコンだと思ってたのに」

「よし、そこに直れリユヌ。 今、テメエの父親にプレゼントされた刀の錆びにしてやるからなッ！？」

「やーん。 クレっち助けて、お姉ちゃんショウヤに犯されるー！」

「お姉ちゃんは…黙ってて！」

「によるーん……」

……恐らくであるが、皆寝不足からテンションが可笑しくなっているであろう。

近所の皆様騒がしくてごめんなさい、と土下座したくなる翔矢である。

「で…その人誰？」

「む、妾か？ 妾は、ミズクメ。 此方の時はこう名乗っておる」

「？」

その偽名使うんだ、とか此方の時とか言うのはマズいだろ、と思わなくもないが口を開かない方が賢明だとさとした翔矢である。
ミズクメことベリウスはクレールに対し面白いものを見たと言うような、実にイイ笑顔だ。

「安心せよ、シヨウヤとはそなたが考えているような関係ではない」

「ふえっ……？」

「おろ？」

「ほっ……」

呆氣にとられる二人に、安心する一人。
ベリウスはコホン！と咳払いをする。

「妾はな……ん！ その——シヨウヤの母親じゃ」

「「「は？」「」」

いやまでという事ですトウチエか頭領！　つか何頼染めてんの！？
——と小一時間間いただいたくなる翔矢であるが、ベリウスさん
なりに氣を使ってくれたのかと、逸る体を抑える。

「ほ……本当に……？ シヨウヤのお母様？」

「マジで……？ え、シヨウチーは十九歳だから……若っ！
——なおい！」
若わけえ

「あー……、まあ、な？」

何処かベリウスの作為的なモノを感じるが、まあ、この場はこれ
で乗り切るとしようと決めたシヨウヤ。
そして当のベリウスは何処か楽しげに……否、愉しげにクレール
と会話している。

「……いや待てショウチーがそういうプレイが好きって可能性も」

「リユンヌ……？ それ以上口開いてつと……」

「え、あ、あはは……。 な、なーんで得物振り抜いてるのかな？
かな？ 危ないでございますですよー？

……て、ちょ、クレっちとミズクメさん！ 現在進行形であたし
襲われてんですけど！？」

ゆらりと幽鬼みたく揺れる翔矢と当然の如く孤立無援のリユンヌ。
振り上げられた刀は、戯れ言を抜かす生物を断罪する聖剣である。
ナマモノ

そして刃の軌跡が三日月を描いて――

……彼女の悲鳴はその日、ノードポリカ全市民の目覚ましになっ
たそうな。

――何度も言うが新月の晩まであと僅かである。 なのに、
こんな有り様で良いのであろうか……？

その事実気づき、今度こそ胃に穴が空きそうになった翔矢であ
ったとさ。

【おまけ】

「ところで頭領、クレールと何話してたんですか？」

「ふふふ、んまあ色々とな。義母としては息子の将来が気になるではないか」

「はあ……？ まあ、何でも良いですけど。具体的には何を？」

「まず、嫁は多い方が善いな」

「……………は？」

「いやなに、私の祖達は一頭の雄を中心とした……………」

「なに魔物と人間の常識一緒にしちゃってんの！！？」

その日は最後までグダグダな1日だったとさ♪

第十三話　完結し得た存在：中編　修正（前書き）

只今絶賛スランプ中……！！
内容も微妙！

中途半端なプロットしか立ててないからこうなるんだよぉ！？（自業自得）

この小説の中ではトップ5に入る内容（予定）なだけに、親指が動かなくなるんだ！

第十三話　完結し得た存在：中編　修正

逢魔が時、という言葉がある。これはオオマガトキ、漢字にすると大禍時という言葉が転じたモノだ。

『時』とはそのまま時間を。そして『禍』^{まが}とは禍^{わざわい}を表す。そして『禍』^{わざわい}とはワザが鬼神のなす業を、ワイがその様を表し、傷害・疾病・天変地異・難儀などを被ることを意味する。

即ち『逢魔が時』とは難儀を被る時間、という事だ。

……実にぴったりじゃないか。特に『難儀』が入っているとこそかが。

翔矢は奥歯を噛み締める。ギリツという音が驚く程大きく響いた。

近くにいる同僚^{メンバー}に聞かれなかが心配になるも、大丈夫だったようで彼に目もくれていない。

「ホント、居心地が悪い……」

「ん？　何か言ったかい？」

「ああ……いや。何でも」

場所は経理部の執務室。この街、ノードポリカの経済の中心。普段はそこそこ遅い時間まで人のいるこの部屋も、この日だけはたったの二人。

翔矢と経理部の長。

——それは、今日が新月の晩だからだ。
この言葉に、全てが集約されている。

……時の流れとは平等で不平等で、そして残酷なものである。
必要な時には早く、必要ない時には遅く、かと言ってその実変わりない。しかし記憶を振り返るとその長さは逆転する。

齡二十年にすら届かぬ年齢でありながら、随分と濃い人生を送ってきた翔矢も、この十数日ほど早くも長い時は初経験であった。

「しかし、良くこんな時まで仕事やってられるな」

「はは、まあね。でも今日に限って仕事してない部があっちゃ怪しまれるでしょ？」

確かに一理ある。翔矢は頷いた。

『魔狩りの剣』の連中がそこまで注意を払っているとは思えない
が大事なことだろう。

……彼らは『戦士の殿堂』に『奇襲』を仕掛けるつもりなのだから、少しでも長く踊って貰うほど上手くいくというものだ、と。

経理の彼が顔を上げると、鼻に乗った眼鏡が淡い光を鋭く返す。
「まっ、仕事してるのが一番落ち着くって理由もあるけどね」

「あんたもか……」

「うん？ あーなるほど、運営のお嬢様も似たようなものだ」と

「……どうでもいいけど、本人に聞かれたら殴られるぞ？」

「もう聞かれてるわよ」

二人が振り返ると、そこに居たのは経営の部の長。 運営のお嬢様と呼ばれた彼女である。

主に闘技場を運営する部だ。

なにやってんだかという面持ちだったが、スパツと表情を切り替え言つべきことを並べる。

「非戦闘員は帰らせたわ。 これで残つたのはわたしらと警備の奴らだけ」

「それはそれは、ご苦労様。 でもゴネられなかったのか？」

「何人かは訝しんでたわよ？ でもそこは強権発動させるだけだし、その眼鏡の黒歴史探るのと同じ位の軽さね」

「そりゃ怖いね、ぞつとしない」

ニヤリと笑う姿は心底愉快そう。 場合によっては如何様にも取れるそれは、この場面において狂気に似たものを添えている。

そしてそれを受ける女性も似たような顔をしている。

一般的な感性の持ち主であれば、戦いの直前に笑い合うことなど出来ない。 ……その表情は暗に、二人が戦闘者であることを示していた。

「……て、ちょっと待って。 そう言えば今日、ドゥーチエ頭領のところに客が来るんじゃないかっただけ？」

客——それは即ち、ゲームの主人公陣ユーリ一行のことである。
思いだして言う女性はナツツから聞いていたのであろう。 察す

るに、今はしまったという心境か。

だがそれと対照的なのは他でもない、翔矢であった。

「そつちについては問題ねえよ」

「てことは何かい、手はもう打ったと？」

「いや、特に何も。　寧ろ――」

――“協力”してもらう積もりだからな。

音として紡がれなかったそれ。　だがその内容を察したのか、女性
性は酷く重い溜息を吐いた。

「……シヨウヤ、キミも大概に上げつないわね。　お姉さんはキミ
の将来が心配よ」

苦笑混じりに呟く女性に、少々ムツとする翔矢だが事実であるこ
とは彼自身認めているのか、言い返そうとはしない。

その時に、二回のノック。

執務室の主のどうぞ、という返事をしか聞き取り、来訪者はドア
を開けた。

「――おい、お前たち。　少しいいか？」

幾つもの裂傷のはしる肉体に左目を覆う眼帯、ギルド『戦士の殿
堂』の幹部が一人、ナツツ。
バレストラ

何時も彼の背で沈黙する大剣も、この状況では、自らの躍動を今
か今かと待ちわびているかの様な錯覚を覚える。

「^{ドゥーチエ}頭領代理……ええ、いいですよ」

口調こそ疑問符を入り混ぜたそれだが、これに拒否する余地などない。……同時に、拒否したい、などと思う者もない。
当然受け入れた三人に、決定的な言葉が投げかけられる。

「警備部からの報告があった。

……街中で『魔狩りの剣』らしき集団を確認。そのまま動向を監視する、とのことだ」

「うん、了解したよ」

何とも形容し難い、ある種の……陰鬱な緊張感とでも言えるものが立ち込めた。

「はあ……。ショウヤの報告は正しかった、ってことかしら。
……外れていて欲しかったわね」

「今更だね。覚悟してなかった訳じゃないでしょ？」

「まあ、ね……」

どちらも本音。それはこの場に居る……否、状況を知る幹部や警備部の一部の者達全員の本音。

——上手い解決手段など全く浮かんでいないこの状況に、頭を抱えているのは皆同じなのだ。

……当然だがギルド『^{バレストラレ}戦士の殿堂』はユニオンのトップ、ギルド『^{アルトスク}天射る矢』に書状を出している。
だがどうしたことが、一向に返事が来ない。

……恐らく裏で『海凶の爪』^{リヴァイアサンのツメ}が邪魔を入れているのだろうということに、翔矢は気付いていた。
ゲームでの知識、そしてこれまで街中で散々狙われたのだから、考えつかない訳がなかった。

へと窓の外に目を遣ると、逢魔が夜闇へと変貌を遂げていることに気づいた。

そろそろ頃合いか。

翔矢はぐつと拳を握り締めた。

「んじゃ、俺はちよつと行ってきます」

立ち上がり、部屋の出入り口へと近づく。

「？ こんな時に一体何をしに？」

「いや、只のお客の出迎えですよ。」

——招かれざる、ではない方の「

「……成る程な。では早めに終わらせろよ」

「ん、分かりました」

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

「でようやく本筋に合流ーっ」と

翔矢の眼下には長い階段が伸び、その袂には見知った顔の人物達がいるのを認める。

思ったより待たされてしまい若干不機嫌になっていた彼だが、それを悟られまいと表情を切り替える様は、見事の一言に尽きるだろう。

身の丈に不釣り合いに大きな鞆を持った少年が駆け上がって来る。

「ショウヤー!」

「おう、カロル。 ちよつと見ない間に伸びたか?」

「え? そ、そうかな、えへへ……」

「ああ——髪の毛が」

「——」

一瞬でピクリともしなくなったので、ジャブとしては十分だろう。カロルの後ろを歩いて上がって来たユーリが苦笑気味しながら言う。

「おいおい、あんまうちのボスをイジメないでくれよ?」

「いや、スマンな。でもやっとかないと、こっ……疼くんだよ。発散する機会もないし」

最近薬の減りが早くて困る、と嘆く翔矢。

彼の胃をさする様子にははーんと目を尖らせたのはレイブんだ。

「それってもしかしてさ——今、闘技場内がピリピリしちゃってるのと関係有るわけ？」

「……………見掛けに依らず目聡いよな、相変わらず」

「見掛けに依らないは余計よ」

つーんと口を尖らせるレイブンだが、三十五のおっさんすることでは無い。だがその二つの目だけは鋭いままだ。

三枚目キャラの相手は面倒臭い。マトモに感情を面に出そうとしないから、一々探るのが億劫になるのだ。

だがそれとは逆に、緊張感を露わにするのが、他の原作主人公パ―ティーの面々。

……尤も中には、呆れを滲ませている者もいる訳だが。

「何？ また厄介事なの？ ……やっぱあんた、何か憑いてるわよ」

「かもな。なあエステル、何かいい呪いまじな知らねえか」

「さ、さあ……？ 流石にそれはわたしにも……」

「だよな……」

と草臥れた顔のユーリ。

「それで何があったのかしら？」

「ん、まあ、色々な……。だから用事を手早く終わらせることをお勧めしとくよ」

勿論これは、自分にとって都合が良いから、という意味。……

しかしまあ、反吐が出るくらいに気持ち悪いな。

大丈夫だとは知っていても、必要な事だとしても、知り合いを戦場の中心に招き入れることには変わりはない。

これが彼らに糧になるとしても、一つ教訓として胸に刻まれるとしても、悲劇に対面させることには変わりはない。

だから内心、自らに呪詛を唱え続ける。

よくもまあいけしゃあしゃと……。

「んじゃ、ちゃっちゃと終わらせようぜ？ おっさん、疲れるのは苦手だわ」

「……分かった。ただ大首領ドン・ホワイトホースの遣いのレイブンは良いんだが、ユ
ーリ達はなあ……」

史実ゲームでのナッツを真似る様に、気持ちと真逆の言葉を一旦口にす
る。

そして小さく深呼吸をして――

「――どうしますか？ ドゥーチエ 頭領」

「……え……？」

誰からともなく、ポツリと疑問の弦きが落とされる。それは明らかに自分達ユーリに向けられたものではない、特定の個人に向けられたものだ。

慌てて周りを見渡すも近くにそれらしい人影も気配もない。その類に一層強く反応する、軍用犬の血を引くラピードさえ気付かないのだから、人間である彼らに分からないのは当然である。

—— 空気が静かに振動し、

『構わぬ、通すが善い』

老婆の様な、重く、優しい声を伝える。

それは、何処からともなく響いてきた。

当然ながら、声の主は『パレストラーレ 戦士の殿堂』の頭領ベリウス。ドゥーチェだが彼女がいるのは、ここから遥かに離れた通路の端にある一室だ。

直線距離で結ぶにしろ、百メートルはある距離。その距離と石の壁が無いかのよう^にに音を伝えるというのは、機械でも使わない限り、人には不可能だ。

細かな解析は未だ行っていないため翔矢にも分かつてはいないが、これもまた東方・ベリウスドゥーチェの有する術の一端なのだろう。

主ベリウスの声を聞いた従者は、数日振りに、目に見えて表情を綻ばせた。

…… この場に居るある人物がそれを見て、ある種の嫉妬にも似た、暗く燦ぶる感情を抱いているだが、これは蛇足だろう。

「ではどうぞ—— と言いたところだが、一つだけ約束事ある」

「……？ 何よ、約束事って」

早くしろ、と視線で促すリタ。

それに対し、翔矢は僅かにトーンを下げ諭すように言う。

「……通路の奥に頭領トウチエの部屋がある。ただし、ここから先、見たモノを“決して口外しないこと”」

「はあ？ それってどういう——」

「——それがこのギルドでの掟ルールだ。故に、今回はそれに従って貰う」

掟——それはギルド社会に於いては法ハ、以上の効力を発揮する存在。

それを守ることがギルドの誇りを守ることであり、また守らなければならぬ“絶対”の存在。

もし破るような事があれば、最早ギルド社会……ひいては、大なり小なりギルドの影響を受ける帝国社会でも存在することは許されない。……場合によっては、その命を以て償わなければならないことだってあるのだ。

時代錯誤も甚だしいが、切腹などという償いも——珍しいのは事実であるが——行われることがある。

「分かったよ。ちゃんと守らせて貰うからね」

それは当然、ギルド社会の中心地のダングレストで育ったカロルの中にも息づいている。だからなんとも素直で純真な答えを返す。それから翔矢は、その場からスツと横に動き、通路への小さな入り口を空ける。

「んじゃ、行ってこい」

入り口は一人が少しの余裕を持って入ることのできる大きさだ。そこに一行が一人一人通り、薄暗い通路へと消えていった。…だが、ジュディスだけが翔矢の目の前に一旦立ち止まる。

「……あなたは来ないのかしら？」

「……もう分かってるだろうけど、これから色々あってな。だから――」

そこで翔矢は誰にも聞かれないように、そっと顔を近づけ、

「――フォローは頼んだ。頼りにしてる」

「フフ、分かったわ。任されたからにはちゃんとやるから、安心して頂戴」

と、何時も通りのお淑やかな微笑み。

それに、自らの気持ちのありったけを湛えた視線で頷き、そして見送る。

――それからややあって、翔矢は近くの壁に背と体重を預けた。

目を閉じて、ゆっくり、息を吐く。

何度も考えたことを、今更思い浮かべるべきじゃないのかもしれない。それに、誰かに向けて聞かせる訳では無いこれはただの自己満足だ。

でもそれは……何度でも繰り返すことで俺自身に刻む戒めとなり、俺自身を留める縛鎖となる。

「……スマン、ジューデイス。それにユーリ達とギルドのみんなも俺は、俺の我が儘でみんなを危険に晒す」

でも……否、だからこそ振り返らない。

謝罪もしよう、反省もしよう。そして心に常に置こう。

「……よし、そろそろ行くか」

今、此処に新たな闘争の幕が――

- - - - -
- - - - -
- - - - -

『戦士の殿堂』^{パレストラーレ}の管理する闘技場。その門の大扉には、数百年以上も昔に彫り込まれた豪華絢爛な装飾が成されている。

闘技場のあるノードポリカは港町だ。故に、その門も常に雨と潮風に晒され続ける。

表面が磨り減り、作られた当初はあつたであろうカラフルな着色も、石材本来の色のみが残る。……だのに色を失おうとも輝きは曇らず、寧ろある種の透明感に満ちてのだ。

この芸術品を保護する為に苦心した、職人たちの努力の結晶と言えよう。

——だが現在、その門の前は輝きを呑み込みかねない程の緊迫感が漂っていた。

門の直ぐ前、頭が失われた女神像に見下ろされる位置。そこには二十人近くの戦士が並ぶ。

——中央に立ち、腰に三尺半の長刀を携えるは『バレストラーレ戦士の殿堂』警備部長、カレル。

「久しぶりだなあ、クリント殿。本日は如何様なご用時で？」

門からやや離れた通りの外れ、丁度闘技場の前にある階段を上り終えた位置。そこにはともすれば五十人近くの戦士が並ぶ。

——中央に立ち、背に七尺の大剣を携えるは『ボス魔狩りの剣』の首領、クリント。

「フン、白々しい演技だな。其処まで堕ちては最早、凶犬と言うしかあるまいよ。」

——主と揃って獣とは、彼の剣豪も随分と落ちぶれたものではないか？」

「勝手に他人を決め付けてくれるなよ、ベルセルク狂戦士。見た目的に、獣の称号は手前方が似合いじゃねえか。」

あと——」

すつと双眼が細められる。場合が場合だけに、刀に手を掛けようとはしないものの、今にも相手に打ち掛かりそうな程の怒気。

「——我等が主を、侮辱してんじゃねエぞ……！」

今、此処に新たな闘争の幕が——

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

今、此処に新たな闘争の幕が――上がった。

此より始まる演目は、本来の道よりズレ始めた物語の、そのほんの一部。しかし彼にとっては一つの、特に大きな山場。^{ショウヤ}

「……よし、そろそろ行くか」

――今一度此処に告げよう。

彼は気付かない、と。

自信と言うイレギュラーと、この状況がどのような作用を齎す^{もたら}のか。

少なくとも、悪いことには違いない。

事実……“影”は、直ぐ近くに存在^いするのだから。

第十三話　完結し得た存在：中編？

闘技場のエントランス。そこは本来、幾つもの商業ギルドの支店が立ち並び、観客席と並んで闘技場内で最も盛り上がる場所といつても過言ではない。

また観光事業で潤うノードポリカであるから、経済的に見ても、最も盛り上がる場所でもある。

そんな……街を支える根幹の一つである場所が、異様な熱気と寒気に満ちている。

冷たい緊張感、熱い気合い、冷たい殺気、熱い怒り……。相反する二つの言葉は、数え切れぬそれらを言い表わす、正に至言。

発生の原因は、エントランスに居る一人一人の『戦士の殿堂』バレストラーレのメンバー。杖や剣、鉄の鎧や革の服など見た目の差はあれど、心持ちは皆同じ。

そして……彼らの視線は現在、一カ所に集中していた。

「変わりは……無さそうだな」

闘技場の正面に位置する大扉、石材を削り出して造り出された芸術品、挑戦者と観客の行き交う姿を見守り続ける大門。

……幾つもの言葉で飾られるそれが、この場に於ける中心となり、何時ものにも増して存在感を放ち続けている。

「状況は？」

ふと、近くにいた同僚に言葉を投げかける。

「膠着状態……といったところでしょいか。 なにか切欠があれば、完璧に事が始まりますね……」

「……そうか」

そんな中、翔矢は思考を巡らせる。

（理想は、犠牲者を出さずに連中を退けるコト。 それには連中に攻め込む口実を与えず、籠城を続ければいい。

……早くても朝まで、最悪数日間。 それまで此方が被害者という体裁を崩さなければ……）

——尤も、固く閉ざされた門は正しい意味で視線のみを集めるのみ。 ……つまるところ意識はその更にその向こう、闘技場の外側に向いているのだ。

……そこでは今、味方と敵が睨み合っている。 姿は見えなくとも、石の扉で隔たれているとも、両者の緊迫した感情は伝わってくる。

だからこそ、このような雰囲気になるのも無理からぬことだろう。

翔矢はぐるりと辺りを見渡し、ポツリと

「ここに是だけ居れば、いざという時にも持つか……」

そう判断を下すと、エントランスを離れるように歩き出した。

……なら、俺は別の所に行こう。 少なくとも、状況を見渡せる

場所がいい。

上の階からなら、どうにか……。

通路を歩き、階段を登り、扉を潜る。

月明かりすらない為、頼りになるのは通路に等間隔で置かれた燭台のみ。だがそれでも十分。

彼にとってみれば目を瞑っていても、闘技場内を移動するなど造作もないことである。何故なら、それ程までに慣れているから。

それは正しい意味で、此処は彼の家であるという証明だった。

「誰だ——！ て、シヨウヤさんか」

窓の外を見れば、どうにか事の次第が見受けられるくらいの距離。そこで、通路の先から来たのは一人の青年だった。肩に下げられたら剣の鞘が、炎の光を受けて怪しく揺らめいている。

彼は万が一に備え闘技場内各所に配備された一人であり、また翔矢の方が年上とは言え、年が近いことから比較的仲の良い間柄の一人。

故に、一瞬で高められた緊張感と殺気が一気に霧散した。

「それで、何でまたココに？」

「や。何となく、自分の目で状況を確認めたくて、少しな」

「そっすか。いや、マジメでスねー」

イヤミのニュアンスすら含まれていない言い方。

それに『やれやれ、呑気だなあ』と内心半ば呆れ気味の翔矢ではある、が口にはしなかった。

こんな状況だからこそ、少しでも綿密に遣り取りをする者と気を張り詰めすぎ無い者。

相手が自らより未熟者であろうとも、主義の違いで噛みついていい時じゃないと判断したためである。

その為、翔矢は言葉少なめに油断だけはするなよ、と伝えただけ。そしてやけに中間で延ばされた了解、という返事を聞きながらその青年を横を通り過ぎて――

「――」

「え……？」

「は――？」

今来た道をバツと振り返って、固まった。

- - - - -
- - - - -

「みんな居るよな……！」

トウチエ

頭領私室。翔矢に通された通路の先にあるその中は、足下さえ見えない、只ひたすらに濃い闇だった。

当然仲間の姿も見えない。だがユーリの投げた言葉への返事は、仲間達全員のモノだった。

そのことにユーリは小さく息を吐いて、安堵を零す。

——やがて、部屋に明かりが灯り始める。

入り口から見て、部屋の左右対称に配置された大きな燭台。独りでに灯る炎の色は紫。

明らかにこれだけでも異常だが、それすらも目に入らなかった。

何故なら、明るさに慣れた六人と一匹の目を奪ったモノがいる。それは——

「なっ、魔物……！」

——彼らの正面に座する、金の体躯を持つ巨大な生き物。大妖狐を連想させるその風貌。

……この世界の一般的の一面のみしか知らぬ者が、魔物だと連想してしまったのは、仕方ない事だろう。

そんな風に混乱する彼らを見下ろす『彼女』はまるで、面白いものを見た、とでも言いたげに目を細める。

そんな突然の事態にいち早く立ち直ったのはユーリだった。鞘を投げ、剣を抜き、目の前の強大な存在に切っ先を向ける。

「まったく、豪華なお食事付きかと期待してたのに、罨とはね」

翔矢やつ、覚えてろよ……。彼の内心の毒突きを口にすれば、一体何人が同意しただろうか。

……少なくとも一人は同意しないだろうが、過半数に及ぶ人数が同意するであろうということを導き出すのは、単純だった。

「罨ではないわ、彼女が——」

「——ベリウス？」

ジューデイスの言葉をエステルが引き継いで言う。

『如何にも。――妾がノードポリカの頭領、ドゥーチェ『戦士の殿堂』パレストラーレを束ねるベリウスじゃ』

さながら老婆の様な声。彼らが先ほど耳にしたものと、寸分の違いさえ感じられない。完璧な一致。

……彼らに認める他の選択肢はない。目の前の存在が、噂に聞くベリウスなのだと。

「こりゃたまげた」

「あなたも……人の言葉を話せるのですね……」

『先刻そなたらは、フェローに会あうておろつ。なれば、人の言の葉を操る妾とてさほど珍しくもあるまいて』

事もなさに、ベリウスは言う。……だが魔物が話せないのは当然のこと、数百、場合によっては千年単位の時を生きる存在でも話せない者もいるのだ。

この辺りの感性については、少々ぶっ飛んでいると言われても仕方無いかもしれない。

「あんた、『始祖の隸長』エンテレケイアだな」

『左様、シヨウヤから聞いて居らぬのか？』

『始祖の隸長』エンテレケイア、伝え聞く所によると、ノードポリカの街を作った存在。

……これまで彼らが聞いた情報を総合すると、『彼女』が作った街を作ったと言うことになる。だが、この街は千年の歴史がある街であるからして……。

自然とその先に行き着く答えに、皆啞然とする。

「……ドンのじいさん、知ってて隠してやがったな」

『？ そなたは』

「ドン・ホワイートホースの部下のレイブン、書状を持ってきたぜ」

そうして、レイブンはベリウスに懷に忍ばせていた封書を手渡すと、ベリウスは人の数倍はある掌を使い器用に目を走らせる。

その最中に零されたベリウスの説明によると、十年前の戦争で世話になったのと言う。

——その戦争の通称は、『人魔戦争』。魔物と人が戦ったとされる戦争であり、公式には生存者なしで終わったとされる。

曰く、『人魔戦争』は人と『始祖の隸長』エンテレケイアとの闘い。

曰く、ベリウスも参戦していた。

曰く、『始祖の隸長』エンテレケイアの定めしがったまで、とのこと。

曰く、ドン・ホワイートホースとはその時からの仲。

次々と語られる真実の一端。それを一通りはなし終えると、ベリウスはさて、と話を切り替えた。

『ドンはフェローとの仲立ちを妾に求めて居る。あの剛毅な男も、フェローに街を襲われては敵わぬようじゃな。……無碍には出来ぬ願いよ、一応承知しておこうかの』

すんなりと、ベリウスは了承の意を示す。それに喜びの声をあげたのは、レイブンだった。仕事の一区切りがついて一安心、と言ったところか。

「ふいふいい人で助かったわ」

「……街襲うのもいれば、ギルドの長やってんのもいる。『始祖^{エン}テレケイアの隸長』ってのは妙な連中だな」

「ふつ、それはそなたら人も同じであろう？」

「うむ、その通りなのじゃ」

柔らかな声色で談笑交わすベリウス。彼女の顔が、ゆっくりと、ある一人の少女に向けられる。

「……さて、用向きは書状だけではあるまい。　のう——」

その少女はエステル。エステルは不意に、ダングレストで自分を襲おうとした紅き怪鳥、フェローを思い出した。

「——『満月の子』よ」

身体が硬直するのを、エステルは感じた。……そうだフェローもベリウスも、姿は違えど、同じ『始祖^{エン}テレケイアの隸長』という括りに属するものなのだ。

……そんなバカな事を考えて、心中を覆い隠してみる。
知りたいけど、知りたくない。好奇心と恐怖心が混ざりあう矛盾に、蓋をしていたくなるものなのだ。

「分かるの……？ エステルが『満月の子』だって」

『我ら』^{エンテレケイア}始祖の隸長』は『満月の子』の力を感じることが出来るのじゃ。そこに力の大小、生きた年月は関係なく、また例外も無い。

——シヨウヤのような、元人間でもな』

「……………え？」

- - - - -
- - - - -

「す、すみません」

闇より、振動が鼓膜を揺らす。

その声は震えていた。 何かに怯えるように、何かに歓喜するよう
うに。

あまりにも突然なことに、二人は曖昧な疑問符を浮かべることが出来るのみ。

翔矢に至っては、振り返った姿勢のまま硬直状態に陥ってしまった。
た。

……ただそれは、突然声をかけられたからではない。

「わ、私です、『遺構の門』^{ルインスゲート}のラーギイです……！ 急遽同僚補佐^{ドウーチエ}
に用事が出来まして——」

何故、何故、なぜ、ナゼ……？ たった二文字の言葉が翔矢の脳内を支配する。

よりにもよって、何故このタイミングで——！？

「な、なーんだ、そーだったんですか。ビックリさせないで下さいよー」

「ばッ——！！」

極々自然に。

もう一人の青年が、闇の中に居るであろう声の主に向かって足を踏み出した。

翔矢は彼の襟首を掴もうと、必死に手を伸ばした。

——そして、目撃する。

闇の中、人影が、人の気配が確かに動くのを。

ニヤリと、誰かがワラウ。

翔矢は見た。その中から、凶悪な曲線を描いた刃が飛び出すのを。

青年は見た。その刃が、下段から自分を狙っているのを。

……一瞬が引き延ばされる。

翔矢の伸ばした右手は、確かに青年の襟首を掴んだ。続けて退避させようと、グイと引き付ける。

だが——

「あ——」

酷く呆気なく、情けない眩き。

気付けば、スパン、と。 青年の左腕が、宙を舞っていた。

「あ……あ あ あ ああああああ——！！？」

一瞬後には、青年がまるで駄々っ子のように泣き叫ぶ。

翔矢は辛うじて、彼を守るようにして刀を振り下ろすのが、精一杯。刹那、“影”がバックステップで距離をとったのが気配で認識する。

「お……お、れの腕え……な、なんでっ……、何でだよおっ！？」

「落ち着け、治療師^{ヒーラー}に頼めばくつつけて貰えるッ！ だから——
！」

正気を保て、敵は目の前にいる、と。 翔矢は有らん限りの思いを伝えようとする。

だけど、伝わらない。

「ちッ……………」

人間の腕が刈り取られたという異常、非常事態だ。 精神と肉体両方の痛みに晒される前者の反応は、至極真つ当なものと言える。

翔矢こそ、青年が酷く前後不覚になったからこそ、辛うじてパニックを免れていただけ。

「何だってデメエがいるんだよ！ なあ！？ ——」

理性の細い糸を手繰り寄せ、生き残る為の最善手の算出を開始。
敵性存在と味方の直線間に身体を滑り込む。

「——『リインズゲート遺構の門』ボス首領ラーギイ改め、『リヴァイアサンのツメ海凶の爪』ボス首領——

——イエーガーさんよお！！！！？」

固有魔術術式、壱式、識別名称・閃光……使用不可。

現状で使用しても効果無し、若しくは極低。加えて現位置で使用するれば彼らに目撃されるのは確実。

その場合、戦闘行為を誘発しかねない。

暗闇の中より、スラリと伸びた長身が姿を表す。力無くぶら下げた右腕には、彼の代名詞と言える可変式の鎌があった。

「ようやく気付きましたか、スチュピッドボーイ？」

「さて、ね。……案外もつと前に気付いてたかもしれないぜ？」

これは本当のこと。ラーギイ^{ラーギイ}イエーガー^{ゲーム}ということは、本筋でも明かされていたことだ。それにそもそも、regae^{ラーギイ}yという名前自体、yeager^{イエーガー}のスペルを反転させただけという安易なものである。

……蛇足を付け加えるならば、そのコトを知った主人公陣が他のギルドなどに何一つ伝えて居なかったことを翔矢は疑問に思っていた、ということくらいか。

「フム……確かにそう考えればフィットすることもありますネ」

バット……。イエーガーは表情一つ変えず続ける。

身長之差から見下ろされ続ける状況は、力の差を如実に表し、翔矢の精神を圧倒する迫力を追加していた。

何で気がつかなかった……！ 口の中に鉄錆の味が広がる。

「ノウプロブレム。それは粗末事でーす」

（くっ……！ こんな奴相手に負傷者抱えて戦闘とか、餓鬼の物をびんずるのもいいとこだ。

それに——）

背後に目を遣ると、床には鮮血の水溜まりがあつた。混乱していても止血をすること覚えていたのか、傷口を抑えている。

……効果の程は別として、だが。

（……出血の量が多い。 だけど人体に直接干涉する治療術なんて、今の俺にはムリだ。 リスクが高すぎる。

……攻めて止血が行えれば——）

——ゾクリ。

言い知れぬ恐怖、寒気、即ち殺気。 さながら氷の刃とも言おうか。

咄嗟に水平構えた木目調の鋼が、黒い曲線を受け止める。 衝撃が身体全体を揺さぶり、両腕に痺れを齎した。

「ぐアッ……！？」

「アーンド、以前もアドバイスしましたが……余所見とは感心しま

せんネ」

まるで窺^{たしな}めるかのように、静かな声。心の奥底までを見通す濁った瞳が、翔矢の双眸を覗き込む。

「そうそう。もうお気付きかもしれませんが、ジイスプロジェクトはミーたちによるもの。

あるリクエストを受けてのワーク。ソウ——」

ナニカ、嫌な予感がする、と。そして同時に……もう遅いとも悟る。

それは、ただの勘。不確定どころではないあやふやな存在。……しかし、人もまた獣。そして、生存本能という人に残された数少ない獣の部分が、不吉を告げるのだ。

心の何処かで、決定的な何かが抜け落ちる音を……彼は聞いた。

「——このままプログレスしないのはノットベター。アークウーオーケー？」

「何が、云いたい——？」

心臓が早鐘のように脈打つ。鼓動は何時になく大きい。煩い、黙れ、いっそ止まれ。脂汗が頬を伝い、顎から床に落ちる。

「インシヨート、今頃マイサボーウドネイツは、何をしているんでしょうかね？」

「ッ！」

サボードネイト、部下。　つまりは『リヴァイアサンのツメ海凶の爪』の赤眼共。
そんな連中が、今、何処で何をしているかだって？　………そ
んなの、決まってるじゃねえか。

その時、その瞬間、その場所で。

翔矢は爆発音を聞く。　その衝撃は建物全体を揺らし、天井から
は粉がパラパラと落ちる。

——　一瞬の後、次に聞こえてきたのは、大勢の人間の………
…怒号と雄叫びだった。

第十三話　完結し得た存在：中編？（後書き）

うつへーい、爆弾投下あつ！

何か自分でどんどんハードルあげながら、爆走してるという質の悪い状態になってます。

ホント、どうしてこうなった（汗

第十三話　完結し得た存在：後編（前書き）

まだ終わらないノードポリカの後編その1！

第十三話　完結し得た存在：後編

寒々とした夜の下、殺伐とした緊張は陸軟風を犯していく。

潮風は止んだ、お陰で人が持つ五感の何れをも欠くことなくいられる。

戦闘時、非戦闘時に於ける僅かな違和感すらない。　だというのに……………

（よもや、悟られていたとはな…………）

魔物討伐ギルド『一魔狩りの剣』の首領^{ボス}、クリントは内心落胆する。

目の前にいるのは二十人足らずのギルド『戦士の殿堂』^{パレストラーレ}の戦闘員、対する此方は五十人超。　相手は対人、此方は対魔物ということを含めても数の差でどちらが有利などはつきりしている。

…………だが既に悟られているとは、クリントにとって誤算だった。きつと闘技場の正面の門を潜れば、『戦士の殿堂』^{パレストラーレ}のメンバーがいるのだろつということは予想できる。

ならばこの場を突破しても、そこから先は無い。

加えて目の前にはあのカレルがいる。　それが率いる者たちと直接、真つ当に相対すれば幾ら削られることか…………。

「…………何とも、儘ならぬものだな」

「ハッ、違えねえな」

ふとしたクリントの呟きは、隣にいたフードを被った男・ティソンによって拾われる。

……元々今回の一件はユニオンからの依頼だった。それも、ユニオンを束ねるギルド『天射る矢』^{アルトスク}の大首領の孫が直接持ってきたもの。

『ノードポリカの街を治め、ユニオンとも概ね有効関係にあるギルド『戦士の殿堂』^{バレストラレドゥーチェ}の頭領ベリウスが魔物によって捕らえられた。これは急を要する案件であり、ギルド社会全体に影響する一件でもある。そのため魔物討伐の専門ギルド『魔狩りの剣』に同氏の救出を依頼する次第である』

……この文章を読んだ瞬間、様々な思いがクリントの中に過ぎた。疑念や喜びなど、様々。

そしてよくよく考えれば考える程、疑心暗鬼に陥っていく。

そこでこれを持ってきた青年、ハリーに質問する。

「——これを知っている者は他に居るのか？」

「——そのはずだ。オレだって『天射る矢』^{アルトスク}から伝えられたんだ」

「——では貴様に直接伝えた人物は？」

「——名は知らないが、恰好から想像するにギルドの下っ端だった。本人もそう言っていたしな。でも、それがどうかしたのか？」

つまり、下っ端にも伝わっていたのだからギルド全体には既に通達済みと判断した、ということ。……だがそろだけでは、真とは限らない。

クリントは、他にも様々なことを部下に探らせたのだが、驚くべきことに『戦士の殿堂』^{バレストラーレ}に関する物騒な情報は何一つ耳に入らなかった。精々が、ギルドを出ていた幹部の一人が戻って来たという位のもの。

ハリーという青年も、成功による自身への誉を焦るあまり碌な確認をしなかったのだろう。

この青年、大首領^{ドン}の孫だけあって周囲からの期待ややつかみも大きい筈だ。それに応える、あるいは見返すために必死なため、視界も狭くなっている見える。

……誰かが潰け込もうと思えば、面白いくらいに足元を掬われることだろう。

——とどのつまり、

（この一件は、何者かによって“仕組まれた”もの。……この『魔狩りの剣』に大義名分を持たせるために）

この案件を使えば、依頼を理由に『戦士の殿堂』^{バレストラーレ}に攻めこむことが出来る。

兼ねてから『戦士の殿堂』^{バレストラーレ}を敵視してきた『魔狩りの剣』にとつてはまたとないチャンスだった。

……また敵視してきた理由は、闘技場の見せ物として魔物を飼っているためとされているが、それだけではない。

人魔戦争の黒幕とされる『魔物の親玉・ベリウス』^{ドワーチェ}が頭領を勤めているというのに依るところが大きい。

——これを討てば、復讐の一端を遂げることが出来る。

『魔狩りの剣』^{ボス}には、首領クリントを始め人魔戦争で肉親を失った者が多くいる。

だから何者かの思惑に利用されるとしても、願ってもないこと。故に、依頼を承諾したのだ。

（だというのに……）

そこで、始めにもどる。

「……せめて、切欠があればな。 闘技場の警戒態勢に支障が出るような、何かが」

「だな、だけどよそんなに都合良く——！？」

——それは、何かが弾けたような振動。

ティソンが苛だたしげに吐いた言葉、それを遮るように突如として轟音が轟いた。

一斉に、辺りの空気は混沌の様相を呈す。

見上げると闘技場から煙が燻ぶり、一部の外壁が取り払われていた。 内部で何が起こっているのかを詳しく知る術はないが怒号や猛り、悲鳴が聞こえてくることから察するに、戦闘が行われているようだった。

誰しもが呆気にとられた、そしてそれを引き戻したのが——

「は、ふはははッ!? いいぜいいぜ! 誰だよこんな最っ高の演出してくれた奴あ、オレらに対するプレゼントですってかアッ!?」

ティソンの高笑い。この狂った叫びが、逆にこの場に於ける秩序を呼び戻す。

それに応えて、クリントはニヤリと笑った。

「そうだな、何者かは知らんが我らにとっては僥倖。……さて全員武器を構えろ、我らが仇を討つために——!!」

……やがてその場は土煙の舞う戦場と化す。

剣が踊り、戦斧が振り下ろされ、火球が焦がし、雷鳴が轟く。

——正史とは変わり、そして変わらぬ闘争。始まりが変わったそれはどの様な帰結を遂げるのか、それは誰にも分からない。あるのは、個々の持つ譲れぬモノだけである。

- - -
- - -
- - -

「っ、らあッ!?!」

所は変わり、闘技場の二回通路。
その幅三間程もない狭い場所では、鋼と鋼の打ち合う音が響いている。

大振りの鎌と刀。通常極狭い領域での戦闘は、地の利からくる取り回しのし辛さを理由に後者に軍配が上がる事だろう。

この争いでもその例に漏れず、刀を持つ翔矢が、遙か上の実力者であるイエガー相手に攻めることが出来ている。

……だが、それは一見するとだ。顔色一つだけでも取ってみれば、その印象はガラリと変わる筈。片方は額から汗と血の混ざった雫を滴らせながら苦悶の表情を浮かべ、片方は激しい運動などしていないかのような涼しげな表情。そして口元の笑みには嘲りを含む。

どちらがどちらかなど、語るだけ野暮というもの。

とどのつまり、翔矢は“攻めている”のではなく“守っている”ということだ。

……再度確認するが、ここは極狭い通路だ。

そんな所でもし、得物を走らせるだけの隙を作ってしまったら？

その時、リーチの長い鎌が振るわれれば？

その速度が、避けきれないほど早ければ？

その担い手が、得物で軌跡を受け止められない程の強者であれば？

——そこには、地の利や手数、全力を挙げてでも、漸く互角という危うい均衡の戦場が生まれる。

翔矢に出来る最良は、攻撃の暇を与えないように刀を絶え間なく動かすのみ。

翔矢は舌打ちした。そして毒づく。

コイツ、前より強くなっていやがる。

……いや、前は手加減してたって訳か。

手加減をされていた……つまりは見下されていた。その事実を受け入れることに、翔矢は怒りも悲しみも抱かない。それは過去の出来事で、己の実力云々で格下なのは歴としている。そんな些事よりも今と過去の、イエガーの違いが翔矢の興味を引く。

何があつたかは知らない。だが何かがあつたのだ。イエガーという一個人の意向を変えた、何かが。

「……分かん、ねえ。何故だ？ 一体何が起こ、ツた！？」

「ホワツツ？ 何を疑問に思つのでーす？」

「、テメエ、今の行動、そして数日前、の襲撃の二つ」

息も絶え絶え、刀を振り回しながらの会話など難しくて仕方ない。でも……やるしかない。

それに……。

僅かに淡い希望を灯しながら

「トルビキアの森での、襲撃、と兵装魔導器ホブローブラステイア、持った連中。と明らかに違う！」

瞬間。エアルを通した刀が三日月を虚空に描く。

だがイエガーは頬を切り裂かれながらも前進し、無理矢理翔矢を押し返す。その僅かによろめいたところに、鎌の柄の先を腹に突き入れた。

声にならない切れ切れの悲鳴を吐く隙に、イエガーは更に、鎌の刃の無い側で翔矢の側頭部を殴りつける。

「ぐ……あ……、つ。最初の二つが俺には、俺を――捕らえるにしろ殺すにしろ。、本気だったとは思えねえんだ、ッ！」

刀で体重を支え、右手で窓が嵌められた窪みを掴み、身体をあげる。

イエガーの表情が気味の悪いのつぺりとした白黒の笑みではなく、感情の色がついたかのように目が細まった。

それを知ってか知らずか……ともあれ追撃の手が休まっている好機に、翔矢は言葉を紡ぎ続ける。

「始めに関してはアッ……！あの赤髪の娘意外、の、“赤眼”實力は、テメエの所では下の方。そして次には、そっち専門ですらなく、ただの傘下のギルドの構成員だった！？」

支えを退け、自分両脚で床に立つ。

イエガーとの距離は、一歩前に踏み出せば、それで相手を斬れる距離。本来剣を振るう最中であれば、無いにも等しい。

……しかし、この位置は相手にとっては間合いの内側。翔矢はチラリと、自らの体内状況を意識する。

「でもッ……数日前のは人数から、今回はテメエが自ら、出てきたことから顧みて、明らかに本気だとお否応無く分かる！」

「……で、ユーは何が言いたいのですか？」

「要は、な。なんでテメエは力を抜いてた、ってことだよ――
――！」

翔矢は爆発のように飛び、上段からの振り下ろし。

当然の如く得物で防ぐイエガーだが、翔矢は左手で鎌の柄を掴み、刀を一閃。肩口を切り裂くが、まだ浅い。

「フンっ……！」

「が、ハ！？」

イエガーの蹴りが翔矢の胸にもろに当たり、杯の空気一気に押し出される。心臓にも衝撃がはしり、意識に一瞬ノイズが起こる。そんな中吹き飛ばされそうになりながらも、リカバリングで着地をして……翔矢は胸の痛みを覚えた。苦痛が、表情を歪める。

（……まずッたな、骨何本イッた……？）

腹のそこからせり上がる吐き気と、視界を外側から侵食する黒。体内のエアルを治療用に装填、途端意識がクリアに戻る。自らの頑丈さに呆れと関心を寄せながら、キツとイエガーを睨む。

「ヤツにッ、何を、命じられた？」

「――」

「……だん、まり……かい！」

まあ、仕方ないか。そう翔矢は嘆息する。口から息をするのも辛いが、そうせずにはいられなかった。

そもそもイエガーは、俺が何を何処まで知っているかを知らない。察するに、俺の言葉の真意を計りかねている、といったところか。それに、

「テメエが、俺に話さなきゃならねえ……って言われもない、よな」

再度翔矢は刀を構えた。 刃の位置は下段に、腰を落として重心をも下に。

さながら飛び上がる前に縮められたバネのような体制の翔矢を、イエガーは鎌を水平に構えながらそれを見つめる。

そして何故、と小さく呟く。 それを知ってかいながら、何故そんなに余裕でいられるのか。

それに……目の前の青年は恐らく“自分には勝てない”と自認もしている。 不屈の精神程度で覆されるような状況でもない。

「でもよ、テメエはそれでいいのか……」

(……マインドへの揺さぶり。 バット、その程度でミィは揺らぎませんよ?)

あまりにも多く使い古され、安易で浅はかと言えないような手段。

故にイエガーは取るに足らないものと判断を下す。 この青年が完全に追い込まれた証拠だろう。

……そろそろケリをつけるとしよう、ごり押しでも十分。

次の刹那で、終わる。 そんな慢心でなく事実による、必定が――

「テメエだつて元は騎士だろ!? 十年前の戦争で全てを失った^{いこひ}からって、それでいいのか!？」

――怒りで、戸惑いで、意志が僅かにブレる。

表層では欠片も知り得ない変化、翔矢もそれを悟った訳ではない。それでも、藁にでも縋る思いで賭にでた。一瞬でも、イエガーの反応が遅れるかもしれないという希望とすら呼べない何かに。しかし現実、

「らあツツツ——！！！」

「クッ！」

とつた——！ 翔矢は歓喜する、そして来る痛みを予感した。下段からの斬り上げ、暗い空間に再び二条の三日月の軌跡、義翔双閃が浮かび上がる。

だがそれでは終わらない。イエガーの得物の柄が剣筋を二つとも受け止め、流れるように自然と、鎌が跳ね上がる。

「あ——！！！」

もはや叫びも続かない。喉がひび割れたような呻きだけが残り、その“痛み”を伝える。

翔矢は右脇腹に、冷たい灼熱を感じていた。絶え間なく、生命を支えていた血が流れ出るのを自覚する。

それでも、翔矢はワラった。

（——俺の、勝ちだ）

殺気もなく、倒れ込むように。翔矢は右手の刀を落とす。手を伸ばさずとも、すぐそこに敵がいる。翔矢両腕を伸ばして、イエガーの服を力一杯握り締め、目を見開いた。

——その瞬間、両腕を光が包み込む。

「ぬ、う……これ、はアゝ!!?」

何が起こった……?

イエガーは、自身の身体に起こった事態を理解しきれなかった。
マズい、これは……マズい。

力が抜け落ちる。指の先から、顔の表面から、全身から。

カラン、と響いた音が自分が得物を取り落としたものとも気付けない。

終ぞには、自分が床に倒れ伏した事実さえ、夢現。

信じられない、というの表情で見上げる。そこにいたのは、先程まで自分より格下だと認識していた青年。

（ミーの、負け……ですか。……先程の、揺さぶりはブラフ、）

彼が実感したのは、ただそれだけ。

青年は煌めく得物を拾い上げ、切っ先を下に向けた。

意味は分からなかったが、これから自分がどうなるのかは分かる。
そうして何時しか、イエガーは微笑みを浮かべる。……それは
悲しみと喜び、反する2つを内包するものだった。

（グッバイ——）

彼は、刃が喉を切り裂くのを幻視して——

——ザクリ、という鈍い振動を聞いた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

——時は少し巻き戻り、場所は頭領私室^{トウーチエ}。

紫の炎の揺らめくそこでは、多くの者が驚愕の表情を浮かべている。それは勿論、部屋の上座に座する金狐——ベリウスの発言を受けてのことだ。

ややあって、リタが声を張り上げる。

「元人間って、アイツまさか、人間じゃないの……………！？」

『左様。成り立ちはやや違えど、あれは妾らと同じ』始祖の隸長^{エンテレケイア}の一員よ』

尤も本人は、『自分はそんな大層な存在ではない』と否定しているがの、とベリウスは続ける。

確かに翔矢は体内に貯められるエアルの量も少なく、自由自在に術式に干渉出来る程でもない。

おかげでエアルを用いた自らの治癒や、詠唱等の一切を破棄した魔術は満足に扱えない。

極めつけには『始祖の隸長^{エンテレケイア}』の総てに共通する、生命維持活動の絶対的根元をエアルに依存している訳でもない。

『そういった意味では、『満月の子』に近しい存在と言えるよう。

じゃが本質は調停者、守護者であることには変わりはないのじゃよ」

「……なんて言うか、それらの一端を扱えるだけでも、十分に反則だよ」

としみじみ語るカオルだが、それは正しいようで正しくない。

元々翔矢はただの日本という国に生まれた、ごく一般的な高校生である。代々続く武家の血筋でも、特殊な超能力者でもない。

そんな彼がいくら鍛錬を積もうとも、短時間で強くなるには限度がある。

……つまりは、翔矢の力不足を埋めるのが“それ”なのだ。“それ”があつて、初めてこの世界の魔物や強者と渡り合える。

故に翔矢の能力は今現在、反則的な存在足り得ない。言つてしまえば比べる対象が明らかに強過ぎるのだ。

……尤も、そこまで基礎パラメータを底上げするのだから強力な能力ではあるのだろうが。

『そろそろあ奴の話は終いにするとして、本題に入るとするかの？』

「あ……うん、お願い」

上手く言葉を紡がない様子のエステルに代わつて、リタが答える。

彼女にとって翔矢についての話は、触りだけでもとても興味を引くものであつた。ブラスティア魔導器の研究者である彼女にとって魔導器無しブラスティア

に術技を使え、しかもはつきりとした理論を持っている翔矢の情報は、喉から手が出る程欲しいものである。

なのにそれよりもエステル、つまりは“友人”のことを優先するあたり彼女の心境の変化が伺えるものだ。

「……エステリーゼといいます。『満月の子』とはいったい何なのですか？」

それを知ってか知らずか、エステルはおずおずと、ベリウスの直ぐ側まで歩み寄る。

「わたし、フェローに忌まわしき毒と言われました。 あれは、一体どういう意味なのですか？」

『ふむ、それを知ったところでそなたの運命が変わるかは分からぬが……』

事の真相を伝えて良いものか、一瞬思考するベリウス。 それはどうしようもないことだ、故に、そこに救いは無い。
人為的な理不尽より、世界の秩序の方が時に残酷な回答を導き出すのだから。

「ベリウス、そのことなのだけど」

そんな戸惑いをちらつかせるベリウスに、話を遮り話しかける人物がいた。 ……だがしかし、その表情と声色が何処か堅いものだったのに気づけたのは誰もいない。

この場にはおらず、今現在死神と対峙している黒髪の青年なら、気づけたのかもしれないが。

そもそもジュデイスはバウルという名の『始祖の隸長』と仲が良いが、その種族全体にはそうではない。
エンテレケイア

そもそも『始祖の隸長』は十年前の人魔戦争の折りにジュデイスの故郷を滅ぼしている。そして生き残った彼女を五年に渡ってあ

る街に軟禁していたのだ。

比較的友好的なベリウスとはいえど、眉を顰めてしまつくらいには苦手意識をもっているのだ。

「ジュデイス……？」

『ふむ、何かあるというのかの』

「——フェローは、私たちが彼女に同行していることから、一定の猶予を与えているつもりだね。恐らくストッパーとしての役目を気休め程度に期待しているのでしょうけど、そろそろそれも限界かもしれない。ショウヤが一時的には取り繕ってくれていたのだけど……」

淡々として続けられる報告に、ユーリ達はどんどん目を丸くしていく。さながら航空機から断続的に落とされ続ける爆弾のよう。ついには耐えきれなくなったりタが指さして声を荒げる。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよあんた！ やけに色んなことを知ってるとは思ってたけど、今度は何！？ ストッパー？ アイツが取り繕ってた？ 一体どういう事なの、一から十までちゃんと説明して！」

「む、むむ。ジュディ姐、ウチらにも分かるように言ってくれんかの……？」

そう言った二人の反応は極自然なものだ。この場合配慮が足りなかったのはジュデイスの方だと言える。

だが彼女は気にせず、だがしかし、面倒だなという内心をおくびにも出さずに振り返った。そこにあるのは、程度の違いはあれど

自身に対する疑念だ。この視線にしばらくずっと晒されていた翔矢を思いだし、ジュデイスは彼を賞賛した。

そうして、何から始めたものかと思考して……それが、一瞬で崩壊した。

「な、何なんです!？」

「爆発!？ おっさん、厄介ことは勘弁よ」

莫大な振動、くぐもった轟音。それが建物を揺らし、そしてベリウスは、それが何を意味するのかを悟っていた。悔しげに押し出される声が、ユーリたちにその異常の具合を物語る。

『ついに、始まってしまったか。じゃが、何故………』

「ベリウス？ 何が始まったっていうの」

『我がギルド』戦士の殿堂パレストラ』と、ギルド『魔狩りの剣』の——
——戦争しゃよ』

声なき叫びが、その部屋に充滿した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……？ ホワイ？」

そこにあるのは暗闇、視界の端で炎が揺らめいているのが見える。だがそれよりも視界の右側……自らの顔の右隣から延びる鋼に目を奪われた。

彼——イエガーは、木目調に彩られたそれを持つ青年を見上げる。

依然身体中に力は入らないが、意識は先程より明瞭だ。この分だと暫くすれば、戦闘も可能になるだろう。………勿論、それまでに生きていれば、だが。

「……これで、貸し、一つだッ」

「ッ………？」

翔矢の体内からは血流が漏れ、口元からは筋となって流れている。ごぽり、むせかえるとまた逆流してくる。

「テメエにつ、今死なれると、困……んだよ」

つまり、何か益あって自分を助けたということだろうか。具体的にそれが何なのか推し量るべくもないが、それならまだ納得できる。

翔矢は、イエガーが納得しているのも無視し、話を続ける。

「あと、さ……。テメエは、死ねてよかった、みたいにツ笑ってたけど。よ、テメエを慕う人間にとっちゃ、辛いとは考えねえのか……？」

「……………」

「……考えなかった、訳じゃないか。　テメエならッ当然だよな」

翔矢はイエガーをその場に残し、後方で倒れ、呻き声くらいしかあげなくなつた青年に肩を貸す。

「……俺を狙つたのは、どうせ奴の命令だろうけどよ。　テメエには、それより優先する、ことがもうあるだろうがッ。

自分の意地、くらい、通してみる……！」

翔矢の脳裏に、二人の少女の顔が浮かび上がる。　赤と新緑、性格も真反対な二人だ。

ゴーシュとドロワット。　イエガーを慕い、そして恩返しのために
リヴァイアサンのツメ
『海凶の爪』というギルドに足を踏み入れた少女たち。

ゲームで、彼女らがどれほどイエガーを慕っていたのかを知っている。　“片方”しか知らなくても、十分過ぎるほどに。

「残された者つてのは、辛いよな？　でも、それに甘んじてんじやねえよ……」

吐き捨てるように、誰かに——自分にさえ言い聞かせるように、翔矢は立ち去る。

……そこに、重い目蓋を持ち上げながら、イエガーは自身でも気づかぬまま喉を震わせた。

「……………ミィたちは、ユーたちのバトル……をスタート、させることがミッション。　……既にマイサボーウドネイツ、は撤退した、ハズでーす……」

その言葉で一瞬立ち止まった翔矢であるが、再び足を進め始めた。途中まではその背中を焰が照らしていたが、やがてその姿は闇へと消える。

……闇に閉ざされた世界に、イエガーは一人取り残された。まるで、十年前の戦争で一度命を落とした時のよう。

そして思い出す、黒い体躯にぎらつく眼。まなこ……あの化け物と対峙した彼女の胸中は、一体どのようなものだったのだろうか？

ふと、胸の奥に懐かしさが込み上げる。

「……本当に、彼は愚かな子供ですネ。ステュピッドボーイ アンド……青臭過ぎる」

でも悪くはない。自らには既に失われた未熟さを目の当たりにして、何故かそう思えた。

「ユーも、そうは思いませんか……」

暗闇の先、窓の外に広がるは一番星の輝く夜空。そこに浮かぶは、長い黒髪を翻し変形弓に矢をつがえる女性。

イエガーという男に、この世を去って尚影を落とし続ける女。

その人の名は、

「ねえ、——キャナリ」

嘗ての上司であり、恋人であつた彼女の顔を思い出した彼の表情は、微笑みを湛えていた。

第十三話　完結し得た存在：後編（後書き）

ども、エクシリアプレイヤーを見かけるたび『けっ、ブルジョアめ……！』とか言ったり、f a t e / e x t r a c c c の発売決定に狂喜したり、つい最近ようやくt o vの映画見て隊長の勇姿に感動したり、人外どものカーニバルに笑ったり、体育祭の平日開催に不平不満をもったり、期首テスト80点以下再テストとか死にたいの？という感じの玄ブです。

だれか安全に直視の魔眼手に入れる方法しらないかな……マジであるシーンみたく校舎を崩壊させたくなってきた……！！

次回、ノードポリカ編ラスト

果たして、ショウヤはこの危機を乗り越えられるのかっ！？

その結果は——作者もしらない！（爆

第十三話　完結し得た存在：後編？

走っている。闇の中、時折揺れる焰を視界の端に収めながら。

左腕は、ケガと失血により意識朦朧がとしている青年を支え、右腕では脇腹の傷口を押さえている。

「なにが、甘んじるなだッ！」

顔を苦痛の色に染めた翔矢は、誰に聞かせるでもなく叫ぶ。

戦闘とそれに伴う負傷から体力の消耗は大きい。故に無駄な行為は控えるべきなのだが、そうせずには居られなかった。

「現状に……あつたはずに甘んじてるのは俺じゃねえ、かよッ」

どの口があんな台詞を……。こんなだから、余計なモノを呼び寄せるのだ。

悪態は止まらない、翔矢の仲の後悔の二文字が口を動かし続ける。……ある意味で、これは彼なりの償いであり反省であり、ただの自傷行為で自慰行為であつた。

翔矢は、階段を一段一段下って行く。途中多量の血痕、果ては黒いコートを羽織った死体を目にし、闘争の音色を聞き流しながら一段一段。

そして状況を整理していく。

先程、イエガーははつきりと口にしなかったが奴の部下。つまり『リウアイアサンのツメ海凶の爪』の赤眼は恐らく、他の場所でイエガーと同じようなことをしていたのだろう。

目的は『戦士の殿堂』と『魔狩りの剣』間の戦闘行為の誘発と……その最中での別の依頼の遂行。

「要は、俺の身柄……かい」

前々から思っではいたが、暗殺集団に狙われるようになるとか本当に勘弁して欲しい。………まったく………そんなものは不思議の世界の人間に押し付けてしまいたい。

………そこに行き着いた思考に対して、翔矢は苦笑を零した。その持論で言うならば異世界を訪れ、現在進行形で世界を旅している俺も大して変わらねえじゃないか。

「ふん………あと連中はついでに、^{アバティ}聖核も手に入れられたら………ってとこかね。

………先が思いやられるな、こちとら不調だつてのに」

笑みを振り払うように鼻を鳴らす翔矢は、更に恥を覆い隠すように呟き続ける。

とはいえ体内のエアルは残り少ないのも事実。イエガーを（一時的に）戦闘不能にさせるためとはいえ、思いの外使いすぎてしまった。

だがこれは、仕方ないと言えは仕方ないこともある。

ゲームでのもしくは外伝作品の知識から省みるに、大量のエアルが彼の生命維持に影響することは分かっていたが、その具体的な量など分かる筈もない。

だから確実性を帰すために、少々やりすぎとも思える量を翔矢は放出したのだ。

それ故、“保険”のことを考えるなら、翔矢はこれ以上の戦闘を避けるべきである。

階段を下りきり、自らを勇気づけるように小さく呟いて見渡すと、

「皆、無事だとい——」

そこは、一面の紅のみ。どうということのない、只の血の海だった。

鉄錆の臭いが鼻腔をつき、腹の底に不快感が増す。慣れなどでは覆しようのない、生命としての嫌悪感。誰の者かは確認しきれないが、月明かりの当たらず、薄暗くなった大部屋の隅に横たわる人がいるのは分かった。

格好と禿あがった容姿から、普段から世話になっていた老戦士だと検討を寄せる。

……だがそれは、別の自分ホームクルスが否定した。それは“人”ではなく既に“肉塊”だと。

翔矢はエアルを感じ取り、操ることが出来る。そしてエアルはこの世界に於ける万物の根元であり、生命力。そして何処にでも——極少量だが空気にまで——存在する。

従って世界に生きる総ての生命は、生きる限り、母なる大地からそれを（始祖エンテレケイアの隸長とは違う意味で）汲み取り続ける。より正確に言うのなら、呼吸や食事などの際どうしても身体に取り込む事になるため、外界との間に“流れ”が生まれるのだ。

だが……そこに流れは二つしかない。

古典的過ぎて、笑いが込み上げて来る。乾いたそれを抑えるのに、翔矢は必死だった。

意識の再起動に数秒を要したのは、未だ真つ当な感性を持っている証だろうか。

(っ…………！惚けてないで、今はそれより治療術師ヒーラーを…………)

事態は、一刻を争う。だが見たところ声や金属のぶつかり合う音はすれど、この部屋には人は居ない。

恐らく外と奥、その二つに戦場が分かれているのだらうと翔矢は結論付けた。

「う……………あ……………」

「安心しとけ、時間はそうかからん」

そう安心させるように言うが、本当はそんなことは思っていないかった。

闘技場内部にまで侵入された以上、普段の待機場所には居ないだろう。恐らくは前線後衛に回っている筈。

出来るだけ戦闘に余裕のある所か治療術士ヒーラーが複数いるところがい
いが、そもいって居られない。

近い所と言うことでエントランスを選び取るが…………そこは既に戦場ですらなかった。

最も良く言い表すものといえば、それは野戦病院だろう。

血まみれの包帯を巻きつけた者達の間を、街の住民やら治療術士ヒーラー
やらが慌ただしく動き回っている。

「ちょ、また急患ですかいつ！？……………ってショウヤ！？」

「リユンヌ！？どうしてここに……………」

「それは…………こっちの台詞！治すから…………こっち来て」

「クレールまで……」

二人は手伝いとして『戦士の殿堂』バレストラーレに顔を出すことはあれど、間違っても戦闘のプロではない。故に、今の翔矢の表情は驚きに満ちたものだった。

「外があんなにうるさかったら……眠れない」

「だね。まあウチはクレっちが起こしてくれるまで超　爆睡してたけどね」

「おい」

「ままいいから！肩の奴貸して、腕くらいぱーっとくつつけちゃうからさ」

言われるが青年を引き渡し、翔矢自身はクレールの治療を受ける。時間はないが事は確実に進めなければならなかったため、治療術を受け続けた。

ボーディプラスティア
彼女の武醒魔導器からでる淡い光が体内で暴れるが、それは理性で以て押さえつける。

そんな中、ふとした疑問が頭を擡もたげた。

「……酷い傷持ってるヤツもいただろ。そんなの見て、怖くないか？」

「……怖いよ。多分……頭の中ぐちゃぐちゃで麻痺してるだけ。だから落ち着いたら……」

「落ち着いたら？」

「……吐くかも」

一瞬言葉を見失うが、それも当然かと思いつく。

「……そっか。でも取り乱してないだけ上出来だな」

「そんな暇もないだけ。お姉ちゃんのアレも…只の空元気だから」

「……………」

それっきり無言が続いた。……思えば背中への傷をリユンヌが見たときは、珍しく狼狽えていた気がする。

本当、頑張っているな、と内心感謝する。……そんな瞬間だったか。

——空気の、流れが変わったのは。

「——！？今は……」

「？　どうかしたの？」

……いや、空気と言うよりは、そこに存在するエアルと言うべきだった。それが……まるで竜巻のように、吸い寄せられている。

翔矢のこれまでの経験から言わせると、何らかの術式が発動した時の感覚に近い。だが近いと言うだけで、細かな部分までは判断のしようがなかった。しかし何か起きたのは疑いようの無いことだ。

場所は……闘技場の中心、メインの広場。そして状況的にみて——使用された術式は兵装魔導器のもの^{ホフローブラスティア}と考えると間違いない。

だとするならば、

（マズいな、またしてもイレギュラーか……！）

治療を続けるクレールの手を振り払い、闘技場への最短ルートを
選択。

傷は完全には治っていない、故に走る際の揺れで開いてくる。

十分なエアルを回せない以上、本当の意味で戦闘は行えない。ひ
よつとすると、エアルの制御に問題がでるかもしれない。

「あれが必要かも、しれない、なあッ……！」

途中、戦闘場面に遭遇すると走りながら、子供の掌程のナイフを
投げ、爆発させ援護する。

思いの他効果はあったようで『魔狩りの剣』の数人に大きな隙を
作り、勢いはそれと対峙していた『戦士の殿堂』^{バレストラレ}に一気に傾いた。

だがそれを最後まで見届けることはできない。そのことに内心謝
罪し、前もって隠しておいたものを求め走った。

（……………よし、問題は……………なしと）

それは通常、闘技場大会の参加を受け付ける為の場所。己の力を
示さんとする戦士を、受付嬢が笑顔で確認する場所。

その役柄故か様々な書類や備品の隅に埋もれるようにして、それ
は置かれていた。

色褪せた袋、その中身の長さは四尺ほどだろうか。翔矢はそれを
まるで宝物か何かのように両方で抱える。

これの中身には特殊な式が刻まれ、他の術式の制御、処理、算出

の為の演算装置と化している。翔矢の持つ能力のサポートを行うのに、正に打って付けと言えた。

（闘技広場の出入口口……いや、それより観客席の方がいいか）

そちらの方が、状況を一度に見渡せる。

それに観客席に矢をつがえる者や魔術を放つ者がいた場合、広場に出たなら地の利的に不利になるのは当然。早く確認したいけど、こんな時だからこそ焦るべきじゃねえしな。

行く途中の敵は正々堂々と、ではなく隙を作らせてから後頭部を思い切り殴りつけ昏倒させる。そして通路は普段ギルドの構成員しか使わないような通路を伝い、再度最短ルートを選択。

時間は数分と掛からなかった。普段通る道なのだ、全速力で走り抜けてもぶつかるなどという愚行を冒す筈がない。

やがて、空の開けた観客席に身を踊らせる。たが近くに『魔狩りの剣』がいるのを認めると、しゃがみ込んでから辺りを見渡す。

広場の中央、客席がぐるりと取り囲むそこにいたのは、金の体躯を持つ巨大な生き物とそれを守るように立つ多数の人間達。翔矢が随分前から見知っている者から、つい先日知り合ったユーリ達まで様々だ。

戦いながら、ここまで追い込まれたのか。『戦士の殿堂』のホールでこれとは、余程『魔狩りの剣』が上手だったのか、それとも『リヴァイアサンのツメ』の赤眼が酷く荒らしたのか……兎に角、それは問題にすべき問題じゃない。

それより彼らを囲みながら対峙する連中の行動の方が問題だ。…その光景は『戦士の殿堂』の実力をよく知る翔矢だからこそ、異常としか映らなかった。

「何で………こんなに一方的なんだ……？」

七尺もの大剣を片手で振り上げる大男。それを合図にして光を纏った矢や魔術が殺到する。

それを剣で、槍で、はたまた防御魔術で撃ち落とすが、明らか防戦一方なのである。

ドゥーチエ（頭領やカレルさん、それにユーリ達がいるのに………どうした？このくらい、かい潜って攻撃に移るくらい可能な筈…………ということは）

つい、と上空に目を向ける。そこでは、光で描かれた紋章めいたものの上下を小さな輪がいくつか囲んでいる………プラスチック魔導器の術式。

小さな輪は街を魔物の侵入から守る結果魔導器のそれと似ているが、それよりもずっと小さい。

（多分、これは内に居る存在を無差別に閉じ込める為のもの。それは結果魔導器の方向性を変えるだけだから、似ているのにも納得できる。）

………だとするなら、動きたくても動けないってところか。でもそれにしても——）

ドゥーチエ頭領なら、抜け出せるだろうに………。

そこではたと気づく。——その術式は何処か可笑しかった。それが分からず、双眸に雀の涙程のエアルを落とす。すると視力が上昇し、術式の細かな部分が見て取れるようになる。

「術式が………変わり続けてる？しかもあんなに細かく………って、まさか！？」

何度も繰り返すが、『始祖の隸長』エンテレケイアはエアルを操ると同時に術式を操作できる。それにより、予め設定されている魔導器ブラスティアの術式を消し去ったり、改変することが出来るのだ。

イメージで言うならばパソコンのパスワードの解除。もしくはドラマや映画で描かれるクラッキングのようなもの。

幾多の情報の海から正しい答えを導き出す、それが彼らの能力だ。では、ハッキングを邪魔するにはどうすればよいのか？

——侵入者を攻撃するようなシステムを構築？それとも侵入を感じたと同時に回線をカット？

確かにそれも有効かもしれないが、それは現実での話。魔導器ブラスティアの術式にそれらを組み込める程の技術は、この世界に存在しない。

……………それを踏まえて考えてると、可能な手段が一つある。

——パスワードを絶えず変え続けるということだ。

それが、この可笑しな術式の正体。

ベリウスパスワードパスワード侵入者に術式を解析されないよう、変え続けている。

勿論人の作ったものであるが故、そこには法則性というものが存在する。そして『始祖の隸長』エンテレケイアにとって、それはただの時間稼ぎに過ぎないのだ。

……………過ぎない、筈なのだが。

（いくら何でも掛かり過ぎだぞ、おい。……………まあ、頭領ドゥーチェがいるから朝まで掛かっても犠牲者は出ないと思うが……………）

タイムミリットは次の朝である。そしてこんなことは、ただ悪戯に時間を削るだけなのだと、少し状況を考えれば火を見るより明らか。

一ギルドの首領ボスが、その程度のことを考えつかない筈がない。…

…そういうニュアンスを含んでいた。

（連中の目的は………その……トウチエ頭領の、ベリウスさんの命な訳で、でもこのままではそれを達成できない——）

ウンザリしたような笑み。呆れと怒り、嘲りを一緒にしたそれを、翔矢は一瞬浮かべる。

（——なんてこと、あるわけないか。絶対何かがある。ベリウスさんの命を奪うだけの、何か、が……？）

唐突に翔矢の記憶の中が疼いた。もう何年も前の、懐かしくどうでもよく……でも重要な一節。

確か、何かの小説のものだった。それがハッキリと——実際には活字を目で追っただけなのに——実際に見たかのように、その情景が浮かび上がる。

“あれが解読できるか”

白髪の男性が、周りのフードを被った者達に問い掛ける。視線の先にあるのは、翔矢が今も見ている術式と同じ。

理想に燃え、誰よりも未来を憂う男。己の罪の為散った友、その残した意志を継ぐ者。

そんな男性の表情が、フードを被った——学術都市アスピオの魔ブラ導器研究員の言葉を聞くにつれ、焦りの満ちたものに変わっていく。

男性はそのフードの男の肩を揺さぶりながら叫び、フードの男は躊躇いがちに残酷な事実を告げた。

“……あの輪は力場を展開させる類の術式です。都市結界に似てい

ますが、作用は内向きです。力場展開後に破壊波を放出、それを内側に押し留め反復することで範囲内の物体を破壊し……しかる後、力場を解放して周囲をも巻き込むという複合内破兵器……つまり……
魔導器ブラスティアを使った一種の……爆弾です”

周囲に走る戦慄は絶望を纏い、確かな色をもって翔矢に伝わる。自らの体温急速に低下していく様が、ありありと感じられた。翔矢は敵の目も気にせず立ち上がる。それに気付いた数人が弓を引き、詠唱を始め、剣を持って走り寄ってくるが気にも留めなかった。

記憶の中の扉は開き続ける。錆び付いた鋼が叫びをあげ、それと共鳴するように心が金切り声を高らかに響かせる。

男性の視線の先。そこには十数人の若者達がいた。いずれも男性の理想に賛同し、未来を担う者達だ。そんな若者達は今——助
けを求めている。

“出られない、助けてくれ、死にたくない、何が起こった、死にたくない、自分だけでも、死にたくないしにたくないシタクナイシ
ニタクナイ——！！！！！！”

幾多の声に焦らされ、翔矢は跳び上がった。身を矢が掠め、火球が髪を焦がし、刃が頬を切り裂く。

宙に身を投げてでもそれは変わらない。

着地の衝撃。周りにいた『魔狩りの剣』が襲いかかってくるのを左手に愛剣、右手に袋の中身をしかと掴んで応戦する。

「邪魔、だアアアッ！！」

戦闘よりも移動を最優先に。敵の隙を作りだすのは敵を倒す為でなく、移動する為に。

右腕の袋は裂け、白銀の刃を外気に晒した。

——銘、『偽剣・デインノモス』。

ブン！と両剣を一閃させ、敵が一瞬退いた瞬間に高く高く跳び上がる。石の床を、時に名も知らぬ戦士の頭を蹴りながら、自ら結界の中に飛び込んだ。

「おいショウヤ！何してやが——」

「そんな事より！頭領^{ドゥーチェ}、今此処は——、っ！？」

『……む。おお、そなたか……』

ベリウスは、明らかに衰弱していた。見ると、彼女の足下に見知った術式が展開させている。

こんな時に……！翔矢の胸は締め付けられる感覚を覚える。可能性は予想していても、今はマズかったのだ。

『ふ、ふふ、真逆本当にコレに世話になるとはの……。流石、じゃ……』

「くっ……！」

その術式の名はない。強いて言うのなら『生体制御術式』。構成としてはそう難しいモノではなく、幾多ある術式の応用に過ぎない。……翔矢の用意した、保険。

「すみません……！わたしが何も知らなかったばかりにっ！」

「いや、そんなことあどうでもイイ」

『満月の子』……則ちエステル。その力は『始祖の隷長』エンテレケイアにとつて毒となる。

今回は、原作と大した差異が無かったのだろうと、見当を付けた。やったことは単純で、エステルがベリウスの怪我を癒したただけなのだろう。だがそれを受けた『始祖の隷長』エンテレケイアの身は暴走し、本人の意思、理性など関係なく暴れ回るようになってしまう。

ゲームではそれを止める為に、ベリウスの息の根を止めた。

だがそんなことは翔矢の望む結果ではない。その為の保険だった。だが……それがまた別の弱点を生み出した。

術式の機能は単純でエアルの流れを制御することだ。初めの起動と制御は翔矢とベリウスくらいしか行えないが、流れを抑えるだけならあとの操作は必要ない。

それを使って『始祖の隷長』エンテレケイアの体内で暴れ、暴走の原因となっているエアルを制御することを目的としたものだ。

だがエアルとは生命維持活動を支えるものである以上、それを受ける『始祖の隷長』エンテレケイアの体力はおおきく削られる。つまりは動けなくなる。

（そこにきてのこの魔導器とか、全く……）

しゃあねえなあといった体で、翔矢は左手の刀を鞘に戻し右手の銀を両手で構えた。

その様子に只ならぬものを感じたのか、周りにいたユーリ達が走り寄ってくる。

（慢心か、それとも単に絶望を長引かせる為かは知らねえけどよ。その隙、突かせてもらっぜ……？）

切っ先を下にして、目を閉じた。これからの工程をイメージして、作業をすぐさま終えられるようにする。

「ショウヤ……？一体なにをするつもりなのかの？」

「まあ、色々とな。ところで、今頭領に掛かつてる術式は知ってるか？」

「術式？あの足元のか？リタ、どうなんだ」

「ベリウスの暴走を制御してるヤツのことなら、見ただけで分かったけど」

「流石は天才魔導士。で、この状況はそれを使ってこの翔矢様がどうにかしてみせましようってな」

「どうにかって、もしかしてあなた……」

これ以上は面倒くさいことになる、そう悟るとジユデイスの言葉を無視して、体内のエアルを意識する。

一度、大きく深呼吸。周りの『戦士の殿堂』パレストラーレのメンバーにも聞かせるように大声を出す為に。

「合図したら走れッ！！今、途開けっからな——ッッ！！！」

返事は聞かない。此方全員に聞こえるということは、他の者達——

『魔狩りの剣』にも聞かれていると言うことだから。

剣をそのまま振り下ろせば石を砕き、翔矢の足下には幾筋の光が灯る。やがてはそれが闘技広場全体に広がり、辺りは真昼のように

瞬く。

それからベリウスに掛かっている術式へ。エアルを制御する術式を、自分達を閉じ込めている結界へと向ける。

これだけの間で既に結界の術式に異変が生じていた。紋章の上下の光輪の間を稲妻が断続的に走り続ける。『魔狩りの剣』が術式を操作したらしかった。

徐々に数が増し色は紫雷から紅雷へ、鞭が叩きつけられるような音が発生している。

「走れ——ッッ!!」

喉を振りしぼり、結界の一部に大穴を開ける。『魔狩りの剣』はそれを止めようと殺到するが、勢いはそれでは鈍らない。

「ぐッ!!??」

身を切り裂く、衝撃。左肩を見ると、そこは巨大な戦輪チャクレムのようなものによって傷つけられていた。それを円軌道を描き、翔矢の後方へと戻っていく。

後方に素早く見やると、そこにいたのは見覚えのある茶髪の少女がいた。あまりにも突然で、翔矢は名前を思い出せなかったがゲームにも登場していたことは間違いあるまい。

でも、それを気にしている暇は無かった。なぜなら……背後から襲いかかってくる、巨大な影がいたからである。

「ッ!!!!」

『ショウヤ!?!くつ、そなた、も……早く逃げよッ……!!!』

その正体は金の体躯を持つベリウス。

……突然である。彼女の暴走を抑えていた術式を別向きに転換したのだから。

今ベリウスの肉体は、彼女の意識の制御は効かなくなっている。

（つゝゝゝ！？全く、面倒ごとは勘弁願いたいんだかなあ……！力ツコつけすぎた代償です、ってか？）

剣の切っ先は床を離れた。故に結界への妨害は止まった。外へは出られない。

それに持ちこたえるだけの体力もない。吹き飛ばされた拍子に剣を手放さなかっただけ、褒めるべきと言ったところか。

上空の術式の光が増し、翔矢とベリウスは影絵となる。それは、爆発が近いことを意味していた。

「それは出来ませんよ、ベリウスさん」

『ぬ、うつ』

一足で走り寄り、なんと剣を大きく――振りかぶった。

この光景を見た者達が驚愕したのは言うまでもない。ベリウス自身でさえ、目を見張ったのだから。

「信じて――」

なるだけ致命的にならないように、でも手が届く位置に。そんなことを意識しながら意味不明な行動を続ける。

「——すみません」

鮮血が舞う。だが傷は一尺にも満たさず、その巨体からみればあまり大きなものでは無いのかもしれない。

そして——なんと翔矢は。

傷に、左手を突き入れた。

『ぐあ、つは!?!』

「つらあアア！」

躊躇わず勢い素早くそうした為か、翔矢は指が不自然に曲がるのを文字通り痛感する。

そして右手の剣は床に再度突き立てられる。

——白い光が満ちる前、両者の周りには赤い光が吹き出した。間欠泉のような勢いで、ベリウスの身体から出た光が翔矢に収まってくる。

剣はガタガタと揺れはじめ、床の術式は青白い光を放ち、上空の紋章は今にも溶けてなくなるかのように明滅している。

光、光、光——光の嵐。

翔矢は見た。ベリウスの金の体躯が光を放ち、見る見る小さくなっていくのを。

バレストラレ

『戦士の殿堂』の者達は願った。自分達の主と仲間の無事を。

『魔狩りの剣』は確信した。敵の死と自らの勝利を。

ユーリ達は信じた。友とその主の生存を。

結界はかき消える。力が解放され、影と光の比率は逆転し、熱波と衝撃波が吹き荒れた。石の床は砕け散り、炎を撒き散らす。最後には思いだしたように濛々たる黒煙をあげ、空と広場とを覆い隠した。

――風が吹く。

――それは緑の光を含み、爆発の中心から吹いてくる。

――煙が晴れる。

そこにいたのは二人の男女。そして彼らを守るようにして六角形の光が集まった半球があった。

ユーリ達が声を上げる。女性はこの街に来たばかりの頃に翔矢に紹介された人物だったから。

続いて上がったのは歓声と落胆。

勝利が……敗北が決まった訳ではない。
でも確かに。

その歓声は勝利の、
その落胆は敗北の、

それぞれの色を持っていたことは、疑いようのない事実だった。

第十三話　完結し得た存在：後編？（後書き）

お久しぶりです。皆様は一週間積み上げたものが一瞬にして消滅した瞬間に何を思いますか？
玄ブです。

てことで、と、り、あ、え、ず！

一応ノードポリカ編、完結！

御都合臭がしなくてもないですけど、一応ちゃんとtoovに登場した理論やらをクソ真面目に考察した結果なので、細かいところを明かせば筋は通ってるので悪しからず。

あとベリウスを生存させる際、なんのペナルティもないとあれなので色々と制約を付けることになると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3326o/>

足掻き続ける愚者

2011年10月1日23時53分発行